

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第64集

上 土 遺 跡 II

静 岡 市

平成29年度～令和4年度 二級河川巴川（麻機遊水地第2工区）
総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

静岡県埋蔵文化財センター

序

上土遺跡は、静岡平野に立地する、弥生時代から近世・近代に至るまでの水田を中心とした遺跡です。

この遺跡は、過去に実施された国道1号静清バイパス建設、二級河川巴川総合治水対策特定河川事業等に伴う発掘調査において、古代条里制に基づく奈良時代から平安時代の水田を中心として、弥生時代以降の各時代の水田が検出されるなど、静岡平野における重層的な水田遺跡として、典型的なありかたを示しています。既に報告された地点の調査成果は、学界の共有財産として広く受容されており、県民の財産としてもかけがえの無い文化財として受け入れられていると考えています。

平成29年度から再開された上土遺跡の調査は、上土遺跡の遺跡範囲の中で北西側に位置し、遺跡の北西側限界を探ることを、調査の目的の一つとして行いました。結果としては全ての調査区で、古代条里制に基づく畔を発見することができました。これにより、調査地点までは確実に条里水田が拡がっていたことが明らかになり、静岡平野における、条里水田の拡がりを考える上で重要な成果が得られたと考えています。

また、今回の調査では、農具や建築材等からなる多数の木製品が出土した調査区もあります。これは、過去の上土遺跡の調査と同様か、さらに上回る密度での出土であり、古代の木製品の研究のために、多くの情報を提供できたと考えています。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県静岡土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2022年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
野村浩司

例　　言

- あらいくわでいし
1 本書は静岡県静岡市葵区立石7-18他に所在する上土遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は二級河川巴川（麻機遊水地第2工区）総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県静岡土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 上土遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
- 本調査　平成29年10月～平成30年2月 実掘削面積 2,101 m²
　平成30年9月～平成31年2月 実掘削面積 3,641 m²
　令和元年10月～令和2年2月 実掘削面積 2,556 m²
- 資料整理 令和2年6月～令和3年3月
　令和3年7月～令和4年3月（保存処理は令和4年度まで）
※資料整理には、保存処理期間、報告書刊行作業期間を含む。
- 4 調査体制は以下のとおりである。
- 平成29年度（現地調査）
　所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治
　総務班長 土戸美樹 調査班長 笹原千賀子 主査 岩崎しおぶ
- 平成30年度（現地調査）
　所長 酒井敏明 次長兼総務課長 山本広子 調査課長 中鉢賢治
　総務班長 土戸美樹 調査班長 溝口彰啓 主任 木崎道昭
令和元年度（平成31年度）（現地調査）
　所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治
　総務班長 土戸美樹 調査班長 溝口彰啓 主任 木崎道昭
令和2年度（資料整理・保存処理）
　所長 酒井敏明 次長兼総務課長 中野克彦 調査課長 中鉢賢治
　総務班長 島田真紀 調査課長代理兼調査班長 富樫孝志 主幹 中川律子
　主査 大森信宏（保存処理担当）主任 木崎道昭
令和3年度（資料整理・保存処理）
　所長 野村浩司 次長兼総務課長 吉田光廣 技監兼調査課長 中鉢賢治
　総務班長 島田真紀 調査課長代理兼調査係長 富樫孝志 主幹 中川律子
　主査 大森信宏（保存処理担当）
- 5 本書の執筆は凡例、第1章～第4章第3節を木崎道昭、第4章第4節～第5章、抄録を中川律子が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 外部委託については以下のとおりである。
- 掘削等・遺跡測量等業務 株式会社イビソク（平成29年度～令和元年度）
　整理作業・保存処理業務 株式会社イビソク（令和2年度～4年度）
　プラントオーパール・火山灰分析業務 株式会社古環境研究所
　木製品樹種調査業務 東北大学名誉教授 鈴木三男
　種実同定業務 株式会社古環境研究所

- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
河合修、鈴木三男、矢田勝、山田昌久（五十音順・敬称略）。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
 - 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
 $(X = -110,250.000 \quad Y = -9,260.000) = (A, 0)$
 - 3 出土遺物は通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
 - 4 遺構図、遺物実測図等の縮尺は、図ごとに適当な縮尺とし、それぞれにスケールを付した。
 - 5 色彩に関する用語・記号は、『新版 標準土色帳 1999年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局他監修1999）を使用した。
 - 6 土層名は第3章第2節の基本土層柱状図（第6図）に表示した名称を用いる。なお、平成29年度・30年度の現地調査においては、年度ごとに独自の層名による分層を行い、図面の作成、土層注記等を行った。今回の報告書作成にあたり、それらの成果を改めて検討した結果、平成8年発刊の、静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第77集『上土遺跡（立石地区）I（遺構編）』（静文研1996 b）で使用した層位の呼称をそのまま用いた方が望ましいと考えるに至った。そこで本報告ではその方向で層名を用いた。したがって、平成29～30年度調査の層名は整理段階で改変している。そのため原図や土層写真の分層線と異なる土層断面図が掲載されている場合がある。また、写真的分層線は直してはいない。なお、令和元年度の現地調査は、現地段階で（静文研1996 b）の土層名を用いた。したがって、土層名の変更はない。
 - 7 第2章第2節の周辺遺跡分布図（第4図）は国土地理院発行1:25,000地形図「静岡東部」「清水」を複写し加工・加筆した。
 - 8 木製品の分類は、伊東隆夫・山田昌久編『木の考古学 出土木製品用材データベース』（伊東・山田編2012）掲載の分類基準に則って行った。
 - 9 本報告書作成にあたり利用した引用・参考文献は、第6章の自然科学分析以外は96・97ページにまとめて掲載した。第6章の自然科学分析の各節でとりあげられた引用・参考文献については、各節が別個の報告として本センターに提出されたことを考慮して、各節の終わりにそれぞれ掲載した。なお、引用・参考文献を表記する際、以下のように省略した場合がある（本文中でもこの略称を用いた場合がある）。
- （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
埋蔵文化財センター→埋文センター
教育委員会→教委
静岡県教育委員会→県教委
- 10 参考文献名等の旧漢字は、原則として新漢字に改めた。

目 次

第1章 調査に至る経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 上土遺跡・岳美遺跡他のこれまでの調査成果	2
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と経過等	
第1節 調査の方法	14
第2節 基本土層	18
第3節 調査の経過	23
第4章 調査の成果	
第1節 平成29年度の調査（1－1区の調査）	27
第2節 平成30年度の調査（1－2区、2区の調査）	32
第3節 令和元年度の調査（1－3区、3区、4区の調査）	42
第4節 出土遺物	55
第5章 まとめ	
第1節 条里型水田について—これまでの調査成果をふまえて—	94
第2節 出土遺物について	94
第6章 自然科学分析	
第1節 上土遺跡出土木材の樹種	119
第2節 上土遺跡種実同定	140
第3節 上土遺跡検出の火山灰同定分析	144
第4節 上土遺跡出土プラント・オパール分析	147
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第32図 3区遺物出土状況図1	50
第2図 調査区位置図	3	第33図 3区遺物出土状況図2	51
第3図 周辺地形図	7	第34図 4区全体図	52
第4図 周辺遺跡分布図	12	第35図 4区遺構詳細図	53
第5図 調査区配置図	15	第36図 4区遺物出土状況図	54
第6図 基本土層柱状図	19	第37図 出土遺物実測図1	74
第7図 土層図1	20	第38図 出土遺物実測図2	75
第8図 土層図2	21	第39図 出土遺物実測図3	76
第9図 土層図3	22	第40図 出土遺物実測図4	77
第10図 1-1区全体図	28	第41図 出土遺物実測図5	78
第11図 1-1区遺構詳細図1	29	第42図 出土遺物実測図6	79
第12図 1-1区遺構詳細図2	30	第43図 出土遺物実測図7	80
第13図 1-1区遺物出土状況図	31	第44図 出土遺物実測図8	81
第14図 1-2区全体図	33	第45図 出土遺物実測図9	82
第15図 1-2区遺構詳細図1	34	第46図 出土遺物実測図10	83
第16図 1-2区遺構詳細図2	35	第47図 出土遺物実測図11	84
第17図 1-2区遺物出土状況図	36	第48図 出土遺物実測図12	85
第18図 2区全体図	37	第49図 出土遺物実測図13	86
第19図 2区遺構詳細図1	38	第50図 出土遺物実測図14	87
第20図 2区遺構詳細図2	39	第51図 出土遺物実測図15	88
第21図 2区遺物出土状況図1	40	第52図 出土遺物実測図16	89
第22図 2区遺物出土状況図2	40	第53図 出土遺物実測図17	90
第23図 2区遺物出土状況図3	41	第54図 出土遺物実測図18	91
第24図 1-3区全体図	43	第55図 出土遺物実測図19	92
第25図 1-3区遺構詳細図1	44	第56図 出土遺物実測図20	93
第26図 1-3区遺構詳細図2	45	第57図 これまでの調査との関連性	94
第27図 1-3区遺物出土状況図	46	第58図 モモ核変遷図	142
第28図 3区全体図	47	第59図 上土道路の火山ガラス比ダイヤグラム	145
第29図 3区遺構詳細図1	48	第60図 プラント・オパール分析結果1	149
第30図 3区遺構詳細図2	49	第61図 プラント・オパール分析結果2	150
第31図 3区遺構詳細図3	49		

挿表目次

第1表 調査実施面積一覧表	5	第9表 出土木製品一覧表	104
第2表 周辺遺跡地名表	13	第10表 上土遺跡出土木材樹種一覧表	130
第3表 土層記述表	25	第11表 出土種実一覧表	140
第4表 調査工程表	26	第12表 出土モモ核の計測値一覧表	141
第5表 畦畔計測表	53	第13表 テフラ検出分析表	144
第6表 出土器観察表	98	第14表 火山ガラス比分析結果	145
第7表 出土石製品観察表	98	第15表 屈折率測定結果	146
第8表 出土木製品観察表	98	第16表 プラント・オパール分析結果	148

挿写真目次

写真1 表土除去作業（1－2区）	17	写真9 出土木材顕微鏡写真5	135
写真2 蚪蚌掘削作業（1－3区）	17	写真10 出土木材顕微鏡写真6	136
写真3 実測作業（木柄付鉄鍬）	17	写真11 出土木材顕微鏡写真7	137
写真4 保存処理作業（含浸）	17	写真12 出土木材顕微鏡写真8	138
写真5 出土木材顕微鏡写真1	131	写真13 出土木材顕微鏡写真9	139
写真6 出土木材顕微鏡写真2	132	写真14 出土種子	143
写真7 出土木材顕微鏡写真3	133	写真15 上土遺跡のプラント・オバール写真1	151
写真8 出土木材顕微鏡写真4	134	写真16 上土遺跡のプラント・オバール写真2	152

写真図版目次

図版1 立石エリア調査区全景（合成写真）	5 1－1区角棒型田下駄出土状況
図版2 1 1－1区調査区西側および畦畔1（北東から）	6 1－1区畦畔内泥除け出土状況
2 1－1区調査区全景	7 1－1区泥除け他出土状況
図版3 1 1－2区調査区遠景（北西から）	8 1－1区田下駄出土状況
2 1－2区調査区全景	図版10 1 1－2区畦畔2土層断面（第2ベルト南側）
図版4 1 1－3区調査区遠景（南から）	2 1－2区畦畔2土層断面（第2ベルト南側） (南東から)
2 1－3区調査区西側および畦畔4（南東から）	3 1－2区畦畔2土層断面（第4ベルト南側） (南東から)
図版5 1 2区調査区遠景（北西から）	4 1－2区畦畔2取水口？北側の土層断面 (南西から)
2 2区調査区全景	5 1－2区畦畔2取水口？南側の土層断面 (南西から)
図版6 1 3区調査区遠景（南西から）	6 1－2区円柱型田下駄の円柱と足板出土状況
2 3区調査区全景	7 1－2区田下駄出土状況
図版7 1 4区調査区遠景（北西から）	8 1－3区畦畔4検出状況（南東から）
2 4区調査区北側および畦畔7	図版11 1 1－3区畦畔4土層断面（調査区西壁） (南東から)
図版8 1 1－1区畦畔1土層断面（土層帯4）（南西から）	2 1－3区調査区南東壁西端部土層断面 (北西から)
2 1－2区畦畔2土層断面（第5ベルト南側） (南東から)	3 1－3区調査区北東壁土層断面（南西から）
3 1－3区畦畔4とその付近の土層断面 (調査区南壁)（北西から）	4 1－3区調査区北西壁端部土層断面 (南東から)
4 1－3区畦畔5とその付近の土層断面 (調査区北壁)（東南から）	5 1－3区畦畔4下部遺物出土状況（南東から）
5 2区畦畔3土層断面（第1ベルト）（南西から）	6 1－3区畦畔4補強材検出状況（東から）
6 3区畦畔6土層断面（調査区北東壁）（南東から）	7 1－3区調査区東側遺物出土状況（南西から）
7 3区畦畔6土層断面（調査区南西壁）（北東から）	8 2区畦畔3検出状況（北東から）
8 4区畦畔7土層断面（調査区西壁北端部） (北東から)	図版12 1 2区畦畔3土層断面（第3ベルト北東側） (北東から)
図版9 1 1－1区畦畔1土層断面（土層帯5）（北東から）	2 2区畦畔3土層断面（第5ベルト南西側） (南西から)
2 1－1区遺物出土状況（椀と田下駄）	
3 1－1区木製品集中地点1 遺物出土状況 (畦畔東端部)（北東から）	
4 1－1区木製品集中地点1 遺物出土状況 (畦畔東端部)（北東から）	

3	2区畦畔3補強材検出状況	5	4区畦畔7（東側）検出状況（南西から）
4	2区畦畔3補強材？検出状況（調査区西侧）	6	4区調査区東南端部遺物出土状況（北西から）
5	2区木製品集中地点2遺物出土状況（北から）	7	4区用途不明木製品出土状況（北東から）
6	2区木製品集中地点2遺物出土状況	8	4区田下駄出土状況
7	2区火きり臼と火きり杵出土状況	図版15	出土遺物1
8	2区天秤棒出土状況	図版16	出土遺物2
図版13	1 2区田下駄出土状況	図版17	出土遺物3
	2 2区田下駄等出土状況	図版18	出土遺物4
	3 2区田下駄出土状況	図版19	出土遺物5
	4 2区木柄付鉄鍤出土状況（北東から）	図版20	出土遺物6
	5 2区田下駄出土状況	図版21	出土遺物7
	6 2区泥除け出土状況	図版22	出土遺物8
	7 3区畦畔6土層断面（第1ベルト西側） (南西から)	図版23	出土遺物9
	8 3区畦畔6土層断面（第2ベルト西側） (南西から)	図版24	出土遺物10
図版14	1 3区畦畔下遺物出土状況	図版25	出土遺物11
	2 3区遺物出土状況（調査区南西コーナー一部） (北東から)	図版26	出土遺物12
	3 4区調査区北半および畦畔7検出状況 (南西から)	図版27	出土遺物13
	4 4区畦畔7（西側）検出状況（東から）	図版28	出土遺物14
		図版29	出土遺物15
		図版30	出土遺物16
		図版31	出土遺物17

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

二級河川巴川総合治水対策特定河川事業

静岡市内を流れる二級河川巴川は勾配が緩く、流下能力が低いために、台風等の大量降雨時には浸水等の被害を多くもたらしてきた。特に昭和49（1974）年の七夕豪雨においては、死者27人、床上・床下浸水約26,000戸をはじめとする大被害を流域の地域にもたらした。これらにより、静岡県では流域整備事業を行い、大谷川放水路の開削と、麻機遊水地第3、第4工区の事業等により、巴川の治水対策を行った。

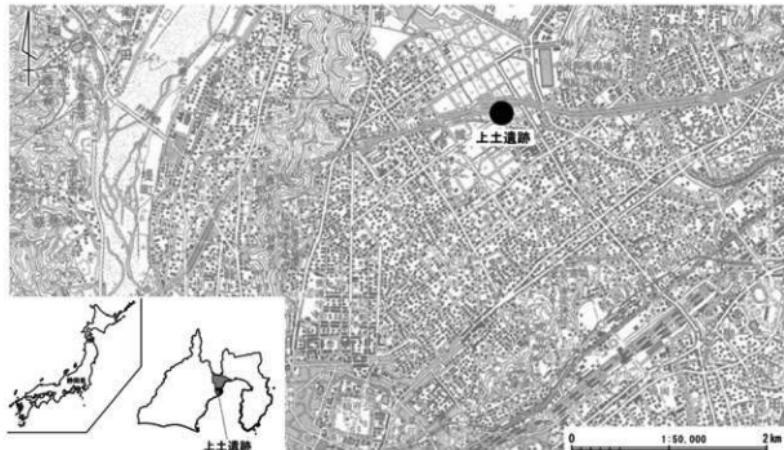
麻機遊水地第2工区

静岡県では、さらなる流出水の抑制をはかる等の目的のため、平成11（1999）年度からの新流域整備計画により、麻機遊水地第1、第2工区等の事業に着手した。このうち、麻機遊水地第1工区から事業に着手し、第1工区事業終了後に第2工区の事業に着手する運びとなった。

加藤島エリア・安東川エリアの埋蔵文化財調査

麻機遊水地第2工区の計画策定に伴い、平成22年4月に静岡県静岡土木事務所から、静岡県教育委員会文化財保護課（当時。以下、保護課と略）に埋蔵文化財取扱いについての照会があった。事業箇所の一部が、周知の上土遺跡・岳美遺跡の範囲内に位置するため、保護課では平成22年8月に加藤島エリアで、平成23年3月、安東川エリアで試掘・確認調査を行い、遺構（水田）の存在を確認した。

これにより、事業箇所のうち、遺構の存在が予測され、かつそれが工事により破壊される地域については本発掘調査が必要となり、協議の結果、静岡県埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターと略）が調査を担当することになった。



第1図 遺跡位置図

埋蔵文化財センターによる、麻機遊水地第2工区の事業に伴う上土・岳美遺跡の本調査は、平成23年度に加藤島エリアで（12月～平成24年3月）、平成24～26年度に安東川エリアで行われた。当初の想定どおり、古代の水田畦畔が検出され、多くの遺物（ほとんどが木製品）が出土した。

埋蔵文化財センターでは、平成23～26年度の現地調査の成果について、平成27・28年度に整理作業・報告書作成作業を実施し、平成29年3月に報告書を刊行した（埋文センター2017）。

立石エリアの埋蔵文化財調査

麻機遊水地第2工区の事業は、平成29年度からは、静清バイパスより北側の地区である、立石エリアでも着手されることになった。平成29年2～3月にかけて、文化財保護課が試掘・確認調査を行ったところ、古墳時代後期～中世の水田が2面以上にわたって認められた（県教委文化財保護課2017）。また、平成30年2月にも保護課により、条里水田の限界が想定できる資料を得るために、立石エリアで再度試掘・確認調査を行ったところ、条里水田の大畦畔と水田面が検出され、限界線を想定できる資料を得ることができた（県教委文化財保護課2018）。

これらの成果を受け、平成29年度から令和元（2019）年度（平成31年度）まで本調査を埋蔵文化財センターで行った。これが、今回報告する立石地区的調査である。

なお、静清バイパスの建設に伴い、平成4～5年度に上土遺跡、岳美遺跡の調査が、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（当時）によっておこなわれているが、これらの調査成果については、次節で述べる（平成4～5年度の、静岡市教育委員会（以下静岡市教委と略）による上土遺跡加藤島地区の調査も同様である）。

第2節 上土遺跡・岳美遺跡他のこれまでの調査成果

ここでは、上土遺跡・岳美遺跡他の過去の調査歴・調査成果について述べる。なお、岳美遺跡の南側に所在する城北永ヶ島遺跡は岳美遺跡にはほど隣接しており、同一遺跡と考えられるのでここに含めた形で述べたい。さらに、上土遺跡・岳美遺跡と連続し、ほとんど同一の立地条件（麻機低地）にある池ヶ谷遺跡にも言及する。なお、今回の調査で検出された遺構の時代である古代（奈良～平安時代）の遺構、遺物にほとんど限定する。

静清バイパス関連の調査経過と城北永ヶ島遺跡の調査

国道1号線静清バイパスは、静岡市清水区興津東町から駿河区丸子二軒屋までの24.4kmの区間であり、昭和43（1968）年に事業化された。それに伴う埋蔵文化財の調査は、旧静岡市内においては、昭和50年に開始された。昭和59年には、当センターの前身である、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が発足し、その年の川合遺跡宮下地区・内荒地区の本調査を皮切りに大規模な調査が行われ、静清平野の歴史の究明に大きな成果をもたらすことになる。

静清バイパスの、上土遺跡から池ヶ谷遺跡までの区間に於いては、静清バイパス事業に伴う昭和62年度からの静岡市教育委員会による試掘確認調査によって、遺跡の存在が確認された。

この上土遺跡以西の地区的本調査は、昭和63年の池ヶ谷遺跡の第Ⅰ期調査により開始され、平成4～5年度にこの地区の大半の本調査が行われることになる（静岡市教委調査分を含む）。

また、この時期には、岳美遺跡の南に隣接する城北永ヶ島遺跡の調査も行われている（平成3年度）。平成4年度からのこの地区的本格調査に先立つ調査であるので、その成果についてここで概略を述べる。

城北永ヶ島遺跡の調査は、現静岡県立静岡中央高校の建設に伴う事前調査である。静岡県教育委員会文化課（当時）により調査が実施された。当初は未周知であったため、確認調査により遺跡の存在を確

認した上で本調査に移行した。大きく分けて2箇所の調査区からなり、2箇所とも大畦畔の交点が検出された。ただし、交点の部分は畦畔が検出されておらず、2調査区とも途切れることが判明した。概報ではこの途切れ部分を送水関連の施設と想定している。また、2調査区の間にも掘削を行い東西方向の畦畔を検出した。これにより、2箇所の調査区で検出された、東西方向の畦畔が連続する可能性が高いことが指摘されている。

調査概報（県教委 1994）を読む限り、この大畦畔は古代（平安時代）の条里制の大畦畔であり、交点部分が隣接する2箇所で切れていることは興味深い。また、大畦畔の補強材についても述べられている。さらにこの水田（V層水田とする）より上層にも水田耕作土が存在することが指摘されている。さらに、大畦畔内部の下部に耕作痕の見られる土層があることから、大畦畔構築以前の耕作土の痕跡ではないかという指摘もある。これは今回報告する地区の大畦畔と概ね共通することであり、重要な指摘である。

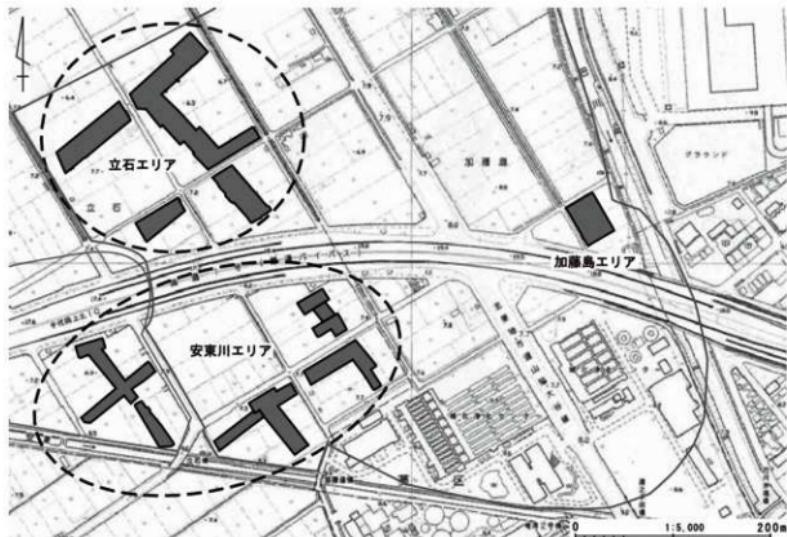
以上のような事実の指摘は、上土遺跡で一般的に見られる（大畦畔の交点が途切れるることは一般的ではない）ことであり、この調査と池ヶ谷遺跡の調査でそれが確認された意義は大きい。

平成4～5年度の上土遺跡・岳美遺跡の本調査（県調査分）

平成4～5年度に上土遺跡・岳美遺跡の静清バイパス分の本調査が一挙に行われた。その成果については遺跡ごとに述べる。

①岳美遺跡

岳美遺跡の本調査であるが、古代の大畦畔の存在が図上で想定される部分のみの調査であり、10箇所の調査区（1区～16区。13区は欠番。接続している区は1箇所としてカウント）で調査が行われた。ほとんど全ての調査区で南北方向ないし東西方向（正確には南北方向の畦畔は北西へ約39度、東西方向の畦畔は南西に約39度傾く）の大畦畔が検出された。したがって、東西ならびに南北方向の大畦畔



第2図 調査区位置図

はバイパスの調査対象地域全体に広がっていたと考えられる。これらから、大畦畔の間隔は、南北間で平均 109.6 m、東西方向で平均 106.3 m（東西間隔は歪みのある SK-04 の両側間隔を除いた数値で、報告書のものとは異なる）と計測される。また、大畦畔の特徴として、南北方向の大畦畔は杭列や板材による補強がなされていることが大半であるのに対して、東西方向の大畦畔にはそれがほとんど見られない点が指摘されている。また、南北方向の大畦畔でも補強の程度に差があること（西側は濃密に補強されているのに対して、東側の補強の密度は薄い）にも言及されている。

なお、大畦畔とセットとなる小畦畔も各地区で検出されているほか、古代と思われる溝状遺構、自然流路も発見されている。また、植物種子の集中している箇所が数ヶ所あり、祭祀に関わる可能性を提示している（静文研 1995）。

②上土遺跡

上土遺跡では、岳美遺跡と異なり、バイパス道路（側道含む）が建設される幅いっぱいまでの調査区を 3 箇所設定して調査を行った（西から 3 区、2 区で、最も東が 1 区）。ここでは、当該期の水田を中心のべる（弥生時代中期後葉～古墳時代前期とされる 15 層水田と、中世以降の水田については原則的に言及しない）。

上土遺跡の古墳時代中・後期～律令期においては、岳美遺跡と同様の条里制大畦畔と中・小畦畔が検出されている。報告書で 12 層水田遺構群と呼んでいるのがそれである。報告書ではこれを 12 層上部（条里制（新）水田と呼称）と、12 層下部水田（非広域条里系と呼称）とに分けて調査している。大畦畔は各区とも南北方向、東西方向とも全て検出されているが、1 区は大畦畔の圧密が強く、大畦畔そのものが不明瞭であった。大畦畔内の小区画水田についても非常に詳細な調査がなされている。12 層下部水田では条里制以前の N 13° E 系、正方位系などの水田区画が部分的にではあるが検出されている。

このほか、県調査分の上土遺跡の報告については畦畔の補強等について非常に詳細な記述がある（静文研 1996 b）が、ここでは深入りせず、必要に応じてこれ以降の記述で述べていきたい。

平成 4・5 年度の上土遺跡の調査（静岡市教委分）

静清バイパス関連他の調査は県教委だけではなく、静岡市教育委員会によっても行われている。平成 5 年 2 月～5 年 11 月まで静清バイパス加藤島地内、5 年 11 月～6 年 3 月には城北下水処理場沈殿池築造に伴う調査（註 1）が行われ、概報が刊行されている。以下の記述は、概報での記述をそのまま要約した。

加藤島地区では、①弥生時代～古墳時代前期、②古墳時代の終わり～奈良時代の疑似畦畔 B、③平安時代の条里地割に基づく水田の 3 面が検出、調査された。①は大畦畔と小畦畔による小区画水田であり、②は③によって攪拌されていること。③では坪界線は出土しなかったが、土盛畦畔による約 5 m 四方の区画等が検出されている（鈴木 1995）。

城北下水処理場地区では、①弥生時代小区画水田、②平安時代の条里地割に基づくと思われる水田跡、が検出された。②には坪界線と思われる大畦畔のほかに小畦畔が検出されている（八木 1995）。

両者ともに、現在に至るまで本報告書が刊行されておらず、調査区の詳細な位置関係も不明であるが、平成 4～5 年分の県報告分と同様の成果と考えられる。ただし、平安時代とされた条里水田は奈良～平安時代とすべきであろう。

二級河川巴川（麻機遊水地第 2 工区）総合治水対策特定河川事業に伴う県調査

平成 23～26 年度に当埋蔵文化財センターで行った本調査が、今回の報告以前の調査として最新のものと思われる。調査は加藤島エリアの他に、静清バイパス南側の安東川エリアが対象となった。また、調査後の工事掘削が深くは及ばないため、古代の条里水田までの深度が調査の対象となった。

加藤島地区では、第1面では近世の遺物のほか、溝状遺構と畦畔状遺構が出土した。泥炭層直下の第2面では小区画水田が小畦畔を伴って検出された。小区画は概ね東西方向に細長く、97面を数える。面積が判明するもの（推定含む）の最大は20.52m²、最少は2.88m²である。調査区の東側には小区画の空白部分がある。この小区画水田は、平成4～5年度調査の上土遺跡立石地区的バイパス関連県調査分の、12層下面の水田と同一層位である可能性がある。

安東川地区では想定される坪界線の箇所のみの調査となつた。1～4区に便宜上分けたが、いずれの調査区からも条里制の大畦畔が検出された。西側の4区を中心に、大畦畔と方向を同じくする小畦畔も発見されている。そのほか、溝状遺構等も検出されている（埋文センター2017）。

③池ヶ谷遺跡

前にも述べたとおり、上土遺跡・岳美遺跡の西側に連続する池ヶ谷遺跡については、別遺跡として扱いであるが、岳美遺跡からほぼ連続しており、麻機低地の最も西側にある遺跡のため、ここでは過去の調査の概略について述べたい。

昭和62（1987）年度の静岡市の予備調査により、静清バイパス事業地での遺跡の存在が明らかとなり、昭和63～平成2（1990）年度に第Ⅰ期調査（静文研1992）、平成5年度に第Ⅱ期調査（静文研1996a）が行われている。遺跡の状況は上土遺跡・岳美遺跡とほぼ同様であるが、各時期の水田を覆う自然堆積の間層が上土遺跡・岳美遺跡では粘土層であるのに対し、砂疊層である点は異なる。

条里制に関連する水田であるが、DⅢ層水田として調査が行われている。それによれば、全地区にわたって条里制に連続すると思われる畦畔と水田耕作土が検出されている。畦畔は、①大畦畔、②中畦畔、③小畦畔に分類されており、①は南北方向の1基のみで里界線と推定している。②は南北方向、東西方向ともにあり、交点も検出されている。坪界線と推定している。③は①・②以外の小規模な畦畔で、坪内部を分割する畦畔とする。全体としては、①の里界線の畦畔を検出、指摘したことが大きいであろう。

今回の調査の課題

以上過去の調査の成果について述べてきたが、静清バイパスの路線内と、その南側と北側にも条里制大畦畔を伴う水田が広がることが明らかとなった。ただし、南側、北側ともにどこまでそれが広がるかについては、必ずしも明らかではなかった。また、詳細に見てゆくならば、畦畔の補強の状況は地区ごとに少しずつ異なっており、それが一定の傾向を有するのかも問題であった。今回の調査の主眼はこのような点に置かれることになった。特に北側にどこまで大畦畔の延長部分が伸びるかが最大の眼目である。

註

1 概報（八木1995）において、当調査区の調査期間は、平成5年11月1日から平成5年3月20日までとなっているが、終了時期は平成6年の誤りであろう。本文では訂正して記述した。

第1表 調査実施面積一覧表

調査年度	調査区	遺構調査面の面積(m ²)
H29年度	1-1区	1,392
H30年度	1-2区	1,418
	2区	1,435
R1年度	1-3区	625
	3区	774
	4区	1,024
合計		6,668

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

上土遺跡は、国道1号線静清バイパス千代田上土ICとその周辺に位置する。現在において上土遺跡と隣接する岳美遺跡は一体的な遺跡として把握されている。このうち、上土遺跡部分は静岡市葵区加藤島、安東川、立石の各地区に広がっている。岳美遺跡は岳美1丁目、北安東4丁目他に位置する。

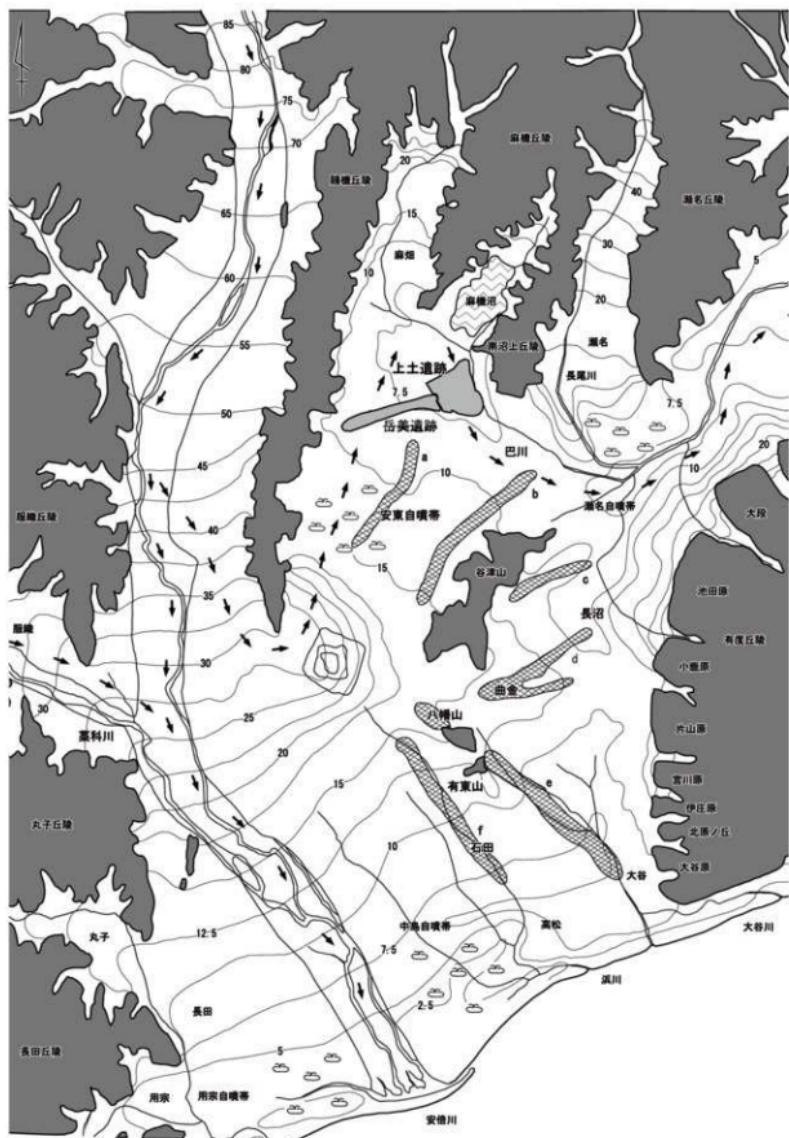
上土遺跡の位置する静岡平野は、北側と東西側が山塊により囲まれ、南側が駿河湾に直接面するといった地形上の特徴をもつ。これらの山塊と、平野を南北に流れる安倍川が、平野の低地部分が形成される上で大きな影響を与えている（第3図）。

山塊としては、安倍川の西岸では、北から服織丘陵、葵科川を挟んで丸子丘陵、長田丘陵と続き、最も海岸沿いには用宗丘陵がある。大半が東西方向に延びている。安倍川の東側には、南北方向に延びる山塊として、西から賤機丘陵、麻機丘陵、南沼上丘陵、瀬名丘陵がある。平野の東には有度丘陵があり、先の瀬名丘陵とこの有度丘陵の間はやや狭くなっているが、巴川流域の低地であり、ここより東側は清水平野となっている（清水平野も静岡平野の一部とみなす意見もある）。

安倍川は静岡平野第一の河川であり、典型的な東海型河川として大量の砂礫を平野に堆積させた。この安倍川の流れは平野部分では蛇行しながらも南側に流れているが、最も下流部分は東南側に折れ曲がっている。これは同じく東海型河川である葵科川が安倍川に流れ込んでいるためである。このため、賤機山地の南端部を起点にして砂礫の堆積が東方向を志向することになり、軸を東西方向にもつ扇状地（安倍川扇状地）を形成している。この安倍川扇状地は扇状地本体と末端の扇端部に分かれる。両者の境界は概ね標高17m程度である（加藤1993）。扇端部からは、静岡平野に残された山地の痕跡である谷津山、八幡山、有東山等の規制を受けながら、礫質自然堤防、（表層粘土が薄い）後背低地I（両者合わせてここでは自然堤防と称す）が鉗足状に數本広がっている。上土遺跡・岳美遺跡に最も近い自然堤防は北安東～上足洗に至る細長い自然堤防であるが、上土遺跡・岳美遺跡の位置までは延びていない。また、この部分の扇端部から自然堤防付近には、扇状地の被圧地下水が地上に湧出する自噴帶（安東自噴帶）が存在する。

また、上土遺跡・岳美遺跡の東北側に、南北に延びる南沼上丘陵が存在するが、巴川は、その東側に位置し、南北に延びる瀬名丘陵の間には、典型的な東海型河川である長尾川が南流しており、低地に出る地点に小扇状地を形成している。また、その先端部には瀬名自噴帯が存在する。

上土遺跡・岳美遺跡の立地する麻機低地は、上で述べた安倍川扇状地と長尾川扇状地に挟まれた位置にある。扇状地堆積物は上土遺跡の位置まで到達せず、平野の中では海浜部を除き、標高が最も低い状況である。例えば、低地中の最も標高の低い箇所の標高は約6mであるが、安倍川扇状地が東に張り出す基部である駿府城跡の標高は約25mである。したがって駿府城跡の位置から見れば北に行くほど標高が低くなることになる。このような麻機低地の低さは、約10万年前から始まった土地の沈降運動（これは有度丘陵の隆起運動と強い関連を有する）も大きな要因をなしている。このような状況のため、麻機低地は大半が長期にわたって低湿地の状態であり、巴川等により流れ込む川水が滞水する状況であった（その名残が現在の麻機沼である）。ただし、歴史的には陸化し、湿田を造ることのできた時期があることが、これまでの埋蔵文化財調査で明らかになっている。



※静岡県埋蔵文化財センター 2017 より引用。一部改変。

第3図 周辺地形図

第2節 歴史的環境

上土遺跡・岳美遺跡周辺の歴史的環境について、古い時代からの概説については、埋蔵文化財センター調査報告第54集の『上土遺跡・岳美遺跡』の報告書に記載があるので、今回の報告では、古墳時代～平安時代にはほぼ時代を限定し、詳しく述べていきたい（第4図）。

第1章第2節と重複する点もあるが、今回の報告遺跡の上土遺跡（31）は、静文研、県教委、静岡市教育委員会によって、静清バイパス地点と、麻機遊水地第2工区関連他の調査が行われている。調査された大半の地点で、条里制の坪界線の大畦畔が検出されているほか、坪内を区画する小畦畔も発見されている。8世紀前半に構築され、9世紀前半に放棄されたと考えられる。また、下層からは弥生中期後葉～古墳前期の水田が検出されているほかに、古墳後期？～奈良時代の非条里制水田と畦畔も検出されたとされる。弥生時代～古代は構状遺構のほかには、水田関連の遺構しか発見されていない（中世以降も水田関連の遺構が検出されている）。

その西に位置する岳美遺跡（29）と城北永ヶ島遺跡（30）であるが、上土遺跡も含む一帯的な遺跡であり、内容的にもほぼ同一である。県教委、静文研により調査され、古代他の水田遺構他が検出されている。条里制水田と畦畔も、もちろん発見されている（静文研 1995 a）（県教委 1994）。

池ヶ谷遺跡（28）は静文研により、静清バイパス関連で調査された。岳美遺跡とほぼ連続しており、麻機低地の西端に立地する。内容的には、上土遺跡・岳美遺跡とほぼ共通するが、ここでは、坪界線の条里畦畔のほかに、里界線と思われる大規模な畦畔が検出されている。また、前に述べた安倍川扇状地の扇端部上に立地するため、水田耕作土等に挟まれる間層は砂礫層が目立つ。

上土遺跡・岳美遺跡の東側には、南沼上丘陵、その東には長尾川の小扇状地が位置するが、前者の丘陵のすぐ南側に川合遺跡（32）、後者のほぼ中央には瀬名遺跡（62）という、静岡平野北部を代表する遺跡が存在する。

川合遺跡（32）は静文研によって調査され、縄文時代から近代に至る多層遺跡として把握されている。上土遺跡の近接地であり、強い関連性が窺える遺跡なので、詳細に見ていきたい。

静清バイパス調査時点では、西から内荒、川合、宮下の各遺跡名で呼んだが、連続しており、同一遺跡として把握されている。また、静清バイパス以外にも、八反田地区、志保田地区の調査が静文研により行われており、それぞれの地点で古墳時代～古代の遺構・遺物が検出されている。以下地点ごとに詳細に述べる。

内荒遺跡は最も西の地区であり、川合遺跡内では、上土遺跡に最も近い距離にある（現巴川で隔てられている）。この地点では、柵等で区切られた区画の中に掘立柱建物、井戸等の遺構が発見されている。建物等に関する遺物はほぼ平安時代初期のものに限られ、特殊な遺物（「造大神印（印はあるいは仏）」銅印や鈎帶金具、付札風木簡、綠釉陶器等）の出土も含めて官衙遺跡と考えられる。報告書等では駿河国安倍郡衙の一部に比定する見解が提示されている（静文研 1986）（平野 1990）。

次の川合遺跡である。古墳時代以降の遺構としては、以下のようものが発見された。①第7遺構面の古墳時代前期の集落（45棟以上の掘立柱建物のうち大半）。②第6遺構面では古墳時代中期の集落跡とそれとセットになった水田（2面）。及び古墳時代中期の墳丘墓（2基）である。墳丘墓のうち規模がほぼ明らかな1号墳丘墓は全長約13mで、前方後方形である。人骨とガラス小玉等が出土した。2号墳丘墓は規模等が不明であるが、多量の玉類と小型仿製鏡1面が出土している。③第5遺構面は古墳時代中期後半とされており、大量の木製品を含む旧河道路跡、堅穴住居跡、方形周溝墓、祭祀跡等が検出されている。④第4遺構面は古墳時代後期に比定されており、水田と構状遺構、自然流路が検出されて

おり、居住の場ではなくなっている。⑤第3造構面も同様で、古墳時代後期の水田のみである。第1、2造構面は近世であり、この間に人の活動の痕跡はない（静文研 1990）（平野 1990）。

最も東になる宮下遺跡であるが、検出した遺構はI～III期に分けられている。I期は奈良～平安前期で、遺物包含層と護岸杭列、旧長尾川と推定される流路のみが発見され、水田や居住域は見られない。II期は平安時代中期で、IIa期とIIb期に分けられている。後半のIIb期は折戸53室式期に比定されている。掘立柱建物群、溝状造構、井戸等が検出されており、縄釉陶器、「専當」墨書き土器、石帯等も出土している。報告書では、平安中期（10～11世紀）の何らかの公的施設の一部、または地方豪族層の居館の一部に推定している。III期は近世以降の水田関連の造構群である（静文研 1985）。

次に川合遺跡でも静清バイパス以外の地点について見て行きたい。まず八反田地区についてである。静清バイパスの調査地点より北側、南沼上丘陵の最南端部に接する低地で、すぐ麓の地点である。内容的には前述の川合遺跡と類似している。①6・7造構面では弥生中期～古墳前期の遺構・遺物が検出されている。3基以上発見されている方形周溝墓や土壘は弥生時代の所産であると考えられるが、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる遺構として、大畦畔・小畦畔を伴う小区画水田、溝状造構等が検出されている。②第5造構面は古墳時代後期の水田が検出されている。③第4造構面は古墳時代末～平安時代で、掘立柱建物84棟、井戸8基、溝状造構47本以上、土坑100基以上、柵列2条、畝状造構、ピット群等が検出されている（I期・II期調査合わせて）。II期調査の報告書（静文研 1995 b）では、遺構群の時期別の変遷が想定されており、奈良時代（特に前半）に遺構数が多くなることが提示され、富農層ないし公的施設等の建物群であることが示唆されている。遺物としては、「下代謹解申高諸口大刀？□□口」木簡、「川万呂」等の墨書き土器、物差、絵馬、瑞花八種鏡等の特徴的なものが出土している。④第3造構面は、I期調査（静文研 1991）では平安時代後期、II期調査では平安中期～後期とされている。掘立柱建物11棟、ピット群、条里型水田？等が検出されている。遺物としては、縄釉陶器、物差等が出土している。

次に志保田地区について述べる（静文研 1998）。調査地点は川合遺跡全体の北部、沼上丘陵の南側末端のすぐ南麓の低地に立地し、八反田地区の東側、川合遺跡と宮下遺跡の北側にある。調査面ごとに述べる。①第6面では、小区画水田が検出された。出土した土器等から古墳時代前期～中期のものと考えられる。②第5面では大畦畔と小畦畔からなる水田、杭列等が検出された。報告では上下の2期でとらえている。①と同様、古墳時代前期～中期のものと推定されている。第4面と第3面は律令期であり、③第4面からは掘立柱建物1基、多数の柱穴群、井戸1基、土器集中が見られる祭祀跡1基、自然流路1があった。④第3面からは、土器集中が見られる祭祀跡5基、石組造構1基、木組み造構1基、井戸1基、自然流路1条、多数の構造造構が検出されている。遺物としては、大半のものが第4、3面で一括して記述されている。少数の7世紀代、9世紀以降の土器も出土しているが、大半は8世紀の土器（多くは前半）である。多量の土器の他に、動物形（馬形含む）土製品、人形土製品、ミニチュア土器が目立つ。多くは特定の祭祀遺構に伴って発見されている。木簡、墨書き土器（「大伴マ子若麻万呂」・「沙弥万」・「弥万呂」・「川万呂」・「俗月」等）、絵馬、帶金具、錢貨「隆平永宝」等の特徴的な遺物の出土もある。

以上、川合遺跡について述べてきたが、まとめるならば次のとおりである。①古墳時代前期の大規模な集落は川合遺跡で見られ、八反田地区、志保田地区では水田が検出されている、②古墳時代中期には、川合遺跡で墳丘墓が作られた。また集落も継続した。中期後半も同じ川合遺跡で集落と墓域が継続した。③古墳時代後期になると、川合遺跡一帯は湿地化し、一面水田化したようである。川合遺跡では2面にわたる水田が検出されている。④奈良時代にはこの地域には官衙に関連する可能性がある施設がつくられるようになる。八反田地区では大規模な掘立柱建物群が検出され、志保田地区では祭祀を行いう場が確立する。⑤平安時代前期には、内荒遺跡で、官衙遺跡の可能性の高い造構群と遺物が検出されている。

駿河国安倍郡衙に比定する説も提出されているが、決定的な証拠はまだ発見されていない。⑤平安時代中～後期には宮下遺跡や八反田地区で集落が検出されている。官衙の可能性もある。

この川合遺跡のすぐ北の、沼上丘陵の南側末端部分に、南沼上古墳群（23）がある。今回報告する上土遺跡から最も近い距離に位置する古墳群である。「前方後円墳の可能性のある古墳をはじめとして、三基前後の高塚古墳が認めら」れ、「恐らく横穴式石室を内部主体とする後期古墳であろう」（中野 1985）とされてきた。ここでは、1994年に静岡市教委により確認調査が実施されている。それによれば、2基の円墳（北側が2号墳、南側が3号墳）が調査された。2号墳は直径約22～24m、現況高さ約3mで、主体部は木棺直葬で複数が重複している可能性が高いとされている。大刀が副葬されていた。3号墳は直径約16～17m、現況高さ約1.5mで、主体部は木棺直葬と考えられ、大刀2振、三環鉢2、鉄鏃、短甲？破片多数が出土した。三環鉢は現在においても、静岡県内で数例検出されているのみであり、珍しい遺物である。3号墳は副葬品から古墳時代中期後半（5世紀後半）の年代が与えられている。また2号墳は土層の観察によって3号墳より古いとされているが、内容的には古い年代が考えられる（天石 1995）。

前述したとおり、丘陵直下の川合遺跡では古墳中期の墳丘墓が検出されており、該期の集落も発見されているので、それとの関連性が問題になるであろう。

南沼上丘陵では、南沼上古墳群の北に（南沼上）諏訪神社古墳がある（14）。測量図が作成されており、中期末～後期初の帆立貝式古墳とされている（静岡市立登呂博物館 1990）。

次に麻機丘陵上の遺跡について述べたい。丘陵の南部、西側斜面には「安倍郡印」出土地とされる地点がある（10）。旧静岡県史第二巻（静岡県 1931）には、写真と印影、法量、外筐墨書などのデータが掲載されている。それによれば、印面は11×9.5cmの縦長の銅印で「安倍郡」の三文字がある。孔のある抜きがあり、印高は11cmとある。外筐墨書には、「駿河国安倍郡／漆山從鈴石天／神麓掘出處古／印 明治十二年十一月／松道屋所藏」（／は改行か）とあり、「中邸」印？がある。掘り出されたのが古く、現物も外筐も行方不明なため確かめようがないのであるが、偽造等とは断定できず、そのまま受け取ってよければ、発見された場所に郡衙が存在する可能性がある。また、筐の記載に「鈴石天神麓」とあり、山麓の低地部分の可能性が高く、第4図の（10）の箇所の下の麓の低地と考えられる。いずれにせよ、近年になって安倍郡衙関連遺跡に比定されている（前述）川合遺跡からはかなり隔たっており、こちらの地点（低地部分）を未発見の安倍郡衙の候補地にする説も成り立つと思われる。

次に麻機丘陵の古墳群を取り上げる。南沼上丘陵に面する東側の斜面部には、南から惣ヶ谷古墳群（9）、小渕ヶ谷古墳群（8）、三滝ヶ谷古墳群（7）、田成ヶ谷古墳群（6）がある。

惣ヶ谷古墳群では1984～85年に2基の古墳が調査された。1号墳は直径約12m×15mの長円形をした円墳であり、周溝を有する。主体部は横穴式石室であるが石材は攪乱のために失われていた。根石の痕跡と主体部の掘り方から、長さ約5.5m、幅約1.2m程度と推測している。床面から鈴付銅釧1、棗玉、丸玉、刀子2が出土しているほか、掘り方攪乱土中より須恵器等が発見された。報告書では須恵器の年代により6世紀後半に比定している。

2号墳は墳丘が既に工事により失われており、極めて小規模な石室と掘り方が奥壁部側で一部残っていただけであった。遺物は発見されなかつたが、石室の規模は幅が現存部で約40cm、推定長が約1～1.5m程度であり、報告書では7世紀後半～8世紀初頭の終末期の古墳としている（静岡市教委 1999）。

次の小渕ヶ谷古墳群は調査が行われておらず、詳細は不明ながら、「横穴式石室の古墳2以上」で、6世紀後半～7世紀の古墳群とされている（静岡市立登呂博物館 1990）。

その北側の三滝ヶ谷古墳群は、1980年に発掘調査がおこなわれているが、正式報告は未刊行である。7基の古墳が調査され、そのうち2基は痕跡を残すだけであったが、全ての古墳が横穴式石室墳である。

墳形が不明な4号墳を除いて円墳のみである。2号墳からは、鉄鎌、刀子、小型の殊文鏡、耳環、玉類等が出土した。4号墳は小横穴式石室が発見されており、「ハリガネ状の鉄芯に連携された中実の金銅玉も出土している」（中野 1985）。調査者は8世紀に比定している（静岡市立登呂博物館 1990）。5号墳は全長約8.4m、最大幅約1.5mの、かなり大型の石室（無袖式）を有し、石室内に組合式石棺を置く（静岡県考古学会 2003）。以上のように、全体としては古墳時代終末期～律令期の古墳群と言えそうである。

三滝ヶ谷古墳群のすぐ北側に、田成ヶ谷古墳群がある。1995～97年に市教委により発掘調査が行われ、古墳6基が検出された。何れも残存状況は悪く、墳丘はもとより、石室も多くの部分が失われていた。最も残りの良かった1号墳の石室は、残存部幅約80cm、残存長約110cmであった。他の古墳も造りは総じて小型であった。概報（石川 1999）によれば、1号墳は須恵器坏が出土しており、奈良時代に比定できる。4号墳からは須恵器長頸壺等が出土しており、7世紀後半としている。他の古墳も総じて同時期の可能性が強いとする。

次に上土遺跡より西側に目を向けたい。まず注目すべきなのは、賤機丘陵の南端に位置する賤機山古墳である（48）。直径約32mの円墳で、叢内系両袖式の巨大な横穴式石室を有し、寄棟造りの有蓋家形石棺が認められていた。金銅装馬具や装飾付き大刀などの豪華な副葬品を多数もつ。6世紀後半の築造と考えられ、該期において静岡平野で第一の古墳である。また、叢内色の濃い古墳であることも指摘されている（鈴木・田村編 2019）。ヤマト政権から派遣された中央豪族（アヘ（ペ）氏の一員か）の墓の可能性もある。また、この賤機山古墳の麓には、產土神である大歳御祖神社、駿河總社である神部神社、駿河国一官を移した浅間神社などが密集して存在しており、「地域社会の精神的支柱ともいえる『聖地』に築かれた始祖墓としての性格も見出すことができる」という意見（鈴木 2019）もある。

また、山地上には賤機山古墳を含む形で、賤機山古墳群が存在し（47）、一本松古墳（賤機山1号墳）、麓山神社後古墳（同2号墳）が含まれる（賤機山古墳は同3号墳）。また、この3古墳のほかに、3基程度の円墳状の高まりも確認されている。一本松古墳は5世紀の木棺直葬の円墳とされ（静岡市立登呂博物館 1990）、獸形鏡が出土している。また、麓山神社後古墳からは大刀、常総型石枕が出土しており、後者は関東地方との関連が考えられる（滝沢・久永 2018）。また、大きな河原石が出てることから、6世紀の横穴式石室墳とも言われる（静岡市立登呂博物館 1990）。

賤機山丘陵で賤機山古墳群より北には、臨濟寺古墳（35）、船原古墳（27）、池ヶ谷古墳群（26）、唐瀬古墳群（25）、マルゾッコウ古墳（20）、谷久保古墳（19）、八津口古墳（11）、平山古墳群（5）、有永前田古墳群（2）、そして低地部の前方後円墳とされてきた有永古墳（有永1号墳）（3）がある。これらの古墳は正規の発掘調査がされた古墳がほとんどなく、詳細が不明なもののが大半である。この中で、唐瀬古墳群は古くから知られ、横穴式石室をもつ古墳6以上で、須恵器と「凝灰岩製の大形丸玉」、勾玉等が出土している（静岡県 1930）。また、池ヶ谷古墳群は、横穴式石室の古墳3以上とされる。他の古墳（群）も7世紀段階の横穴式石室墳が大半とされる（静岡市立登呂博物館 1990）。有永古墳は、平成4年度に静岡市教委により、「墳丘」測量及び範囲確認調査が行われている。これらによても、前方後円墳はおろか、古墳としての確証もない状況であり（ただし須恵器等の遺物は出土した）（静岡市教委 1993）、ここでは名称をあげるだけにとどめておきたい。（33）の大在家遺跡は古くから知られた遺跡で、古墳時代の低地の集落遺跡であろう（静岡県 1930）。

駿府城内遺跡（56）は、近世の駿府城跡と大部分重なるが、駿河国府跡の可能性が指摘されている。古代の遺構の検出箇所は少ないが、旧「三ノ丸跡」等では、奈良時代への溝状遺構（区画溝？）、土壘、柱穴列、掘立建物群や井戸等の遺構、縁軸陶器、墨書き土器、屋瓦等が出土したほかに、平安末～鎌倉初期の青磁、白磁等が多量に出土している。国府ないし国衙と断定するには証拠に乏しいが、大規模な官



第4図 周辺遺跡分布図

第2表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	有木田遺跡	縄文・古墳	22	川合遺跡	弥生～近世
2	有木浦田古墳群	古墳	23	大在家遺跡	古墳
3	有木古墳	古墳	24	賤母山城	中世
4	遺物採集地点(有木)	古墳	25	臨済寺境内遺跡	弥生
5	平山古墳群	古墳	26	北川殿屋敷跡	中世
6	田成ヶ谷古墳群	古墳	27	千代田遺跡	弥生
7	三瀬ヶ谷古墳群	古墳	28	香谷四丁目遺跡	古墳
8	小瀬ヶ谷古墳群	古墳	29	井上塚古墳	古墳
9	惣ヶ谷古墳群	古墳	30	愛宕山城跡	中世～近世
10	「安倍郡」出土地	古代	31	新日山古墳	古墳
11	八津口古墳	古墳	32	荒沼古城跡	中世
12	八津口遺跡	弥生・古墳・古代	33	遺物採集地点(土足洗)	古墳
13	彦山遺跡	縄文	34	安東二丁目公園遺跡	古墳・古代
14	海沿上御跡神社古墳	古墳	35	大岩遺跡	弥生
15	佐敷堂遺跡	縄文～古代	36	西千代田遺跡	弥生
16	水梨古墳群	古墳	37	難鳴山古墳群	古墳
17	利食神社古墳	古墳	38	茂間神社境内遺跡	弥生
18	切石遺跡	古墳・古代	39	静岡高校ヶ原山遺跡	弥生
19	谷久保古墳	古墳	40	波束町道路	古墳
20	マルゾッコウ遺跡	古墳	41	袖木丘遺跡(本郷坪跡地)	古代
21	時ヶ谷遺跡	縄文・弥生	42	本郷坪道路	古墳～中世
22	長崎島遺跡	縄文	43	袖木丘遺跡(仕舞削道坪跡地)	古代
23	南浦上古墳群	古墳	44	仕舞削道坪遺跡	弥生
24	川合仙石遺跡	弥生・古墳	45	東草深道路	弥生～近世
25	唐瀬古墳群	古墳	46	駿府城内遺跡	弥生～中世
26	湘ヶ谷古墳	古墳	47	駿府城跡	近世
27	新原古墳	古墳	48	谷津山古墳群	古墳
28	池ヶ谷遺跡	弥生～古代	49	長沼遺跡	弥生～古代
29	若葉遺跡	古代	50	曲全北遺跡	弥生・古墳・古代
30	城北永ノ島遺跡	古代	51	堀田遺跡	中世
31	土土遺跡	弥生～近世	52	掘名遺跡	弥生～中世

術遺跡の可能性は高い(平野 1990) (長谷川 2003)。

平野中の独立山地である谷津山にも谷津山古墳群(58)が存在する。その盟主墳は全長約 110 m の前期古墳である袖木山神古墳(袖木 1 号墳)である。葺石を伴い、朱塗りの竪穴式石室が主体部であると思われ。神獣鏡 6 面、銅鐵、鉄検、鉄鋤等が出土したとされる(県教委 2001)。静清平野で最大の前方後円墳であり、4 世紀前半に比定される(鈴木他編 2019)。該期において静清平野全体を支配した首長の墓である。

谷津山古墳群中には、4 基以上の古墳があり、2 号墳は墳長約 36 m で前方後円墳とされている(疑う説もある)。未調査のため詳細不明であるが、袖木山神古墳に続く 4 世紀前半～中頃のものと考える説がある(鈴木 2019)。3 号墳は詳細不明だが、次の 4 号墳と同じく後期の円墳であろう。4 号墳は清水公園古墳とも呼ばれ、古くに石室内から 4 基の組み合わせ式箱形石棺が検出されたことで知られる。銅鏡や環頭大刀、鉄斧、耳環が出土しており、後期の有力古墳であろう。谷津山の東北部分には井上邸

古墳（39）、茶臼山古墳（41）等があり、後期の円墳であろう。この二つの古墳を含めて、別の古墳と思われる地点を入れ、愛宕山古墳群を想定する向きもある（静岡市立登呂博物館 1990）。

以上、古墳時代～平安時代にほぼ限定してあるが、上土遺跡周辺の遺跡について述べた。大半が水田域であるが、微高地上には集落が点在する。ただし、古墳時代後期には、ほぼ一面水田化したのではないかと思われる。同じく、古墳時代後期の古墳群が丘陵上を中心にして多く作られる。奈良時代～平安時代には条里制水田が形成される。また、郡衙、国衙の可能性のある遺跡が近在して現れる。平安時代中期以降にも官衙ないし、有力者の居館の可能性のある遺跡が作られる。

第3章 調査の方法と経過等

第1節 調査の方法

1 現地調査

（1）平成29年度の調査

平成29年度の調査は、第1章第1節で述べた経過に従い、平成23～28年度の本センターの調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を主とすることになった。この調査範囲についての考え方は、令和元年度の調査まで引き継がることになる。調査区については、これまでの周辺の調査（主に平成4～5年度の静文研による静清バイパスの調査と、県教委文化財保護課による試掘調査）で確認された条里の区画線から想定される推定線に沿う形で設定した。

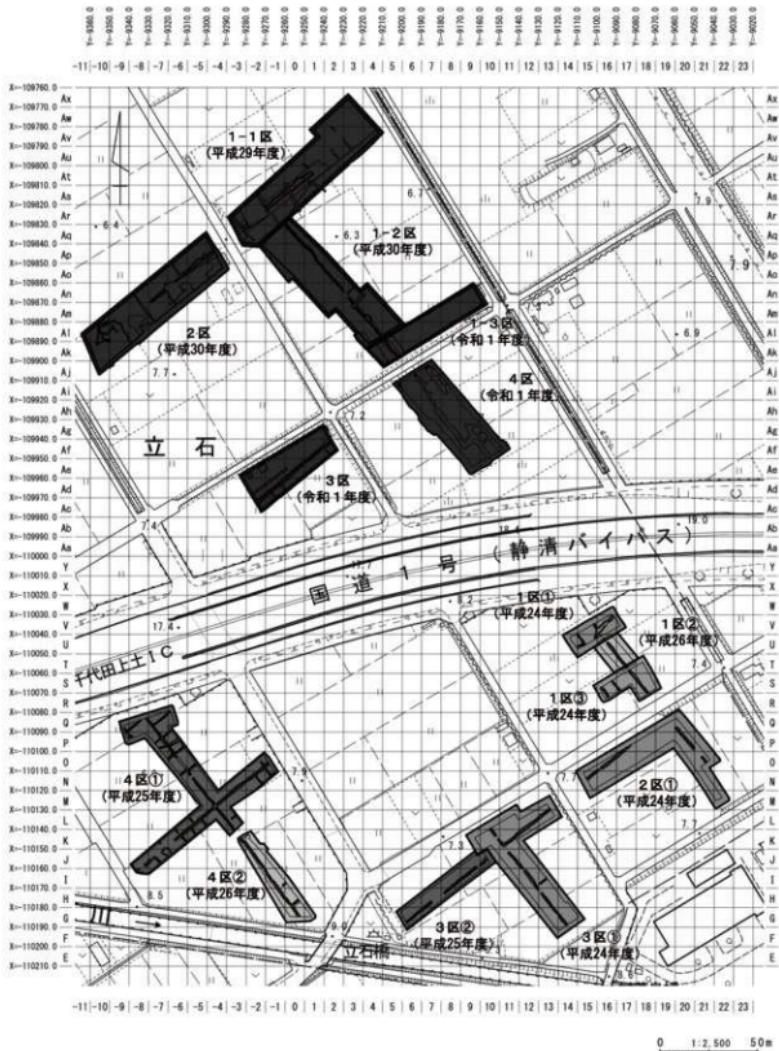
麻機遊水地第2工区の事業は、立石地区で埋蔵文化財が存在する範囲において、3箇年度にわたって調査が必要と考えられた。それに伴い、遊水地工事が最も早く着手される予定であった、事業地の北側から調査を開始することになり、1-1区から調査に着手することになった。

調査グリッドについては、世界測地系に基づいて、10 mの方眼を調査区全体に設置した。平成23～26年度の調査との整合性を保つため、それと同一のものを基準にしてグリッドのメッシュを拡張した。Y軸方向はアルファベットを付し、AをX=-110250.0とし、10 m間隔で北へB、C……Zとした（平成23～26年度と同様）。今回の調査ではその北側延長上に、Aa、Ab、Ac……Ba、Bb……Zzとした。

X軸方向は算用数字を付し、0をY=-9260.0とし、東へ1、2、3……、西へ-1、-2、-3……とした。これは平成23～28年度のものと全く同一である。

掘削作業は、表土から第6層（令和元年度の調査で統一した層名であり、平成29・30年度は別の層名を用いた。層位の統一の次第については、第4章2節を参照）までは重機で一気に除去し、第7層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行き、畦畔（大畦畔・小畦畔ともに）の頭を出すことで、泥炭層の中での線状の畦畔列の検出に努めた。この結果、東西方向の大畦畔を検出したので、畦畔両側の泥炭層で残った部分を含め、水耕耕作土の第12層を主に包含層掘削を行った。この間に遺構検出として、大畦畔の輪郭と小畦畔の検出につとめたが、小畦畔は検出されなかった。また、大畦畔も調査区東側では縮小し、東端部では消失していることが判明した。

これらの掘削作業と併行して、調査区への基準杭の設置、遺構検出段階でのラジコンヘリコプターによる空中写真撮影及び実測を行い、1/20平面図と1/100全体図の作成を行った。その後、遺構掘削として畦畔の解体作業を行い、遺物の出土状況図や土層図の作成も併行して行った。調査記録としての写真撮影は、中判カメラ（6×7判）のモノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムによる撮影を



第5図 調査区配置図

基本とした。このほか、調査経過の記録用も含め、デジタルカメラも併用して、埋蔵文化財センター職員が撮影した。なお、遺物出土状況図や遺構図等の細密な図の作成のため、測量受託業者もデジタルカメラを使用している。

なお、火山灰、プラントオバールの現地での採取と分析は、株式会社古環境研究所に委託し、現地調査終了までに成果を報告して頂いた（平成30年度・令和元年度も同様）。

（2）平成30年度の調査

平成30年度の調査は、平成29年度の調査成果に基づき、東西方向で検出された大畦畔の西側延長方向の追求のため、南北方向の市道を挟んだ西側に2区を設定した。また、平成29年度調査の1-1区の南側から南北方向の畦畔を検出する目的で、1-1区に接続し、南北に細長い調査区である1-2区を設定した。平成30年度の調査はこの2つの調査区を調査することになった。調査の方法・手順等は平成29年度とほぼ同じである。ただし、調査の目的が畦畔の検出とその構造の究明、及び畦畔の拡がりの追求にあった関係で、水田耕作土の人力掘削は、畦畔下とその両側面部分に限定せざるを得なかった。これは調査期間の制約が主な要因であるが、グリッド等は1-1区で設定したものを利用した。

両区とも大畦畔は想定通り検出されたが、小畦畔の検出はなかった。また、2区の西側は自然流路の痕跡があり、その部分からは大畦畔の検出はできなかった。また、前述の木製品の集中出土箇所はこの調査区西側であった。

（3）令和元年（平成31年）度の調査

令和元年度の調査は、最終年度であり、遊水地工事が遅く着手される予定である事業地の南側部分の調査である。平成29・30年度の調査区である、1-1区と2区で検出された東西方向の大畦畔より、107m南側に存在すると想定される坪界線を追求するため、東西方向の調査区である1-3区と3区を設定した。なお、1-3区は、平成30年度調査区である1-2区の南側に接して設定し、1-2区で検出された南北方向の大畦畔の検出も目的にしていた。この南北方向の大畦畔の南側の延長部分の存在を確認するため、1-3区の南側、市道を挟んだ更に南側部分に4区を設定した。4区は南北方向に細長い調査区で、南端部は静清バイパスの現側道に近い箇所で、調査可能な部分まで拡げた。

調査の方法・手順等は平成29・30年度とほぼ同じである。今回は調査範囲内の水田耕作土を極力掘削する方針で調査に臨んだ。1-3区ではほぼ達成することができた。3区においては、調査区西南側の耕作土中に、木製品の集中箇所が検出されたため、遺物の有無や多寡を確認するためトレンチを掘削して、遺物集中部以外の水田耕作土中の遺物が僅少であることを確認した上で、畦畔下と両側面部分のみの掘削を行った。

4区は掘削開始後に、調査区が全面地盤改良を受け、深い部分まで土取りされたうえ、大量の瓦礫により盛土されていることが判明した。調査面は「島」状にしか残存しておらず、大畦畔の検出する困難な状況であった。このような状況の中で、3区の方向から延びる、東西方向の大畦畔のみ、断続的ではあるがかろうじて検出、調査することができた。南北方向の大畦畔はついに検出できなかった。存在したであろう箇所が、全て削り取られていたためと想定された。このような状況のため、3区においては水田耕作土の掘削は、大畦畔の下部の一部を除いて行わなかった。

2 資料整理

遺物洗浄、木製品のシーラーパック詰め、記録類の整理等は、本発掘調査期間内に基礎整理作業として、掘削業務受託業者が実施した。

出土した遺物は実測作業を経て、実測図をAdobe Illustrator CS 6によってトレイス・版組作業を実施した。木製品、金属製品は、これらの整理作業を経て保存処理を実施した。

保存処理については木製品の出土数が多いことから、遺物を3分割し、3箇年度の期間をかけて、前半処理（処理前記録～安定化処理）と後半処理（修理～梱包・収納）を交互に行うこととした。安定化処理については、PEG含浸、真空凍結乾燥を行い、遺物の形状を安定化させ、修復を行った。

また、木製品については東北大北との委託契約に基づき、同大学名誉教授鈴木三男氏による樹種同定を実施した。出土種実の同定は株式会社古環境研究所に委託した。

遺構図版は、現地での写真測量のデータをコンピューターに取り込み、編集作業を行った上で、Adobe Illustrator CS 6によってトレイス・版組作業を実施した。遺物写真は中判カメラ（6×7判）のモノクロフィルム及びデジタル一眼レフカメラによる撮影を行った。また、報告書の作成とともに収納作業を実施している。



写真1 表土除去作業（1-2区）



写真2 看護掘削作業（1-3区）



写真3 実測作業（木柄付鉄鍔）



写真4 保存処理作業（含浸）

第2節 基本土層

基本土層の層名については、平成29・30年度の現地調査においては、今回の調査独自のものを使用したが、過去の調査例を検討した結果、平成4～5年度の静清バイパス関連上土遺跡調査の報告書（静文研1996b）で用いられた層位名を使用しても問題がないことが判明した。令和元年度の調査からは、現地においてもこの層名を使用し、今回の報告書でも前掲報告書の層名に統一する。ただし、調査地区が同一ではないため、以下の土層説明は過去のものと完全には同一ではない。なお、ここでの層名は記述上、第〇層と呼び、静清バイパスの層の呼称とは区別した。また、今回の調査での掘削深度は第13層中までであり（（静文研1996b）の13～1層中か）、第14層以下は掘削していないため、ここでは記述しない。

盛土層…近代以降の水田を造成するための盛土層である。全体に小粒な砂利を含んでいる。1～3区などでは砂利のみが盛られている箇所がある。4区では最近において、大規模な地盤改良が行われており、土を採取した後に、建築廃材等を含んだ土砂の投入が行われている。これらも盛土層として一括した。

第1層…黄灰色シルト質粘土層。2.5 Y 4/1。粘性無し。しまり有り。土層断面の観察では、ほとんどの箇所で次の第2層と区別できない。その場合は第2層とともに、第1～2層として扱う。静清バイパスの調査成果では、この第1層は近世の「新田開発」水田耕作土とされている。

第2層…灰色粘土層。7.5 Y 4/1。粘性やや有り。しまり有り。上述のように、大半の箇所で、第1層と分離できない。過去の調査では、中世後半～近世の洪水堆積層に比定されている。

第3層…極暗褐色泥炭層。7.5 YR2/3。粘性少ない。腐植やや多い。今回の調査では、3区東壁の断面で、極めて部分的に観察されたのみであり、調査区全体でもこの泥炭層は見出しができなかつた。また、3区東壁断面で見いだされた泥炭層も、静清バイパスの調査で検出された3層に比定できるか否かが確証はない。平成4～5年度の調査では土層断面図を見る限りにおいて比較的普遍的に存在する層であり、この層が今回の調査でほとんど見いだされなかつたのは、地形的ないし位置的な理由を考える必要がある。静清バイパスの上土遺跡の報告書では、中世水田水没時の湿地植物が堆積したものとされている。

第4層…灰色粘土層。7.5 Y 4/1。粘性やや強い。腐植少ない。第2層ないし第1～2層との差異は、粘性等から比較的明瞭である。なお、過去の調査では、この層の下に灰色ないしオリーブ黒色粘土層があり、攪拌の無い5～1層に比定されているが、今回の調査では認識できなかつた。上下の層に含まれてしまっているか。

第5～2～1層…オリーブ黒色粘土層。5 Y 3/1。径5mm程度の白色粘土（次の第5～2～1～2層が巻上げられたものと思われる）を多く含む。水田耕作土（過去の調査では、5～2～1層水田と呼称）であり、中世（鎌倉時代：13世紀代）の層に比定されており、中世小氷期のものとされている。断面を観察したが、今回の調査区では、この層中に咗畠は見出しができなかつた。

第5～2～1～2層…灰色粘土層。N 4/1。薄層で、耕作により失われている箇所がある。また、残存していてもバッチ状を呈す部分が多い。粘性強い。腐植なし。層の凹凸と湾曲が著しい。前述の5～2～1層水田の水田床土であろう。過去の調査では洪水堆積層とされている。

第5～2～2層…オリーブ黒色粘土層。7.5 Y 3/2。ラミナ無し。粘性強い。腐植ややあり。径3～6

cm程度の灰色粘土（次の第6層であろう）の巻上げ土のブロックを含む。径5mm程度の灰色粘土の粒子を多く含む。本片をわずかに含む。水田耕作土（過去の調査では、5-2-2層水田と呼称）であり、中世（鎌倉時代：13世紀代）の層に比定されている。断面を観察したが、僅かではあるがこの層中に、次の第6層による畦畔を発見することができた。小区画水田の畦畔であると思われる。

第6層…灰色粘土層。7.5Y4/1。ラミナあり。粘性強い。腐植ややあり（縞状に入る部分あり）。層の上端部に攪拌痕の見られる箇所が多い。1-3区にはこの層による小畦畔の見られる箇所がある。3区西側においては、第5-2-2層の耕作（5-2-2層水田）によりこの層が失われている（西壁土層断面の位置では、第5-2-2層の耕作は、次の第7層以下にも及んでいる）。過去の調査では、平安時代末～鎌倉時代？の洪水堆積により形成された層とされている。

第7層…黒泥層。10YR2/1。ラミナあり。粘性少ない。腐植少ない。過去の調査では、7層以下11層までは平安時代の湿地性堆積物の泥炭層であり、平安海進期？のものとする。

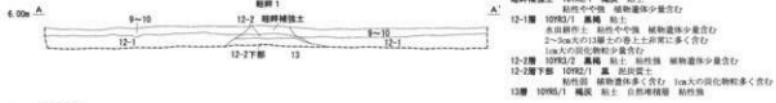
第8～9層…過去の調査の8層と9層であるが、今回の調査においては、この2つの層は分離できなかつた。従ってまとめて土層説明をする。黒褐色泥炭層。7.5YR2/3。ラミナあり。粘性ややあり。腐植は濃淡あるが全体的に多い。

第10層…黒褐色粘土質泥炭層。7.5YR3/1。ラミナあり。粘性ややあり。腐植やや多い。第8～9層との区別はやや困難な箇所がある。この層の層中の上部に、白濁色を呈する火山灰層が3～5mm程度の厚さでバッチ状に含まれる。これは、火山灰分析の成果から838（承和5）年噴出の、伊豆神津島天上山火山灰であることは明らかである。したがって、この第10層は、9世紀前半を前後する時期の層であることは確定的である。なお、静清バイパスの調査では、10層上面にこの火山灰が堆積している（従って、10層と9層を分かつことになる）とされているが、今回の調査の所見では10層中に堆積していると思われ、過去の報告書（静文研 1996b）の記載と異なっていることを明記しておく。

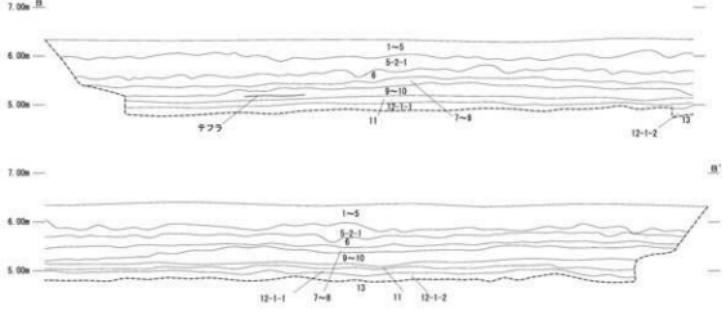
第11層…泥炭混じり黒褐色粘土層。2.5Y4/1。粘性強い。腐植少ない。原則的に条里制の大畦畔（坪界畦畔）を直接被覆する層である。

第12-1層…黄灰色粘土層。2.5Y4/1。粘性やや強い。腐植わずかに混じる。灰色粘土ブロック（径5cm以上のものが多い。第13層が中心）を層の下部を中心として大量に巻き上げている箇所が多い。過去の調査では、条里型の（一部に非条里型を混在）、奈良～平安時代初頭水田（12層上部水田とする）の耕作土とされている。なお、土層断面図ではこの第12-1層を色調等

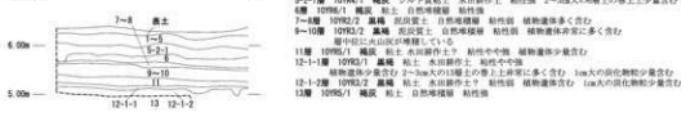
1-1区西壁



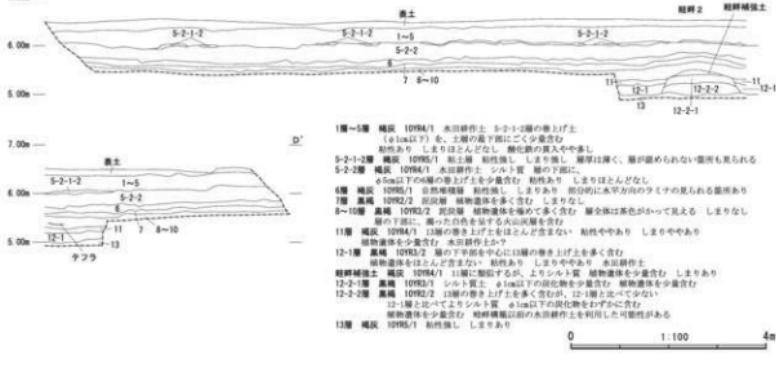
1-1区東壁



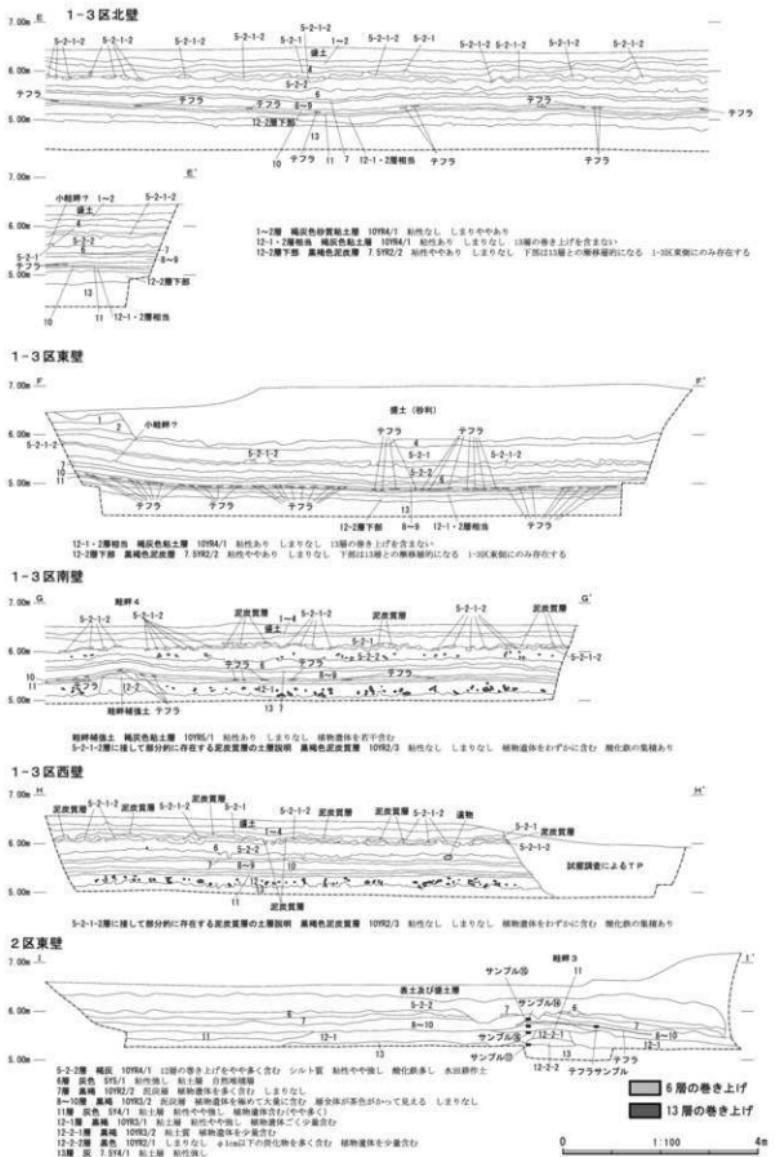
1-1区北壁



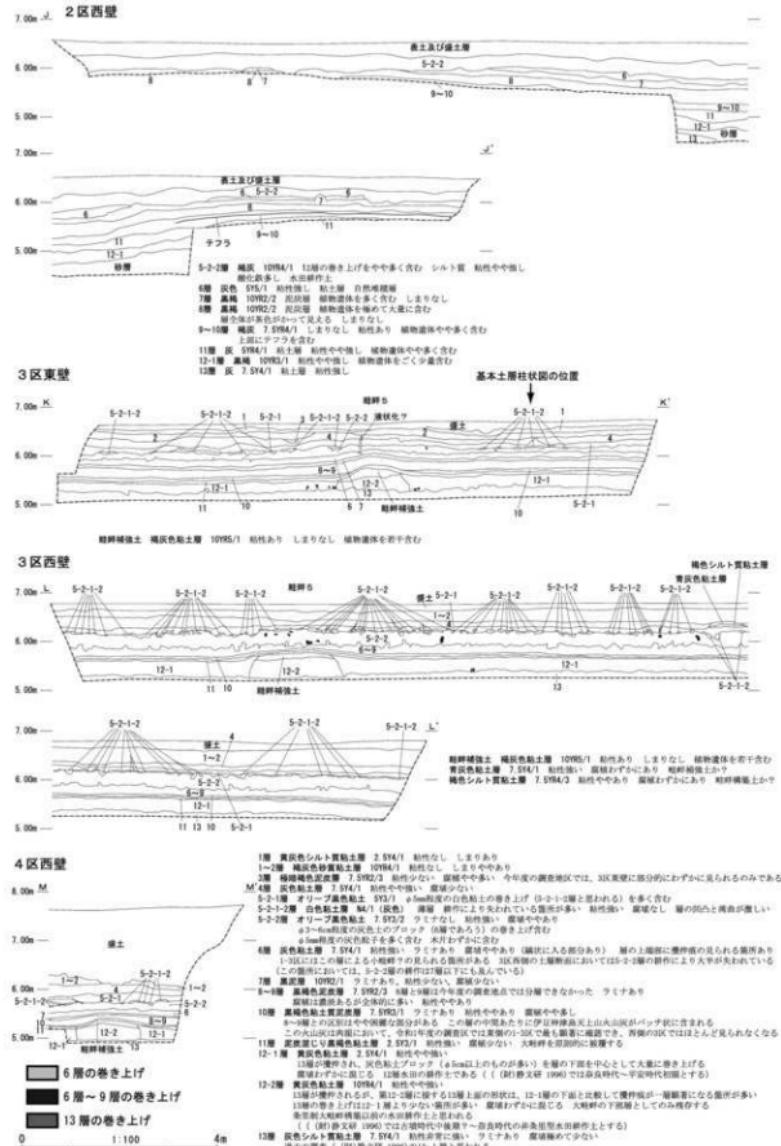
1-2区南壁



第7図 土層図 1



第8図 土層図2



第9図 土層図

により上部と下部に分けた箇所がある

第12-2層…黄灰色粘土層。10YR4/1。粘性やや強い。腐植わずかに混じる。第13層が巻き上げられるが、第12-2層に接する第13層上面ラインの形状は、第12-1層の下面ラインと比較して、搅拌痕が一層顕著になる箇所が多い。大畦畔本体の下部層としてのみ残存する。条里制大畦畔構築以前の水田耕作土と思われる（過去の調査では古墳時代中後期～奈良時代の非条里型水田を主とする水田の耕作土とする）。この層も下の第13層の巻き上げの多少等により、第12-2-1層と第12-2-2層に分層した箇所がある。

第12-2層下部…黒褐色泥炭層。7.5YR2/2。粘性やや有り。しまり無し。今回の調査の調査区では、1-3区東側にのみ見られる。過去の調査では、古墳時代中期に比定されている。

第13層…灰色シルト質粘土層。7.5 Y 4/1。粘性非常に強い。腐植極めて少ない。ラミナあり。過去の調査の13-1層の可能性がある。過去の調査では古墳時代中期洪水堆積層とする。今回の調査の掘削はこの層の上部の中途まで行った。

第3節 調査の経過

1 現地調査

(1) 平成29年度の調査

平成29年10月26日に現地事務所等を立ち上げ、30日から重機による表土等除去作業を開始した。途中重機等によるトラブルがあり、一時期中断したが11月14日に再開し、12月1日に終了した。同日、包含層掘削を開始し、12月5日からは遺構検出も同時併行で進めた。24日は包含層掘削、遺構検出とともに終了した。

翌1月10日にはラジコンヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った。1月11日から畦畔部分の遺構掘削（畦畔の解体作業）を開始した。29日に遺構掘削を完了し、以降は撤収作業と出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続した。3月26日に現地事務所を撤去し、撤収作業を完了させた。

(2) 平成30年度の調査

(ア) 2区

平成30年9月3日に現地事務所等を立ち上げ、調査準備等の作業を行い、21日から、重機による表土等除去作業を開始した。産業廃棄物が多量に埋められている部分があり、そこは盛土が極めて厚く、除去作業にかなりの時間を要したが、10月29日に2区全体の表土等除去作業を終了した。翌30日から包含層掘削を開始し、11月26日に終了した。27日に清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、28日にはラジコンヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った（景観写真撮影には高所作業車も併用）。翌29日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。2区西側において、多量の木製品が出土したため、掘削作業と遺物の記録及び取り上げ作業を同時並行で行い、年末年始をはさんだ翌1月8日に遺構掘削作業を完了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、2月20日に、1-2区の基礎整理作業も含めて終了した。

(イ) 1-2区

2区の調査に併行する形で、10月29日より掘削のための準備作業を行い、11月5日から、重機による表土等除去作業を開始し、12月3日に終了した。翌4日から包含層掘削を開始し、年が明けた1月7日に完了した。8日から10日にかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、11日にはラジコン

ヘリコプターによる景観撮影、写真実測を行った（景観写真撮影には高所作業車も併用）。15日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。24日に遺構掘削作業を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、2月20日に終了した。21日からは2区も含めた撤去作業を行い、3月5日に調査関連の施設等の撤去作業を完了し、現地から撤収した。

（3）令和元年度（平成31年度）の調査

（ア）1-3区

令和元年9月2日に現地事務所等を立ち上げ、調査準備等の作業を行い、10月7日より表土等除去作業を開始し、11月5日に終了した。翌6日から包含層掘削を開始し、11月19日に上段部分の包含層掘削を完了した。25～26日に清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、26日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。12月3～4日に下段部分の包含層掘削を行い、4日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。遺物出土状況の記録及び取り上げ作業を同時並行で行い、10日に遺構掘削作業を完了した。なお、1-3区は発掘区側面の土層図作成の作業のみを掘削作業中から行い、遺構掘削完了後の12月11～12日、18～25日、令和2年1月7日～24日まで実測を含めて断続的に行った。終了後は他地区の遺物も合わせて、3月5日まで現地での出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を行った。

（イ）4区

1-3区の調査に併行する形で、11月6日から、重機による表土等除去作業を開始した。既に述べたように、この調査区は極めて深い深度まで地盤改良による削平がなされており、その上に大量の建築関連の廃棄物が捨てられていた。更にその上に1m以上もの盛土がなされていた。その上で調査前まで大半が畑として利用されていた状況であったが、このような状況が判明したのは、表土等除去作業開始後であった。そのため、表土等の土量が当初設計より大幅に増加し、また、法面の安全対策を十分に行う必要があった。このような理由により、この区の表土等除去作業は予定より大幅な作業日数増を要することになった。12月10日に表土等除去作業を終了した。翌11日から包含層掘削を開始し、年が明けた1月16日に完了した。日数がやや経過しているが、1月31日から2月6日にかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、7日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。10日と12日には僅かに残存した畦畔部分の解体を行い、25日に写真撮影を終えて4区の調査を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、3月5日に終了した。

（ウ）3区

1-3区、4区の調査に併行する形で、12月18日から、重機による表土等除去作業を開始し、12月25日に終了した。翌26日から包含層掘削を開始し、年が明けた2月3日に完了した（途中の1-3区、4区の調査の工程上、数回の中止期間あり）。3～5日からにかけて清掃作業も兼ねて遺構検出作業を行い、6日にはラジコンヘリコプター及び高所作業車による景観撮影、写真実測を行った。7日から畦畔部分とその周辺の遺構掘削（畦畔の解体作業他）を開始した。20日に遺構掘削作業を終了した。以降は出土品基礎整理作業（木製品の洗浄等）を継続し、3月5日に終了した。3月6日には、現地の監督員詰所の撤去作業を行い、現地から完全撤収した。

2 資料整理・保存処理

（1）令和2年度

資料整理（記録類整理・出土品整理）、報告書刊行作業（原稿執筆）を実施した。また、木製品及び金属製品については保存処理作業を実施した。これとともに、木製品の樹種同定作業、種実の同定作業

第3表 土層総括表

平成29年度	平成30年度	令和元年度	調査区	出土地点	開拓図面	備考
6層		1層～5層	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	
10層		5～2層	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	
12層		6層	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	
13a層		7～8層	1-1IK	調査区東・北壁、昭峰土層帶	土層図No.3	
13b層		9～10層	1-1IK	調査区東・北壁、昭峰土層帶	土層図No.3・1	
14層		11層	1-1IK	調査区東・北壁、昭峰土層帶	土層図No.3・1・2	
15層		12-1層(上部)	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	12-1層の土層説明とは別には原図のものを使用する
16層		12-1層(下部)	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	
17a層		12-1層～13層	1-1IK	調査区東・北壁	土層図No.3	
17b層		13層	1-1IK	調査区東・北壁、昭峰土層帶	土層図No.3・1・2	
15-16層		12-1層	1-1IK	調査区東・北壁、昭峰土層帶	土層図No.3・1・2	
14層の一部		昭峰粘土土	1-1IK	昭峰土層帶	土層図No.1・2	
昭峰構造土①		12-2層	1-1IK	昭峰土層帶西壁、土層帶1	土層図No.1	
昭峰構造土②		12-2層下部	1-1IK	昭峰土層帶西壁、土層帶1・2	土層図No.1・2	土層帶1では1層として表現する。原図の分剖線(中間線)は消す。
17a層		12-2層下部	1-1IK	昭峰土層帶西壁、土層帶1	土層図No.1	
13b～14層		10～11層	1-1IK	昭峰土層帶2	土層図No.2	
昭峰構造土③		12-2層	1-1IK	昭峰土層帶2	土層図No.2	土層帶2では1層として表現する。原図の分剖線(中間線)は消す。
昭峰構造土④		昭峰粘土土①	1-1IK	昭峰土層帶-4・5	土層図No.2	
昭峰構造土⑤		昭峰粘土土②	1-1IK	昭峰土層帶-4・5	土層図No.2	土層説明は原図のものを使用する
昭峰構造土⑥		昭峰粘土土③	1-1IK	昭峰土層帶-4・5	土層図No.2	
10層		5～2-2層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
12層		6層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
13a層		7層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
13b層		8～10層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
14層		11層	2IK	調査区東壁昭峰部分	土層図No.8	
15～16層		12-1層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
17b層		13層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
昭峰構造土⑦		2IK		調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	東壁土層帶1では1層として表現する。原図の分剖線(中間線)は消す。
昭峰構造土⑧		12-2層	2IK	調査区東壁・昭峰第1ベルト	土層図No.8	
13b層		8～10層	2IK	昭峰第1ベルト	土層図No.8	
15層		12-1層(上部)	2IK	昭峰第1ベルト	土層図No.8	
16層		12-1層(下部)	2IK	昭峰第1ベルト	土層図No.8	
13b層		10層	2IK	昭峰第2ベルト	土層図No.9	
昭峰構造土⑨		12-2層	2IK	昭峰第4ベルト	土層図No.9	
6層		1層～5層	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
7または9層		5-2-1-2層	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
10層		5～2-2層	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
12層		6層	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
17b層		13層	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
昭峰構造土⑩		昭峰粘土土	1-2IK	調査区南壁	土層図No.6	
昭峰構造土⑪		12-2層上部	2IK	調査区南壁	土層図No.6	
昭峰構造土⑫		12-2層下部	2IK	調査区南壁	土層図No.6	
13b層		10層	2IK	昭峰第4ベルト	土層図No.6	

を委託し、実施した。

(2) 令和3年度

資料整理（出土品整理）、報告書刊行作業（原稿執筆・編集作業）を実施した。これにより令和4年3月に報告書を刊行した。また、木製品については保存処理作業を継続した。

木製品の樹種同定作業を委託し、3箇年度で全て終了した。

(3) 令和4年度

木製品の保存処理作業を実施し、全点数を完了した。これにより、今回の上土遺跡の調査に係る全作業が終了した。

第4表 調査工程表

調査項目	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31（令和 1）年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度
【現地調査】						
1区		---				
2区		--				
1-2区		--				
1-3区			--			
4区			---			
3区			--			
【資料整理】						
資料整理作業				--	--	
報告書作成作業				--	--	
【保存処理】						
出土品保存処理				--	--	--
木製品樹種同定				--	--	--

第4章 調査の成果

第1節 平成29年度の調査（1-1区の調査）

1 遺構の検出状況

平成29年度の調査は、第1章第1節で述べた経過に従い、平成23～28年度の調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

掘削作業は、表土から第6層（統一した層名であり、調査当初は別の層名を用いた。以下同じ。）までは重機で一気に除去し、第7層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行ったが、この地区は畦畔の高さが低く、検出は困難を伴った。そのため、ある程度の深度（第13層までである場合が多い）をもつトレンドチを、想定される畦畔の方向と垂直に交差するように設定し、断面からの畦畔の検出に努めた。この結果、調査区西側で東西方向の大畦畔を検出した。

畦畔 1

調査区を南西壁から北東方向に延びる大畦畔である。西側はAq-3グリッドから検出されているが、東側は、第7～10層に及ぶ泥炭層の除去のみでは検出できなかった。第10図の畦畔は泥炭層除去段階での平面的な検出状況を図化したものである。これによれば、黒色泥炭層中に突き出していた部分はAt-1グリッドまでで、それより東はこの図には表現されていない。ただし、土層帶4と5からは高さの低い畦畔が痕跡的に検出されており（第11図）、本来的には畦畔が調査区の東北壁まで（あるいはその近くまで）設定されていた可能性は高い。ただし、この畦畔1の東側部分は補強等が不十分で、畦畔としての使用は他の箇所に比べて早期に終了した可能性が高く、水田も含めて早い段階で耕作が行われなくなつたと思われる。

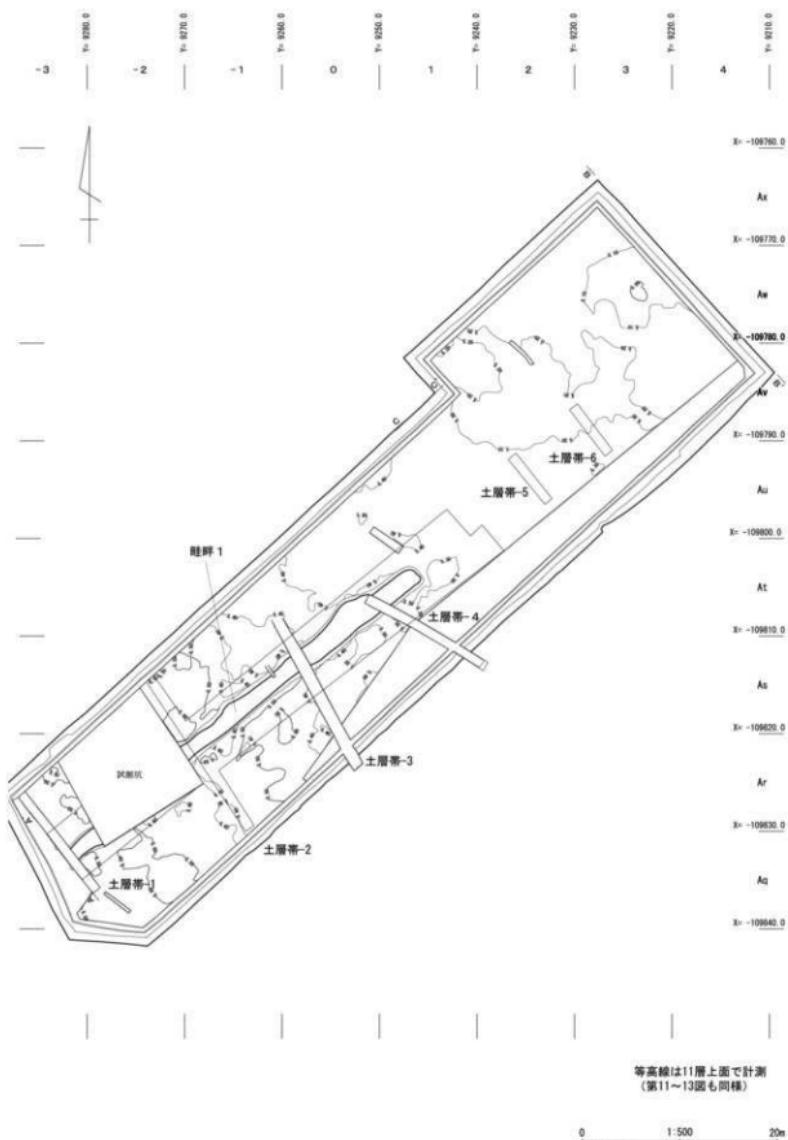
上述した通り、第10図での泥炭層中に突き出で検出された長さは約45mであり、幅は約3.2～0.8mである。床土である第13層の直上部分における幅は、3.2m～0.6mである。ただしこれはトレンドチ掘削に伴う土層帶部分のみによる所見である。

畦畔1は高さ（第13層上面からの）は全体として西側部の方が高く、前述したAt-1グリッド以東は急激に高さを減ずる。

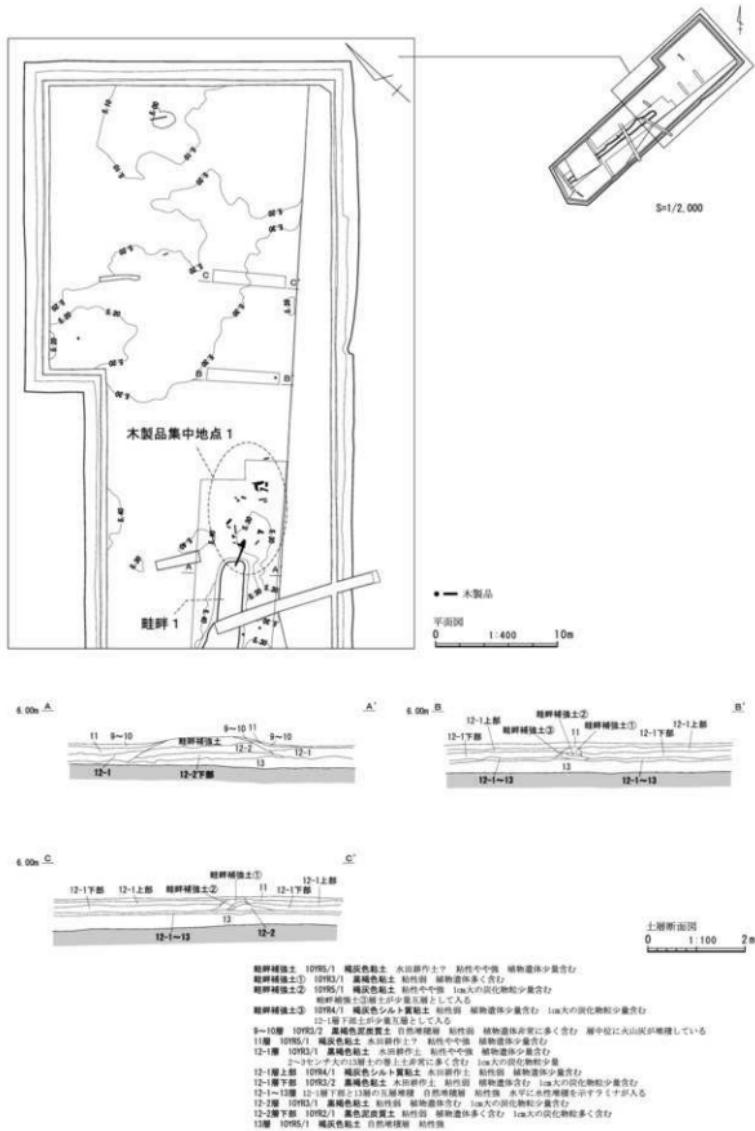
遺物は畦畔中ないし畦畔上からは非常に少ない。ただし、At-1グリッドを中心とした畦畔付近には次項で述べる木製品集中地点1が存在する。

木製品集中地点1

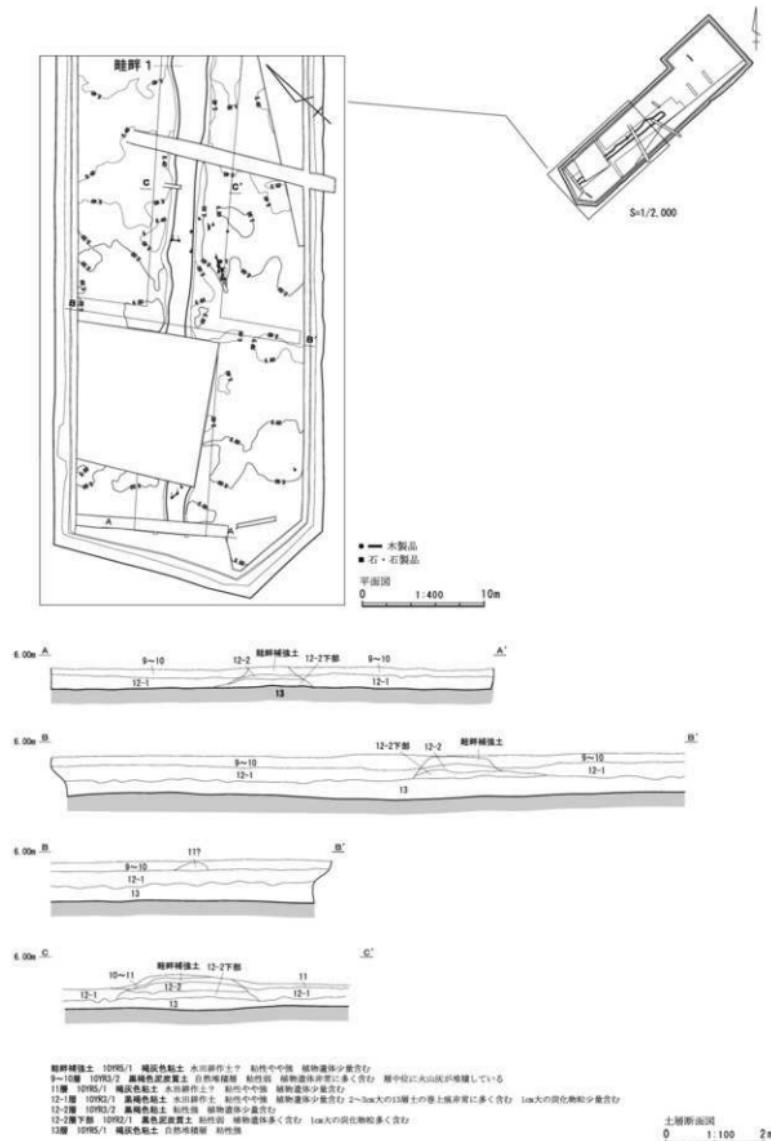
畦畔1の北東に木製品が集中していた箇所があり、木製品集中地点1として扱う。分布状況は長径約10m程度の楕円形を呈し、細長い木製品が比較的目立つ。注意すべきなのは木製品が畦畔1の頂部にかけて出土していることである。第10図ではこの木製品集中部が、畦畔の痕跡だけを残した土層帶4の方向へ延びていることがわかる。このことから、この遺物集中地点1を構成する材の多くが畦畔1の補強材であり、原位置から若干ずれた形で出土していると推測される。



第10図 1-1区全体図



第11図 1-1区造構詳細図1



第12図 1-1区遺構詳細図2



第13図 1-1区遺物出土状況図

第2節 平成30年度の調査（1-2区、2区の調査）

1 遺構の検出状況

平成30年度の調査は、第1章第1節で述べた経過に従い、平成29年度の本センターの調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

掘削作業は、表土から第6層（統一した層名であり、調査当初は別の層名を用いた。以下同じ。）までは重機で一気に除去し、第7層以下は重機を用いて上から慎重に剥いで行った。最初は2区を、2区の調査途中から1-2区の調査を開始し、同時に進めた後、2区を終了させ、その後は1-2区のみになり、1-2区を終了させてこの年度の作業が終了した。

両地区の概略を述べると、2区は、平成29年度調査の1-1区の南西側、市道を挟んだ箇所に設定し、1-1区の畦畔1の続きを検出する目的で調査した。1-1区の状況に類似して、大畦畔の検出にはやや困難が伴ったが、一応調査区東北壁から延びる大畦畔を検出することができた（畦畔3）。

1-2区では、泥炭層中に突き出る大畦畔の頭を容易に検出することができた（畦畔2）。この畦畔は調査区の北西壁から南東壁まで、一か所の切れ目部分を除いて一直線につながっていた。この切れ目は水田の出水口の可能性があり、以下で詳述する

（1）1-2区

畦畔2

調査区の北西壁から南東壁まで、1箇所の切れ目を除き、一直線に延びる大畦畔である。これを検出した1-2区では、調査区北西側は前述1-1区と接続している。したがって畦畔2の北側延長部分は、1-1区で検出されるのが自然であると思われるが、1-1区ではこの畦畔2の延長部分は検出されていない。理由は不明である。

また、南東側延長部分には後述する1-3区を設定し調査を行った（令和元年度）が、こちらでは畦畔3の延長上に大畦畔が検出されている（畦畔4）。

この畦畔2は全体的に高さが高く、泥炭層中の遺構検出作業においても容易に頭を出すこと可能であった。第11層と考えられる灰色粘土層は畦畔上を覆つておらず、畦畔補強土が直接泥炭層に姿をあらわす形で検出できた。

畦畔の断面は全体にわたってほぼ一律であり、地山である第12-2層の上に灰褐色の畦畔補強土が盛られて造られている。その点では他地区的畦畔と共通するが、第12-2層は上下の2層に分層可能である。これについては既に第3章2節の土層説明の箇所で述べた。

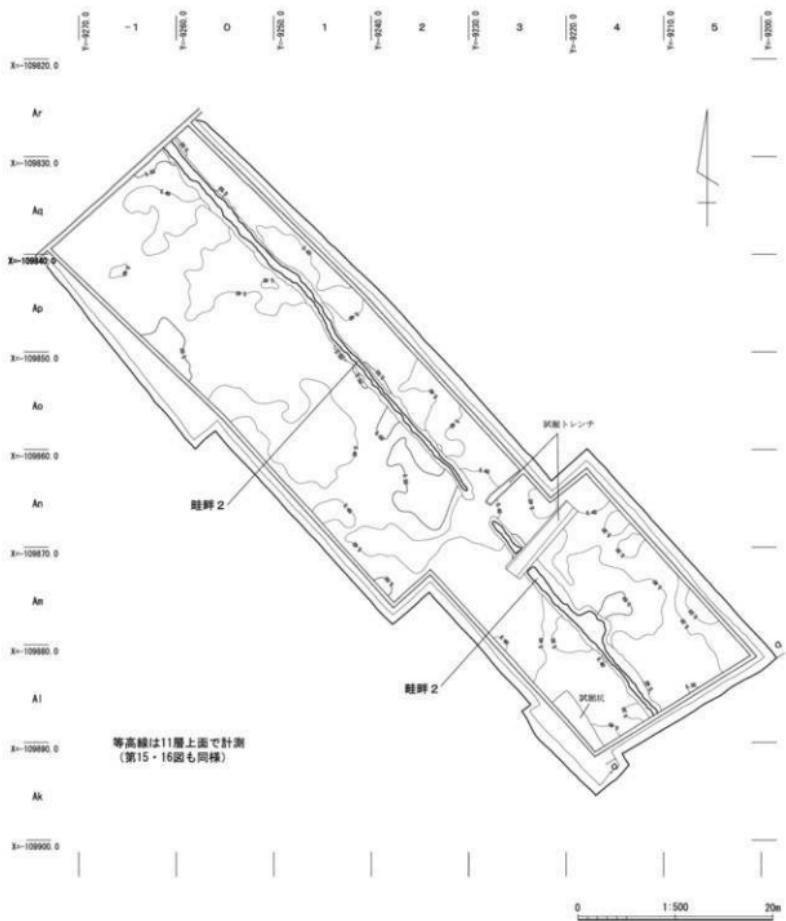
このほか、この畦畔2にはAn-2～3グリッドにおいて、出水口の可能性がある切れ目が発見されている。畦畔補強土が内側に傾斜する形で盛られていることが確認できるため、これは明らかに人工的に作られた切れ目である。ただし、畦畔設置当初からこの切れ目が存在したか否かは不明である。

第14図での泥炭層中に突き出で検出された長さは、北（西）壁から出水口（？）までは約48mであり、出水口（？）から南（東）側、南（東）壁までは約26mである。

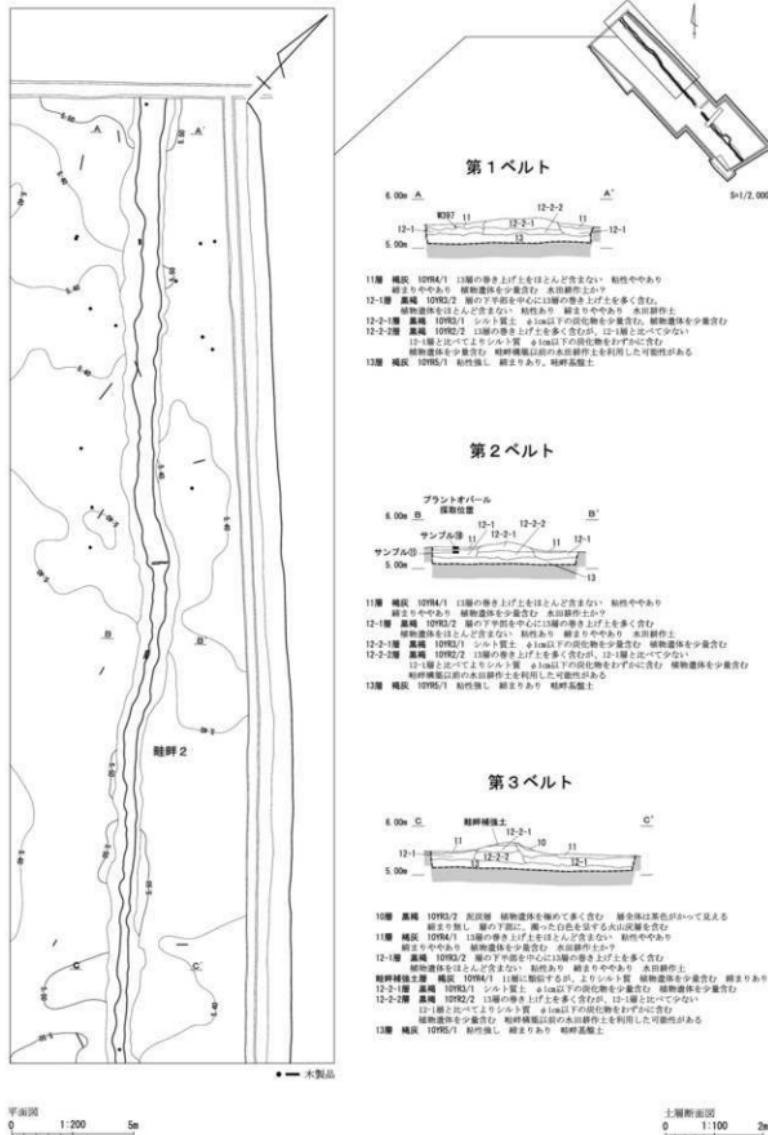
出水口（？）の幅は、第13層上面で約2.6mである。

畦畔全体の最大幅は約3.3mであるが、これは出水口（？）の南側で一段と太くなっている箇所である（第16図）。最も細い部分は約1.0m程度であろう（床土である第13層の直上部分における幅）。平均的には1.6m～1.2mである（土層ベルト部分のみによる所見）。

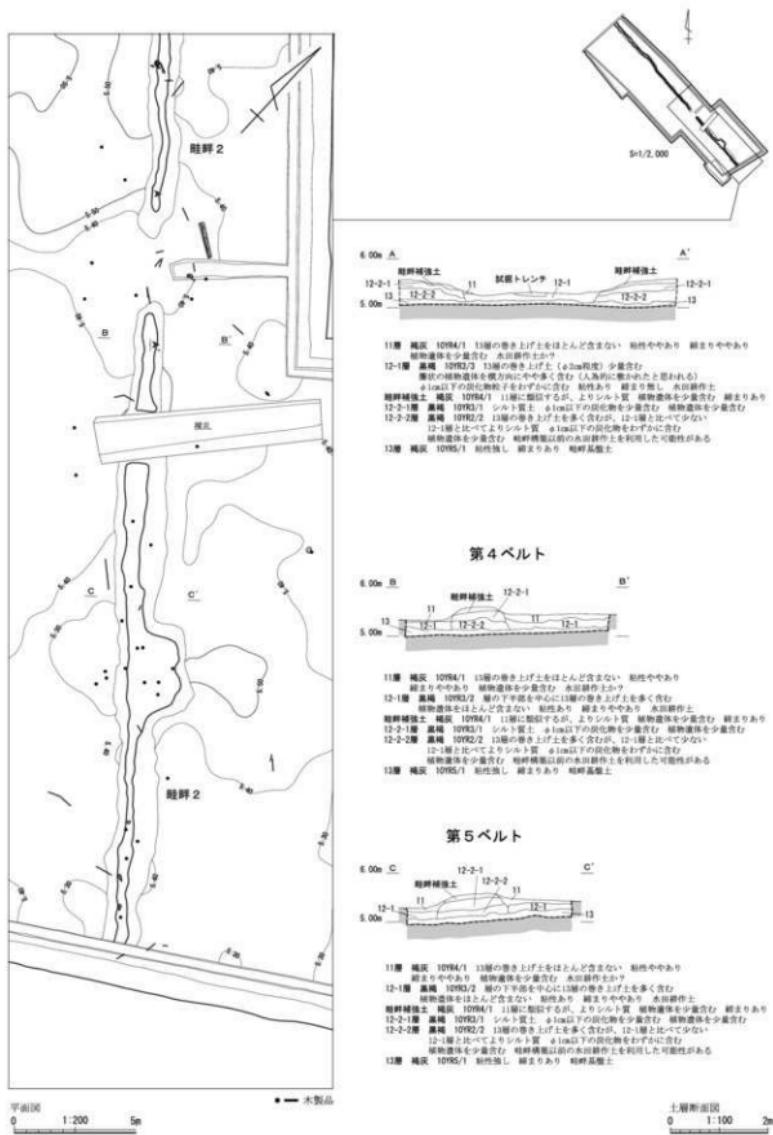
この1-2区では遺物の集中地区は見られない。畦畔3から離れた箇所で円柱型田下駄の棒と踏み板が近接して出土しているのが目立つ程度である（第17図）。

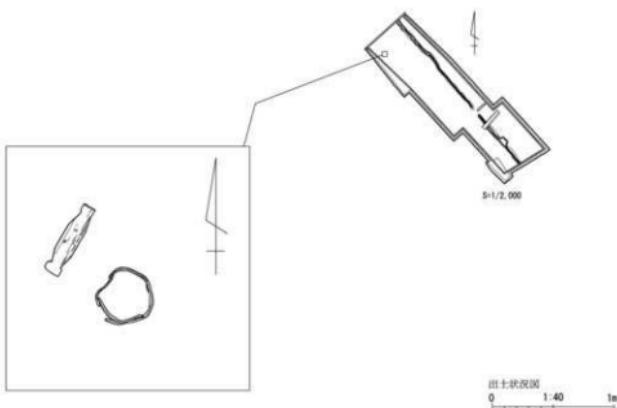


第14図 1-2区全体図



第15図 1-2区造構詳細図1





第17図 1-2区遺物出土状況図

(2) 2区

畦畔3

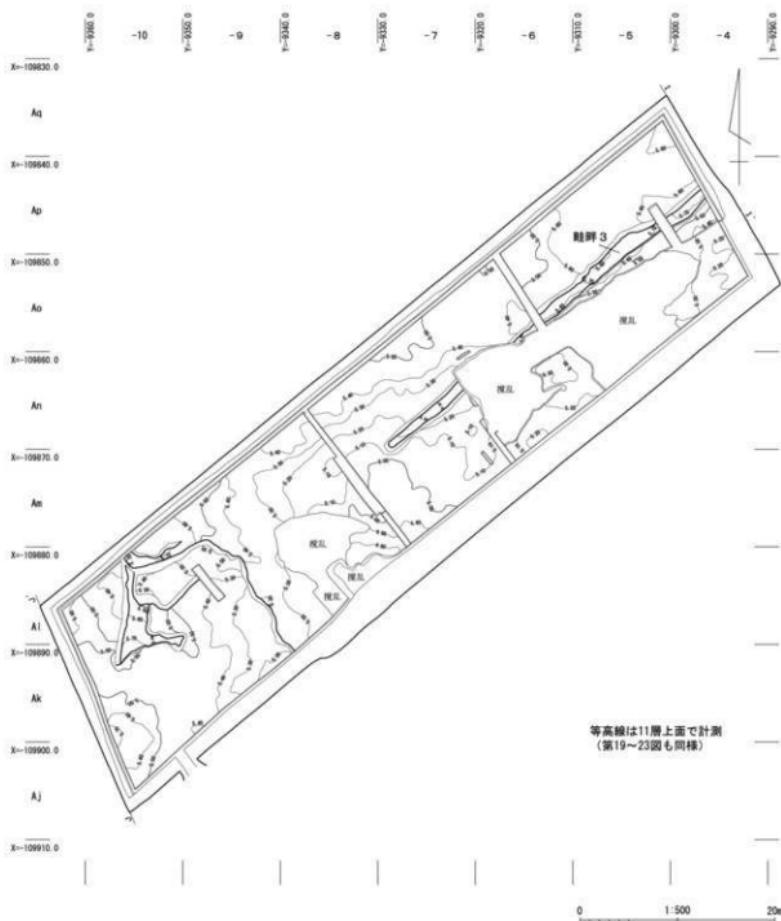
調査区を北（東）壁から南西方向に延びる大畦畔である。北東側は調査区の北東壁に断面が現れていますので、これより北東側に延びるのは確実である。1-1区で検出された畦畔1の延長上にあるため、現静岡市道の路面下を通って畦畔1に接続すると思われる。

全体的に、第7～10層に及ぶ泥炭層の除去によっては検出できなかったが、第11層と考えられる灰色粘土層が疑似畦畔状に盛り上がっている箇所もあり、これにより畦畔の存在を確認できた。第18図の畦畔の平面図は、11層上面を出した状況で作成している。この図では南西部はAn-7グリッドまで畦畔を表現することが可能で、それより南西側は土層断面図で判断するほかは無い。第20図は最も西側の土層確認用トレチの土層断面であるが、ここには低平な畦畔の断面が見えており、ここまで畦畔が延びていたことが確認できる。調査区南（西）壁部の土層断面図（第8図）では畦畔の断面は見えず、ここまで畦畔が延びていなかったことは明らかである。

また、シガラ状の木枝の集積が畦畔上に数か所で見られたが、そのうちのAm-8グリッド付近で検出されたものを図化し、写真撮影を行った。

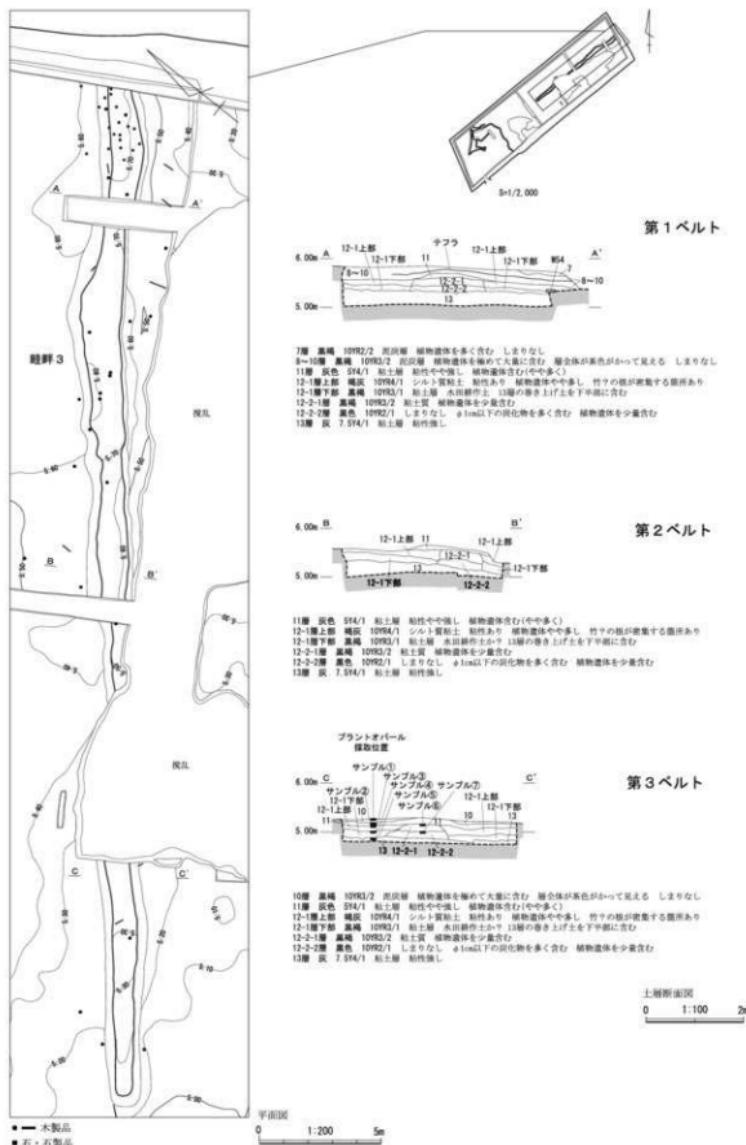
なお、調査区で最も西南側の土層確認トレチ付近から西南側は、第13層上面に至るまで不規則な凹凸が認められ、恐らくは洪水時などに形成された窪地のような地形であろう（洪水時等には水が流れる）。畦畔の痕跡が見いだされた第5ベルトはこの窪地状の地形の東側部分にある。ここから西南側で畦畔の痕跡が見いだされなかったのは、この窪地状の地形が形成される時点での作用（恐らくは洪水等であろう）で削り取られた等の事情が考えられる。この調査区南西部の窪地状の凹凸は、極めてイレギュラーで明確なプランを示さないため、遺構とは認定しなかった。

第19図での泥炭層中に突き出て検出された長さは、北（東）壁から約42mである（途中に大きな搅乱箇所がある）。畦畔の痕跡が確認できる土層確認トレチまでは約62mである。最大幅は約2.4m、最も細い部分は約1.4m程度であろう。床土である13層の直上部分における幅は、1.6m～0.9mである。ただしこれは土層ベルト部分のみによる所見である。

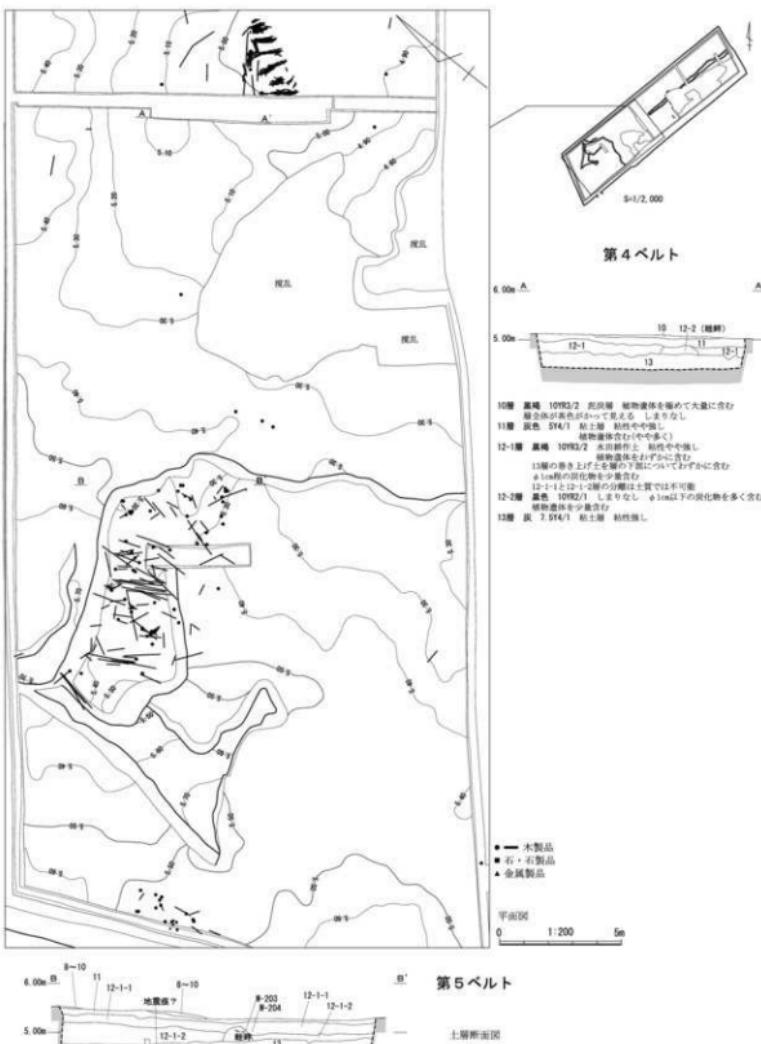


第18図 2区全体図

第4章 調査の成果



第19図 2区遺構詳細図1



8-10層 基礎 10F2/2 花崗岩 植物遺体を含めて大量に含む。層全体が茶色がかった見える。しまりなし。

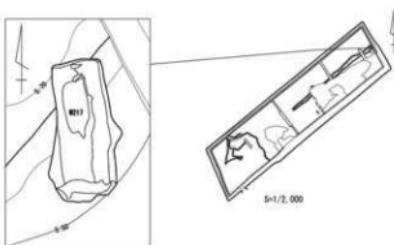
11層 砂岩 5F4/1 基土層 素性やや硬し。植物遺体含む(やや多く)

12-1層 基礎 10F2/1 木田耕作上 素性やや強し。植物遺体大さびで多く含む。竹材の根が密集成する箇所あり。

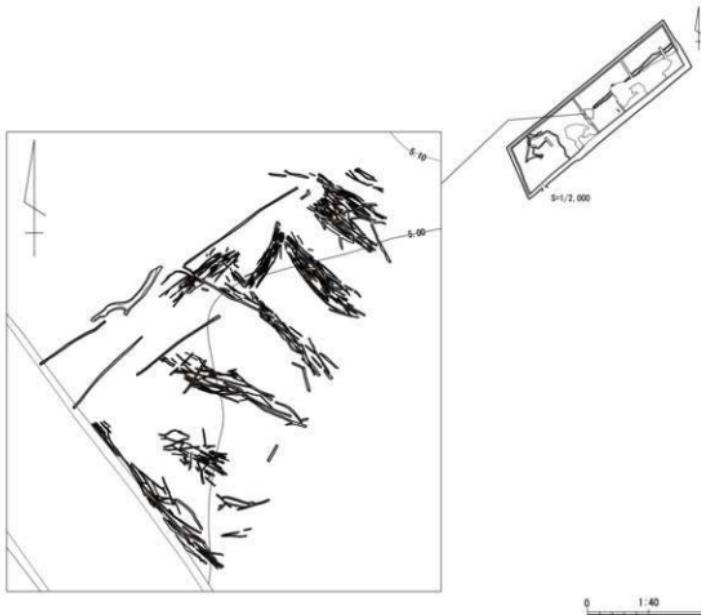
12-2層 基礎 10F2/2 しまりなし。木田耕作上より 13層の巻き上げ土を下層に含む

13層 覆 7.5F4/1 基土層 素性強し。

植物遺体を少數含む



第21図 2区遺物出土状況図1



第22図 2区遺物出土状況図2

木製品集中地点2

前記の窪地状部分周辺から相当に多くの木製品が検出されたので、これを木製品集中地点2として扱う。分布はA1—9グリッド付近である。点上げした遺物は第20図に載せ、これと重なるが、最も遺物が密集している箇所は、出土状況詳細図として第23図に掲げた。個々の遺物についての詳細は次の「遺物」の項で述べるので、ここではこの遺物集中地点の概略について述べたい。

遺物全体の分布は先述の窪地の中で大枠としては長楕円状に広がる。出土状況詳細図では中央付近に細長い木枝を加工した木製品が集中した箇所があり、その周りを取り巻くように板材や田下駄等の遺物



第23図 2区遺物出土状況図3

が分布する。木枝加工の木製品の向きは、非常に大きな括りでは北方向を志向している。これらの遺物は恐らく洪水等によりこの場所に移動し、埋没したと思われ、現状での遺物分布から原位置での情報を推測するのは困難を伴うが、木枝状の木製品がある程度共通した方向でかたまって出土しているのは、意味のある分布状況と考えられる。この木枝状木製品は畦畔の補強材であると考えられる。おそらくは杭であろう。

なお、Am-8付近にシガラ状の木枝の集中箇所があり詳細図（第22図）を掲載した。9束程度のまとまりが認められ、畦畔の方向と垂直方向の束が大半を占める。この部分は低平な畦畔が続いている箇所であり、このシガラ状の木枝は畦畔の補強材の可能性が考えられる。このシガラ状の木枝は出土状態を図化し、写真撮影を行ったが、個々の木枝の取り上げは行っていない。

また、2区北東のAp-4グリッド畦畔下で、第13層にめり込む形で、大型の加工痕のある木幹が出土した（第21図 図版31）。遺物については、第4節で述べたい。

第3節 令和元年度の調査（1－3区、3区、4区の調査）

1 遺構の検出状況

令和元（平成31）年度の調査は、第1章第1節で述べた経過に従い、平成29年度の調査方法を踏襲し、条里区画に伴う大畦畔の調査を第一とすることになった。

1－3区は平成30年度の1－2区の南東側に接続し、東西方向（南西～東北）に走行する大畦畔を検出することが主な目的であるため、東西方向に長い調査区になった。また、想定どおり1－2区の畦畔2に接続すると思われる大畦畔も検出できた（畦畔4）。ただし、当初想定していた東西（南西～北東）方向の畦畔は検出できなかった（結局この畦畔は、さらに南側の4区で検出された）。また、Am-6グリット付近に存在したと想定され、断面が調査区北（西）壁に現れる畦畔（後述する小畦畔で、畦畔5）は泥炭層の重機掘削中、存在に気付かず、誤って削平してしまった。

3区は、1－3区で検出するはずであった東西方向（北東～南西）の大畦畔の続きを検出する目的で設定した調査区である。後述するとおり、この畦畔は4区で検出されたが、3区ではその延長上から大畦畔が検出された（畦畔6）。また、調査区西側部から木製品集中地点（木製品集中地点3）が検出された。

4区は、調査前は他地区と同様の状況と想定していたが、全域で大規模な削平を行った後に、大量の建築廃材（現在のものに近い極めて新しいもの）等が埋められており、遺構の残りは極めて悪かった（第13層以下まで削平が行われている箇所も多かった）。しかし残存部で、断続的に東西方向（南西～北東）の大畦畔を検出することができた。ただし、遺構面の擾乱がひどく、南北（北西～南東）方向の大畦畔（この区を設定した当初狙っていた畦畔）を検出することはできなかつた。

（1）1－3区

畦畔4

調査区西側で北（西）壁から南（東）壁にかけて検出された大畦畔である。1－2区で検出された畦畔3の延長上にあり、かつ畦畔4の北端部と畦畔3の南端部が極めて近い位置関係にあるので、連続する畦畔であることは間違いない。

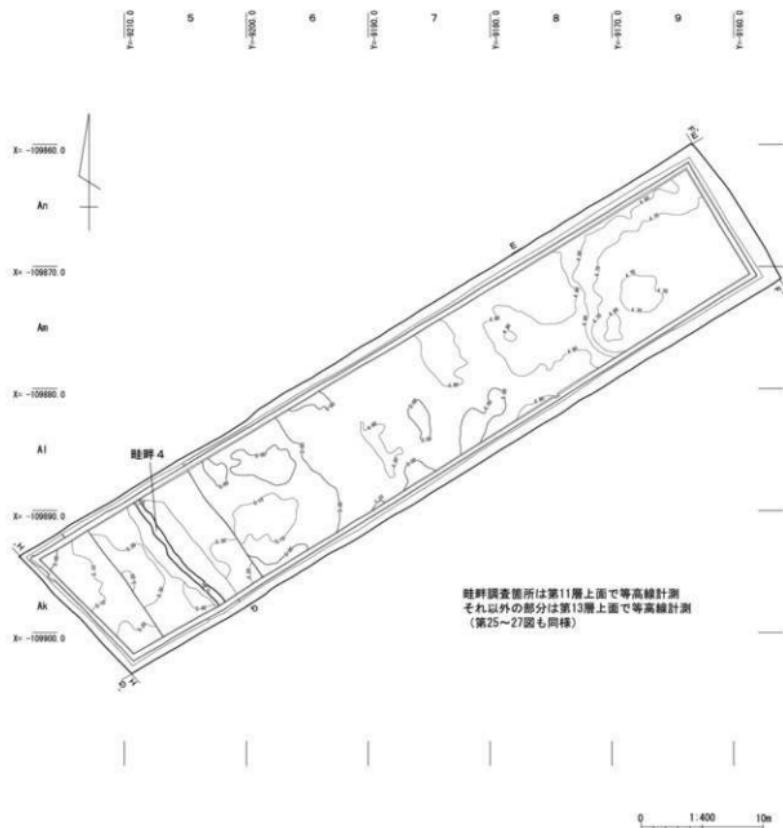
この畦畔4は全体的に高さが高く、泥炭層中の遺構検出作業においても、畦畔3と同様に容易に頭を出すこと可能であった。第11層に被覆されており、11層が疑似畦畔を構成している。11層直上の泥炭層である第10層中には、伊豆神津島天上山の火山灰Iz-Ktが、畦畔付近と畦畔上に断続的ながら明確に認められる。

第13層上面からの高さは調査区北西壁、南西壁の断面部分で約40～50cmであり、幅は底辺部分（13層直上部分）で約110～140cmである。第12～2層は上下に分層しなかつた（できなかつた）。

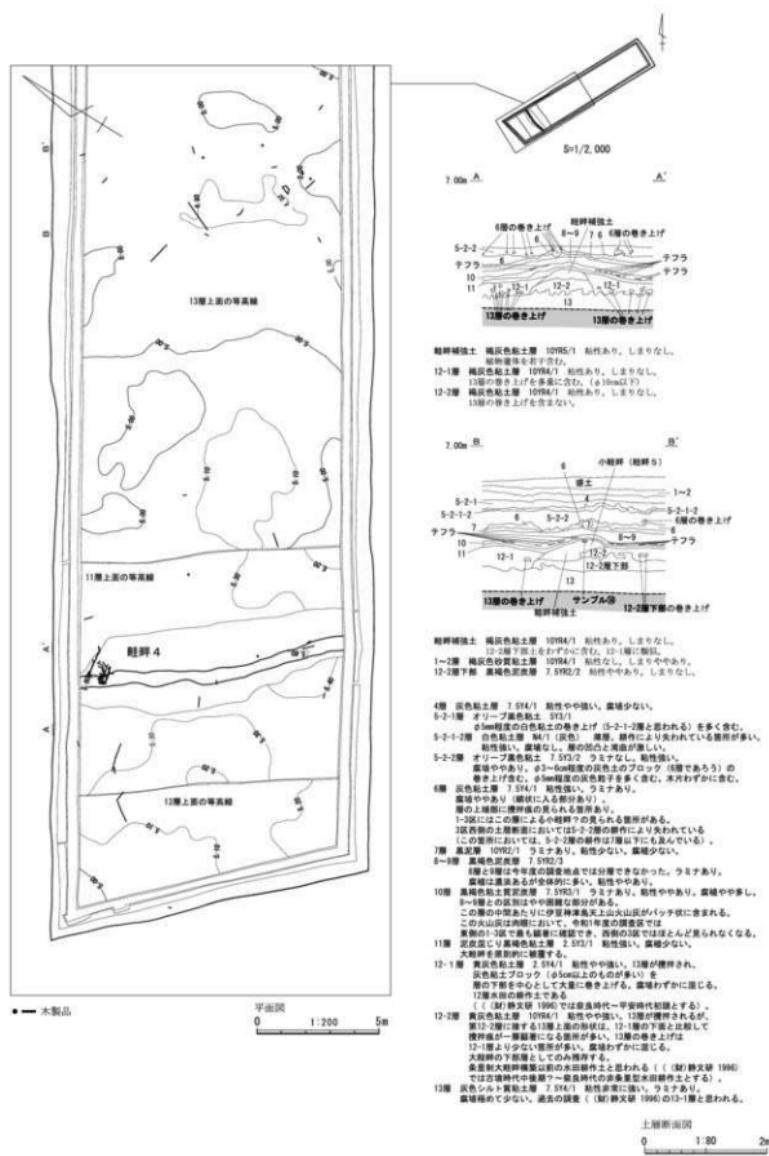
畦畔5

調査区の西側、北西壁に現れた畦畔の断面を畦畔5とした。前述のとおり、この畦畔の存在は重機による表土等除去作業中には気づかず、調査区内に存在していたであろう畦畔本体は重機により削ってしまった。したがって、現状では断面のみからの記述になる。

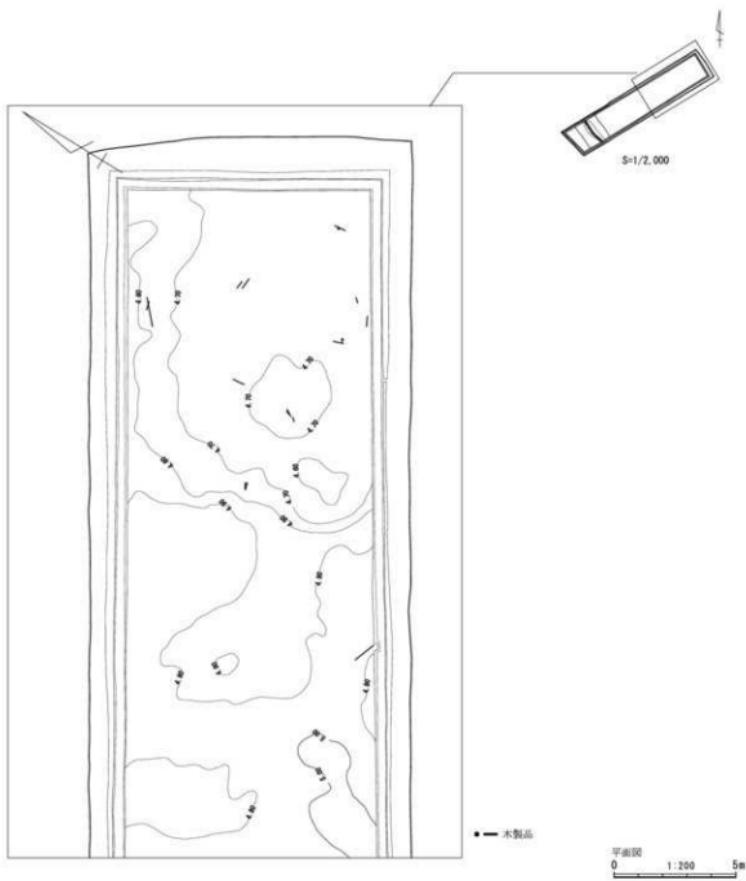
畦畔は第12層とその上の畦畔補強土となる。ただし第25図では、西側に比べて東側は第12～2層が畦畔中に食い込むように表現されており、やや不審である。段差ないし断層上に設定された畦畔の可能性がある。それでも東側の畦畔掘部の土層の状況は不自然ではある。この畦畔の上には11層と泥炭層である10層がのっており、疑似畦畔を構成している。10層中に断続的にであるが、伊豆神津島天上山の火山灰Iz-Ktが明確に認められる。



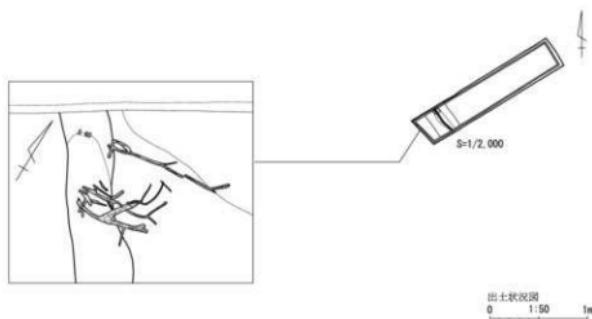
第24図 1-3区全体図



第25図 1-3区造構詳細図1



第 26 図 1-3 区遺構詳細図 2



第27図 1-3区遺物出土状況図

(2) 3区

畦畔6

北東壁から南西壁にかけて検出された大畦畔である。4区で検出された畦畔7の延長上にあり、間に未調査部分があるが、連続する畦畔である可能性は高い。

この畦畔6は全体的に高さが高く、泥炭層中の遺構検出作業においても、容易に頭を出すことが可能であった。

畦畔の構造は他地区の大畦畔と同様であり、第12-2層を畦畔土にして上に畦畔補強土をのせる形である。層厚は薄いが第11層が調査区全体で見られ、この畦畔6も11層で被覆されており、調査区端部の南西壁、東北壁の土層断面図においては、第10、11層が疑似畦畔を構成している。北東壁の断面では、第10層は畦畔直上部分では存在しない(第9図土層図③)。これに対して南西壁では10層は畦畔全体を被覆し、第11層とともに疑似畦畔を構成している。

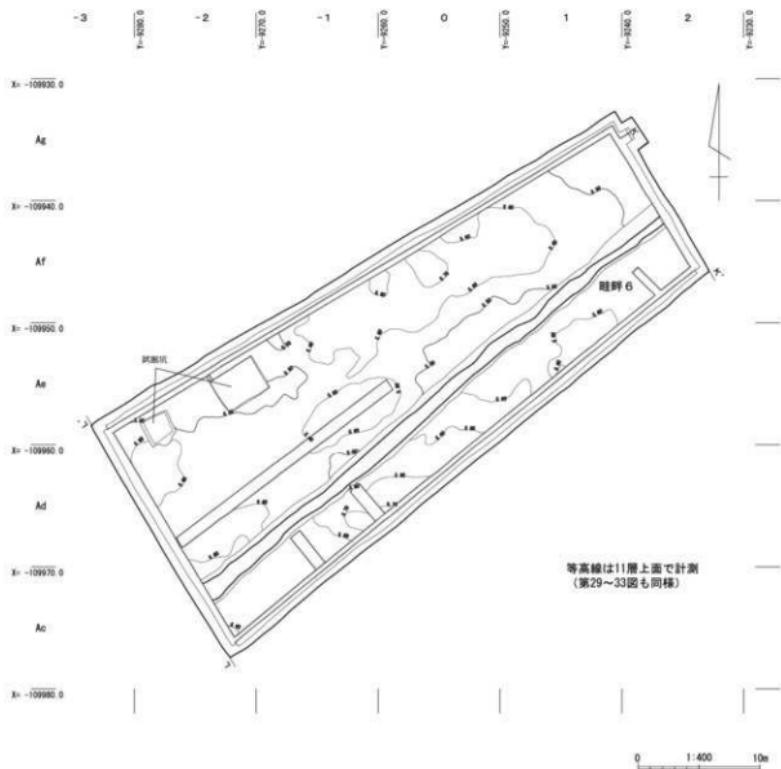
畦畔の幅は1.2m~2.2m(第11層上面での幅)である。底辺部分(13層直上部分)で1.5~3.8mである。畦畔の上部や裾部に補強材とみられる木枝が見られる箇所もあり、やや集中する部分もあった。これらの木枝は、加工痕(裁断痕は除く)が見られるもの以外は記録のみ作成し、遺物としての取り上げを行わなかった。

木製品集中地点3

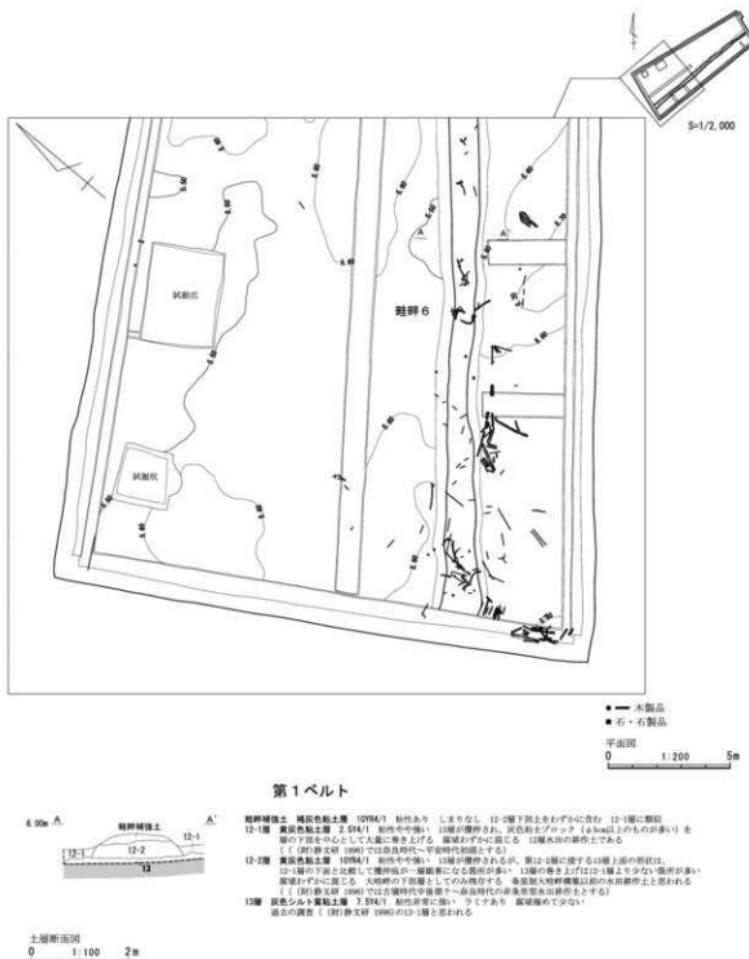
3区の調査区西南部を中心に(特に南西壁南側の調査区端部が中心)、多くの木製品が検出されたので、これを木製品集中地点3として扱う。分布はAc-1-1-2グリッド付近である。点上げした遺物は第29図に載せ、これと重なるが、最も遺物が密集している箇所は、出土状況詳細図として第32図に掲げた。個々の遺物についての詳細は次の「遺物」の項で述べるので、ここではこの遺物集中地点の概略について述べたい。

この集中地点は、全体としては遺物の分布は疎である。ただし4個所以上の密な部分がある。密な部分も含めて、遺物の分布状況と畦畔が直接関係するとは言い難い。補強材や構築材として確実にいえるものはない。おそらくは、条里制水田耕作において、何らかの事情で水田耕作が放棄される際、あるいは放棄後に、田面中に廃棄された遺物である可能性が高い。

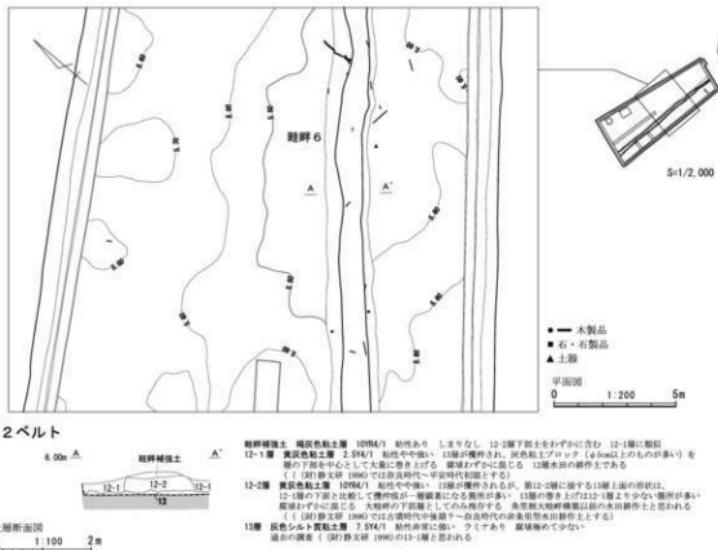
また、遺物も農耕関連のものはほとんどみられず、細い柱材と思われる木製品が目立つ、建築材(他のものも含む)を廃棄したのであろうか。



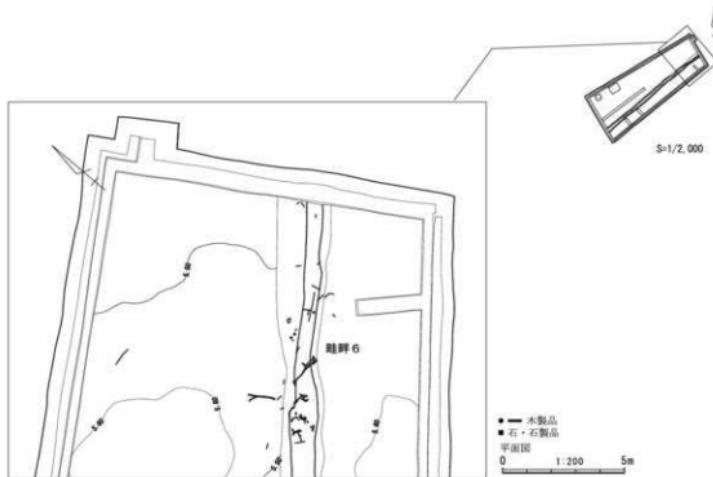
第28図 3区全体図



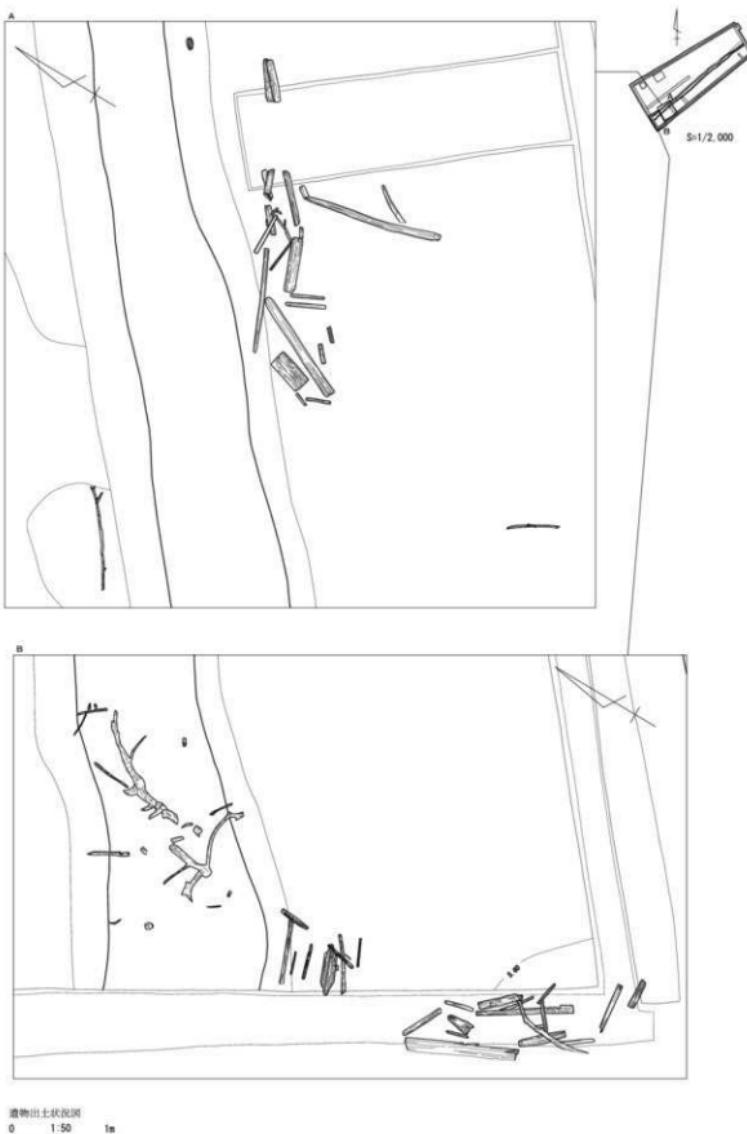
第29図 3区遺構詳細図1



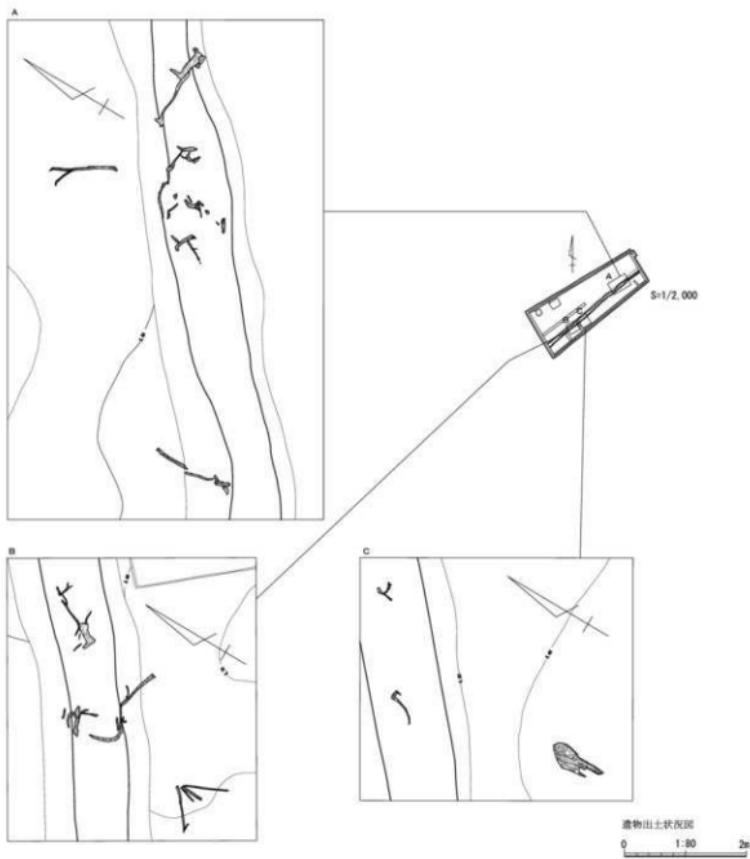
第30図 3区遺構詳細図2



第31図 3区遺構詳細図3



第32図 3区遺物出土状況図1



第33図 3区遺物出土状況図2

(3) 4区

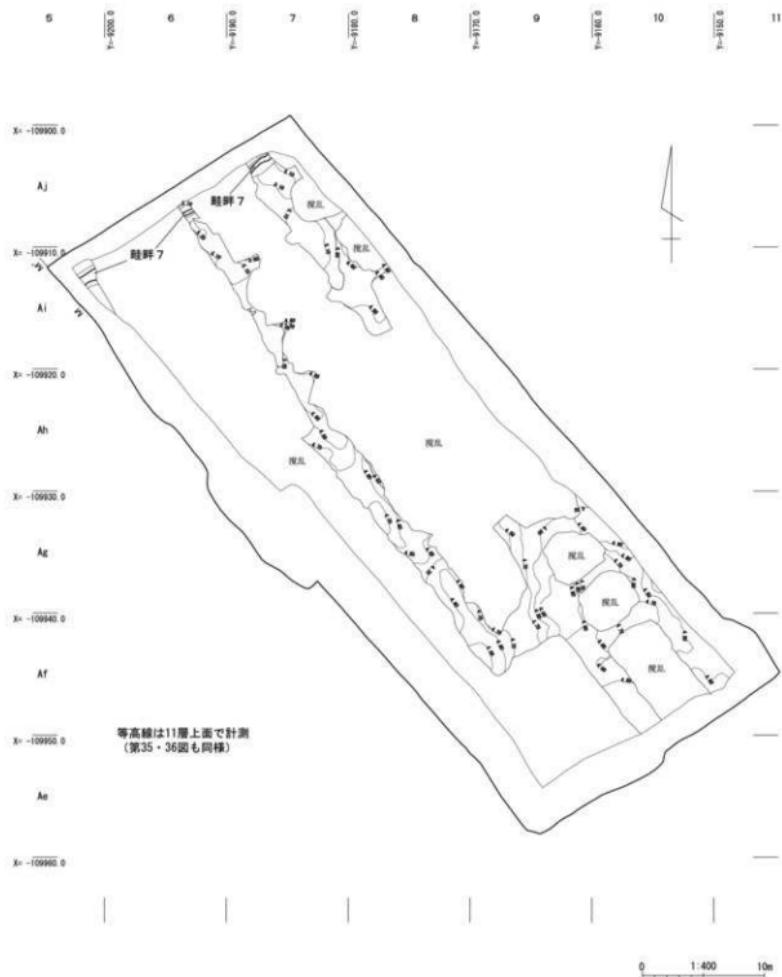
畦畔7

調査区北側（北西側）に、東西方向（東北～南西方向）に走る大畦畔である。前に述べたように4区は擾乱がひどく、この大畦畔も連続的に検出できたわけではない。第13層上面より深い深度まで擾乱が及んでいる箇所は、遺構そのものが残存しないわけであり、この畦畔6はいわば「島」状に残った残存部に断続的に検出された畦畔である。また、調査区北東側の畦畔は、残存していても畦畔の上部～中部が削られて基部に近い部分が僅かに残存しているにすぎない（その状態で図化した）。

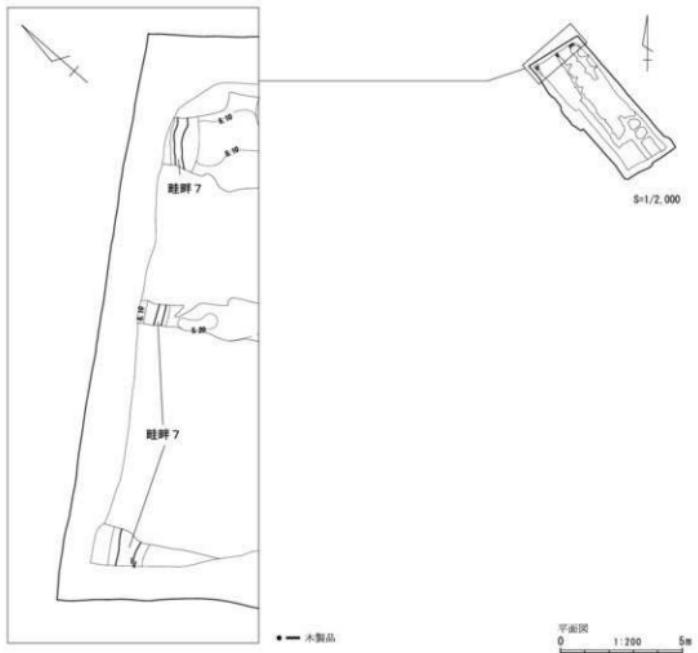
調査区南西壁近くは第1～2層以下が残存し、この部分で畦畔断面の記載を行う（第9図）。畦畔は他地区と同様に第12～2層により構築され、その上部に畦畔補強土が乗ってい

る。第11層は畦畔直上部では被覆せず、泥炭層の最下部の第10層により疑似畦畔が生じている。

この大畦畔が検出されたことにより、1-3区よりさらに南側（市道下を含む）に大畦畔が通っていたことが証明されたわけである。



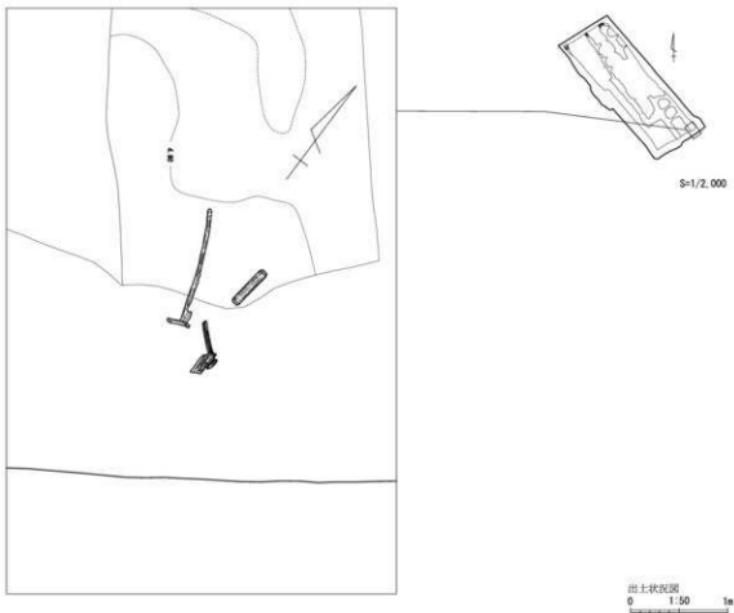
第34図 4区全体図



第35図 4区造構詳細図

第5表 畦畔計測表

造構名	調査区	長 (m)	幅 (m)	高さ (m)	備考
畦畔1	1-1	45	0.8 ~ 3.2	0.25 ~ 0.44	
畦畔2	1-2	74	1.2 ~ 1.6	0.28 ~ 0.42	
畦畔3	2	42	1.4 ~ 2.4	0.29 ~ 0.38	
畦畔4	1-3	11	1.1 ~ 1.4	0.4 ~ 0.5	
畦畔5	1-3	-	-	-	調査区壁でのみ確認
畦畔6	3	48	1.2 ~ 2.2	4.4 ~ 0.5	
畦畔7	4	18	0.3 ~ 0.6	-	



第36図 4区遺物出土状況図

第4節 出土遺物

上土遺跡の平成29年度から令和元年までの調査では、奈良時代から平安時代の年代に属する土器1点、石製品1点、木製品577点、金属製品が1点出土した。大半が水田の覆土より出土した。おそらく水田の畦畔の構築材として、あるいは農耕土木具として使用された製品が大半を占める。生活用具として使われた製品はごく僅かである。今回の調査では、検出された遺構が水田畦畔であったことから、生産域としての性格を持つ。そのため、出土する遺物も水田に関わるもののが中心となる。調査区は複数箇所に分かれているが、年代は奈良・平安時代に限られていることから、器種分類ごとに記述する。

第37図1(図版15)は須恵器の坏身口縁部片である。3区の12a層の畦畔6据より出土した。復原口径は13.0cm、残存高は3.2cmである。外面は黒く、非常に薄いつくりで、やや風化して脆い状態となっている。今回の調査で出土した土器は、この1片のみである。

第37図2(図版15)は1-1区の畦畔盛土内より出土した。長方形の柱状窓で表裏面は平坦となっている。表面の一部と裏面は全体に磨り面がある。側面は磨り面がない。水田で耕作作業時に使われた砥石で、畦に据え置かれて、鎌等の研ぎ直しに使われていた、所謂、置き砥石と推定される。石材は砂岩質である。

第37図3(図版15)は柄付きの鉄製鎌である。2区16層下層より鉄製の鎌刃に木製の柄が付いた状態で出土した(図版13-4)。西端部トレンチ内で見つかったため、畦畔内なのか包含層からなのかは特定できなかった。

鎌刀は緩やかな曲刀で、先端部分が欠損し、中央付近で折れている。長さは21.9cm、幅は2.95cmで、背面は厚みが0.25cmである。基部端は柄の装着時に外れないよう、手前方向へ直角に、折り曲げられている。基部端は欠損している。木製の鎌柄に重なっていた部分には、表面・裏面ともに木質部分が残っている。特に鎌刃の裏面に残る木質は、はっきりと別部材であることがわかる(図版15最下段)。木質は 2.45×2.6 cmの大きさであった。保存処理前の観察状況では板目の薄板が確認できた。別部材は鎌柄側でも確認できている。鎌刃が装着された隙間に、明らかに鎌柄の木目とは異なる板目の薄板が見えていた(図版15最下段)。鎌柄に鉄製の鎌刃を装着したときに、刃と柄の隙間の両側に、咬ませて固定させていた木製の「楔」と考えられる(註1)。

鎌柄は中央が破損しているものの、全体の形状が復元できる。全長は33.4cm、最大幅は4.4cm、厚さは1.8cmを測る。頭部は小振りの鶴頭状に作られていて、鎌刃の直上にあたる右側は浅く窪んでいる。鎌刃の装着部分は上端より3.7cmのところから、長さ3.6cm×幅0.5cmの隙間がある。基部の断面は鎌刃に近いほうは、厚みのある長方形で、握部に近いほうは梢円形である。下端部は握部の突起が作り出されている。下端部は欠損している。裏面には整形時の手斧痕が見える部分もある。この鎌柄の形状と鎌刃の向きから、右利き用の鎌であろう。

鎌柄の樹種はカキノキ属の分割材から加工されている。カキノキ属で作られた鎌柄は、樹種同定では適材とされているが、県内で鎌柄に使われた初例とのことである(第6章第1節)。柄に装着された鎌刃は鈍角で、着柄角度は113度である。

第38図4以降は今回の調査で出土した木製品である。器種ごとに記述していくこととする。第38図4~8(図版16)は発火具の燃えさし(付け木)又は火切り杵と考えられる。樹種はスギ、ヒノキ、

サワラ等の針葉樹が使われている。

第38図4(図版16)はヒノキ材で全て割面の棒状である。長さは53.5cm、幅は1.9cm、厚さは1.1cmである。3区の畦畔上部より出土した。下端部の先端は炭化している。切れ端材で付け木として使われたものであろう。

第38図5(図版16)は2区の疑似畦畔の基盤より出土した火切り杵である。スギの分割材から作られている。一部、折れているが、ほぼ完形品で、全長は37.9cm、直径は1.2~1.45cmである。表面は全体に加工され、断面は円形の棒状である。第35図10の火切り臼と共に出土した(図版12-7)。

第38図6(図版16)は1-2区の13b層より出土した。ヒノキ材で、上部は切断された痕がある。全て割面で、下端部は炭化している。全長は15.6cm、幅は1.6cm、厚さは1.05cmの細い棒状である。

第38図7(図版16)は1-1区の14層より出土した火切り杵の破片で、上半部は欠損している。全体に風化のため加工の痕は見えない。棒状で断面形は丸く、下端部が炭化している。樹種はスギである。残存長は15.6cm、直径は1.35~1.55cmである。

第38図8(図版16)は3区の畦畔6内より出土した。樹種はサワラで、上部は欠損し、各面とも割面である。表に一部、工具の痕がある。残存長は14.9cm、幅は4.2cm、厚さは1.95cmを測る。下方部が炭化していることから、付け木として使用されたものであろう。

第38図9(図版16)は1-2区の畦畔2層より出土した。薄板状のスギ板目材で、下端部が火を受けて焦げている。残存長は27.5cm、幅は3.35cm、厚さは0.65cmと薄い。4面とも割面で、上半部は欠損している。これも付け木として使われたものであろう。

第38図10(図版16)は2区の疑似畦畔の基盤より、火切り杵(第38図5)と共に出土した火切り臼である(図版12-7)。スギの板目材で、残存長は27.2cm、幅は2.0cm、厚さは1.2cmを測る。上端部は丸く整形され、下端部は欠損している。全面、丁寧に整形加工されている。臼の部分は7箇所が確認できる。擦り面は1.4×1.4cm程度で、上部3箇所の臼部分は左側に抜け落ちている。かなり使い込まれた状況であることが観察できる。

第38図11・12(図版16)、第39図13・14(図版16)は農具等の柄と思われる木製品である。ただしいずれも破損しているものであるため、用途は異なる可能性もある。

第38図11(図版16)はスギの柱目材で作られた製品である。1-1区の14層より出土した。残存長は88.2cm、最大幅は4.1cm、厚さは3.6cmである。上端部は丸く整形され、上部断面は円形に近い。一方、下方は下から15cm程度のところから幅が広がっている。下端部は欠損している。左側面だけが加工面で、それ以外は割面の状態であることから、未完成品の可能性もある。樹種選択からして鍛・鋤の柄ではないと思われるが、水田城で見つかっていることから、農耕土木具等の一部と考えられる。

第38図12(図版16)も同図11とほぼ同形で、同じような寸法のスギの分割材より作られた製品である。1-2区13b層より出土した。全長は85.7cm、最大幅は6.5cm、厚さは2.8cmで、全面、整形加工されている。上端部は丸く整形している。上半部は幅が5.1cm程度で、下端部の25cm辺りから徐々に幅が広がっている。左側面の中央に長さ3.5cm程度の浅い窪みがある。右側面下方にも長さ1.2cmの窪みがある。整形されている製品ではあるが、未完成の状態に思える。

第39図13(図版16)は1-1区の畦畔1盛土内より出土した、上部が欠損した棒状の製品で、樹種はアカガシ亜属である。分割材から整形されている。残存長は69.4cm、断面は上部が3.9cm、下部は2.6~2.7cmを測る。全面、丁寧に整形されており、下方には握部を作り出されており、上方へ行くほど幅が太くなる。表面の加工痕は見えないことから、仕上げに磨いた可能性がある。この形状や樹種選択からして、鍛の柄である可能性が高い。上部が欠損しているため、鍛身との組み合せ状態はわからない。

第39図14(図版16)は2区の17b層より出土した。材質はスギで、分割材から加工されている。断面は円形の棒状木製品である。上部中央は突起状の部分を切断した痕がある。下方は欠損している。残存する面は、すべて加工が施されている。残存長は42.8cm、直径は2.5~2.8cmを測る。材質がスギであることから、鎌・鋤の柄とは考えにくいが、農耕土木具のなかに含めた。

第39図15~第40図29(図版17)は鎌等の柄に付けられた泥除けである。この時期の泥除けは本遺跡のほかに隣接する岳美遺跡や池ヶ谷遺跡、過去の上土遺跡でも数多く出土している。長さ20~28cm程のスギ又はヒノキの板目材で、薄板を用いて作られているが、スギの使用率が圧倒的に多い。いずれも柄孔が通る部分が半円形に削り込まれ、孔の上下にある小孔で左右対称の板を綴じ合わせて、2枚1組で泥除けとして使用される。

第39図15(図版17)は3区の12a上層より出土した泥除けで、ほぼ完形の半身である。全長は23.5cm、幅は7.7cm、厚さは0.9cmで、樹種はスギの板目材を使って作られている。柄を通す孔として、片方の側面が半月形に抉り込まれている。綴じ合せの孔は0.5~0.8cm径の円形孔が上下に2箇所ずつある。

第39図16(図版17)は2区の14層上面より出土した。スギの板目材で、一部欠損するが全体の残りは良い。全長は25.6cm、幅は7.5cm、厚さは0.7cmを測る。丁寧に加工されているが、上下端部は切断した痕が残っている。上部の小孔は1箇所、下部の小孔は2箇所である。孔は円形で、0.5~0.6cm径である。

第39図17(図版17)は1~2区の13b層より出土した、全長20cm程の小振りな泥除けである。スギの板目材で、上下に2箇所ずつの綴じ孔がある。上半部の一部を欠損するが、ほぼ完全な形で残っている。全長は19.9cm、幅は7.5cm、厚さは0.8cmで、円形の綴じ孔は0.55~0.8cmである。

第39図18(図版17)は1~2区の畦畔2最上部より出土した。スギの板目材で、全体に加工してある。全長は21.2cm、幅は7.05cm、厚さは0.85cmで、柄孔を通すため半円形の抉りを入れる加工はあるものの、側面部の整形や上下の小孔は見当たらない。まだ完成形ではない未製品であろうか。

第39図19(図版17)は3区の12層上面より出土した。全体に火を受けており、炭化して元の形状は一部にしか残っていない。スギの追い柾目材で、柄孔を通す削り込みと小孔1箇所が辛うじて残っていることから、泥除けであったことが判別できる。残存長は21.2cm、幅は8.8cm、厚さは0.8cmで、上方にある円形孔は1.0cmである。

第39図20(図版17)は1~2区の13b層より出土した泥除けである。上半部は残りが良いが、下方の左側面が欠損している。表には平滑面とするための手斧痕が見える。側面も丁寧に加工している。小孔は上部に1箇所、下方には残存孔が1箇所見える。スギの板目材で各面とも加工面である。全長は23.0cm、幅は7.5cm、厚さは0.8cm、上部の綴じ孔は0.4×0.5cmの円形孔が貫通している。

第40図21(図版17)は2区14層上部より出土した。スギ材の追い柾目板で作られた泥除けである。右側面の一部が欠損し、表面が風化している。残存長は26.6cm、幅は7.6cm、厚さは0.7cmを測る。柄孔部分は7.2cmの長さがある。上部には円形の小孔が1箇所、下部の小孔は2箇所で、並列せず、ずれています。孔は0.7~1.0cmの径がある。また上部右側には筋状の刃物痕がある。

第40図22(図版17)は1~1区の畦畔1盛土内より出土した泥除けである。スギ材の板目板で、上下端部は切断痕がある。左側に柄が通る孔があり、右側面にも浅い抉りが入る。上部には小孔1箇所、下部は2箇所の小孔がある。第40図21と同様に小孔の位置がずれている。全長は23.9cm、幅は8.5cm、厚さは0.9cmを測る。

第40図23と25(図版17)は1~1区の14層より重なり合った状態で出土した(図版9~7)。使用材もヒノキと同一の樹種であることから、対になり同じ鎌柄等に装着されていた可能性もある。今回、

出土した泥除けで、唯一のヒノキ材である。

第40図23(図版17)は長方形で、上下端部は切断面で、左右側面は割面である。表・裏は平坦に加工されている。左側に柄が通る孔がある。全長は22.0cm、残存幅は5.0cm、厚さは0.5cmで、上下に1箇所ずつ、0.6～0.7cmの円形孔がある。

第40図25(図版17)は長方形で、上下端部は切断している。右側に柄が通る部分が抉られている。全長は22.5cm、残存幅は4.3cm、厚さは0.5cmである。寸法は23とほぼ同じである。縫じ孔は上部に1箇所、下部に2箇所ある。0.6×0.8cmの円形孔がある。

第40図24(図版17)は1～2区の遺構外14層上部より出土した。長方形を呈するスギ材の板で、右側中央に割り込みと下部に小孔1箇所のみがある。小孔は円形で 0.65×0.8 cmであった。上下端部は切断痕で、裏と左右側面は割面である。小孔が1箇所しかないことや左側面も整形加工もないことから未製品の可能性もある。

第40図26(図版17)は3区の畦畔6真上より出土した泥除けの破片である。上下欠損した破片だが、材質と小孔の状況から泥除けに含めた。スギの板目材で、側面の一部が火を受けて炭化している。左側面寄りに小孔が2箇所ある。孔は0.7～0.9cmの径がある。破片は残存長が13.0cm、幅は5.3cm、厚さは0.8cmである。

第40図27・28(図版17)も26と同様の泥除けの破片である。

第40図27(図版17)は2区の15～16層より出土した。右側面と下方が欠損している。スギの板目材で、両面とも割面である。左側面寄りに小孔が1箇所ある。小孔は 0.75×0.9 cmの径を持つ円形である。寸法は長さ14.45cm、幅は3.4cm、厚さは0.9cmを測る。

第40図28(図版17)は1～2区13b層より出土した。泥除けは上半部の一部が欠損している。スギの板目材で、表面と側面は面調整されているが、裏面は割面のままである。下方の左側面寄りに円形の小孔が2箇所ある。小孔は0.4～0.55cmの径がある。残存長は22.2cm、幅は7.4cm、厚さは0.9cmである。

第40図29(図版17)は1～2区の遺構外13b層最下部より出土した。泥除けは全面加工されたスギの薄板だが、抉り込みと小孔はない。表面には数本の傷がある。長さは27.1cm、幅は5.4cm、厚さは5.4cm形状とスギ材であることから泥除けとした。

第40図30～32(図版18)は馬鍬の台木とした。樹種は、いずれもスギ材である。馬鍬の場合、耕起具として使われることから、台木はアガシ亜属等の強韌な樹種を使うことが多い。スギ材は馬鍬の台木としては、やや強度が劣るように思われる。馬鍬としたが、大足の継縛等、他の用途である可能性も否定できない。

第40図30は2区の木製品集中区15～16より出土した。角柱状のスギ材の破片で、全面加工されている。上方は切断面で、下方は欠損している。残存長は21.7cm、幅は3.5cm、厚さは2.9cmである。方形のホゾ穴が3箇所確認できる。2箇所の孔は、長さが2.4～2.5cmと大きさが揃っている。上部端の孔周辺は左右の角に圧痕があり、別部材を緊縛していた可能性もある。

第40図31は1～2区の13b層より出土した。角柱状で、分割材から加工してある。上下端部は欠損している。方形孔が見られないが、表面に工具で加工をしようとした産み痕がある。残存長は20.7cm、幅は4.3cm、厚さは2.9cm程である。表面は風化が著しく進んでいる。

第40図32は31と同様、1～2区の13b層より出土した。方形孔の一部が残る破片である。表面と下方は欠損し、裏面は面加工してある。残存長は15.25cm、幅は3.7cm、厚さは1.3cmである。表面の風化が著しい。破損部分も大きく、原形が想定が困難である。

第41図33～第45図68（図版18～21）は円柱型田下駄の足板や角柱型田下駄等である。田下駄に含めた木製品は、すべてスギ材であった。

第41図33は1～2区の遺構外14層上面より出土した円柱型田下駄の足板である。カキ底（註2）の大型楕円形曲物の底板から円柱型田下駄の足板へと転用している。全長は63.7cm、最大幅は15.6cm、厚さは最大で1.55cmであった。表裏と両側面とも加工面であるが、上部と中央付近の側面の一部には割面が残っている。中央には長方形の貫通孔がある。幅は2.1～2.25cm、長さは1.25～1.8cmの孔で、横長の形状である。上端部は切断痕があり、カキ底の痕跡は下方に残っている。上下とも側面方向から切り込みを入れて頭に張り出し部分を作り出している。第44図60も楕円形曲物の底板から田下駄の足板に転用している。33は円柱も共伴していたが、破損が酷く、団化は不可能であった（図版10～6）。

第41図34は1～1区の14層より出土した、角柱型田下駄の足板の可能性がある。スギの板目材で、正面は木表である。右側面の上部が一部欠損しているが、ほぼ完全な形で残っている。全長は51.3cm、最大幅は11.9cm、厚さは1.4cmで、板の上下は側面を両側から切り取り、本体よりも幅狭く、長方形に作り出されている。この端部は第44図59のような角柱型田下駄の桟木に差し込まれたものと考えられる。上下端部は切断された痕が残っている。中央には鼻緒状に3箇所の方形孔がある。方形孔の一辺は1.3～1.7cmの長さがある。

第41図35は2区の調査区西側トレレンチ内16層最下より出土した、円柱型田下駄の足板である。全長は55.25cm、最大幅は8.3cm、厚さは2.0cmである。細身の板状で、4面とも割面のスギ板目材を加工している。上・下端部は両側面から削られて有頭状になっている。中央には方形孔が3箇所切り込まれている。孔の一辺は1.6cm～2.1cm程度になっている。下方の裏面には短軸方向に刃物で削られた痕跡がある。やはり上下側面に切り込みを入れて、円柱の部材と固定するのであろう。

第41図36は3区の13b層より出土した円柱型田下駄で、全面、丁寧に整形された足板である。表面には面調整した手斧痕が見える。スギ材の板目板である。全長は49.2cm、最大幅は8.5cm、厚さは1.8cmを測る。上下の両側面にはV字状の切り込みがあり、両側に張り出す頭部を作り出している。中央には3箇所の方形貫通孔がある。孔の一辺は1.1～1.4cmである。更に上下1箇所ずつ、1.0×1.2cmと1.1×1.4cmの方形孔があることから、円柱部材との固定に使われた孔と思われる。

第41図37も同じ形状を有する足板である。2区の木製品集中区15～16層より出土した。右側面の上部が一部欠損している。全長は40.2cm、幅は11.7cm、厚さは1.3cmで、脛部に最大幅を持つ。スギ材の板目板で、正面は木表面である。中央には円形の小孔が3箇所あるが、上下には貫通孔がない。孔は0.8～1.0cmの径を持つ。足板の表面は風化しているが、加工面であったと思われる。

第41図38は2区の15～16層最上部より出土した円柱型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、表と裏、側面は割面、上下端部は切断痕がある。全長は52.1cm、最大幅は12.4cm、厚さは1.4cmで、長方形の板の側面を削って、上下端部に行くほど幅が狭くなり、脛部に最大幅がある。風化しているため、はっきりとしていないが、一部に面加工されていたように見える。貫通孔は中央の3箇所以外に、上下に1箇所ずつ、大きめの方形孔がある。中央の孔は方形で、横方向が2.6～2.8cm、縦方向が3.0～3.6cmを測る。上端部の孔は2.8×3.6cm、下端部の孔は2.7×3.2cmで、鼻緒孔と同じような方形孔である。

第41図39は2区の木製品集中区15～16層より出土した。別々の取り上げ番号が付いた木製品が、資料整理の段階で、接合することがわかった。やや小振りの円柱型田下駄の足板で、全長39.2cm、最大幅は10.6cm、厚さは1.7cmで、脛部が最も張り出す形状を持つ。スギ材の板目板を素材とし、表・裏とも割面の状態で、両側面は加工されていた。上下の側面には、粗く刃物で切り欠いて、紐をかける場所を作り出している。貫通孔は中央の3箇所で、0.6～0.8cm径の円形の小孔である。形状や小孔の状況が第41図37と酷似していることや同じ調査区の層より出土したこと等から、対になっていた可能

性がある。

第42図40は3区の13層上面より出土した円柱型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、全長は51.9cm、最大幅は中央付近の13.7cmで、板の厚さは2.3cmである。側面は平行する中央部から上下方向へ行くと斜めに削られ、先端は小さな頭部を作り出している。表・裏は剖面のままで面調整痕はない。側面は両側とも加工している。中央には小さめの貫通孔が鼻緒状に並ぶが、下方の孔は2箇所ずつあり、足に合わせて穿ち直されたのであろうか。孔は方形に近い楕円形で、一辺は縦方向が0.85～1.25cm、横方向が1.15～1.45cmを測る。

第42図41(図版19)は2区の木製品集中区15～16層より出土した(図版13～2)、円柱型田下駄の足板である。ほぼ完形で、全体、丁寧に整形されており、表・裏とともに手斧痕が見える。スギ材の板目板で、全長は62.7cm、最大幅は11.9cm、厚みも2.8cm程ある。全体の形状は中央に最も幅を持ち、上下の端に向かって窄まる。板の左右よりも、中央に膨らみを持つ。上下端部は左右に張り出し、緊縛する部分を作り出している。中央に位置する鼻緒の孔は、1.3～1.4cm径の円形で、鋭利な工具で穿孔されたことがわかる。

第42図42(図版19)は1～1区の14層より出土した円柱型田下駄の足板である。細長い長方形形状で、全長は66.7cm、幅は9.9cm、厚さは1.5cmである。スギ材の板目板で作られている。正面は木表側になる。そのため木表側に緩やかに湾曲している。各面とも剖面のまま加工を加えていない。上下端部は切断痕が残っている。板の上下側面にV字状の切り込みを入れているが、上部は2箇所ずつ切り込まれている。中央の貫通孔は小さめの方形である。孔は1.0～1.3cmの方形で鋭利な刃物で切り込まれている。

第42図43(図版19)は1～2区の畦畔2層15～16層より出土した円柱型田下駄の足板である。スギ材の板目板で作られており、全面に面加工の痕跡がある。上端部は切断痕が残り、下端部は欠損している。長方形板の上下側面から切り込みを入れて、左右に張り出す頭部を作り出している。残存長は46.0cm、最大幅は13.5cm、厚さは1.0cmを測る。中央の3箇所の貫通孔は円形で、直径が1.2～1.7cmである。上部中央にも1.6×1.8cmの1箇所の円形孔がある。下方にも対となる貫通孔があつたであろう。

第42図44(図版19)は4区の12層上部より出土した円柱型田下駄の足板で、右半分が欠損している。スギ材の板目板で作られている。左右側面を削って切り欠き、上下端部に突起状の頭部を作り出し、鼻緒部分の貫通孔も2箇所残っていることから、田下駄の足板と判断できる。残存長は50.8cm、残存幅は7.2cm、厚さは1.4cmを測る。表・裏や側面は剖面で、面加工はない。残存する貫通孔は、2.0×2.6cmの方形孔である。

第42図45(図版19)は1～2区の畦畔2内17b層上面より出土した。円柱型田下駄の足板であろうが、上部に特徴的な形状を持つ。スギの板目材で、残存長32.5cm、幅は10.5cm、厚さは1.25cmである。上部は左右に張り出す頭部と軸部のような部分があり、他の足板に比べ、やや特異な形状を作り出している。すべて加工面で、表面は摩減しているが、軸部分に浅い圧痕が見える。また裏面にも圧痕や大きな刃物状の深い傷が数条ある。下方の破損部分に方形の貫通孔らしき痕が見えるため、円柱型田下駄の足板に含めた。

第42図46(図版19)は3区の畦畔6上部より出土した円柱型田下駄の足板破片と思われる。下方と右側面が欠損しているため、全体の形状が不明である。残存長は26.0cm、幅は7.5cm、厚さは1.4cmで、スギ材の板目板である。上部の作り出しあはや粗雑で、全体に風化が進んでいる。欠損部に方形と思われる貫通孔の痕がある。孔の一辺は1.2cm程である。

第42図47・48(図版19)も円柱型田下駄の足板に含めた。

第42図47(図版19)は1～1区の14層より出土した。全体に風化が著しく進んでいるため、表裏

の判断も難しい。足板上半部の破片で、残存長は 29.8 cm、幅は 10.6 cm、厚さは 1.4 cm で、中央には 2.6 × 1.5 cm の方形孔が 1 箇所、貫通している。上端部は破損しているが、貫通孔があった可能性がある。

第42図48（図版19）は2区の13b層より出土した。スギの柾目材で作られた曲物底板の破片を再加工したものであろう。残存する部分が少なく、全体の形状が分からぬ。残存長は 13.9 cm、幅は 5.3 cm、厚さは 0.9 cm を測る。裏面に樋綴じの痕跡がある。右上部には 0.3 ~ 0.4 cm の円形孔がある。そのほか、欠損しているが、円形孔の直下と下方に、大きめの円形孔の痕跡がある。田下駄の足板に含めたが、泥除けまたは、曲物底板に孔を穿ち、曲物の蒸器として使用したもの可能性もある。

第42図49（図版19）は1-1区の畦畔1盛土内より出土した円柱型田下駄の足板である。全長は 64.3 cm、最大幅は 10.2 cm、板の厚さは 2.6 cm で、ほぼ直線的な長方形を呈する。スギの板目材である。各面とも割面で、表は樹皮直下の表皮面で、面加工は無い。上端部は丸い形状に仕上げ、側面から浅い切り込みを入れて、頭を作り出している。下端部は切り離しの状態である。中央の貫通孔は 3 箇所で、やや雑な長方形に穿たれている。方形孔の一辺は 1.4 × 1.5 cm を測る。

第43図50（図版19）は3区の13層上面・12層下部より出土した。足板の右下部分が欠損している。全長は 57.5 cm で、最大幅は 12.4 cm、板の厚さは 1.4 cm である。スギ材の板目板から、側面を削って上端部が窄まる形状を作り出し、下方も丸みを帯びた形状となっている。表・裏は割面のままで、両側面は加工されている。鼻緒は 3 箇所の長方形孔で、1.3 ~ 1.5 cm 角、上下端部にも同様の長方形孔があり、一辺が 1.1 ~ 1.4 cm である。

第43図51（図版19）は1-1区の14層より出土した円柱型田下駄の足板である。全長が 49.1 cm、幅は 10.0 cm、厚さは 1.0 cm と小振りな足板である。スギ材で、板目の長方形板の上下角を削り、端部に行くほど幅が狭くなっている。貫通孔が多く上部に 2 箇所、中央に 3 箇所、下方に 3 箇所の方形孔がある。上部の方形孔は一辺が 1.5 ~ 1.8 cm、鼻緒の 3 箇所は 1.3 ~ 2.1 cm の幅を持つ。

第43図52（図版19）は2区の畦畔3内より出土した円柱型田下駄の足板破片である。残存長は 24.5 cm、幅は 10.6 cm、厚さは 1.2 cm を測る。スギ材で、長方形の板目板の上部角を落としてあり、貫通孔は上に 2 箇所、破損部分に 2 箇所の円形孔の痕がある。孔は直径が 1.0 ~ 1.1 cm で、右上の小孔横には、穿ち損ねの痕が残っている。上端面は切断の痕があり、左側面は割面、右側面は加工面となっている。

第43図53（図版20）は3区の畦畔6裾12a層より出土した円柱型田下駄で、全体形状が長い小判形をした足板である。上下には括れ部分を作らず、端部は丸く仕上げている。貫通孔は上下に 2 箇所ずつ、径が 1.0 cm 前後の円形孔、中央は 3 箇所の方形孔がある。方形孔は縦が 1.8 ~ 1.9 cm、横が 1.1 ~ 1.3 cm と縦長である。ほぼ完形で全長は 53.1 cm、最大幅は 16.2 cm、厚さは 1.9 cm と幅広になっていて。側面だけ加工し、表・裏面は割面のまま作られている。

第43図54（図版20）は3区の畦畔6内12b層より出土した。3つの破片が接合した円柱型田下駄の足板である。長方形板の上下角を丸く削った形状で、ほぼ完全な形を持っている。全長は 57.4 cm、幅は 13.0 cm、厚さは 1.2 cm を測る。貫通孔が多く、上部には 3 箇所の円形孔、中央に 3 箇所の方形孔、下方には 4 か所の円形孔が並ぶ。形状の特徴が第43図56と酷似しており、近い位置で出土していることからも、対になっていた可能性もある。

第43図55（図版20）は1-1区の畦畔1盛土内より出土した円柱型田下駄の足板である。全長が 59.1 cm、幅は 10.4 cm、板の厚さは 1.9 cm で、右下側面がわずかに欠損している。スギ材の板目板である。表・裏面と両側面とも手斧による調整痕がある。側面に括れは作り出されていない。上下に方形孔が 1 箇所ずつ、中央には方形孔が 3 箇所ある。上下の方形孔は 2.6 × 2.6 cm と 1.6 × 2.5 cm とやや大きめの孔である。鼻緒部分の方形孔は一辺が 1.8 ~ 2.5 cm で粗く穿っている。

第43図56（図版20）は第43図54と良く似た作りをしている。出土した場所も3区の畦畔6内12

b下層と同じであることから、対で使用されたか、同一の板材から分割して作られた可能性もある。スギ材の板目板で、全長は57.9cm、幅は11.6cm、厚さは1.8cmを測る。54と56は、ほぼ同じ形状であるが、56の方は上部の並列した貫通孔が4箇所ある。表・裏と右側面が割面で、左側面は面加工されている。全体に摩滅しているため、加工痕は拾えなかった。

第43図57(図版20)は1-1区の畦畔1盛土内より出土した円棒型田下駄の足板である。全体に風化が著しく進んで、破損している。中央よりも端部へ向かうほど窄まる形状と想定される。残存長は63.7cm、幅は8.15cm、厚さは1.4cmを測る。上部と右側面の一部と中央の円形孔が2箇所あることは確認できることから、田下駄の足板に含めた。

第44図58(図版20)は田下駄の足板を製作する方法を表す貴重な資料と言える。1-2区の15~16層より出土した。全長は75.8cm、最大幅は17.6cm、厚さは2.9cmで、スギの板目材である。全て割面のままで、面調整は、なされていない。長い板目材を適當な長さに切り分ける途中の未製品段階と思われるが、既にこの段階で3箇所ずつ方形孔を穿っている。方形孔は一辺が1.3~2.1cmである。上端部には両側から刃物を入れ、中央で折り取った跡がある。本資料は資料整理段階に接合できることから、中央部分も同じ折り取る段階であったことが分かっている。

第44図59(図版20)は1-1区14層より出土した角棒型田下駄の足板横棒である(註3)。角棒型田下駄は、通称、大足とも言われる。スギの板目材で、残存幅は44.5cm、高さ9.1cmで、全面加工されている。上辺は中央に最も高さがある山形の形状で、下辺は水平である。中央には6.65×2.7cmの長方形孔がある。この孔には足板の上下端部が差し込まれる。また左右両脇は角棒の縦枠に差し込まれる部分だが、両脇とも欠損している。

第44図60(図版20)は2区の木製品集中区15~16層より出土した円棒型田下駄の足板である。カキ底の梢円形曲物の底板から足板へ転用している。全長は68.6cm、幅は9.3cm、厚さは1.1cm、上下にはカキ底部分の加工がそのまま残っている。表・裏とも全面加工面である。中央には方形の孔が3箇所ある。孔の一辺は1.1~2.0cmである。側面近くには底板と側板を固定するための0.6~0.7cmの円形孔が2箇所あり、一部に木釘が残存している。

第44図61(図版20)は2区の木製品集中区15~16層より出土した羽子板状の木製品である。全長は56.2cm、最大幅は9.9cm、厚さは2.0cmを測る。表・裏と左側面は割面で、右側面と上下端部は加工してある。円形孔は1.0~1.3cmで、上半部に3箇所、中央に3箇所の貫通孔がある。中央の貫通孔の位置から、円棒型田下駄の足板としたが、上下の加工や孔が円棒型田下駄足板のそれとは異なることから、さらに再加工されたか、別の製品である可能性も考えられる。

第44図62・63(図版20)も足板とした。第44図62は1-1区の畦畔1の盛土内より出土した足板で、全長44cm、最大幅は19cmである。スギ材の板目板で、全体形は長方形に近い。上下端部の角は丸く削られている。上下1箇所の方形孔と中央に4箇所の方形孔がある。左側面に近い孔は鼻緒とは関係のないものであろう。第44図63は3区の畦畔内12b層と12b層下部より出土した。縦方向に折れた状態だったが、資料整理段階で接合した。長方形の板目板の上下角を削り落としてある。全長は44.8cm、幅は17.7cm、厚さは2.1cmで、表・裏面の一部に面調整した手斧痕がある。貫通孔は上下に2箇所ずつ、中央には3箇所の方形孔と、やや上部寄り中央に1箇所、貫通していない方形孔がある。また上下端に直径0.8~0.9cmの円形の小孔が穿たれている。

第45図64(図版21)は3区の畦畔6内12b層より出土した円棒型田下駄の足板である。スギ材で、木目は板目方向である。全長は40.1cm、幅は19.3cm、厚さは2.35cmの長方形を呈する。鼻緒状の貫通孔はあるが、各側面に加工の痕がなく、裏面の一部に面調整の手斧痕が見える程度である。貫通孔は5箇所ある。あまり丁寧な穿孔ではなく粗い。上部中央に1箇所、下半部に2列に4箇所の孔があり

ぶ。第44図58のような板材から分割された直後の段階で、足板の未製品であるかもしれない。

第45図65(図版21)は3区の13層上面から出土した円柱型田下駄の足板である。表と両側面が面加工された整形板である。裏面は割面のまま残っている。側面に切り込まれた部分ではなく、長方形を呈する。下半分は欠損している。残存長は28.1cm、幅は9.5cm、厚さは1.3cmの細長い板である。上部に2箇所、その下には中央に1箇所、折損部分に2箇所の縦長の貫通孔があつたようである。孔は横が1.1~1.3cm、縦が1.8~3.1cmの長方形となっている。

第45図66(図版21)は2区17b層より出土した。残存長が32.5cm、幅8.6cm、スギ材の板目板で作られた円柱型田下駄の足板である。表・裏は割面であるのに対し、左右側面は加工されている。中央部には鼻緒状に3箇所の円形孔がある。孔は1cm未満の小孔で、右下の孔は2箇所、穿たれていた痕跡がある。

第45図67(図版21)は2区15~16層より出土した足板である(図版13-5)。全長は46.2cm、幅は15.9cm、厚さは1.6cmを測る。表・裏は割面で、スギの大径木から分割した時のままの湾曲が残っている。下端部は切断痕があり、右側面だけ面加工されている。また両側面には上下に2箇所ずつV字状の切り込みがある。中央には0.9~1.4cm径の円形孔が貫通している。

第45図68(図版21)は1-1区の畦畔1盛土内より出土した、中央部分で折れた円柱型田下駄の足板である。スギ材の板目板で、残存長は33.3cm、折損部分の最大幅が14.2cm、厚さは1.95cmである。表は割面の一一番膨らんでいるところを手斧で縦方向へ削っている。左右側面は面加工している。貫通孔は方形で、上部に1箇所(2.2×2.3cm)、鼻緒部分は2箇所(2.0×2.15cm)が確認できる。

第45図69(図版21)は2区の遺構外15~16層より出土した、下駄である。全体に風化が酷く、面調整等は見えない。全長25.5cm、最大幅は14.4cm、厚さは1.8cmで、スギの柾目材を使用している。貫通孔は長方形の孔が鼻緒状に3箇所ある。田下駄として使われたかどうかは判断できない。

第45図70(図版21)は角柱型田下駄の枠木に付属する桟木であろうか。上部は欠損している。残存長は27.1cm、最大幅は2.5cmである。全面加工されていて、断面中央は丸みがあり、下端部は各面から削り、長方形断面になっている。

第45図71(図版21)は1-2区の遺構外13b層より出土した。円形曲物を転用して作られた製品で、上下端部に頭を作り出している。全長52.3cm、最大幅は3.85cm、厚さは1.6cmの板状である。表・裏は曲物の面をそのまま使い、左右両側面は割面となっている。上端部は曲物底板のカキ底の加工が残っている。紡織具に位置付けたが、その他の用途に使われた可能性もある。

第46図72~80(図版21・22)は運搬具、容器、祭祀具等である。

第46図72(図版21)は天秤棒状の木製品である。樹種はスギの分割材から加工された製品で、全面に手斧による加工痕がある。全長は56.5cm、最大幅は5.5cmで、全体に丁寧に面調整され、中央部の断面は円形となっている。上部は上端部に向かって削られ、端部からやや下方に、10cm程の長さを持つ角状材が軸とは直角方向に差し込まれている。下端部は周囲から斜めに刃物で切りこまれ、中央部は折り取られたようになっている。同様の製品は過去の上土遺跡の調査でも発見されている(註4)。また平成26年に静岡市教育委員会が実施した曲金北遺跡(第18次)でも、同じ形状の木製品が出土している(註5)。用途は運搬具の天秤棒と報告されていることが多いものの、はっきりとした用途はわかつていない。今後、民具例等と比較していく必要があるだろう。

第46図73(図版22)は1-1区の14層より出土した割り物の椀である。最大径は13.0cm、高さ5.75cm、厚みは部位により異なるが0.6~1.7cmを測る。口縁部は一部欠損し、丸底で、底径は8cm程ある。材質はスギの板目材から削り抜いてある。木目は0.1cm以下と、非常に細かい。内椀面は一部黒く変色

している。側面（外拠面）や底部には加工痕が見えるが、加工痕は不明瞭で、削りの後に磨かれている可能性もある。

第46図74（図版22）は3区の畦畔6上層で出土した曲物の底板である。スギの追い柾目材が使われている。円形で、直径は11.4～12.4cmで、厚みは1.05cmである。全面、加工してあるが、裏面は腐食が進んでいる。側面には木釘の痕跡が4箇所、確認できる。間隔から欠損部分にも1箇所の木釘があつたかもしれない。曲物としては小型の製品である。

第46図75は1～2区の畦畔2内から出土した、厚さ0.4cmの薄板で、スギの板目材を使っている。幅は7.5cmで、上端部は両側面を斜めに切り落としてある。側面は加工されており、下方は欠損しているが、下端部から5cmほど上に筋状の圧痕がある。形状と樹種選択から、曲物の側板の端部分であろう。

第46図76も1～2区の13b層より出土した薄板である。材はヒノキで、厚さは0.5cmの板目材である。全長は26.1cm、幅は9.2cmで、上端部は切断され、樺綴じの孔が数箇所ある。中央よりやや下には幅0.7cmの樹皮が入った樺綴じ痕がある。これも形状と樹種選択から、曲物の側板であろう。

第46図77（図版22）は2区の14層上面で出土した削り物の槽である。左半部は欠損しているが、上部は丸く、下部は直線状の形状になっていたと思われる。縁辺部は下方の一部が残存しているだけで、大部分が欠損している。残存長は60.55cm、底部の残存幅は16.45cm、最大厚は3.4cmである。上方に行くほど、全体の厚さが薄くなっている。内側は浅く、縁はさほど高くはなかったようである。外面には手斧の痕跡がわずかにみえるが、全体には不明瞭である。材質はスギの板目材で、内面側が木表になる。

第46図78（図版22）は2区の14層上面で出土した槽の口縁部分破片である。破片のため全体の形状は不明だが、口縁部分の厚みから見て、大型の槽であったと想像できる。材はスギの柾目である。残存長は14.8cmで、内面には手斧の痕を見る。

第46図79（図版22）は4区の12層より出土した薄い板状の加工品である。全長19.4cm、最大幅は2.7cm、厚さは0.5cmである。スギの板目材で、表面と両側面は加工面、裏面は割面のままでいる。上部の両側面にV字状の切り込みを入れて、頭部を作り出している。上端部は斜めに切断され、下方は欠損している。形状は人形のように見える。

第46図80（図版22）は4区の畦畔7内、12b層最上部より出土した。上部と左下側面が欠損している。全長は26.4cm、最大幅は4.3cm、厚さは0.5cmで、スギの柾目材が使われている。上端部は丸い形に削り、両側面にV字状の切り込みを入れて、頭部を作り出している。薄板祭祀具の人形の可能性がある。

第47図81～第49図92は（図版23～25）、建築部材として使われた可能性のある大型の木製品である。

第47図81（図版23）は2区の木製品集中区15～16層より出土した。全長が130cmを超える大型木製品である。スギの丸太材から剥ぎ取られた板目材で、表面は表皮で節を切り落とし、裏面は割面となっている。上端部は刃物で切断された痕がある。下方は欠損し、全体の形状・寸法は不明である。表面の一部と側面に手斧加工の痕があるものの、丁寧な整形の痕跡はない。上部に7.5×5.7cmの長方形の貫通孔がある。梁・桁行等の建築材として用いられた可能性がある。

第47図82（図版23）は2区の木製品集中区で15～16層より出土した。上端部は刃物で切断した痕があり、下方は欠損している。残存長は137.9cm、最大幅は12.75cm、最大厚は3.2cmで、板状を呈する。表面は表皮下の面で中心線の高い部分や枝が出ていた部分を手斧で削っている。右側面は加工があり、左側面と裏面は割面のままである。建築部材として加工・使用されたものであろう。

第47図83（図版23）は1～1区の14層より出土した。全長は86.85cm、最大幅は11.7cm、厚さは8.6cmで、スギの板目材である。裏面は表皮下面で、残る表面や両側面が割面である。上端部は表面と裏面

の両側から、幅4cm程の手斧で切断されているため、横方向から見ると逆V字状になっている。中央左寄りには節の痕がある。左側面下方には、長さ20.75cm、幅4.8cmの溝が切り込まれている。建築部材として使われたものと考えられる。上端部は転用する際に切断した可能性もある。下端部は手斧による加工痕が見える。

第47図84(図版23)は2区の木製品集中区15~16層より出土した角材である。スギの板目材で、裏面は表皮下面で、それ以外は割面である。全長は82.05cm、最大幅は7.0cm、厚さは5.1cmを測る。上端部は欠損している。下端部も欠損しているが、幅1.2cm程のホゾ孔があつた可能性がある。

第47図85(図版23)は板目材のスギ板である。木目からして、表皮面に近い部分から割りとられている板で、各面とも加工の痕はなく割面のままである。82・84と同じく、2区の木製品集中区、15~16層より出土した。上・下端部は、手斧により切断されて折りとられた痕がある。全長は78.8cm、最大幅は21.1cm、最も厚いところで5cm程である。台輪もしくは壁板として使用した建築部材を転用する際に、切断した可能性がある。

第47図86(図版23)は1-1区の畦畔1盛土内より出土した。スギの板目材で、全長は45.8cm、最大幅は17.0cm、最大厚は2.1cmである。表・裏面は割面、左右側面は加工面となっている。表面右側は最も膨らみがある所にだけ手斧で面を削っている。一方、裏面でも左端部分を上から下まで手斧で面を削っている。手斧幅は3.5~4.0cm程であったと思われる。中央の右寄りには、2.5×2.5cmの方形孔が1箇所ある。上下端部は表面と裏面から手斧で切断された痕が残っている。壁板等に使用された整形板材を切断して、再利用しようとした可能性がある。

第47図87(図版23)は1-1区14層より出土したサワラの半裁材で、表面と上端面に加工痕がある。裏面は表皮下面で、表側は割面である。上端部は切断痕があり、下端部は火を受けて炭化している。残存長は60.5cm、最大幅は17.2cmで厚さは9.5cmを測る。上端部から13.3cm程下には、短軸方向に幅5.4cmの溝が切り込まれている。加工時の刃物痕が見える。台輪や梁・枠材等の建築部材として使われていたものと思われる。

第48図88(図版24)は1-2区の遺構外14b層より出土した大型の整形板である。全長は147.0cm、幅18.35cm板の厚さは1.9cmで、スギの板目材である。スギの大径木から割り出された材で、木目は迫い極目で、表・裏面は割面となっている。平坦な板にするために表面の左右と裏面の一部を手斧で平坦に削っている。ただ、表面は風化しているため、手斧痕が見えない。右側面は直角に側面を作っているが、左側は裏面側が斜めになるよう加工してある。上下端部は切断の痕がある。一方の側面を斜めに削る加工を施してあることから、掘立柱建物の壁板等に使われた建築部材の可能性がある。

第48図89(図版24)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。全長144.8cm、幅19.1cmの整形された板状木製品で、88とほぼ同寸法である。表面は風化しているため手斧痕が見えないが、裏面は手斧痕の残りが良い。割面の側面極を手斧で削り、厚みを調節している。左右側面は真っ直ぐに面加工している。上端部は表・裏面から端部に向かって薄く削られている。下端部にも同様の加工が施されている。また短軸方向の圧痕がある。88と同様に掘立柱建物等の壁板として使われていた可能性が高く、柱材等へ差し込むために上下端部の厚みを薄くしてあるのだろう。

第48図90(図版24)も2区の木製品集中区15~16層より出土した整形板である。88や89とほぼ同じ寸法で、全長が141.8cm、最大幅は24.5cm、板の最大厚は2.2cmを測る。木裏にあたる表面は全面に手斧による面調整がある。一方の木表側は割面のままである。手斧は上部から下部へ一定方向に並んでおり、手斧の幅は5cm以上あったのではないかと思われる。上端部は切断された面となっている。下端部と左右両側面は面加工されている。やはり88・89と同様、掘立柱建物の壁板材として使われていた建築部材であろう。

第49図91(図版25に展開写真あり)は2区の畦畔3内より出土した建築部材の垂木である。樹種はイヌマキの芯持ち材で、全長は208.1cm、直径は6.45～6.7cmを測る。上端部は先端を逆V字形に切り落としてある。上部には長さ11.5cm、幅4.9cmの抉り部分を手斧で削ってある。全体は表皮下面であるため、枝部部分は刃物で切り落とされた痕が複数箇所に残っている。下端部は27cm程、風化して欠損した状態である。建築部材の板材や角材がスギ材であるのに対し、垂木にイヌマキを使う傾向は、静岡平野だけではなく、静岡県内でも同じ状況がみられる。年代も弥生時代以降の出土例もあるが、やはり垂木はイヌマキ材を使っている。垂木はイヌマキを使うという樹種選択は、年代が奈良時代や平安時代になっても変わらないようである。

第49図92(図版24)は2区の木製品集中区15～16層より出土した。スギ板で、木目は板目方向である。全長は178.2cm、最大幅は7.9cm、厚さは2.3cmと細長い形状を持つ。各面とも割面で、面調整されたところは見当たらない。上下端部は切断された痕がある。上端部から39cm下の右側面に手斧による長さ8cmほどの浅い抉りが入っている。刃物方向は上から下へ入る。また左側面中央には長さ14.3cmの浅い抉り込みがある。さらに左側面の下端部にも抉り込みがある。板の長さやスギ材であること等から、建築部材と考えられるが、梁・桁行材として使われたものであろうか。

第49図93～第56図164(図版25～31)までは、用途の特定ができない木製品である。

第49図93(図版25)は3区より出土した杭状木製品である。樹種はスダジイで芯持ち材が使われている。表面は表皮下面だが、欠損した部分が多い。上部には斜めに削られた面がある。下方は欠損している。

第49図94(図版25)も3区より出土した。ヒノキ属の芯持ち材で、上端部から10cmほど下部分を手斧で削り、有頭状の形状を作っている。下方は火を受けて炭化している。残存長は71.1cm、直径は7.3～7.8cmを測る。建築部材の一つとして使われていたものか。

第49図95(図版25)は1～3区より出土したスギ材の棒状木製品である。上端部は丸く加工され、下端部は欠損している。全面加工により整形されている。残存する長さは95.5cmで、元々は1m以上あつたと考えられる。断面形は円形に近く、直径は2.5～2.9cmである。表面の一部が火を受けて炭化している。

第49図96(図版25)は2区の木製品集中区15～16層より出土した。スギ材で、長さは106.2cm、最大幅は4.1cm、厚さは3.5cmの角棒状木製品である。上下端部は欠損している。表・裏面と右側面は加工面で、左側面のみ割面となっている。下方の角に小さな切込みがあり、その裏面には縛繋したような圧痕がある。一部、風化が著しい部分もある。木製品集中区では建築部材が多く出土しているから、本製品もその一部と思われる。

第49図97(図版25)は96と同じく2区の木製品集中区15～16層より出土した角棒状木製品である。スギの分割材で、上端部は切断され、下端部は欠損している。左右側面は加工面だが、その他は割面のままである。残存長は86.4cm、最大幅は4.3cm、厚さは3.75cmを測る。建築部材の一部と思われる。

第49図98(図版25)は96・97と同様、2区の木製品集中区15～16層より出土した、一部を面加工してある分割材である。接合点はないが、第55図157と同一個体である可能性が高い。スギ材で、長さは69.15cm、幅は3.9cm、厚さは3.1cm、上下端部は欠損しているが断面は角棒状で、3面が加工面、1面は割面である。下端部より22cm程上まで側面を抉るように削る加工が施されている。

第50図99(図版25)は2区の木製品集中区15～16層より出土した。長さは93.0cm、幅4.3cm、厚さは2.6cmの棒状木製品である。元々は1m以上の長さがあったと思われる。表面と左右両側面は丁寧な面加工があり、裏面は割面となっている。下端部は欠損している。材はヒノキの分割材を使っている。

第50図100(図版25)は3区の13層上面より出土した。棒状の木製品である。スギの分割材から削り出されているが、上部は欠損している。残存長は105.2cm、最大幅は5.2cm、厚さは3.5cmで、下端部の8cm程は薄くなっている。断面形は楕円形に近い。全面に加工されているが、工具の痕跡は見えないことから、表面は磨かれていると思われる。

第50図101(図版26)は2区の木製品集中区15～16層より出土した、全面に細かい加工痕が残る棒状木製品である。裏面と下方は破損している。上方は加工された端部が残っている。残存長は72.7cm、最大幅は5.4cm、厚さは1.2cm程ある。直径も5cm以上の円形と想定されることから、第53図133と同様、天秤棒の一部と思われる。

第50図102(図版26)は1～2区の13b層より出土した。4面とも加工されたスギ材の整形板である。長さは57.4cm、最大幅は5.1cm、厚さは1.9cmを測る。上端部は左側面を一部切り欠き、下端部は欠損している。切り欠きは長さ5.3cm、幅2cmである。丁寧に加工された板だが、具体的な用途場所は特定できない。

第50図103(図版26)は3区12層より出土した板状木製品である。スギの分割材だが、4面とも加工ではなく、割面である。下方は欠損している。上部には雑な切り欠きがあるが、その上と下とでは幅が異なる。残存長は79.6cm、最大幅は4.3cm、厚さは1.85cmを測る。

第50図104(図版26)は3区の12層最下部より出土した板状の木製品である。スギの板目材で、各面とも割面で、面加工ではなく、整形された板ではない。全長は100.0cmで、左側面が欠損しているため、残存する最大幅は8.3cm、最大厚は3.2cmを測る。欠損した左側に刃物で荒く切り欠かれた部分がある。

第50図105(図版26)は3区の畦畔6内、12b層下部より出土した板状の木製品である。ほぼ完形で、全長は118.9cm、最大幅は9.5cm、板の厚さは1.0cm、表・裏面は割面で、左右側面は切断面となっている。上端面は水平に切断されているが、下端部はU字状に加工されている。1mを超える長さを持つスギ材の整形板であることから、建築部材の一つと考えられる。

第50図106(図版26)は2区の木製品集中区15～16層より出土した、スギ材の板である。上端面と右側面は加工面で、表と左側面は割面、裏は表皮下面で、大径木から分割された板であることがわかる。丁寧な面調整はない。下端部は刃物で切断されている。残存長は58.7cm、最大幅は10.4cm、厚さは2.6cmを測る。上端から2.2cm下の中央に0.9×0.85cmの方形孔がある。元々は1mを超える長さがあったと想定されることから、建築部材として使われていたと思われる。

第50図107(図版26)は3区12層下部より出土した。ヤナギ属の芯持ち材で、有頭状の形をしている。下方は欠損しており、残存長は18.2cm、直径は4.0～4.6cmである。上端部は斜めに先端へ向かって削られている。上端から6cmほど下から周囲を削っている。表面は表皮下面で、面加工はない。

第50図108(図版26)は1～3区の10層より出土した加工製品である。スギの分割材から削って作られた製品で、全面加工されているが下方は欠損している。残存長は10.0cm、幅は2.8cm、厚さは3.7cmである。長方形に削られた材に大きなホゾ孔を切り込んでいる。裏面は火を受けて炭化している。何かの把手か、柄の一端とも考えられる。

第50図109(図版26)は、1～2区の畦畔2裾、13b層より出土した。スギの分割材を加工した角棒状の製品である。上部には切断した痕があり、下部は欠損している。残存長は28.8cm、幅と厚さは2.0cmを測る。表・裏と右側面が加工面で、左側面は割面である。表面上部には長さ2.9cmの切り込みがある。丁寧に加工された製品だが、用途は不明である。

第50図110(図版26)は2区の木製品集中区15～16層より出土したスギ材の板状木製品である。長さは18.8cm、幅は3.7cm、厚さは1.5cmで、4面とも割面である。上端部は切断痕があり、そこから1cm程下の両側面から切り込みを入れて、有頭状になっている。下端部は欠損している。

第50図111(図版26)は4区の攢乱層(3層相当)より出土した。一部、折れているが、ほぼ完全な形状が残っている。スギ材の板目板で、長さは38.4cm、幅は2.8cm、厚さは1.1cmで、4面とも加工が施されている。しかし表面が風化しているため、加工痕ははっきりとしていない。上部の両側面には浅い切り込みを入れ、有頭状になっている。下方に行くほど、全体に細くなっている。

第51図112(図版26)は3区の遺物集中、13層上面より出土した棒状の木製品である。スギの分割材を丁寧に削っている。表面は筋状に加工痕が見えるが、裏面は割面が残っている。長さは23.3cm、幅は1.3~1.6cmである。上端部は丸く削られ、下端部は欠損している。

第51図113(図版26)は3区12a層より出土した。サフラの半裁材を加工した製品である。上下は欠損している。表面は手斧により面調整してある。裏面は表皮下面がそのまま残っている。残存長は24.1cm、最大幅は6.25cm、厚さは3.7cmである。表面の上半部左右には、側面を8cm程、浅く削っている。裏面側には貫通していない3.1cm×3.4cmの方形穴が浅く切り込まれている。建築部材の一部であった可能性もある。

第51図114(図版27)は3区の畦畔6上10~11層より出土した棒状製品である。材はスギの極目で、分割材より整形している。長さは44.9cm、幅は2.3cm、厚さは1.2cmで、細い棒状で、断面形は楕円形に近い。別々に取り上げた3点が接合した。上端部は両側面を削り、四角い頭を作り出している。下端部は欠損している。全体は加工された面だが、研磨されているのか、工具の痕跡は見えない。

第51図115(図版27)は1~2区の13b層より出土した。素材はカヤの芯持ち材である。上部は二股に枝分かれする部分だが、欠損している。表面は表皮下面のままで、下方は長さ13.1cm程、一段削り落としている。下端部は切断面となっている。残存長は30.9cm、直径は1.7~2.0cmを測る。何かの部材として使われていたと思われるが、用途は不明である。

第51図116(図版27)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギの分割材から加工した製品である。上端部は欠損し、下端部は切断された痕がある。左側面に6cm程の長さの厚みを持った部分があり、その下方にも同じような部分があったようである。表面には3箇所の窪みがある。長さは36.7cm、最大幅は3.0cm、厚さは3.4cmを測るが、製品の使い道は不明である。

第51図117(図版27)は1~2区の13b層より出土した棒状製品である。下端部は欠損しており、残存長は52.7cm、最大幅は2.6cm、厚さは1.0~1.1cmを測る。上部は両側面から浅いV字に切り込みを入れて、有頭状になっている。さらに11cm下にも同じような切り込みが入っている。側面は丸みを持つ加工だが、工具の痕跡は見えない。

第51図118(図版27)は3区の遺物集中12層下部より出土した。スギの分割材から角棒状に整形されている。上端部は側面から切り込みを入れて、有頭状になっており、下端部は欠損している。残存長は34.3cm、幅は2.7cm、厚さは2.1cmで、左側面だけ加工がある。他の面は割面の状態である。

第51図119(図版27)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギの分割材から整形している板で、中央で折れているが、全体が完存している。長さは40.4cm、幅は3.7cm、厚さは1.6cmである。板は4面とも割面で、板目の緩い湾曲が残っている。上下には左右両側面からV字に切り欠いていて、頭を作り出している。円柱型田下駄の足板と組み合わせる横木か、角柱型田下駄(大足)の棒の部材等の可能性がある。

第51図120(図版27)は3区の12層最下部より出土したヒノキ材の板目板である。右側面側が欠損している。残存長は33.1cm、残存幅は3.85cm、厚さは1.15cmである。表・裏と左側面は加工面である。欠損部分が多く、元の形は想定できない。上部には短軸方向に浅い溝が切り込まれている。

第52図121(図版27)は2区の15~16層最上部より出土したスギ材の角棒状木製品である。分割材から4面の角材に加工してある。上下は欠損している。残存長は38.9cm、幅は5.0cm、厚さは4.15

cmである。左側面だけが割面で、他3面は加工面である。右側面には上から下まで中心が浅く窪んでいる。厚みのある角材であることから、建築部材の一つであった可能性がある。

第52図122(図版27)は2区の木製品集中区17b層最上部より出土した。スギの分割材で、角材に加工されたと思われる。上下は欠損し、左側面と下半部が火を受けて炭化しているため、元々の形状が想定できない。表は手斧で削られた加工面である。右側面と裏は割面となっている。残存長は44.0cm、幅は6.15cm、厚さは4.7cmを測る。上部の欠損部には1.5cm角の方形孔の痕跡がある。

第52図123(図版28)は3区の12層から出土した、非常に丁寧に整形された板状木製品である。ほぼ完成品で、全面、加工が施されている。スギの板目材で、全長は45.5cm、幅は9.2cm、厚さは1.8cmである。板の上下には、両側面から切り欠かれた部分がある。表は緩やかに湾曲した面で、裏は全面に手斧痕が残る平坦面となっている。側面の角も丸く仕上げである。下方の切り欠きには縦方向に筋が刻まれている。

第52図124(図版28)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギ材の板目板である。形状は長方形で、上下端部は切断された痕跡がある。表・裏と両側面は4面とも加工されている。表は上から下方向へ手斧痕が連続している。板の全長は25.1cm、幅は7.3cm、板の厚さは1.25cmを測る。

第52図125(図版28)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。材はカヤの追い柾目板である。ほぼ長方形だが、上部はわずかに幅が狭くなっている。上端部は左右の角を斜めに切り落としてある。下方は切断された面である。表は手斧で面を削っているが、加工の方向は見えない。下方向には斜めの筋状圧痕がある。板の長さは25.8cm、最大幅は6.8cm、厚さは1.1cmである。

第52図126(図版28)は2区の13b層最下部より出土した板状の木製品である。スギの追い柾目材で、表・裏とも割面のままで面調整されていない。長さは24.5cm、最大幅は9.4cm、厚さは1.2cmで、上端部は切断痕、下端部は欠損している。下端部の欠損箇所には上面幅2.3cmの方形孔がある。建築部材の一部と考えられる。

第52図127は2区の木製品集中区16層より出土した。ヒノキの板状製品で、板目材である。表・裏と左側面は割面で、右側面だけが加工してある。上面は切断痕があり、下面は欠損している。上部には径0.5~0.65cmの円形孔が貫通している。残存長は21.0cm、幅は4.3cm、厚みは1.1cmを測る。形状と樹種から、第53図130と同一の可能性がある。

第53図128(図版28)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギの板目板で、形状は矢板状である。4面とも割面で、手斧による整形はされていない。上部は欠損し、10cm幅で真っ直ぐに下方へ伸び、下端部から16cm程上から、両側面を斜めに切り、下方先端を尖らせてある。下端部は欠損している。中央右寄りには貫通していない直径0.9~1.0cmの円形穴がある。

第53図129は3区畦畔6上部より出土した板状の木製品である。サワラの板目材で、表面は風化しており、各面とも割面である。上部は欠損しており、残存長は27.8cm、最大幅は8.5cm、厚さは1.5cmである。長方形の板の中央より、やや上に左右に離れた円形孔がある。サワラ材で作られた製品は古墳時代以前には当地で見られないが、奈良時代以降、サワラ材で作られた製品が出てくる。サワラ材は中部高地で出土する木製品によく見られ、スギやヒノキ材とよく似ていることから、その代替えとして樹種選択しているようである。各地との流通に伴い、製品として当地に入ってくる可能性も考えられる。

第53図130(図版28)は2区の木製品集中区16層より出土した。長方形の板で、ヒノキの板目材で作られている。上端部は切断痕があり、下端部は欠損している。残存長は35.5cm、最大幅は4.7cm、厚さは1.1cmである。4面とも割面で、手斧等で面整形した痕跡は見られない。上方には中央に0.7×0.7cmの円形孔が貫通している。第52図127と良く似ており、同一製品の可能性がある。

第53図131(図版28)は3区12層上面より出土した板状製品である。ヒノキの板目材で、長方形

を呈する。表・裏は割面で、左右両側面は加工面、上・下端部は切断面となっている。長さは 27.2 cm、幅は 7.0 cm、厚さは 0.9 cm で、上部中央に 0.7×0.9 cm の方形の小孔がある。127 や 130、132 と形状がよく似ている。

第 53 図 132 (図版 28) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。細長い板状の木製品で、ヒノキの板目板である。上端部は形状を残し、下端部は欠損し、中央付近で折れている。残存長は 33.2 cm、幅は 3.6 cm、厚さは 1.1 cm で、4 面とも加工されている。上部中央には 0.8×0.8 cm の円形孔がある。全体に風化している。

第 53 図 133 (図版 29) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。残存長が 107.4 cm、最大径 5.5 cm の棒状木製品である。スギの分割材から加工している。面全体に整形の加工痕があり、断面形は円形に近い。直径は上部に最大値があり、下へ行くほど徐々に細くなる。上端部は欠損、下端部は杭状に再加工されている。また下端部には、幅 1.4 cm、長さは 3.4 cm 程の長方形のホゾ穴痕が見える。下方に近い所には短軸方向の刃物痕がある。おそらく天秤棒等から杭に転用されたと考えられる。上土遺跡から出土した木製品のなかで、第 46 図 72 や、第 50 図 101 なども天秤棒の可能性がある。

第 53 図 134 (図版 29) は 3 区 13 層より出土した棒状木製品である。全体に加工されたスギ材の角柱状で、先端を杭状に加工している。加工面は 2 面で、残る 2 面は割面である。全長 91.5 cm、厚さは 3.8 cm、最大幅は 4.7 cm 程で、ほぼ中央付近に集中して刃物痕が残っている。下から 27 cm 程の表面に工具が集中的にあたった痕がある。

第 53 図 135 (図版 29) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。角棒状で、上部は欠損し、下端部より 6 cm 上まで杭状の加工痕がある。4 面とも割面である。左側面は火を受けて、部分的に炭化している。残存長は 54.8 cm、幅は 3.25 cm、厚さは 2.3 cm を測る。

第 54 図 136 (図版 29) は 1 ~ 1 区の 14 層より出土した棒状の木製品である。樹種はイヌマキ属の芯持ち材で、表皮下面のまま表面加工はない。長さは 114.8 cm、直径は 3.2 ~ 3.4 cm を測る。上端部には斜め方向に工具痕がある。下端部から 5.85 cm の部分は杭状に加工されている。樹種選択からして、建築部材の垂木とも考えられる。

第 54 図 137 (図版 29) は 1 ~ 2 区の遺構外 17 層で土中に打ち込まれた状態で出土した杭状木製品である。材はサワラの芯持ち材で、直径 6.6 ~ 6.8 cm 程の雜木から作られている。上部は欠損し、下端部は複数の方向から工具で削られている。樹皮は残っておらず、表皮下面のままである。

第 54 図 138 (図版 29) は 1 ~ 1 区の畦畔 1 盛土内より出土した杭状木製品である。樹種は広葉樹のアカメガシワの芯持ち材で、3 節所で折れている。上部は欠損し、下方は杭状に先端を尖らせている。表皮下面のままで、枝を掃う以外の加工はされていない。残存長は 54.1 cm、直径は 5.2 ~ 5.5 cm である。杭には様々な種類の樹種が使われており、近隣に自生する雜木を使っているものと思われる。

第 54 図 139 (図版 29) は 2 区の深掘りトレーナー内の 14 ~ 15 層より出土した杭状木製品である。各面とも割面だが、建築部材等の大型製品から転用されたものの可能性がある。上部は 20 cm 程、腐食が激しく進んでいる。残存長は 68.1 cm、幅は 6.1 cm、下端部から 48 cm 程上から杭状に加工している。樹種はスギの分割材である。

第 54 図 140 (図版 29) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。樹種はコジイの芯持ち材で、表皮下面のままである。上・下端部は切断痕がある。下端部は杭状の加工もある。あまり利用されない樹種であることから、手近な雜木を杭に使用したと想定される。

第 54 図 141 (図版 29) は 2 区の遺構外 15 ~ 16 層より出土した杭状木製品である。ほぼ完形の状態で残っている。樹種はスギで、分割材から角柱状にしている。長さは 46.9 cm、幅は 2.5 cm、厚さは 1.7 cm で、右側面が加工され、それ以外は割面である。下端部から 5 cm の部分を杭状に加工している。

第54図142(図版29)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。杭状に加工されたスギの追い柾目で、木目は粗い。上端部は欠損し、下端部から10cm程まで両側面から工具で削って先端を尖らせていている。残存長は61.3cm、幅は6.5cm、厚さは最大で3.5cmほどある。表と左側面は加工された面で、裏面は割面となっている。建築部材等を再加工して、分割してから杭に転用した可能性がある。

第54図143(図版29)は1~1区の14層より出土した。スギの分割材を角棒状に加工してある。4面とも加工した面である。上端部は3cm程やや細く削られていて、下端部は欠損している。残存長は29.3cm、幅は1.95cm、厚さは1.6cmを測る。全体に火を受けているため、加工の痕跡は見えず、特に中央部分が炭化により収縮している。

第54図144(図版29)は2区の木製品集中区15~16層より出土した大型の木製品である。スギの分割材で、表は表皮下面、その他は割面のままである。上端部は切削痕があり、下端部から9cmほど上まで両側面を斜めに切って、杭状に加工してある。長さは145.3cm、最大幅は10.7cm、厚さは4.1cmである。

第54図145(図版29)は3区の畦畔6内12層より出土した大型の木製品である。スギの分割材で角柱状にしてある。残存長は147.0cm、幅は7.9cm、厚さは5.8cmで、4面とも面調整は無く、割面のままである。上端部は欠損しているが、端部から7.5cm下まで、段差をつけた加工が裏表にある。下端部より13.4cm上まで杭状の加工がある。中央から下に横方向の刀物痕が複数ある。上部の段差は、ホゾまたは切り欠きに差し込んで組み合わせる建築部材として使われていた可能性がある。杭状の加工は、転用するための二次加工の可能性がある。

第55図146(図版30)は2区の畦畔1の構築土①より出土した。スギの分割材で、棒状の木製品に加工している。上部は切断面、下部は欠損している。欠損部以外は、すべて加工面で、断面は多角形状になっている。長さは18.7cm、幅は3.0cm、厚さは2.3cmを測る。上部には表と右側面に切り欠いた部分がある。表の切り欠きは長さが2.8cm、右側面の切り欠きは長さ3.8cmほどある。用途は不明である。

第55図147(図版30)は1~2区の13b層より出土した板状の製品である。スギの分割材から作られている。裏面の一部が加工面だが、その他の面は割面である。長さは36.6cm、幅は5.0cm、厚さは1.9cmを測る。中央の右寄りに2.45×1.7cmの方形孔がある。下方には短軸方向に緊縛痕のような溝みがある。

第55図148(図版30)は1~2区の遺構外13b層最下部より出土した。スギの分割材から作られたもので、板目板である。4面とも割面で、長方形の下方には段差が作り出されている。下端部は欠損している。残存長は21.25cm、幅は5.7cm、最大厚は2.3cmを測る。

第55図149(図版30)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギの分割材で、裏は表皮直下の面、他3面は割面である。上端部は幅4cm前後の手斧で斜めに切削した痕がある。表側は下半部が火を受けて炭化している。裏側も下端部と左右側面が炭化している。長さは53.9cm、最大幅は11.05cm、厚さは4.1cmを測る。建築部材を再利用して転用するために適当な長さに切削したと思われる。

第55図150(図版30)は1~2区の13b層より出土したスギの追い柾目板である。全体に風化が激しい。上部は両側面を削り細くしている。上下端部は欠損している。残存長は45.25cm、幅は9.65cm、板の厚みは1.4cmである。右側面寄りに長方形の孔が3箇所ある。

第55図151(図版30)は2区の木製品集中区15~16層より出土した。スギの分割材から整形された製品で、表側は整形後に磨かれていている。上下端部と裏側は欠損している。残存長は53.2cm、最大幅は6.1cm、厚さは1.5cmである。丁寧な整形であることから、生活道具として使われていたものだろうが、欠損部分が多く、用途を特定できない。

第55図152(図版30)は2区の疑似畦畔基部より出土した。スギの分割材から整形した製品である。

細長い棒状で、上端は丸く整形、下端部は欠損し、残存長は 27.2 cm、幅は 1.5 cm、厚さは 1.0 cm を測る。断面形は表が蒲鉾状に丸く整形され、裏は平坦面となっている。製品の用途は不明である。

第 55 図 153(図版 30) は 1-1 区の 14 層より出土した角棒状木製品である。スギ材で、上端部は欠損、下端部は先端が 10 cm 程、炭化している。残存長は 46.3 cm、幅は 2.3 cm、厚さは 1.65 cm の細長い棒状で、4 面とも割面となっている。

第 55 図 154(図版 30) は 2 区の木製品集中区 15 層下部より出土した。角棒状の木製品で、スギの板目材である。残存長は 30.6 cm、幅は 2.05 cm、厚さは 1.55 cm で、上端部は欠損しているが、下端部は左右側面を斜めに切り落として、先端を尖らせている。表・裏と右側面は加工面で、左側面は割面となっている。

第 55 図 155(図版 30) は 1 区の 14 層より出土した。同一個体だが、接合点がないため、図面上は別々に分けている。スギの芯持ち材で、2.2 ~ 2.7 cm の直径がある。全体に樹皮が残っており、元の長さは 2 m 以上あったと思われる。上端部は側面から切り込みを入れて、頭を作り出している。下端部には工具で削った痕がある。

第 55 図 156(図版 30) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。イヌマキ属の芯持ち材で、完形品である。長さは 172.35 cm、直径は 3.4 cm を測る。上下端部は工具で切り落とした痕跡があり、小枝部分を掃ってある。表皮は残存せず、表皮下面がそのまま残っている。木材がイヌマキ属の樹種選択をしていることや、芯持ち材であることからして、建築部材の一つと思われ、垂木等の用途が考えられるが、加工の痕はない。

第 55 図 157(図版 30) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。スギの分割材から角棒状に加工されている。4 つの面はすべて加工面で、一定方向の手斧痕がある。上部は欠損、中央で折れており、そこから下の右側半分が欠損している。下端部には 7 cm ほど、火を受けて炭化している部分がある。全長は 144.8 cm、最大幅は 3.5 cm、厚さは 3.0 cm で、元は 150 cm 以上あったと想定される。第 49 図 98 と同一製品の可能性があるが、接点がない。全体の長さから建築部材の一つと考えられる。

第 56 図 158(図版 31) は 3 区の 12 層上面より出土した。スギの分割材から作られた板目板である。上部は欠損し、下端部は左右側面を斜めに切り落として、先端部を作り出している。各面とも割面で、残存長は 26.5 cm、幅は 2.0 cm、厚さは 1.4 cm である。

第 56 図 159(図版 31) は 3 区の畦畔 6 帽より出土した製品である。スギの分割材から整形された板目方向の棒状で、断面形は半月の形になっている。表は丸みを持っており、裏は平坦になっている。面には手斧痕がないことから、整形後に表面を磨いているだろう。残存長は 46.5 cm、最大幅は 3.8 cm、厚さは 2.3 cm である。欠損部分が多いため、どのような用途に使われたかは、わからない。

第 56 図 160(図版 31) は 2 区の木製品集中区 15 ~ 16 層より出土した。スギの分割材で作られた角棒状木製品である。上下端部は欠損している。残存長は 53.4 cm、幅は 2.6 cm、厚さは 1.7 cm を測る。4 面とも割面で、面加工はしていない。

第 56 図 161(図版 31) は 1-2 区の 13 b 層畦畔 2 帽より出土した。樹種はイヌマキ属で、長さ 125.9 cm、直径 3.45 ~ 3.55 cm 程の芯持ち材で棒状の形状を持つ。表皮は無く、表皮下面のままで、枝は掃われている。上端部は欠損し、下端部は工具で斜めに切り落とされている。イヌマキ属は建築部材の垂木に使われる樹木で、その枝の長さや撓りを利用していている。161 も建築部材であった可能性がある。

第 56 図 162(図版 31) は 3 区の畦畔 6 上 10 ~ 11 層より出土した。スギの分割材から加工した棒状の製品である。木目は板目で、断面形は半月状になっている。上端部は斜めに切断してあり、下端部は欠損している。表は面を加工してあり、裏は割面の状態である。残存長は 118.6 cm、幅は 5.7 cm、厚さは 2.7 cm を測る。

第56図163(図版31)は1-3区の13層上面で出土した棒状木製品である。ほぼ完形で、全長は134.4cm、最大幅は4.1cm、厚さは2.5cmである。スギの分割材から加工され、全面加工面である。上部は角柱状だが下方に行くほど、徐々に細身になり、円形に近い断面形となっている。上下端部は使用によるためか、丸くなっている。下方から50cmほど右側面が火を受けて炭化している。用途は不明だが、長さのある棒状製品であることから、建築部材の一つと考えられる。

第56図164(図版31)は2区の16層より出土した全長136.1cmの完形品である。上下端部は切断した痕跡がある。スギの分割材から加工された製品で、全面に手斧による面調整が施されているが、上部は表と裏を削り込んで、扁平に作り出されている。下方は面を削った手斧痕が残っている。全長は136.1cm、幅は3.4cm、上部の厚さは1.8cmで、下部の厚さは最大3.3cmを測る。全面丁寧に加工された製品だが、何の用途に使用されたかは不明である。

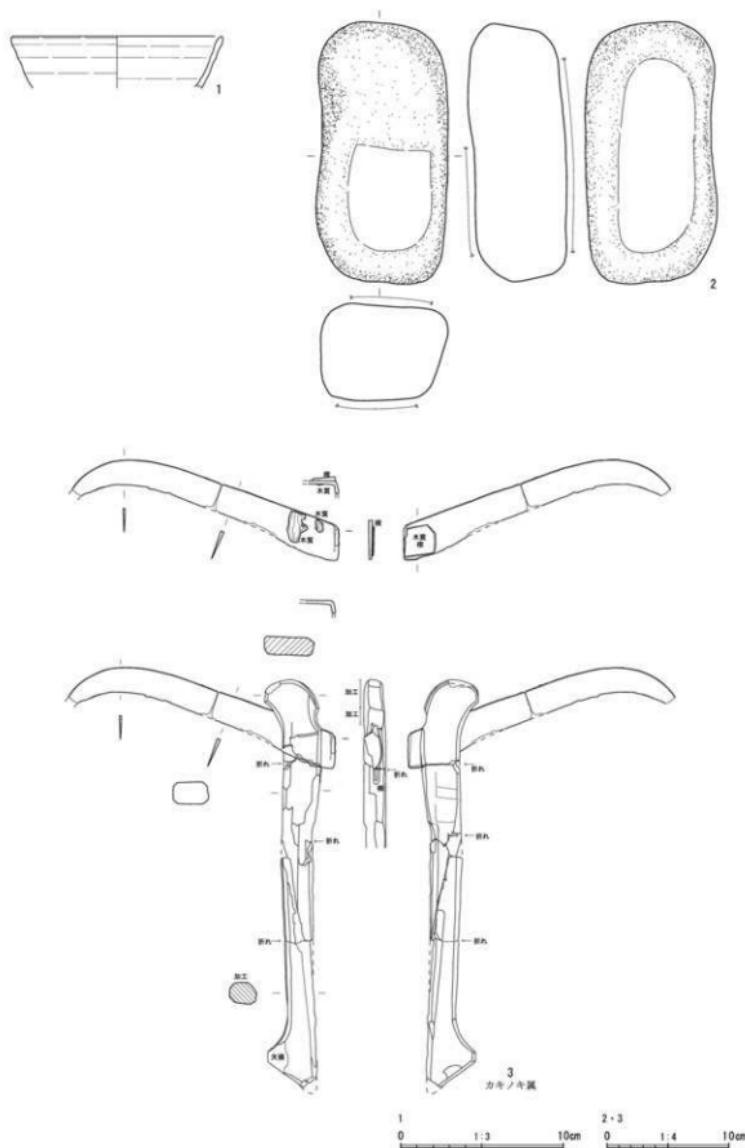
第56図165(図版31)は2区畦畔脇15層より出土した棒状木製品である。イヌマキ属の芯持ち材で、上端部が欠損している。残存長は38.1cm、直径は2.4~2.9cmを測る。表面は表皮下の面が残っている。垂木等の可能性がある。

原本(2区W-217)は2区の造構外17b層より出土した。加工製品ではなく、原木材である。長さは137cm、幅71cm、厚さは40cmを測る。小口面に材を切り出してきたときのものと思われる工具の痕跡がある。材はヒノキであった。今回は図化せず、写真のみ図版に掲載した(図版31)。この他にも1-3区12層上面で出土したスギ材(3区W-25)など、原材料と思われる非加工材が見つかっている。

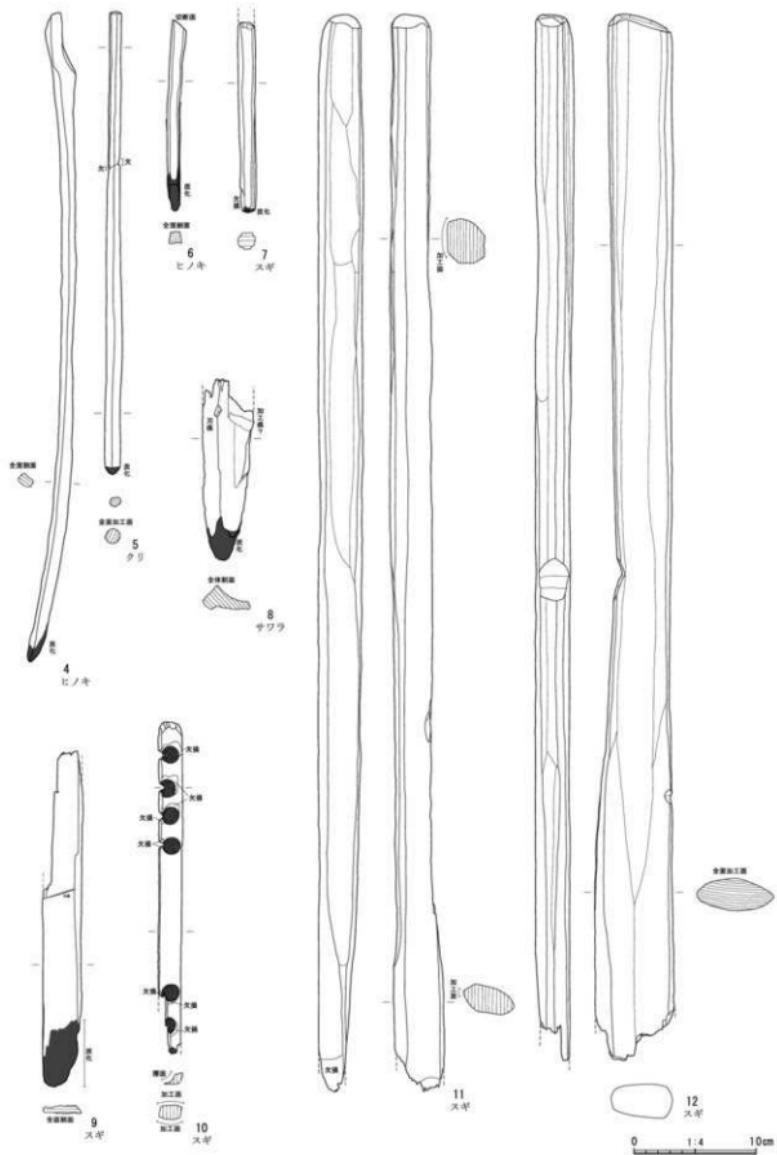
種実は包含層より39点のモモ核が出土した。同定結果を第6章第2節に掲載した。

註

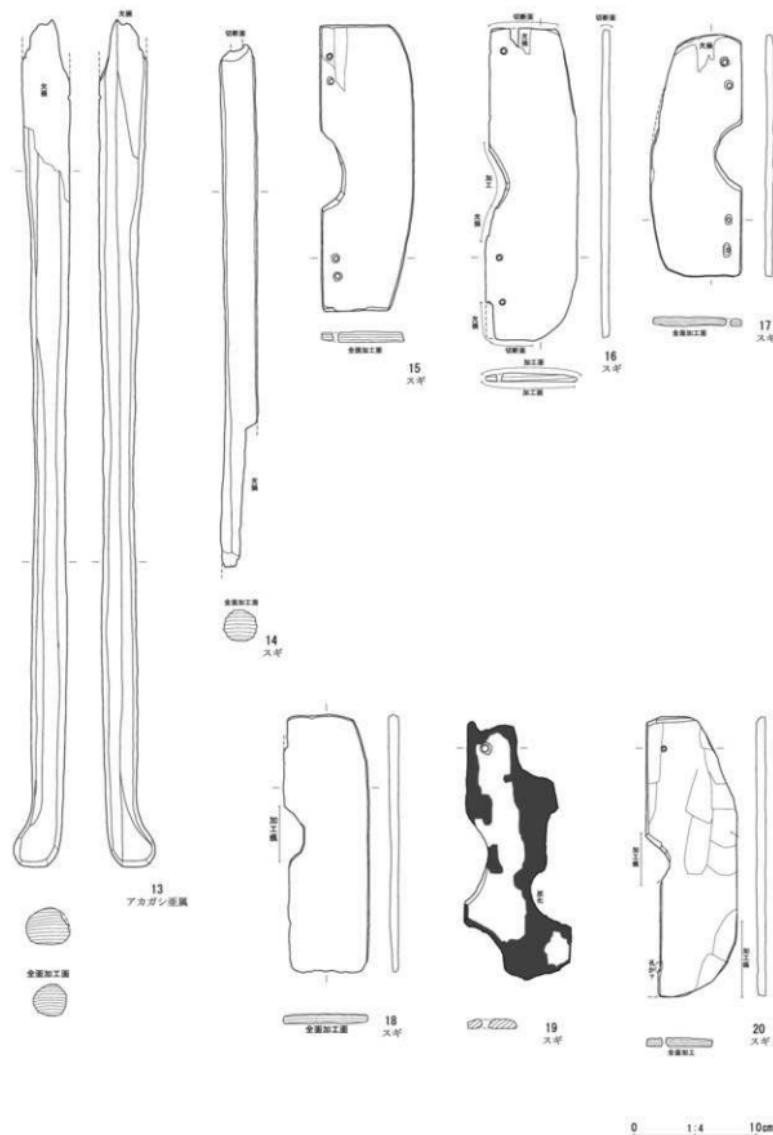
- 1 鎌刀を鎌柄に固定する際に楔を使っていることは、首都大学東京の山田昌久教授も指摘している。
- 2 「カキ底」については『漬名遺跡III(遺物編)本文編』の詳細による。
- 3 角枠型田下駄は、隣接する池ヶ谷遺跡『池ヶ谷遺跡III(遺物編)』や曲金北遺跡『曲金北遺跡(遺物・考察編)』で完形に近い製品が出土している。また、過去に行われた上土遺跡の調査『上土遺跡(立石地区)II(遺物編)』でも、角枠型田下駄の全体形状がわかる木製品が出土している。
- 4 『上土遺跡・岳美遺跡』(静岡県埋蔵文化財センター調査報告第54集)参照。
- 5 『曲金北遺跡(第18次)』(静岡市教育委員会)による。



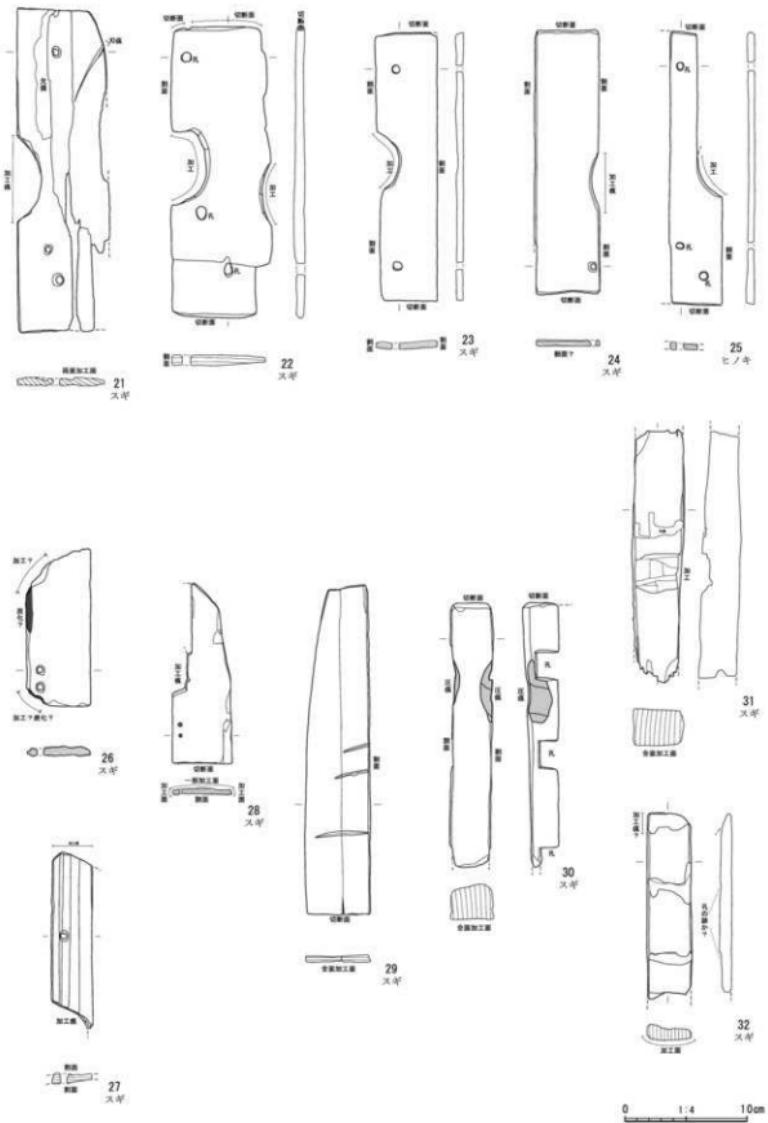
第37図 出土遺物実測図 1



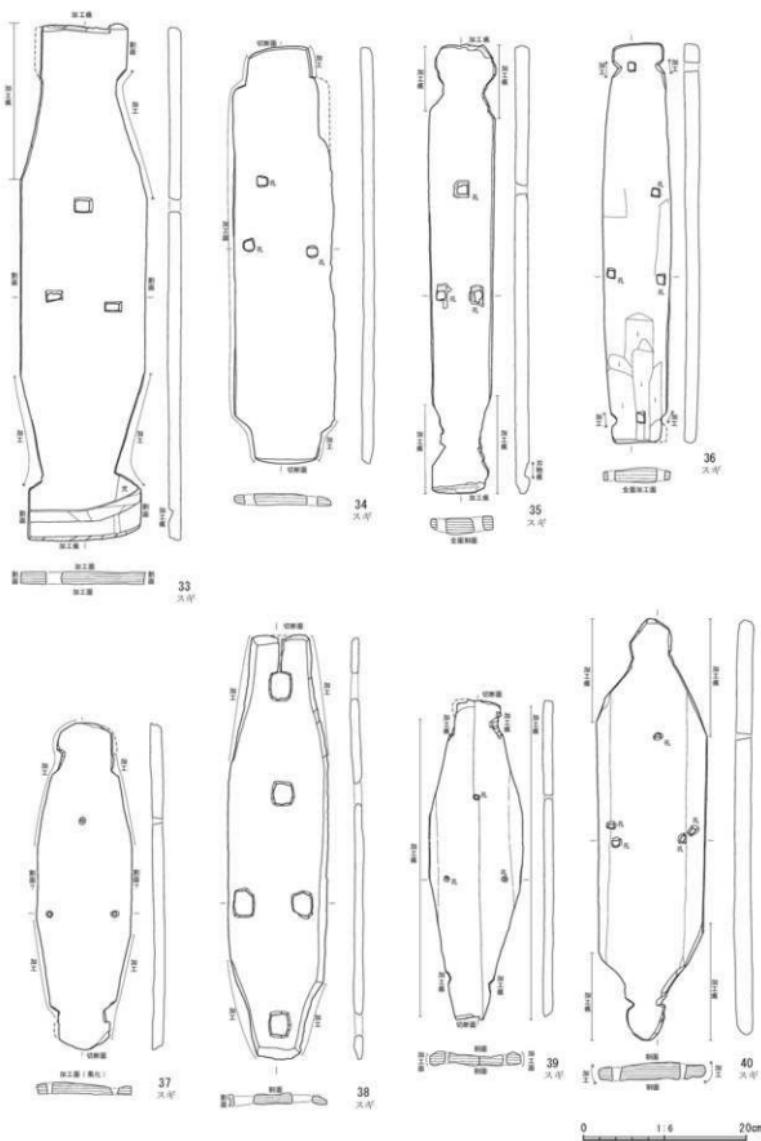
第38図 出土遺物実測図2



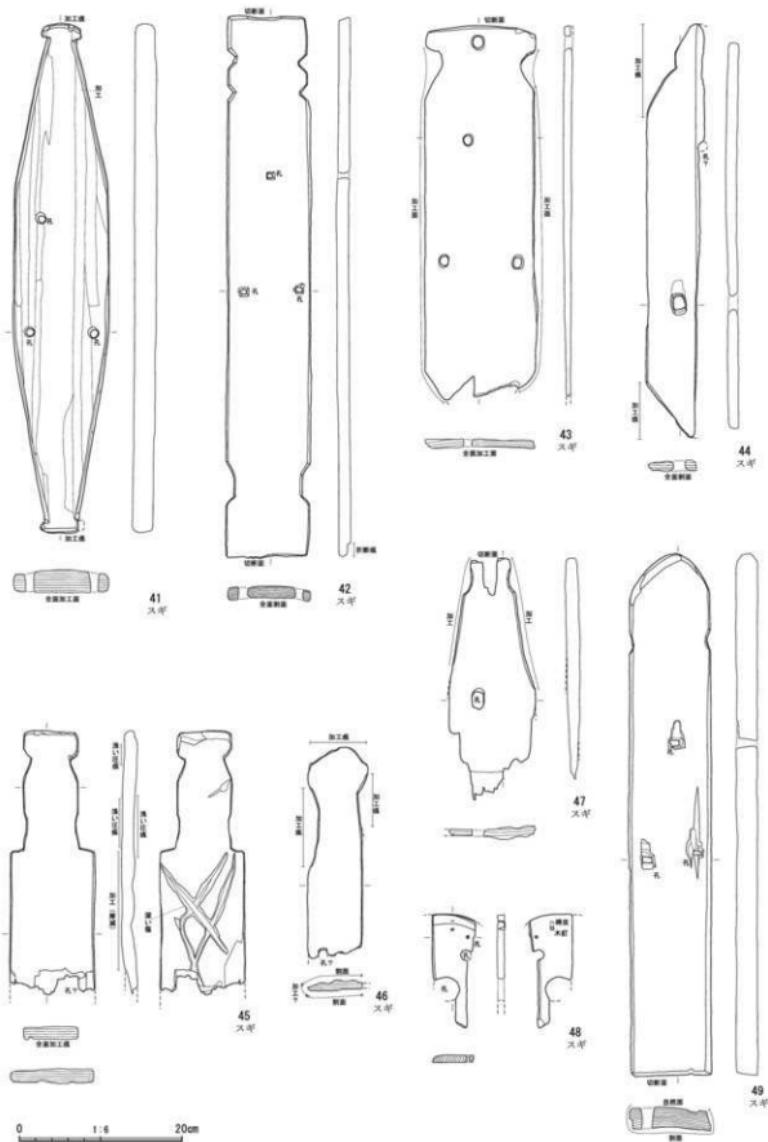
第39図 出土遺物実測図 3



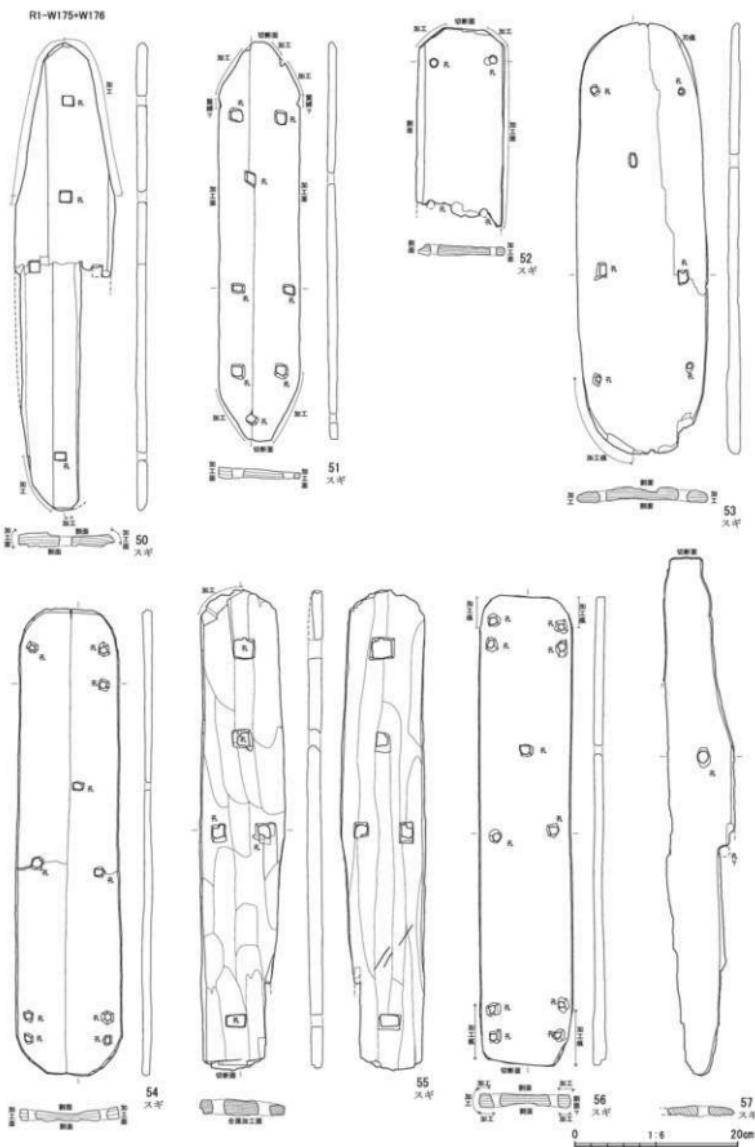
第40図 出土遺物実測図4



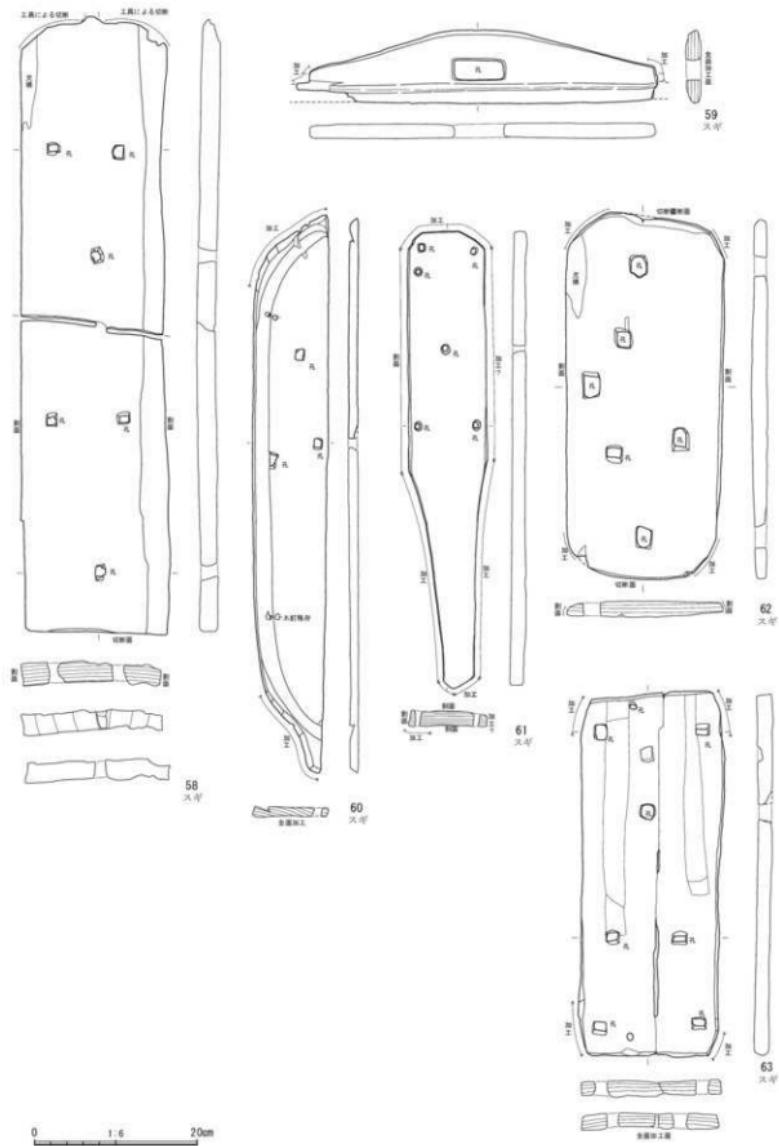
第41図 出土遺物実測図5



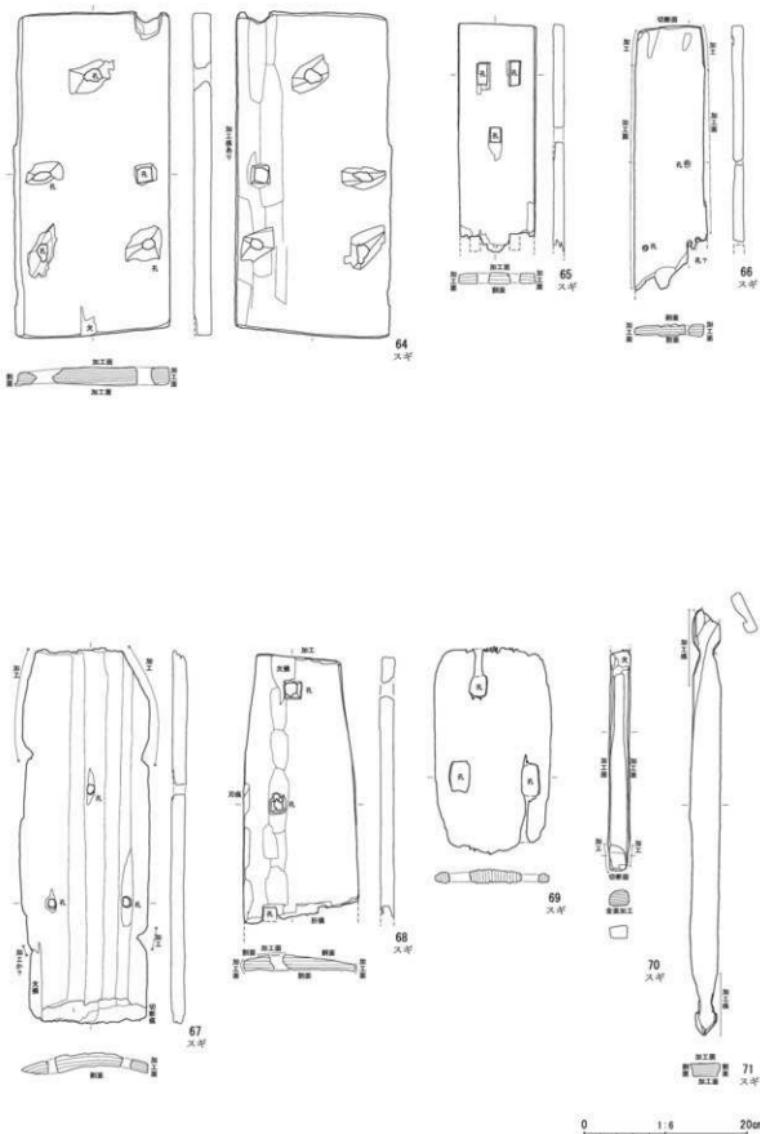
第42図 出土遺物実測図 6



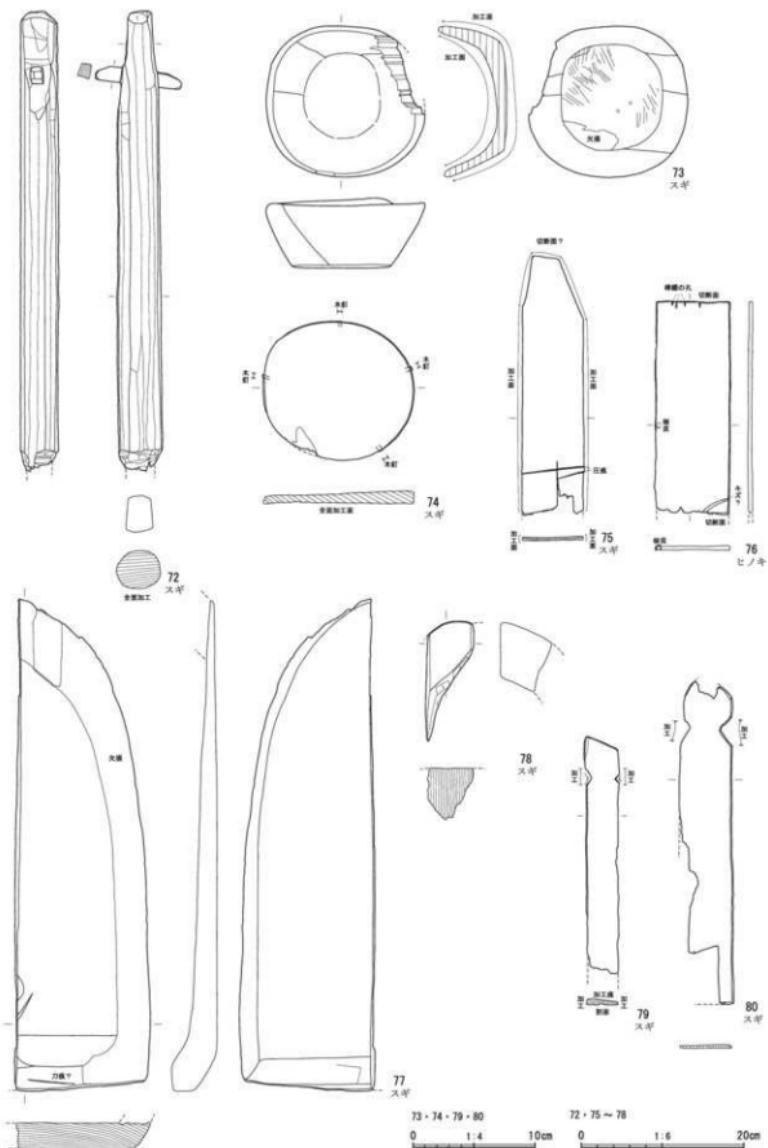
第43図 出土遺物実測図7



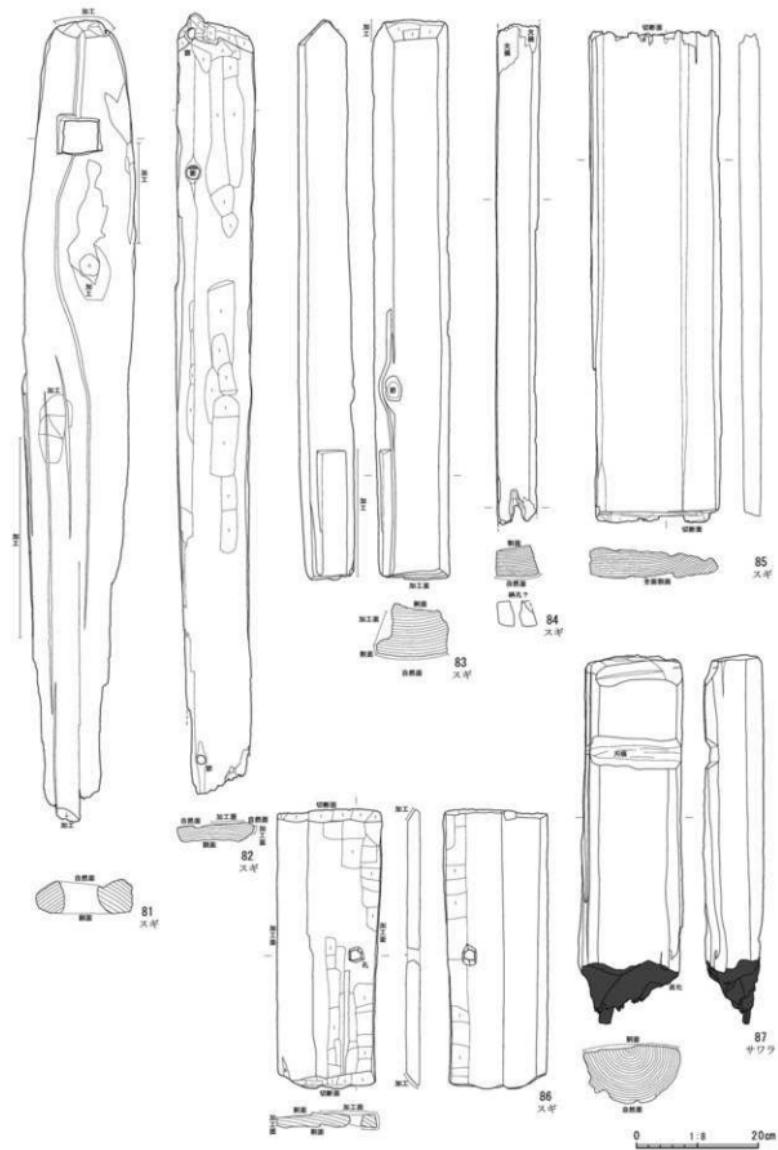
第44図 出土遺物実測図 8



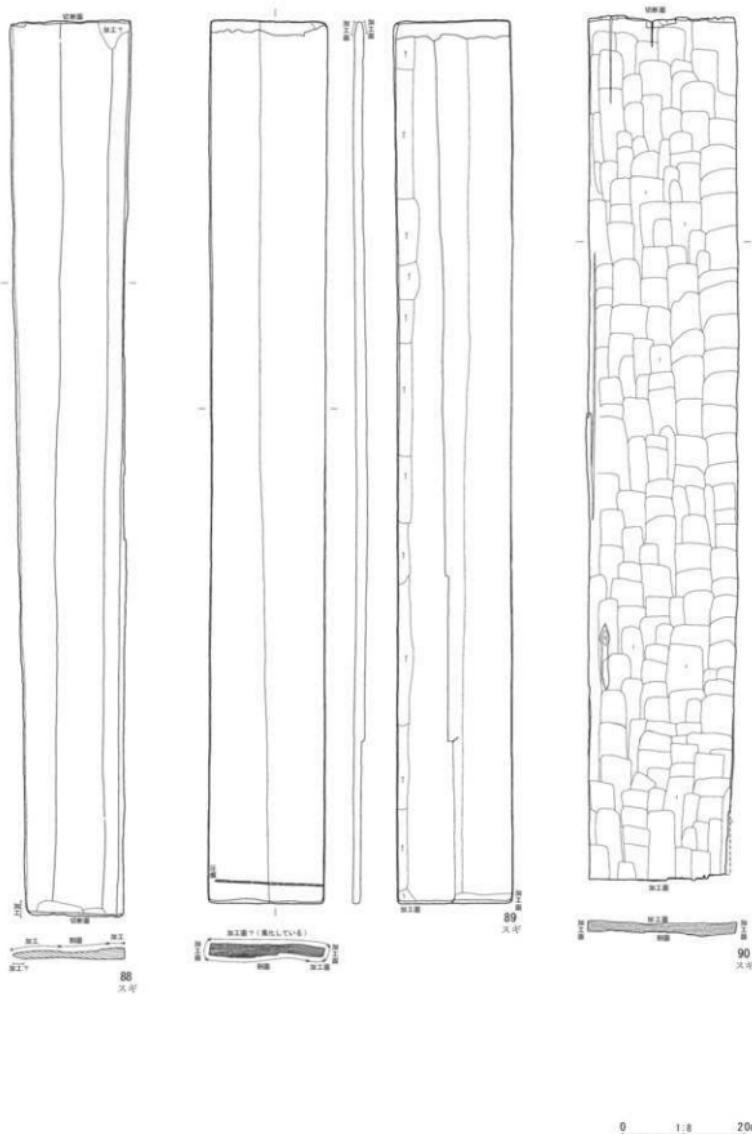
第45図 出土遺物実測図 9



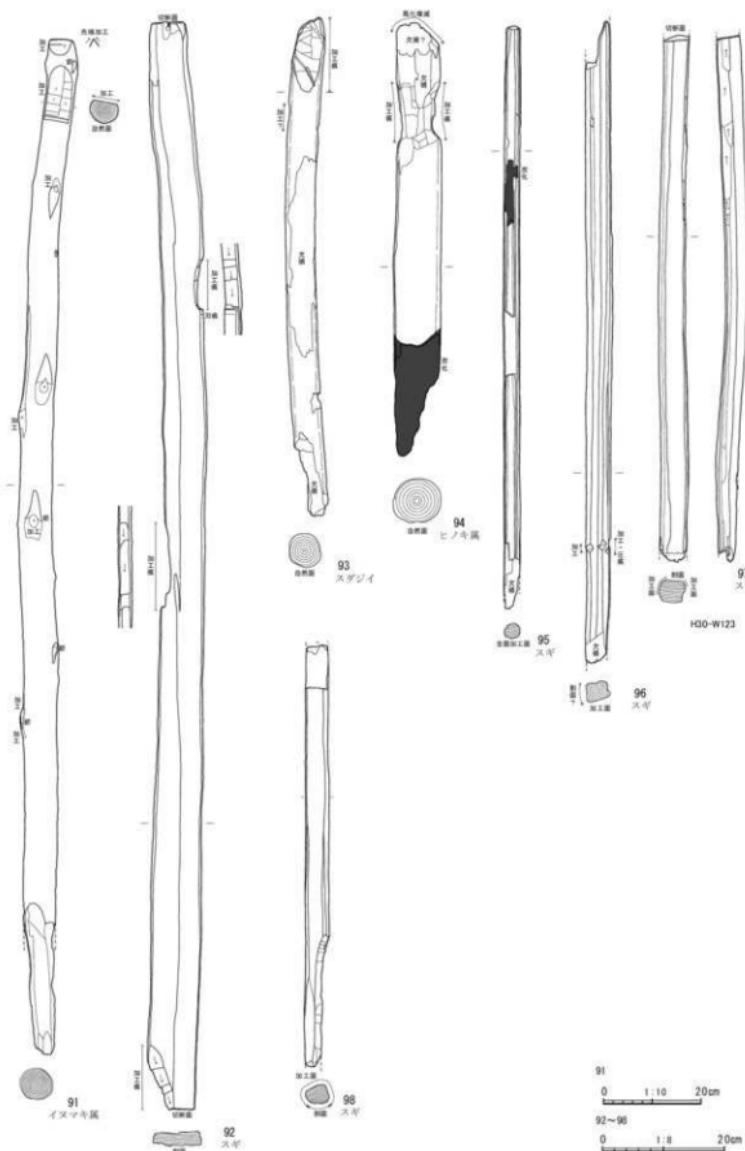
第46図 出土遺物実測図 10



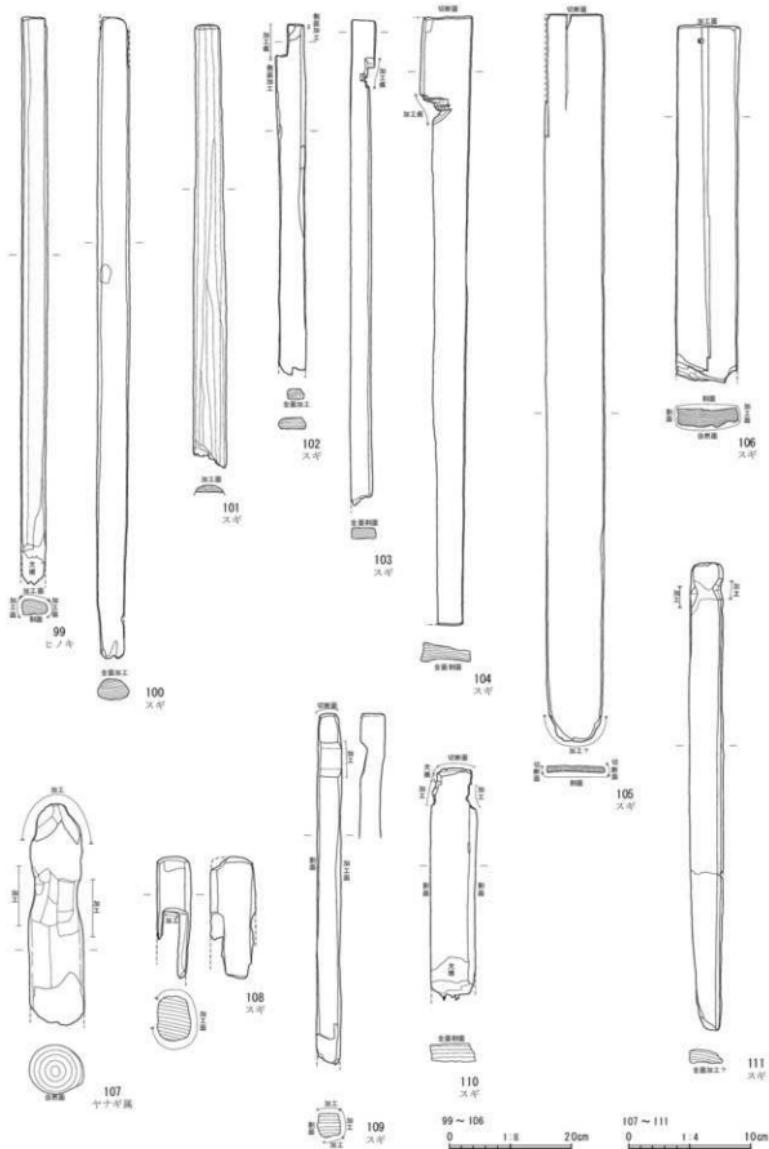
第47図 出土遺物実測図 11



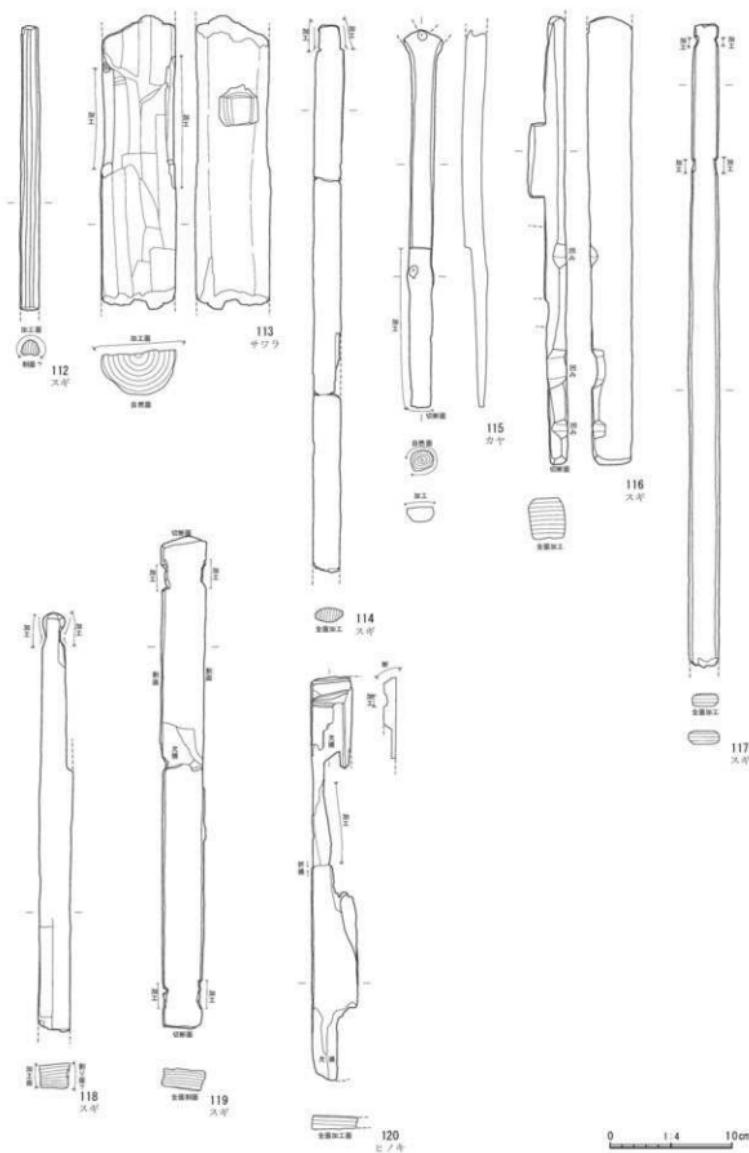
第48図 出土遺物実測図 12



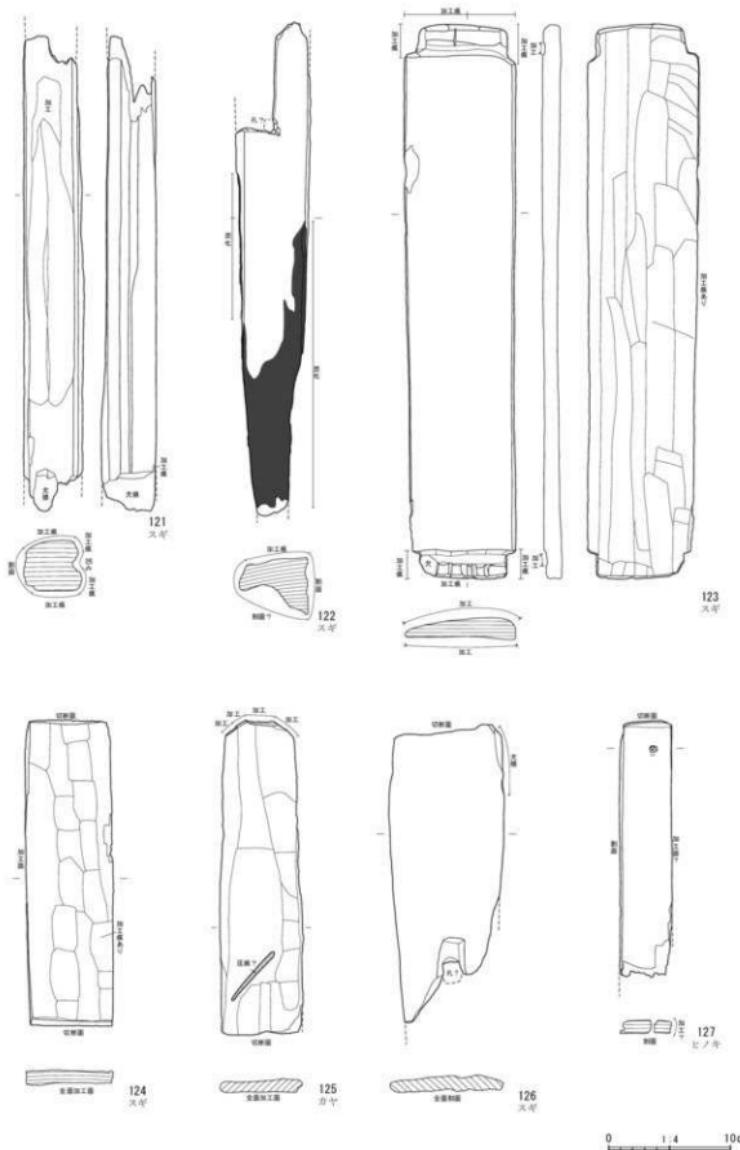
第49図 出土遺物実測図 13



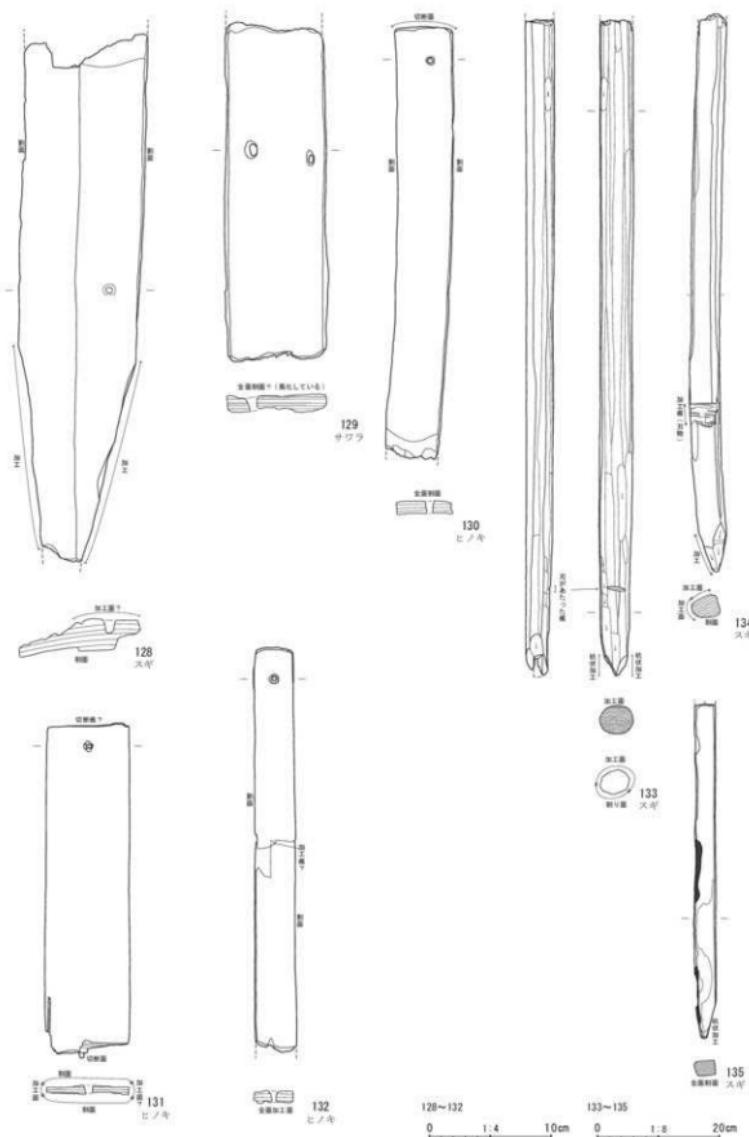
第50図 出土遺物実測図 14



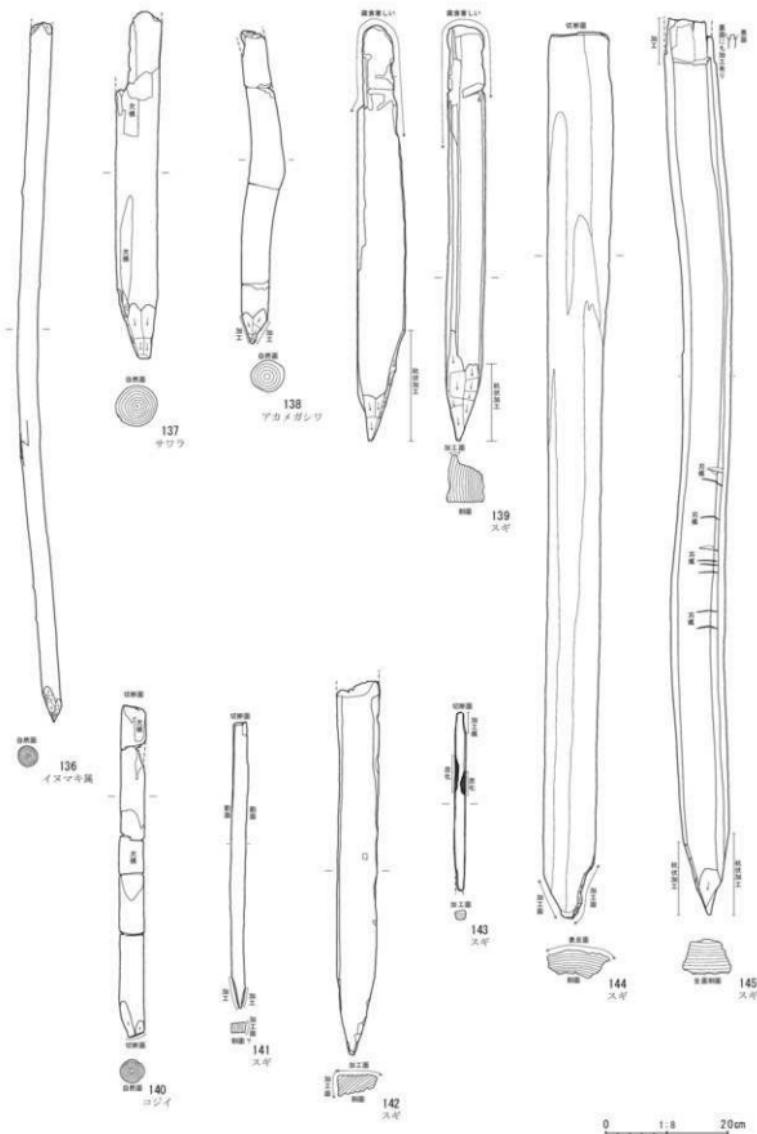
第51図 出土遺物実測図 15



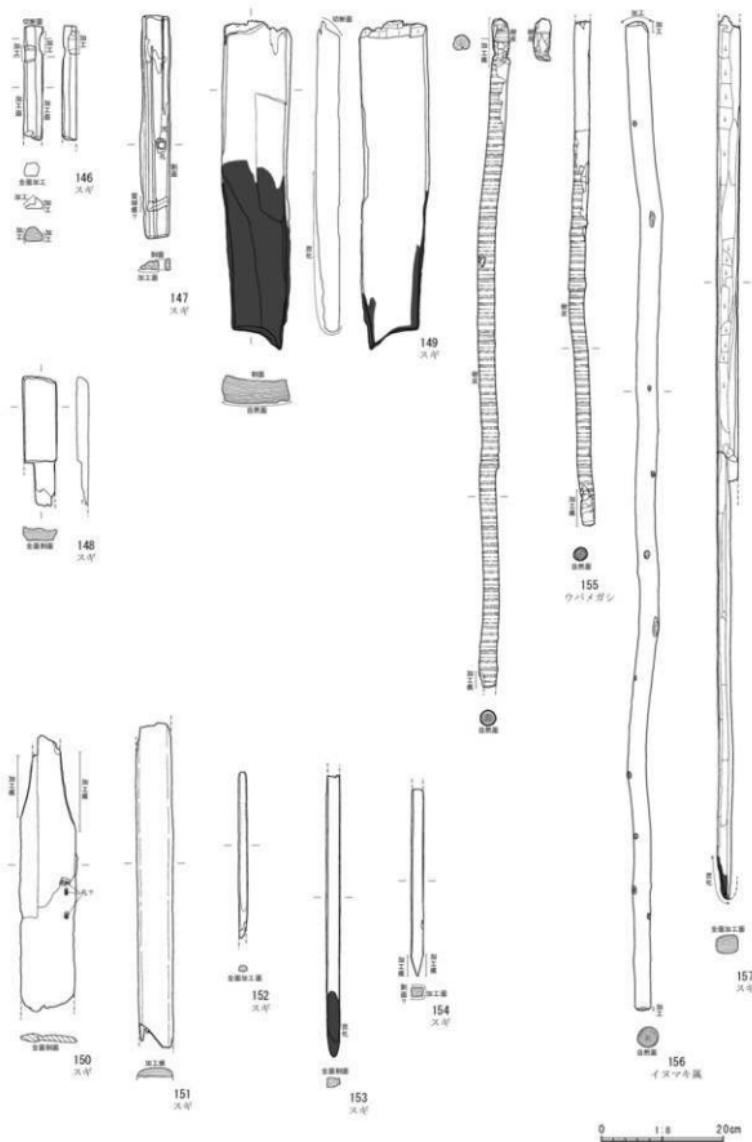
第52図 出土遺物実測図16



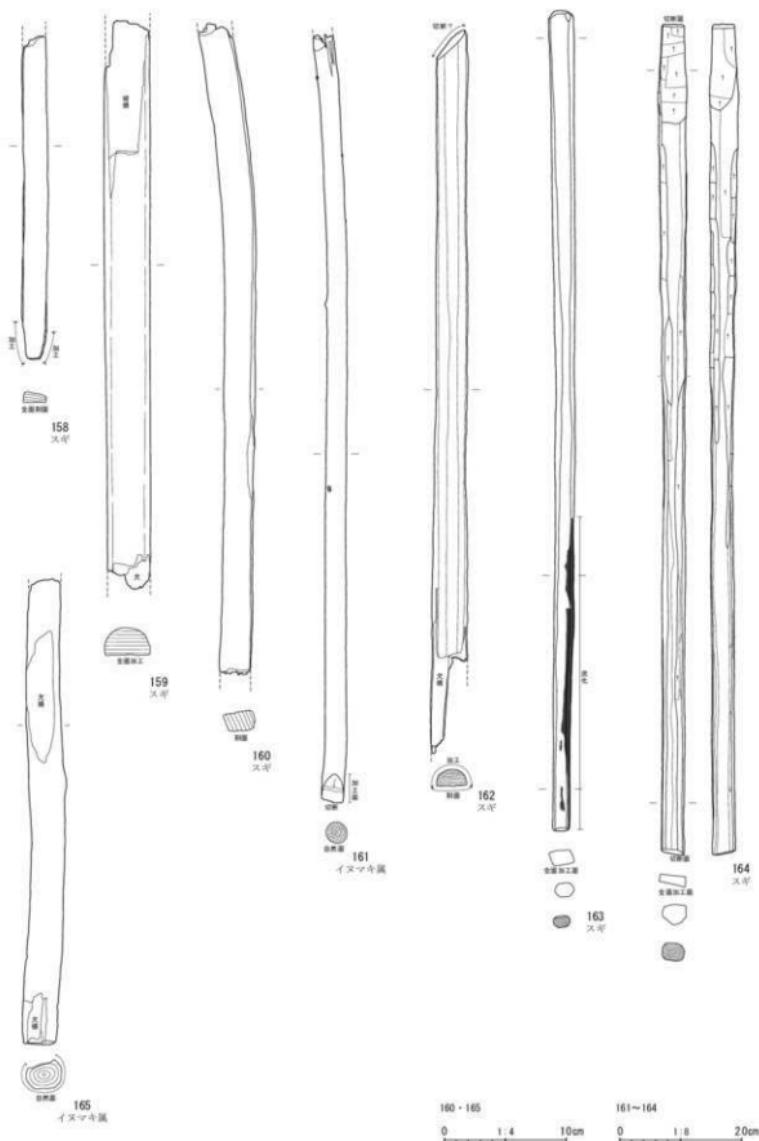
第53図 出土遺物実測図 17



第54図 出土遺物実測図 18



第55図 出土遺物実測図 19



第56図 出土遺物実測図 20

第5章　まとめ

第1節　条里制水田について—これまでの成果をふまえて—

上土遺跡の発掘調査は、過去における複数箇所の調査で奈良時代に整備された条里制水田の広がりが確認されてきたが、それが北側にどこまで及ぶかという問題に主眼が置かれた。

今回の発掘調査計画は、平成29年度と平成30年度、平成31年度（令和元年度）の3年間をかけて、本発掘調査を行うこととなった。これまでに確認された大畦畔は、北から西へ39度傾く方向の条里計画線に沿って構築されたことが分かっている。立石エリアの調査区も、これに基づいて設定され、大畦畔が想定される位置へ、1区から4区まで分割した。

平成29年度に行われた1-1区では東西方向の大畦畔（畦畔1）が検出され、平成30年度に西側に隣接する2区で畦畔1から続く大畦畔（畦畔3）が見つかっている。同年度に実施した1-2区の調査では、畦畔1と交差する南北方向の大畦畔（畦畔2）も検出した。続く平成31年度（令和元年度）は1-3区で畦畔2から続く大畦畔（畦畔4）を検出した。また同区では、畦畔4と並行する小畦畔（畦畔5）も確認した。3区では東西方向の大畦畔（畦畔6）を調査した。4区は後世の地盤改良による擾乱が酷く、畦畔の検出も危ぶまれたが、調査区の北端で、東西方向の大畦畔（畦畔7）を確認することができた。

3年間の調査成果として、条里制水田は麻機沼の近くまで広がり、条里型地割が存在することが明らかとなった（第57図）。大畦畔は北側から北西側へと、さらに広がっていく可能性が高いと言える。

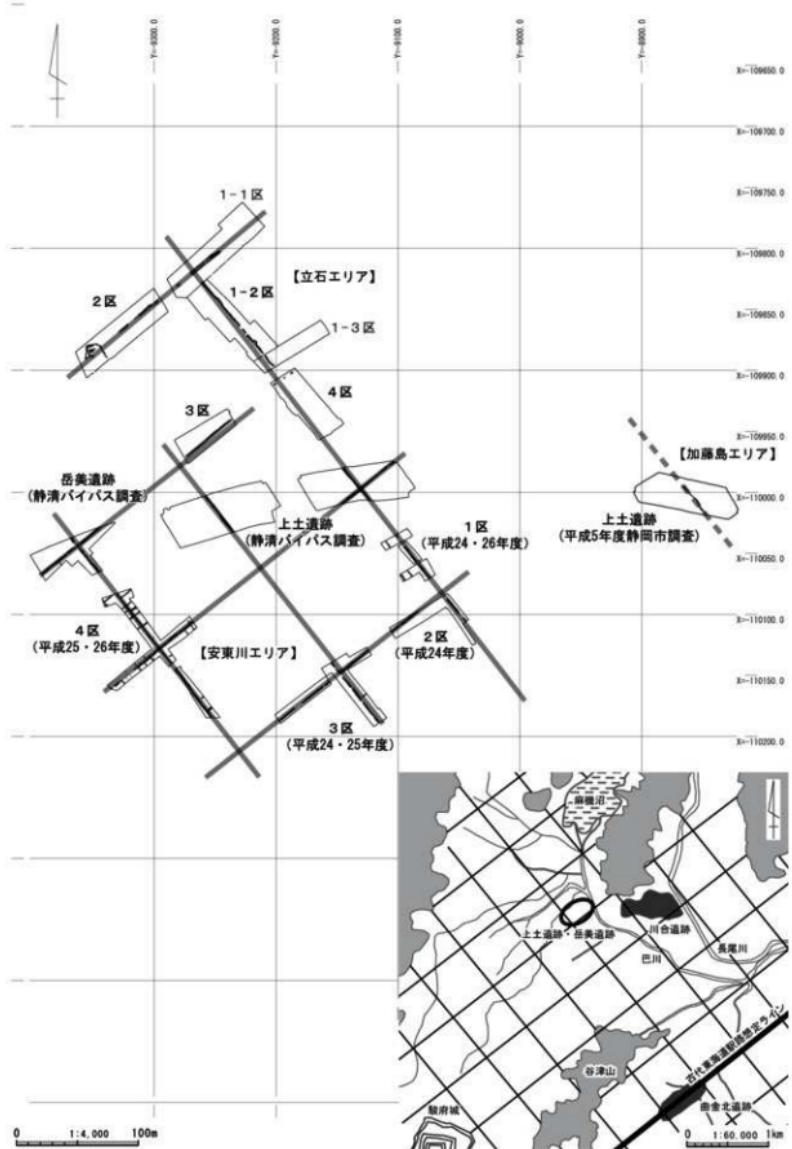
一方、東側は、平成5年に静岡市教育委員会が発掘調査した加藤島エリアで、大畦畔が見つかっている。ここから東は南沼上丘陵の南裾に広がる川合遺跡群が展開する。川合遺跡群は安倍郡閏連遺跡として知られており、ここでも条里制水田が見つかっている。さらに長尾川を越えて東側にある瀬名遺跡でも大畦畔は確認されている。

西側に転じれば、上土遺跡に隣接する岳美遺跡や賤機丘陵の東裾にある池ヶ谷遺跡にも条里制水田がある。静岡平野の北部・中部の条里については、当センターの前身である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が1996年に刊行した『上土遺跡（立石地区）II（遺構編）』の第209図に埋没条里と地籍図に残された表層条里について図示され、詳細な考察が書かれている。今回の調査は、これより北側に統く埋没条里を検出したことが、最大の成果と言える。

第2節　出土遺物について

上土遺跡の出土品は、水田という生産域であることから、集落域とは異なり、生活用具の主体である土器や石製品、鉄製品は非常に少なく、ここでの主体は木製品であった。多くの木製品は大畦畔の補強のために埋め込まれているか、大畦畔の近辺、または水田覆土から出土した。特に2区の西端では、木製品が集中して出土した地点を検出した（第23図）。2区の大畦畔（畦畔3）の延長線上にあたる場所ではあるが、畦畔は確認されてはいない。木製品はいずれも大型で、建築部材の壁板等に用いられていた可能性がある。おそらくは大畦畔の構築材として持ち込まれたと想定される。

平成29年度から令和元年までの発掘調査では、人為的な加工のある木製品を取り上げ、当センター



第57図 これまでの調査との関連性

で保管している。令和2～3年度に行った資料整理で、これらを分類・接合した後に図化し、写真撮影をした。資料整理の結果、出土した木製品の構成は、これまでの調査で出土した木製品のそれと、ほぼ同様であった。最も多く見られた木製品は、やはり生産域という場所柄、円柱型田下駄や角棒型田下駄と泥除け等の農耕土木具であった。次いで、畦畔を構築するために転用された建築部材や、杭等の土木材が出土した。一方で、生活用具は極端に少ない。しかし、火切り臼や火切り杵（第38図5・10）は、今回の調査に限らず、過去の調査でも出土している。集落ではない生産域と言う場所で発火具が出土する、その出方に意味があるのかもしれない。

今回、特に注目されたのは鎌である。木柄に鉄製の鎌刃が装着された状態で出土した（図版13-4）。使用状態で出土する鎌は、出土例が少ない。また装着状態が詳細にわかる資料としても貴重な発見となつた。さらに鎌刃と木柄を固定するために、別材の楔が両面に咬ませてあったことも明らかになった（第37図3 図版15）。装着状態を示す鎌が出土する機会も希少であるが、今後、発見の折には、楔の存在に注意が必要であろう。

木製品の約9割がスギ材であること、これまでの静岡平野の傾向と同じである。田下駄や泥除けには、暗黙の規範があるかのようにスギ材を選択して使っている。一方、建築部材の垂木はイヌマキ属を使い、曲物の側板にはヒノキ、杭等は雜木といった、明確な用材選択がなされていたことが樹種同定結果に表れている（第5章 第9・10表、第6章 第1節）。スギ材のほかにヒノキ材やサワラ材が含まれることがある。特にサワラは中部高地でよく見られる針葉樹材で、スギやヒノキの代わりに使用されている。こうした素材は、製品として持ち込まれているのか、素材として持ち込まれているのか、今後、検討を要するであろう。

製品ではなく、原本の状態で水田に持ち込まれた木もある。2区の大畦畔（畦畔3）の下で、第13層にめり込んだ状態で、ヒノキの原本が出土した（第21図 図版31）。原本には切り出されたときの工具痕跡が残っているが、目的・用途は、はつきりとしない。

円柱型田下駄や角棒型田下駄の足板については、過去の岳美遺跡において詳細な形態分類がなされており、今回の出土品では、それに照らし合わせた。泥除けについても同様である。

なお、今回の発掘調査で出土した木製品は全て、樹種同定を行っている。樹種同定は東北大学名誉教授の鈴木三男先生にお願いした。報告書に掲載した木製品は第6章第1節にて樹種の同定結果を報告し、観察表へ樹種名を記載した（第9表）。本節では報告書に掲載しなかった木製品とその樹種同定結果の一覧表を掲載した（第10表）。

参考文献

- 天石夏実 1995 「南沼上古墳群」『ふちゅーる』No.3 静岡市教育委員会
- 石川昌之 1999 「田成ケ谷古墳群」『ふちゅーる』No.7 静岡市教育委員会
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 加藤芳朗 1993 「静岡県・池ヶ谷遺跡をめぐる地形・地質的背景」『池ヶ谷遺跡II (自然科学編)』第46集
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985 『宮下遺跡 (遺構編)』第9集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986 『内荒遺跡 (遺構編)』第10集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 『川合遺跡 (遺構編) 図版編』第21集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990 『川合遺跡 (遺構編) 本文編』第25集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 『川合遺跡 八反田地区I』第33集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『池ヶ谷遺跡 遺構編I』第38集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『池ヶ谷遺跡II (自然科学編)』第46集

- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995a 『岳美遺跡 I (遺構編)』第60集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995b 『川合遺跡 八反田地区 II (本文編)』第63集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996a 『池ヶ谷遺跡 IV』第76集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996b 『上土遺跡 (立石地区) I (遺構編)』第77集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『川合遺跡 志保田地区』第102集
- 佐藤達雄 1990 「安倍川流域の古墳群」・「巴川・庵原川流域の古墳群」『静岡県史 資料編2 考古二』
- 静岡県 1930 『静岡県史』第一巻
- 静岡県 1931 『静岡県史』第二巻
- 静岡県教育委員会 1994 『静岡県埋蔵文化財年報 (平成3年度)』
- 静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳-資料編-』
- 静岡県教育委員会文化財保護課 2017 『静岡県文化財年報 (平成28年度)』
- 静岡県教育委員会文化財保護課 2018 『静岡県文化財年報 (平成29年度)』
- 静岡県考古学会 2003 『静岡県の横穴式石室』
- 静岡県埋蔵文化財センター 2017 『上土遺跡・岳美遺跡』第54集
- 静岡市教育委員会 1993 『有水1号墳』静岡市埋蔵文化財調査報告31
- 静岡市教育委員会 1999 『惣ヶ谷古墳群』静岡市埋蔵文化財調査報告53
- 静岡市立登呂博物館 1990 『特別展 静岡・清水平野の古墳時代』
- 鈴木悦之 1995 「上土遺跡 (第2次調査)」『ふちゅーる』No.3 静岡市教育委員会
- 鈴木一有・田村隆太郎編 2019 『駿機山古墳と東国首長』(『季刊考古学』別冊30) 雄山閣
- 鈴木一有 2019 「東海地方における古墳時代後期の地域社会」(前掲『駿機山古墳と東国首長』掲載)
- 淹沢誠・久永雅宏 2018 「静岡市麓山神社後古墳出土の石枕」『静岡県考古学研究』No.49
- 中野有 1985 「静岡市域の古墳の分布について (前)」『静岡県博物館協会学芸職員研究紀要』8 昭和59年度
- 農林水産省農林水産技術会議事務局他監修 1999 『新版 標準土色帖 1999 年版』
- 長谷川秀厚 2003 「駿府場内遺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』第57集 静岡県教育委員会
- 平野吾郎 1990 「川合遺跡」「内荒遺跡」「駿河国府跡」『静岡県史 資料編2 考古二』静岡県
- 八木広尚 1995 「上土遺跡 (第3次調査)」『ふちゅーる』No.3 静岡市教育委員会
- 矢田勝 2015 「五畿七道の条里 2 東海道 駿河」『古代の都市と条里』 吉川弘文館
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『瀬名遺跡 I (遺構編I) 本文編』第40集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『瀬名遺跡 III (遺物編I) 本文編』第47集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『瀬名遺跡 V (遺物編II) 本文編』第79集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『池ヶ谷遺跡III (遺物編)』第62集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『曲金北遺跡 (遺構編)』第68集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『曲金北遺跡 (遺物・考察編)』第92集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『岳美遺跡 II (遺物編)』第75集
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『上土遺跡 (立石地区) II (遺物編)』第78集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012 『曲金北遺跡 II』第16集
- 静岡市教育委員会 2015 『曲金北遺跡 (第18次)』静岡市埋蔵文化財調査報告書

第6表 出土土器觀察表

番号	固版 番号	区	出土位置	種別	器種名	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
1	15	3	昭和町 12a 層	直底器	环身	10	(13.0)	(3.2)	灰色 N 6/	良

第7表 出土石製品觀察表

番号	固版 番号	区	出土位置	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
2	15	1-1	昭和 1 直土内	石刀・石石	21.2	10.5	8.0	

第8表 出土木製品觀察表

番号	固版 番号	区	遺構	分類群	器種名	断面名 1	断面名 2	断面	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	次數	備考	
3	13	2 IX	西側壁 1 16 帯下部	農耕 上木具	鍬	鉄製鍬頭	組合わせ (柄)	カギフタ箆 柄:(33.0)	17.0 柄:(33.0)	12.0 柄:(14.0)	0.25 柄:(1.0)	1	絶目	
4	16	3 IX	昭和上部	工具	鋤	木具	—	ヒノキ	53.2	1.9	1.1	板目	先端削化	
5	16	2 IX	昭和昭呼? 基盤	工具	鋤	木具	火薙的	—	37.0	1.45	1.2	板目	削化	
6	16	1-2 IX	13 b 帯	工具	鋤	木具	付け木	—	ヒノキ	15.6	1.6	1.05	板目	削化
7	16	1-1 IX	14 帯	工具	鋤	木具	火薙的	—	35.0	1.55	1.35	板目	削化	
8	16	3 IX	昭和内	工具	鋤	木具	付け木?	—	34.9	1.2	1.05	扇板目?	削化	
9	16	1-2 IX	昭和削	工具	鋤	木具	付け木	—	スギ	(27.0)	3.35	0.65	板目	削化
10	16	2 IX	昭和昭呼? 基盤	工具	鋤	木具	火薙的	—	スギ	(27.2)	2.0	1.2	板目	削化
11	16	1-1 IX	14 帯	農耕 上木具	鍬	柄?	—	スギ	(36.2)	4.1	2.6	板目		
12	16	1-2 IX	13 b 帯	埋造 木制品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	(36.7)	6.3	2.8	板目		
13	16	1-1 IX	昭和 1 直土内	農耕 上木具	鍬	柄?	—	アカゼン箆箆	(36.4)	3.9	3.05	板目		
14	16	2 IX	17 b 帯上部	農耕 上木具	鍬	柄?	—	スギ	(42.8)	2.8	2.5	板目		
15	17	3 IX	12 a 上層	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付	—	スギ	23.5	7.7	0.9	板目		
16	17	2 IX	11 帯上面	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付	—	スギ	25.6	7.5	0.7	板目		
17	17	1-2 IX	13 b 帯	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付	—	スギ	19.0	7.5	0.8	板目		
18	18	1-2 IX	昭和帯上部	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付	—	スギ	21.2	7.05	0.85	板目		
19	19	2 IX	12 帯上面	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付?	—	スギ	21.2	8.8	0.8	扇板目	削化	
20	17	1-2 IX	13 b 帯	農耕 上木具	鍬	N/B/S	—	スギ	23.0	7.5	0.8	板目		
21	17	2 IX	14 帯上部	農耕 上木具	鍬	鉗鑽付	—	スギ	26.0	7.6	0.7	扇板目		

第8表 出土木製品観察表

番号	測量番号	区	遺構	分類群	整理名	整理 編番名1	整理 編番名2	整理	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木数	備考
22	17	1-1 IX	昭和1 塗上内	農耕 土木具	麻	瓦障け	—	スギ	23.9	6.3	0.9	板目	
23	17	1-1 IX	11層	農耕 土木具	麻	瓦障け	—	ヒノキ	22.0	3.6	0.5	板目	
24	17	1-2 IX	遺構外 11層上部	農耕 土木具	麻	瓦障けサ	—	スギ	21.7	3.4	1.0	板目	
25	17	1-1 IX	11層	農耕 土木具	麻	瓦障け	—	ヒノキ	22.3	4.30	0.5	板目	
26	17	3 IX	昭和高止	農耕 土木具	麻	瓦障けサ	—	スギ	13.9	3.3	0.6	板目	削化
27	17	2 IX	11～16層	農耕 土木具	麻	瓦障けサ	—	スギ	(14.45)	(3.4)	0.9	板目	
28	17	3-2 IX	13.5層	農耕 土木具	麻	瓦障け	—	スギ	22.2	7.4	0.9	板目	
29	17	1-2 IX	遺構外 13.5層最下部	農耕 土木具	麻	瓦障けサ	—	スギ	27.1	3.6	0.6	板目	
30	18	2 IX	木製品貯蔵中[IX] 15～16層	農耕 土木具	馬繩	合	—	スギ	(21.7)	3.5	2.9	板目	
31	18	1-2 IX	13.5層	農耕 土木具	馬繩	合	—	スギ	(20.7)	4.3	2.9	板目	
32	18	1-2 IX	12.5層	農耕 土木具	馬繩	合	—	スギ	(15.2)	3.7	1.3	板目	
33	18	1-2 IX	遺構外 11層上面	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	62.7	15.6	1.50	板目	M 279の棒とセット関係 焼付漆器物軸用
34	18	1-1 IX	11層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	51.3	11.9	1.4	板目	
35	18	2 IX	測定区西側1r 内 16層最下	農耕 土木具	田子板	円錐空 田子板	縁み板	スギ	55.25	8.3	2.0	板目	
36	18	3 IX	13上面	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	49.2	8.5	1.8	板目	
37	18	2 IX	木製品貯蔵中[IX] 15～16層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	40.2	11.7	1.2	板目	
38	18	2 IX	15～16層 最上部	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	32.1	12.4	1.4	板目	
39	18	2 IX	木製品貯蔵中[IX] 15～16層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	39.2	10.6	1.7	板目	
40	18	3 IX	13上面	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	51.9	15.7	2.3	板目	
41	19	2 IX	木製品貯蔵中[IX] 15～16層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	42.7	11.9	2.0	板目	
42	19	1-1 IX	14層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	60.7	9.9	1.5	板目	
43	19	1-2 IX	昭和層 15～16層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	46.0	13.5	1.0	板目	
44	19	4 IX	12層上部	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	50.8	7.2	1.4	板目	
45	19	1-2 IX	昭和内 17.5層上面	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	(32.5)	10.5	1.85	板目	
46	19	3 IX	昭和上部	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	(26.0)	(7.5)	1.5	板目	
47	19	1-1 IX	14層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	(29.6)	(10.6)	1.4	板目	
48	19	2 IX	13.5層	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	(33.9)	(5.3)	0.9	板目	複数・木釘
49	19	1-1 IX	昭和上 塗上内	農耕 土木具	田子板	円錐型 田子板	縁み板	スギ	64.3	10.2	2.4	板目	

第8表 出土木製品観察表

番号	器皿 番号	区	遺構	分類群	器皿名	縦横 幅分名1	縦横 幅分名2	断面	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取	備考
30	19	3区	13上部-12下部	遺構 上木具	圓筒	円筒型 圓筒子盤	縦み板	スギ	37.5	12.4	1.4	板目	
31	19	1-1区	11層	遺構 上木具	圓筒	円筒型 圓筒子盤	縦み板	スギ	49.1	10.0	1.0	板目	
32	19	2区	焼附内	遺構 上木具	圓筒	円筒型 圓筒子盤	縦み板	スギ	(24.0)	10.6	1.2	板目	
33	20	3区	焼附 12cm	遺構 上木具	圓筒	円筒型 圓筒子盤	縦み板	スギ	53.1	16.2	1.9	板目	
34	20	3区	焼附内 12cm	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	37.4	13.0	1.2	板目	
35	20	1-1区	焼附 1 盛土内	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	58.1	10.4	1.9	板目	
36	20	2区	焼附内 12cm	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	37.9	11.6	1.8	板目	
37	20	1-1区	焼附 1 盛土内	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	63.7	(8.15)	1.4	板目	
38	20	1-2区	焼附表面土上部	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	75.8	17.6	1.9	板目	
39	20	1-1区	14層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦木	スギ	(44.5)	9.1	1.9	板目	
40	20	2区	木製品束中区 15～16層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	68.6	9.3	1.1	過板目?	樹皮剥離物利用
41	20	2区	木製品束中区 15～16層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	58.2	9.9	2.0	板目	
42	20	1-1区	焼附 1 盛土内	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	65.1	19.5	1.9	板目	
43	20	3区	焼附内 12cm×12cm	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	44.8	17.7	2.1	板目	
44	21	3区	焼附内 12cm	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	65.1	19.3	2.35	板目	
45	22	2区	13層上面	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板?	スギ	(26.0)	9.5	1.2	板目	
46	22	2区	木製品束中区 17.8層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	(32.0)	9.6	1.5	板目	
47	22	2区	木製品束中区 15～16層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	66.2	15.9	1.4	板目	
48	21	1-1区	焼附 1 盛土内	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板	スギ	(33.0)	11.2	1.30	板目	
49	21	2区	遺構外 15～16層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦み板?	スギ	25.3	14.4	1.8	板目	
50	21	1-2区	遺構外 17.8層	遺構 上木具	圓筒	円筒型指 子盤	縦?	スギ	(27.1)	2.5	1.9	板目	
51	22	1-2区	遺構外 15.5層	縦み板 その他 ・粘液質?	その他	-	-	スギ	(32.0)	3.85	1.6	板目	樹皮剥離物利用
52	21	2区	木製品束中区 15～16層	遺構外	天井桟	天井桟	-	スギ	(56.0)	5.5	1.7	板目	
53	22	1-1区	14層	遺構外	圓筒	圓	物	スギ	12.4× 13.0	8.75	0.6～1.7	板目	内側面、一端黒く変色
54	22	3区	焼附上層	遺構外	不明	物	遺板	スギ	31.4	12.4	1.05	過板目	木釘
55	1-2区	焼附内	遺構外	圓筒	圓	物	側板	スギ	(31.9)	7.5	0.4	板目	
56	1-2区	13.5層	遺構外	圓筒	圓	物	側板	スギ	(26.0)	9.2	0.5	板目	側板
57	22	2区	14層上面	遺構外	焼?	物	-	スギ	(60.0)	(16.0)	3.4	板目	

第8表 出土木製品観察表

番号	器皿 番号	区	遺構	分類群	遺物名	器種 種分名1	器種 種分名2	寸半衝縫	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取	備考
78	22	2区	11層上面	施設	櫛?	鉄物	—	スギ	(14.6)	(5.9)	(6.0)	板目	
79	22	2区	12層	施設	鉄物	人形?	—	スギ	(19.0)	2.7	0.5	板目	
80	22	2区	西壁上端 高さ約内 12.5cm再上面	施設	鉄物	人形?	—	スギ	(26.0)	4.3	0.3	板目	
81	23	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	漆・粉引	その他の 不明	—	スギ	(31.4)	15.9	3.25	板目	
82	23	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	その他の 不明	その他の 不明	—	スギ	(337.9)	12.75	3.2	板目	
83	23	1-1区	11層	建築材料	その他の 不明	—	スギ	86.95	11.7	8.6	板目		
84	23	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	その他の 不明	—	スギ	(82.05)	7.0	5.1	板目		
85	23	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	その他の 不明	その他の 不明	—	スギ	78.8	21.1	5.0	板目	
86	23	1-1区	塔壁上 道上内	建築材料	その他の 不明	その他の 不明	—	スギ	45.8	17.0	2.1	板目	
87	23	1-1区	11層	建築材料	その他の 不明	その他の 不明	—	モリ	60.5	17.2	9.5	芯材	炭化
88	24	1-2区	漆桶外 11.5層	建築材料	櫛?	その他の 不明	—	スギ	147.0	18.35	1.9	板目	
89	24	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	スギ	144.8	19.1	2.1	板目		
90	24	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	その他の 不明	—	スギ	111.8	24.5	1.8～2.2	板目		
91	25	2区	塔壁内	建築材料	漆木	その他の 不明	—	イヌマキ属	206.1	6.7	6.03	芯材	
92	24	2区	木製品底中区 15～16層	建築材料	—	スギ	178.2	7.9	2.2	板目			
93	25	3区	13層	施設材	その他の 不明	—	スギ	91.75	7.0	5.5	芯材		
94	25	3区	12層上面	施設材	その他の 不明	—	ヒノキ属	71.1	8.9	7.3	芯材	炭化	
95	25	1-3区	13層上面	施設材	その他の 不明	—	スギ	195.57	2.9	2.5	板目	炭化	
96	25	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	スギ	(196.12)	4.1	3.1	板目		
97	25	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	スギ	98.0	4.3	3.73	板目		
98	25	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	スギ	160.15	3.9	3.1	板目	157(W 121×146)と同一か(最高なし)	
99	25	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	ヒノキ材	93.07	4.3	2.6	板目		
100	25	2区	13層上面	施設材	その他の 不明	—	スギ	(180.21)	5.2	3.5	板目		
101	26	2区	木製品底中区 15～16層	施設材	その他の 不明	—	スギ	(22.7)	5.4	3.2	板目		
102	26	1-2区	12.5層	施設材	その他の 不明	—	スギ	(57.4)	5.1	1.9	板目		
103	26	3区	12層	施設材	その他の 不明	—	スギ	(78.6)	4.3	1.85	板目		
104	26	3区	12層下面	施設材	その他の 不明	—	スギ	186.0	4.3	3.2	板目		
105	26	2区	塔壁内 12.5F	施設材	その他の 不明	—	スギ	118.9	3.5	1.0	板目		

第8表 出土木製品観察表

番号	画面番号	区	遺構	分類群	整理名	整理 編分名1	整理 編分名2	整理	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取	備考
106	28	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(58.7)	10.4	2.6	板目	
107	28	2区	12層下部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セナギ属	(18.2)	4.6	1.0	芯材	
108	28	1-3区	10層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(10.0)	2.8	1.7	板目	
109	28	1-2区	13層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(28.9)	2.0	2.0	板目	
110	28	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(18.8)	3.7	1.5	板目	
111	28	4区	漆瓦 (3層相当)	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	38.3	2.8	1.1	板目	
112	28	2区	漆物集中 13層上面	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(25.3)	1.6	1.3	板目	
113	28	3区	12層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セワタ	(21.1)	6.25	1.7	芯材	
114	27	2区	稻坪上 10～11層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(44.9)	2.3	1.2	板目?	
115	27	1-2区	13層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	カヤ	(36.9)	2.0	1.7	芯材	
116	27	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(36.7)	3.0	1.4	板目	
117	27	1-2区	12層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(32.7)	2.6	1.1	板目	
118	27	2区	漆物集中 12下层	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(36.3)	2.7	1.1	板目	
119	27	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	40.4	3.7	1.6	板目	
120	27	3区	12層最下部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セノキ	33.1	(3.85)	1.13	板目	
121	27	2区	15～16層最上部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(36.9)	3.0	4.13	板目	
122	27	2区	木製品集中央 17～18層最上部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(44.0)	6.15	4.7	板目	炭化
123	28	2区	12層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	65.5	6.2	1.8	板目	
124	28	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	25.1	7.3	1.25	板目	
125	28	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	カヤ	(25.8)	6.8	1.1	漆灰目	
126	28	2区	13層最下部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(24.5)	9.4	1.2	板目	
127	28	2区	木製品集中央 16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セノキ	(21.0)	4.3	1.1	板目	
128	28	2区	木製品集中央 15～16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	スギ	(43.2)	10.0	2.5	板目	
129	28	2区	稻坪上部	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セワタ	(27.8)	8.5	1.5	板目	
130	28	2区	木製品集中央 16層	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セノキ	(25.5)	8.7	1.1	板目	
131	28	2区	12層上面	施設材 ・器具材	その他の ・不明	—	—	セノキ	27.2	7.0	0.9	板目	
132	28	2区	木製品集中央 15～16層	土木材	松	—	—	スギ	107.4	3.5	1.7	板目	天井構造に軸用?
133	29	2区	木製品集中央 15～16層	土木材	松	—	—	スギ					

第8表 出土木製品観察表

番号	器皿 番号	区	遺構	分類群	遺構名	器種 種分名1	器種 種分名2	容積	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取	備考
134	29	3区	13層	土木材	杭	—	—	スギ	39.5	4.7	3.8	板目	
135	29	2区	木製品底中央 15～16層	土木材	杭	—	—	スギ	54.8	3.25	2.3	板目	炭化
136	29	1-1区	11層	土木材	杭	—	—	イヌマキ箆	114.8	3.2	3.4	芯材	
137	29	1-2区	遺構外 15～16層	土木材	杭	—	—	サワラ	156.9	7.2	6.6	芯材	
138	29	1-1区	壁内 15～16層	土木材	杭	—	—	アカメガシ	134.4	7.1	3.2	芯材	
139	29	2区	Tv内 14～15層	土木材	杭	—	—	スギ	66.1	4.1	7.7	板目	
140	29	2区	木製品底中央 15～16層	土木材	杭	—	—	コジイ	54.4	4.0	3.9	芯材	
141	29	2区	遺構外 15～16層	土木材	杭	—	—	スギ	96.9	2.5	1.7	板目	
142	29	2区	木製品底中央 15～16層	土木材	杭	—	—	スギ	93.3	6.5	3.5	板目?	
143	29	1-1区	14層	土木材	杭?	—	—	スギ	129.3	1.95	1.6	板目	炭化
144	29	2区	木製品底中央 15～16層	土木材	杭	—	—	スギ	115.3	10.7	4.1	板目	
145	29	2区	壁内 12層	土木材	杭	—	—	スギ	147.0	2.9	5.8	板目	
146	30	2区	1号壁時 柱頭構築上②					スギ	118.7	3.0	2.2	板目	
147	30	1-2区	12層	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	38.6	3.9	1.9	板目	
148	30	1-2区	遺構外 13.5層下部	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	131.25	5.7	2.3	板目	
149	30	2区	木製品底中央 15～16層	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	53.9	11.05	4.1	板目	炭化
150	30	1-2区	12層	用途不明 品	その他 ・不明	—	—	スギ	145.25	9.65	3.4	板目	
151	30	2区	木製品底中央 15～16層	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	153.27	6.1	1.37	板目	
152	30	2区	疑似壁時基層	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	127.3	1.5	1.0	板目	
153	30	1-1区	14層	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	146.21	2.3	1.65	板目	炭化
154	30	2区	木製品底中央 15層下部	用途不明 品	その他 ・不明	その他 ・不明	—	スギ	138.6	2.05	1.55	板目	
155	30	1-1区	11層上面	用途不明 品	その他 ・不明	—	—	ウバメガシ	131.61/ 182.71	5.3/4.25	2.7/2.2	芯材	炭化
156	30	2区	木製品底中央 15～16層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	イヌマキ箆	172.35	3.4	3.4	芯材	
157	30	2区	木製品底中央 15～16層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	144.43	3.5	3.0	板目	炭化
158	31	2区	12層上面	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	126.5	2.0	1.8	板目	
159	31	2区	壁時層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	106.57	3.8	2.3	板目	
160	31	2区	木製品底中央 15～16層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	133.0	2.6	1.7	板目	
161	31	1-2区	壁時層 12.5層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	イヌマキ箆	125.9	3.45	3.35	芯材	

第8表 出土木製品観察表

番号	面番 番号	区	遺構	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	形種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	本数	備考
362	31	3区	昭和上 10~11層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	138.6	5.7	2.7	枚目	
363	31	1-3区	13層上面	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	134.4	4.1	1.95~ 2.5	枚目	右側面コゲあり
364	31	2区	16層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	スギ	136.11	4.3	1.8~3.3	枚目	
365	31	2区	昭和下10層	施設材 器具材	その他 ・不明	—	—	イヌマキ属	138.11	2.9	2.4	芯材	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
R2	1-1	14層	カヤ	土木具	杭				90	4	4
R5	1-1	14層	スギ	土木具	杭	杭?			45	5	2
R14	1-1	昭和1 盛土内	イヌマキ属	その他	加工材				65	6	5
R16	1-1	昭和1 盛土内	ツヅ属 西端管束属	その他	井加工材	芯打ち材			48	14	12
R18	1-1	14層	スギ	その他	加工材	分割材			43	11	2
R19	1-1	14層	スギ	その他	加工材				77	6	4
R24	1-1	昭和1 盛土内	カヤ	構造部材					286	14	7
R27①~⑤	1-1	昭和1 盛土内	コジイ	土木具	杭	杭?			42	4	4
R28	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			薄板	19	4	0.5
R29	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			薄板	94	6	0.5
R30	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			板状	30	4	0.5
R31	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			薄板	67	4	0.5
R32	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材	?			34	8	3
R33	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材	?			26	4	1
R34	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			薄板	61	5	0.5
R35	1-1	昭和1 盛土内	スギ	その他	加工材			薄板	63	6	0.5
R37	1-1	昭和1 盛土内	イヌマキ属	その他	加工材			薄板	64	5	0.5
R40①~⑩	1-1	昭和1 盛土内	コジイ	土木具	杭				103	4	3
R1	2	昭和1層	イヌマキ属	その他	加工材				49	4	2.8
R2	2	14層上部	スギ	その他	加工材				24	4	0.3
R3	2	14層上部	スギ	その他	加工材				27	2	1.3

第9表 出土木製品一覧表

取上 No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
W4	2	9層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	84	4	1.7	
W6	2	14層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3	1	
W7	2	13a層	スギ	その他	加工材	分割材	無材	72	5	2.5	
W9	2	14層上部	スギ	その他	加工材	分割材		21	2	2	
W10	2	14～15層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3	1.8	
W11	2	14層上面	スギ	その他	加工材			27	2	1.5	
W12	2	14層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42	4	1	
W13	2	13b層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	62	4	1.5	
W14	2	13b層下部	スギ	その他	加工材	分割材	薄板状	27	4	0.3	
W16	2	13b層下部	スギ	その他	加工材			23	2	1.8	
W17	2	14～15層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	40	6	0.8	
W20	2	14層上面	スギ	その他	加工材	分割材		37	4	1	
W22	2	13b層下部	スギ	その他	加工材	分割材	角状木製品	42	4	3	
W23	2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材		17	3	1.5	
W25	2	14層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	3	1.5	
W26	2	14～15層	ナリワ	土木具	杭			53	9	5.8	
W27	2	昭和町岬？下部	スギ	その他	加工材	分割材	用途不明	17	2	1	
W31	2	昭和町横坂土①	イヌマキ属	その他	加工材	分割材		38	4	2.2	
W32	2	17b層最上部	スギ	その他	加工材	分割材		27	5	2.2	
W33	2	17b層最上部	スギ	その他	加工材	分割材		18	3	2	
W34	2	17b層最上部	イヌマキ属	その他	非加工材			25	3		
W35	2	17b層上部	ヒノキ科被皮	その他	加工材	分割材		23	4	0.5	
W36	2	17b層上部	スギ	その他	加工材	分割材		19	2	0.4	
W37	2	17b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	15	4	0.3	
W38	2	15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		10	2	0.4	
W40	2	15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状加工品	20	3	2.5	
W42	2	昭和町横坂土	スギ	その他	加工材	分割材	板状	25	5	0.3	
W43	2	17b層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	4	2.7	

第9表 出土木製品一覧表

取上 No.	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
844	2	17b 層上部	スギ	その他	加工材	分割材		17	3	0.3	
846	2	15~16層	ハンノキ属 +シャブレ属	その他	加工材	分割材	棒状	108	3	2.5	
847	2	17b 層最上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状?	37	11	5.5	
848	2	17b 層	スギ	その他	加工材	分割材		24	5	3	
850	2	町野内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	24	4	1	
853	2	町野構造土2層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	34	3	1.5	
854	2	町野層16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	107	5	1.5	
855	2	15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	角棒状	15	2	0.9	
856	2	15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	73	9	6.5	
857	2	15~16層	セナガ属	その他	加工材	分割材	加工木	125	3	2.3	
858	2	15~16層	ムクロジ	その他	加工材	分割材	棒状	27	2	0.5	
863	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	12	3	0.5	
864	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	17	6	0.3	
865	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	19	3	0.6	
866	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	24	4	0.8	
868	2	木製品集中区 15~16層	ヨクイ	その他	加工材	分割材	棒状	83	4	3.7	
871	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	6	1	
873	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	20	6	0.5	
874	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	43	6	0.5	
875	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	21	2	1.5	
876	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	45	5	1	
877	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	17	3	0.5	
878	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	31	5	1	
879	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	287	5	1.2	
880	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木	26	3	1.7	
882	2	木製品集中区 15~16層	コナラ属	その他	加工材	分割材		8	3	1.8	
884	2	木製品集中区 15~16層	スギ	建築部材			建築材?	50	6	5.5	
885	2	木製品集中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	6	1.2	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
R97	2	木製品龜中区 15~16層	ナツラ	その他	加工材	分割材		50	4	2.1	
R98	2	木製品龜中区 15~16層	ムラサキシキブ 風	その他	加工材	分割材	加工木 板?	87	4	3.5	
R99	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		37	4	1	
R100	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	2	1	
R101	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	建築部材				92	3	2.7	
R104	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		37	3	1.5	
R105	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	建築部材			建築材?	119	6	2.5	
R106	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	建築部材			建築材?	144	6	3.5	
R107	2	木製品龜中区 15~16層	イスマキ属	その他	加工材	分割材	棒状材	122	3	3	
R108	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	3	0.7	
R109	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	建築部材				67	8	1.2	
R110	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		46	4	1.2	
R101	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	2	0.6	
R102	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		29	8	1.2	
R104	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		42	2	2	
R105	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		74	29	8	
R106	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		25	3	1	
R107	2	木製品龜中区 15~16層	ナツラ	その他	加工材	分割材		177	4	1.6	
R109	2	木製品龜中区 15~16層	ナガキ	その他	加工材	分割材	棒状	165	5	3.5	
R111	2	木製品龜中区 15~16層	エゴノキ属	その他	加工材	分割材	棒状	181	5	4.5	
R112	2	木製品龜中区 15~16層	ナガキ	その他	加工材	分割材	棒状	233	4	3.5	
R113	2	木製品龜中区 15~16層	コナラ属	その他	加工材	分割材	棒状	85	4	4	
R114	2	木製品龜中区 15~16層	エゴノキ属	その他	加工材	分割材	棒状	207	4	3.6	
R115	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		18	3	1.5	
R116	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		14	3	2.6	
R117	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		12	3	0.5	
R118	2	木製品龜中区 15~16層	クリ	その他	加工材	分割材		71	9	4	
R119	2	木製品龜中区 15~16層	スギ	その他	加工材	分割材		43	4	1.8	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
W126	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	26	2	0.4	
W132	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	81	8	1.5	
W133	2	木製品龜中区 15～16層	コナラ属	その他	加工材	分割材	棒状材	133	4	3.8	
W135	2	木製品龜中区 15～16層	クスノキ科	土木具	板			122	4	4.2	
W138	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	加工木材	39	3	2.2	
W141	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	220	11	2	
W142	2	木製品龜中区 15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材	板状	79	11	3.3	
W143	2	木製品龜中区 15～16層	クスノキ科	その他	加工材	分割材	棒状	68	4	3.2	
W147	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		48	4	1.8	
W148	2	木製品龜中区 15～16層	サワラ	その他	加工材	分割材		17	2	1	
W149	2	木製品龜中区 15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	25	3	0.5	
W150	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	5	2	
W151	2	木製品龜中区 15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	34	3	1	
W152	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42	5	1.8	
W153	2	木製品龜中区 15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	60	3	1.4	
W154	2	木製品龜中区 15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	21	2	0.4	
W155	2	木製品龜中区 15～16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	19	2	0.3	
W157	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状加工具	70	8	4.2	
W163	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		18	4	0.3	
W164	2	木製品龜中区 15～16層	スギ	その他	加工材	分割材		35	7	1.5	
W168	2	木製品龜中区 16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	27	2	1.4	
W170	2	木製品龜中区 16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	4	1.7	
W171	2	木製品龜中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1.5	
W173	2	木製品龜中区 16層下部	クスノキ科	その他	加工材	分割材	棒状	130	4	3.5	
W174	2	木製品龜中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24	3	1	
W175	2	木製品龜中区 16層	セナガ属	その他	加工材	分割材		36	7	5.5	
W176	2	木製品龜中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1	
W177	2	木製品龜中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	4	1.4	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
W178	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	11	3.2	
W180	2	15～16層	スギ	土木具	杭		板状	96	4	3.5	
W182	2	木製品集中区 17a層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	26	3	1.7	
W183	2	木製品集中区 17a層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	59	3	2.3	
W185	2	木製品集中区 16層	チカキ	その他	加工材	分割材	板状	148	4	3.2	
W186	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	64	4	1.5	
W188	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11	5	1.7	
W189	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	166	3	1.5	
W190	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	165	3	1	
W191	2	木製品集中区 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	193	3	1.2	
W192	2	木製品集中区 16層 16層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	96	9	2	
W193	2	木製品集中区 17b層	チワラ	その他	加工材	分割材	板状	82	45	23	
W194	2	調査区西側Tr 内 16層	イヌマキ属	その他	加工材	分割材	板状	42	2	1.7	
W195	2	調査区西側Tr 内 16層	クスノキ科 C	その他	加工材	分割材	板状	68	3	2.3	
W196	2	調査区西側Tr 内 16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	4	1.5	
W197	2	調査区西側Tr 内 16層	ヒノキ	その他	加工材	分割材		37	2	0.8	
W198	2	調査区西側Tr 内 16層	スギ	その他	加工材	分割材		13	4	2	
W199	2	調査区西側Tr 内 16層	スギ	その他	加工材	分割材		15	4	0.5	
W200	2	調査区西側Tr 内 16層	スギ	その他	加工材	分割材		19	3	0.5	
W201	2	調査区西側Tr 内 15	スギ	その他	加工材	分割材		14	1	1.2	
W202	2	調査区西側Tr 内 砂層	イヌマキ属	その他	加工材	分割材	板状	43	2	2	
W203	2	木製品集中区東側 断面咲野積埴土②	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	5	0.5	
W204	2	木製品集中区東側 断面咲野積埴埴土②	スギ	その他	加工材	分割材		10	3	0.5	
W205	2	調査区西側Tr 内 16層	イヌマキ属	土木具	杭		板状	33	6	3	
W206	2	調査区西側Tr 内 16層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	3	0.5	
W207	2	調査区西側Tr 内 16層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	7	3	0.9	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
R208	2	調査区西側Tr 内 砂層	スギ	その他	加工材	分割材		7	2	1	
R209	2	調査区西側Tr 内 16層	スギ	その他	加工材	分割材		7	2	0.3	
R210	2	調査区西側Tr 内 砂層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	8	1.5	
R211	2	調査区西側Tr 内 16層最下部	スギ	その他	加工材	分割材		23	5	0.4	
R212	2	調査区西側Tr 内 砂層	サカキ	土木具	杭		杭状	53	4	3.5	
R214	2	駿府城跡内	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26	2	1	
R216	2	木製品集散区 16層最下部	クスノキ科	その他	加工材	分割材	棒状	91	3	3.2	
R217	2	道構外17b層	ヒノキ	その他	加工材		原材加工有	137	71	40	
R303	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24	2	0.3	
R307	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	63	4	3	
R310	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	19	0.5	
R311	1-2	駿府城	ヒノキ	その他	加工材	分割材		96	9	8.5	
R312	1-2	駿府城	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	78	4	1.2	
R313	1-2	13b層	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	77	5	4	
R314	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	32	2	1.2	
R316	1-2	13b層	ヒノキ	その他	加工材	分割材		29	2	1	
R318	1-2	13b層	スギ	土木具	杭		杭状	58	4	2.6	
R320	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	49	2	1.7	
R321	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材		11	3	0.5	
R328	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	51	7	1.7	
R329	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	1.7	
R330	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	38	5	1.7	
R332	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	31	5	1.1	
R333	1-2	14層	コジイ	その他	加工材	分割材	棒状	27	3	3.5	
R334	1-2	13b層	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	48	2	2	
R335	1-2	駿府城13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	3	0.3	
R337	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	13	5	1	
R338	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	2	
R340	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	6	0.5	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
R341	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	8	0.5	
R342	1-2	13b層最下部	ヒノキ	その他	加工材	分割材		26	2	1.2	
R343	1-2	13b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	32	3	1	
R344	1-2	13b層最下部	スギ		建築部材			34	6	4	
R345	1-2	13b層最下部	サカキ	その他	加工材	分割材	棒状	40	4	2.8	
R347	1-2	明畔上13b層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	3	1.5	
R349	1-2	明畔内	ヒノキ属	その他	加工材	分割材	板材	11	3	0.3	
R350	1-2	明畔最下部	ヒノキ	その他	加工材	分割材		19	1	0.9	
R351	1-2	明畔内(底立)	スギ	その他	加工材	分割材	板材	33	7	0.8	
R352	1-2	明畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	34	2	0.5	
R353	1-2	明畔裡	スギ	その他	加工材	分割材	板材	6	3	0.3	
R354	1-2	明畔下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	27	4	0.5	
R355	1-2	明畔裡下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	12	3	0.3	
R356	1-2	明畔裡下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	17	2	1.3	
R357	1-2	明畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	21	4	1.1	
R358	1-2	明畔内	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	23	2	1.1	
R359	1-2	明畔最上部	ヤナギ属	土木具	杭			25	4	5	
R362	1-2	明畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	29	6	0.9	
R363	1-2	明畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10	2	0.3	
R364	1-2	明畔最下部	スギ	土木具	杭			72	10	7.5	
R366	1-2	遺構外13b層 最下部	スギ	その他	加工材	分割材		10	4	0.3	
R369	1-2	遺構外17b層	スギ	その他	加工材	分割材	板材(杭型)	98	4	1.5	
R370	1-2	明畔内	スギ	その他	加工材	分割材	板材	24	4	1	
R371	1-2	明畔内15～16層 最下部	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	22	3	1	
R372	1-2	明畔裡17b層 最上部	スギ	その他	加工材	分割材	加工材	27	2	1	
R373	1-2	遺構外15～16層	ナワラ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	1.3	
R375	1-2	遺構外13b層 最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板材	30	4	2.5	
R376	1-2	明畔裡部	スギ	その他	加工材	分割材	加工製品	12	2	0.5	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
K377	1-2	昭廟内	スギ	その他	加工材	分割材	加工板材	24	4	0.5	
K379	1-2	造構外 14 層上面	マタタビ属	農耕土木具	田下駁	円錐型田下駁	仲				K378 とセット
K380	1-2	造構外 15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	29	2	2	
K382	1-2	造構外 15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	13	2	0.5	
K383	1-2	造構外 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	3	2.4	
K384	1-2	造構外 15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	8	2	1.5	
K385	1-2	昭廟内 昭廟構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18	3	1.6	
K386	1-2	昭廟内 昭廟構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	2	1.5	
K387	1-2	昭廟内 昭廟構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38	3	1.5	
K388	1-2	昭廟内 昭廟構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	板状	34	4	1.5	
K389	1-2	造構外 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	3	0.3	
K390	1-2	造構外 14 層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材	棒状	4	2	1	
K391	1-2	造構外 15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	2	1	
K392	1-2	造構外 17b 層	スギ	土木具	杭				102	17	12
K393	1-2	造構外 17b 層	ヒノキ科細皮	その他	加工材	分割材	板状	75	9	9.5	
K394	1-2	昭廟内 昭廟構築土②	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	5	0.7	
K395	1-2	造構外 15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材		12	5	2.3	
K396	1-2	昭廟内 17b 層 最上部	スギ	その他	加工材	分割材		41	5	0.7	
K397	1-2	15 ~ 16 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	45	3	1.7	
K398	1-2	昭廟内 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	4	2.5	
W400	1-2	昭廟内 15 ~ 16 層 最下部	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	24	2	1.8	
W401	1-2	昭廟内 15 ~ 16 層 最下部	マタタビ属	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	2.4	
W402	1-2	造構外 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	11	2	0.3	
W403	1-2	造構外 17b 層 最上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	2	0.9	
W404	1-2	昭廟内 17b 層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	4	0.4	
W1	1-3	7 ~ 9 層	スギ	土木材	杭		杭状	45.5	5	3.5	
W3	1-3	10 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	3	1.2	
W4	1-3	10 层	スギ	土木材	杭		杭	46.5	3.5	1.8	
W5	1-3	10 ~ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	50	2.5	1.8	
W6	1-3	10 ~ 11 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	31	2.5	1.5	
W7	1-3	11 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	4	0.6	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
W8	1-3	11層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38.5	4	0.5	
W9	1-3	9~11層	スギ	木材	杭		杭	53	3	3	
W10	1-3	10~11層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	31.5	2.1	1.2	
W11	1-3	10~11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	17.5	2.5	0.5	
W12	1-3	10~11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	2.5	0.5	
W13	1-3	8~9層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	34.7	1	0.5	
W14	1-3	8~9層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	122.5	2.5	1	
W15	1-3	10層	ヤナギ属	その他	加工材	分割材		30	4	3.5	
W16	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	96	5.5	1	
W17	1-3	7層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22.5	2.5	1	
W18	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	11	2	1.2	
W19	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18.2	2	0.8	
W20	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	9	1.5	0.5	
W21	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	14.5	2.2	0.5	
W22	1-3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	18.2	2	0.8	
W23	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	3.2	0.5	
W24	1-3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	2	2	
W25	1-3	12層上部	スギ	その他	著加工材		原材?	40	18	17	
W26	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	19.5	5	1	
W27	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	39	3	0.8	
W29	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17.5	2	1	
W30	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10.5	3.5	0.5	
W31	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26.5	2.5	1.5	
W32	1-3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	33	4	2.5	
W33	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	2	1.5	
W35	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	55	7	2.5	
W36	1-3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	15.5	5	0.5	
W37	1-3	7~9層	チカラ	その他	加工材	分割材	棒状	35	3	2	
W38	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	119	5	1	
W39	1-3	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2.2	1.8	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
#40	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	44.5	3.5	1	
#41	1-3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	92	3	1	
#42	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	3.7	0.4	
#43	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	26	2	1	
#44	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	1.5	1.2	
#45	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	3.5	0.5	
#46	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.7	2	0.5	
#47	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	47.5	2.5	0.2	
#48	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	4	0.5	
#49	1-3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	3.8	0.3	
#50	1-3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	2.9	1.5	
#51	4	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	13	2.5	0.3	
#52	4	12層上面	ヤナガ属	その他	加工材	分割材		9	3	1.2	
#53	4	擾乱?	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	51.5	3	2	
#54	4	擾乱?	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28.5	5	3.5	
#56	4	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11	2	0.3	
#59	4	擾乱(12層相当)	ツガ属	その他	加工材	分割材	板状	21.5	2.5	0.4	
#60	4	擾乱(12層相当)	マツ属 西高曾東亞風	その他	加工材	分割材	板状	9.5	3	0.3	
#61	4	擾乱(12層相当)	チワラ	その他	加工材	分割材	板状	7.5	3	0.3	
#62	4	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	47	6.5	3.5	
#63	4	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	40	6	2	
#64	4	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	41.5	3.8	1	
#66	3	明畔根	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	2	1	
#67	3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	24.5	2	0.3	
#68	3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	39	6.2	3.3	
#69	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16.5	2.7	2	
#71	3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28.5	2.5	0.5	
#73	3	明畔真上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	2.5	0.2	
#75	3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21.5	2	0.5	
#76	3	12層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	41.5	2	0.7	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w77	3	昭和上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	42.5	3.5	0.5	
w78	3	昭和表上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	46.5	6	0.3	
w79	3	昭和上	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	10	0.3	
w81	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	30	2	1	
w82	3	昭和表上	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	37.2	2.3	1.5	
w84	3	12層上部	スギ	土木材	杭		杭	82.5	3.5	2.5	
w85	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.5	7	2.5	
w86	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	28	4.2	1.5	
w87	3	昭和表	ヤツラ	その他	加工材	分割材	板状	7	1.5	0.8	
w88	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	40.5	2	1	
w90	3	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11.5	3	1.5	
w91	3	12層上部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	1.5	0.8	
w92	4	12層上面	スギ	土木材	杭		杭	42.5	4.5	2.4	
w94	4	12層	タマノミズキ	その他	加工材	分割材	棒状	137	9	7	
w95	4	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	17.5	4.7	1	
w96	4	12層底部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	4.5	2	
w98	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3.7	1	
w100	3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	3	1.8	
w101	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	60	4.3	3.5	
w102	3	13層上面	スギ	土木材	杭		杭	71	3.5	3.3	
w103	3	13層上面	アカガシ葉属	土木材	杭		杭	142	11.5	6	
w104	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	35	4	1.5	
w105	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	23	4.5	1.5	
w106	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	37	3.7	1	
w107	3	13層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	47	2	1.5	
w109	3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	93	12	2.5	
w112	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	26	5	1	
w113	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3.5	1	
w114	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	22	3.5	1.3	
w115	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	29	4	3.3	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w116	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	63	五五	1.5	
w117	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	45.5	2	1	
w118	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	85	2	0.8	
w119	3	咲岬上部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	30	1.8	1.2	
w121	3	咲岬上層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	38.5	2	1.5	
w122	3	咲岬内	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	23.5	2	1	
w124	3	咲岬根	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21.5	2.5	1	
w125	3	咲岬下 (13層上面)	チワラ	その他	加工材	分割材	棒状	14.5	1	1	
w127	3	12層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	10.5	3	0.5	
w129	3	咲岬下層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	9.5	1.5	1	
w130	3	咲岬上部	スギ	その他	加工材	分割材	不明木製品	14.5	6	4.5	
w131	3	咲岬内	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18.6	6.2	1.2	
w133	3	13層上面 (咲岬上面)	チワラ	その他	加工材	分割材	板状	9	3.3	1.5	
w134	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	5.5	1	
w135	3	咲岬根(12層)	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	17	2	1.5	
w136	3	咲岬根	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	3	0.8	
w137	3	咲岬中(12層)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	12	4	0.4	
w138	3	咲岬基(12層)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	25	3.5	2	
w139	3	咲岬下(12層)	スギ	その他	加工材	分割材	不明木製品	31.5	6	4	
w140	3	13層下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	47.5	4	2	
w141	3	12層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	21	3	1	
w144	3	咲岬内(12b層)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	13	5.6	2.5	
w148	3	咲岬内 (12b層下部)	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	36	2.5	2	
w149	3	咲岬内(12b層)	スギ	土木材	杭		杭	107	4	2	
w150	3	咲岬内 (12b層下面)	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	43.5	2.2	2.2	
w151	3	咲岬内(12b層)	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	44	3.5	1.2	
w152	3	咲岬内 (12b層下面)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16.5	3.5	0.8	
w153	3	咲岬内 (12b層下面)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	21	4	1.6	
w155	3	咲岬内 (12b層下面)	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	25.5	2.5	0.5	

第9表 出土木製品一覧表

取上 №	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w156	3	昭野内 (12b層下部)	ナワラ	その他	加工材	分割材	棒状	15.5	2.5	0.6	
w161	3	昭野(12b層)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	8.5	3	0.4	
w162	3	昭野(12b層下部)	ナガキ	土木材	杭		杭	20.5	4.5	3.8	
w165	3	遺物集中13層 上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	10	5	1	
w166	3	遺物集中13層 上面	スギ	土木材	杭		杭?	32	4	4	
w167	3	遺物集中13層 上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	70	4	4	
w169	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	49	2	2	
w172	3	遺物集中13層 上面	アカガシ属	その他	加工材	分割材	棒状	63	3	3	
w173	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	2	1.5	
w174	3	遺物集中13層 上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	49	6	5	
w177	3	昭野根部13層 上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	116	11	1	
w178	3	13層上面	スギ	その他	加工材	分割材	板状	46	8	5	
w179	3	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	29	3	1	
w180	3	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	34	5	2	
w183	3	13層上面	アカメガシワ	土木材	杭		杭	35	4	2	
w184	3	12層最下層	スギ	建築部材				52	5	4	
w185	3	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	65	9	2	
w186	3	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	166	6	2	
w187	3	12層最下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	6	2	
w188	1-3	西壁土層断面6層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	14	5	1	
w199	4	西壁土層断面 12b層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	22	1	1	
w191	3	昭野内12b層	ヒノキ	その他	加工材	分割材	板状	40	5	3	
w194	3	昭野(13層上面)	スギ	その他	加工材	分割材	板状	30	4	1	
w195	3	昭野内12b層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	33	12	2	
w196	3	10~11層	スギ 樹材	その他	加工材	分割材	棒状	10	2	1.5	
w197	3	昭野上10~11層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	52	2	0.5	
w200	3	昭野構築土	イヌツバキ属	土木材	杭		杭	37	4	4	
w201	3	昭野(12a層)	ヒノキ	土木材	杭		杭	23	4	3	
w203	3	12a層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	16	2	1	

第9表 出土木製品一覧表

取上 施	区	出土位置	樹種	分類群	器種名	器種 細分名1	器種 細分名2	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
w204	3	10～11層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	10	1	1	
w205	3	咲岬内 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	18	2.5	1	
w206	3	咲岬内 12b 層	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	28	3	1	
w207	3	12b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	20	1	0.5	
w210	3	遺物集中 12 層 下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	27	5	2	
w211	3	12a 最下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	31	8	1	
w212	3	12a 下層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	38	3	2	
w213	3	12b 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	45	5	3	
w214	3	12a 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	板状	16	2	1	
w215	3	12a 層下部	スギ	その他	加工材	分割材	棒状	36	3	2	
w216	3	12a 層	スギ	その他	加工材	分割材	板状	11	3	1	
w217	3	13 層	サカキ	土木材	杭		杭	58	4	4	
w218	3	13 层	スダジイ	土木材	杭		杭	65	5	5	

第6章 自然科学分析

第1節 上土遺跡出土木材の樹種

鈴木三男

静岡市葵区立石地内の上土遺跡から平成29年度～令和元年度の発掘調査で出土した木材577点の樹種を調べた。

上土遺跡は静岡平野北部の賤機丘陵と南沼上丘陵の間の麻機低地に位置する水田地帯にあり、現標高は約7mである。この地域一帯は奈良時代～平安時代の条里制水田であったことが周辺の遺跡調査で明らかになっており、平成29年度～令和元年度の発掘調査でも大畦畔、小畦畔に区画された水田が検出された。出土した木材の多くはこの大畦畔を安定したものとするために打ち込まれ、組み込まれた木材で、多くは木製農具や建築部材等の転用材である。

これらの木材の樹種を調べた結果、静岡県内の弥生時代～中世の他の遺跡と同じようにスギ材の圧倒的多用が確認された。以下に同定された樹種を記載するとともに上土遺跡における用材について若干の考察を試みた。

I. 同定された樹種

1. マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxyylon* マツ科

写真図版 I-1a-c (SZ-17329)

水平・垂直の樹脂道を持つ、年輪が明瞭な針葉樹材で、早材部、晩材部とも幅広く、早材から晩材への移行はゆるやかである。垂直樹脂道の多くは晩材部にある。樹脂細胞は無い。放射組織は単列と効錐形があり、放射柔胞、放射仮道管、それに水平樹脂道を囲む薄壁の分泌細胞からなる。放射組織の上下に1～数層の放射仮道管があり、その細胞内壁には歯牙状肥厚があるが保存状態が十分でなくその形状はよく観察できない。放射仮道管の有縁壁孔は軸方向仮道管の有縁壁孔より小さい。放射柔組織の水平壁は平滑で薄く、分野壁孔は大型の窓状で1分野に1個あり、分野のほぼ全域を占める。

垂直・水平の樹脂道を持ち、窓状の分野壁孔を持つことからマツ科のマツ属であることが分かり、分野壁孔が分野の大部分を占め、放射仮道管の内壁に歯牙状突起を持つことから、複維管束亜属であることが分かる。静岡県地方に分布する複維管束亜属には丘陵部に普通なアカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. と沿岸部に多いクロマツ *P. thunbergii* Parl. があるが、両者の区別点である放射仮道管内壁の歯牙状突起の形態が良く観察できないため、このいずれとも決めることが出来ないので「複維管束亜属」とした。

アカマツは本州から九州までの低地から山地にかけて広く分布する常緑の針葉樹で、痩せた土地、陽光地、二次林に多い。幹径1m以上、樹高30mの大木となる。静岡県内にも海岸近くから山地帯までもっとも普通に見られる針葉樹の一つで、特に二次林に多い。材は木理通直、肌目は粗く、心材の保存性は良く、特に水湿に強い。大材が得られることもあり、建築材（特に基礎、土台回り、棟木など）、土木用材、器具材などに幅広い用途があるほか、坑木などの特用がある。クロマツは塩害に強いことから沿岸部に多く、特に近世以降は砂浜の緑化によく用いられている。樹性、材質等はアカマツとほとんど同じで、同じように利用される。本遺跡出土材は加工材、非加工材とされるもの各1点である。なお、「上土遺跡・岳美遺跡」（静岡県埋蔵文化財センター 2017）にはアカマツが報告されている。

2. ツガ属 *Tsuga* マツ科

写真図版 I-2a-c (SZ-17616)

水平・垂直の両樹脂道を欠く針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で、晩材部は一般に幅は狭い。軸方向要素はほとんど仮道管のみからなるが、年輪界付近にまれに樹脂細胞が混じる。放射組織は単列、背はあまり高くなく、放射柔細胞と放射仮道管からなり、後者は放射組織の上下縁にあり、ほぼ1細胞層である。放射仮道管の有縁壁孔は小さく、内壁に錐歯状突起やらせん肥厚はなく、なめらか。樹脂細胞と放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の单壁孔を持つ、いわゆるモミ型壁孔である。分野壁孔は小さいトウヒ型一ヒノキ型で、1分野2-6個程度ある。以上の形質からマツ科のツガ属の材と同定した。

ツガ属は本州から九州の山地帯にツガ *Tsuga sieboldii* Carr.、温帶上部から亜高山帯にかけてコメツガ *T. diversifolia* (Maxim.) Masters. が分布している。静岡県でも標高500mほどの山地にはツガがあり、富士山や南アルプスなどの山岳地帯にはコメツガが分布している。いずれも樹高20m以上、幹径1mになる常緑高木で、いずれの材も木理通直で緻密、軽軟あるいはやや重硬で、建築材、各種器具材、土木材、バルブに用いられる。本遺跡出土材は加工材1点である。

3. イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

写真図版 I-3a-c (SZ-17410)

年輪が全く目立たない緻密な針葉樹材で、出土材の保存性は良い。早材から晩材への移行はとても緩やかで、晩材部は年輪界附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞は横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、ヒノキ科のような黒褐色の樹脂様物質を蓄積していないので、横断面では見つけにくい。樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、ヒノキ科のように数珠状に肥厚したり、マツ科のモミ型壁孔のようになることは無い。放射組織は背の低い単列で、放射柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキートウヒ型で、1分野あたり1-2個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

我が国のイヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambert と紀伊半島南部より南西に分布するナギ *P. nagi* (Thunb.) Zoll. et Moritzi の2種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布から本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。静岡県内の弥生時代～中世の遺跡からは他府県では例を見ない量のイヌマキ属の木材（多くは丸木弓や柱材）が出土している。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強く、建築材（柱、土台回り）によく使われたが、資源量が限られているので現在ではほとんど使われることはない。本遺跡出土材は垂木、杭、その他加工材など合計15点(2.6%)と比較的多い。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真図版 II-4a-c (SZ-17805)

出土材は多くの場合スギに比して色が淡く、明るい褐色を呈するのが一般的である。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。年輪は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは目立たない。仮道管はスギより細い。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に緩く集まって散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔細胞のみからなり、分野壁孔はスギより一回り小さい中型のヒノキートウヒ型で、1分野に1-2個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帶域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心大型の建築物

の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。本遺跡出土材は曲げ物側板、泥よけ、付け木のほか加工材合わせて24点(4.2%)で、スギに次いで多い樹種である。

5. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真図版 II-5a-c (SZ-17618)

ヒノキ、スギによく似た針葉樹材で、水平・垂直の両樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。年輪はヒノキより目立つがスギより目だたない。早材から晩材への移行はややゆるやか～やや急で、晩材部はやや多い少ない。仮道管はヒノキと同等で、スギより細い。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、1分野当たり普通2個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北南部から本州中部の山地帯上部(温帶)に広く分布する常緑高木で、樹高30m、幹径1mに達する。静岡県では北部山中に多い。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に強いので桶類に、また、匂いが無いので飯びつや箸に用いられる。ヒノキに比べ材質はやや劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は建築部材、付け木、加工材など18点(3.1%)でヒノキに次いで多い。

5'. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

仮道管がスギより細く、早材から晩材への移行がやや急な針葉樹材で、樹脂細胞の形態などからヒノキかサワラのいずれかと判断されたが、分野壁孔の保存が悪くそのいずれとも判断できなかったものである。出土材は加工材1点である。

6. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don ヒノキ科

写真図版 III-6a-c (SZ-17743)

保存性が良く、出土材は一般に黒褐色を呈する。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急、年輪が詰んだところでは急である。年輪幅は広いものから非常に狭いまでの変異があり、後者はかなり(樹齢数百年)の老齢木と推定される。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な单壁孔があるが、通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で1分野あたり通常2個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、ヒノキ科のスギの材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島までの全国の温帶～暖帯に広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、幹径1m以上、樹高30mを超える大木になり、大材が得易く、また、材は軽軟で割裂、切断がしやすく、加工が容易で、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。静岡県地方の弥生時代～中世の遺跡では大量のスギ材が出土するのが一般的だが、当遺跡の出土材も大部分(79.7%)がスギ材である。

6'. スギ 根材 *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don Root wood ヒノキ科

写真図版 III-7a-c (SZ-17879)

細い丸木で、仮道管、樹脂細胞、放射柔組織からなる針葉樹材である。年輪幅は狭く、早材部仮道管は数～10細胞、晩材部仮道管は1～2細胞で、早晚材とも幹材に比べて細胞径は大きく、壁は薄い。早材仮道管の放射壁の有縁壁孔はしばしば対列状に2列になる。分野壁孔は幹材よりやや大きくて、開口部の大きさに変異があり、ほぼスギ型である。放射組織の高さはほとんどが10細胞以下と低く、構成細胞は幹材に比べて大きく、背が高い。これらの形質からスギの根材と同定した。出土材は自然木であると推定される。なお、時代と用途は異なるが、秋田県、石川県などから縄文時代晚期のスギの根材を

使った編組製品が出土している。

6 ". ヒノキ科樹皮 Cupressaceae Bark ヒノキ科

写真図版 III-8a-c (SZ-17367)

一見、年輪が明瞭な針葉樹材のように見えるが、顕微鏡でよく観察すると、年輪のように見えたのは1細胞厚で接線方向に整列した纖維細胞—柔細胞—筋細胞—柔細胞—纖維細胞の層が繰り返した構造である。また、接線方向に連なる傷害樹脂道もある。これらの形質からヒノキ科の樹皮であると同定された。当遺跡ではヒノキ科ではヒノキ、サワラ、スギの3樹種が同定されているがこのいずれの樹皮も基本構造は全く同じであり、それぞれを区別することはできない。

7. カヤ Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc. イチイ科

写真図版 IV-9a-c (SZ-17332)

保存性の良い出土材で、木材組織はしっかりしている。年輪は目立たず、早材部には断面が方形の仮道管が整然と並び、晩材部の仮道管はやや細く厚壁となる。晩材部の量はわずかである。樹脂細胞ではなく、仮道管と放射柔細胞の2種類の細胞のみからなる。仮道管内壁には顯著ならせん肥厚があり、2-3本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり、背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは岩手県南部以南から九州屋久島の暖帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径1mを超える樹高は25m以上の大木となる。幹は直通で材の木理も直通、堅く粘りがあり、緻密で弹性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、耐朽性、保存性も高く、極めて優秀な針葉樹材である。神社、仏閣などの特別な建物の建築材、各種器具など実に多様な用途があるが、特に彫刻材として優れ、仏像や神像、木魚などの木製仏具に、また基盤、将棋盤などの特用がある。古代～近代にわたり、全国の寺院の木彫仏などに重用されている。本遺跡出土材は加工材4点である。

8. クスノキ科 C Lauraceae C type クスノキ科

写真図版 IV-10a-c (SZ-17433)

茶褐色を呈する出土材で保存性は比較的良い。断面が縦長の楕円形～円形の道管が単独あるいは2-3個、主に放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の最大接線径は90 μm 程度。道管の穿孔は單一と横棒が10本以下と数が少ない階段状穿孔が混在する。木部柔組織は周囲状で量は少ない。放射組織は異性、ほぼ2細胞幅で背は低い。木部柔組織と放射組織の直立細胞にやや大きくなっている油細胞がまれに混じる。これらの形質からクスノキ科のクスノキ以外の材であることがわかる。

クスノキ科には多くの属、種があるが、道管が大きく、多量の油細胞を持つクスノキ以外の材の基本構造は共通で互いによく似ている。静岡県に分布するクスノキ科の常緑高木にはヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Siebold ex Nakai、タブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc.、アオガシ(ホソバタブ) *Machilus japonica* Siebold et Zucc.、シロダモ *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz.、イヌガシ *Neolitsea aciculata* (Blume) Koidz.、バリバリノキ *Actinodaphne longifolia* (Blume) Nakai、カゴノキ *Actinodaphne lancifolia* (Siebold et Zucc.) Meisn.、落葉高木にはカナクギノキ *Lindera erythrocarpa* Makino、落葉低木にはクロモジ *Lindera umbellata* Thunb.、アブラチヤン *Lindera praecox* (Siebold et Zucc.) Blume、シロモジ *Lindera triloba* (Siebold et Zucc.) Blume、ヤマコウバシ *Lindera glauca* (Siebold et Zucc.) Blume、ダンコウバイ *Lindera obtusiloba* Blumeなどがある。これらのうちタブノキは道管の最大接線径が120 μm 前後になり、クスノキに次いで大きいことで区別できる。道管の最大接線径が100 μm 前後になるのはアオガシ、バリバリノキ、カゴノキ、カナクギノキがある。そしてこれらのうち木部柔組織の量が多くて、木部柔細胞と放射組織の

直立細胞に多数の油細胞を持つのはカゴノキのみであることからカゴノキは他の樹種から区別できる。

一方、道管の最大接線径が $100 \mu\text{m}$ 前後だが油細胞がまれにしか無いアオガシ、バリバリノキ、カナクギノキなどをここでは「クスノキ科A」とする。さらにダンコウバイ、アブラチャン、クロモジ、ヤマコウバシなどは道管の最大接線径が $60 \mu\text{m}$ 程度とクスノキ科の中では最も小さく、また油細胞も希なので、これらを「クスノキ科B」とする。

本項の出土材 (SZ-17433, 17453, 17471) の道管の最大接線径は $90 \mu\text{m}$ 程度で、油細胞は希であることから「クスノキ科A」、「クスノキ科B」のいずれとも区別が可能で、ヤブニッケイ、カナクギノキ、シロダモなどと一致するので、これを「クスノキ科C」として区別した。クスノキ科Cとしたものは杭、加工材の3点である。なお、ヤブニッケイ、カナクギノキ、シロダモなどのそれぞれを材構造で区別するのは現在は出来ていない。

9. クスノキ科D Lauraceae D type クスノキ科

写真図版 IV-11a-c (SZ-17437)

クスノキ科Cによく似た出土材で、道管の最大接線径は $70 \mu\text{m}$ 程度と小さく、油細胞は希であることからこれを「クスノキ科D」とした。静岡県地方に自生するクスノキ科ではイヌガシがこれに該当するが、一般に樹木の最大道管径には個体間、個体以内の部位などにより変異があるのが一般的で、クスノキ科B、クスノキ科C、クスノキ科Dに該当する樹種でも道管の最大接線径が $70 \mu\text{m}$ 前後の値を示すことは十分にあり得ることなので、本項出土材をイヌガシであると決めることは出来ない。出土材は加工材2点である。

10. ハンノキ属ヤシャブシ節 Alnus sect. Bifrucatus カバノキ科

写真図版 V-12a-c (SZ-17376)

複合した放射方向に長い楕円形の小管孔がほぼ均一に散在する散孔材で、管孔の大きさは年輪内ではなくとんど変化無く、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は $20 \sim 40$ 本程の横棒がある階段状、側壁の壁孔は小孔紋で密に交互状にある。木部柔組織は単細胞幅で接線状に連なる。散在状、放射組織は單列で同性、 $1 \sim 20$ 細胞高程度である。道管放射組織間の壁孔は小孔紋で交互状である。以上の形態からカバノキ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。静岡県地方では、伊豆半島の海岸部にオオバヤシャブシ *Alnus sieboldiana* Matsumura が、県内の丘陵、低山地にはヤシャブシ *A. firma* Siebold et Zucc. が、そして亜高山帯にはミヤマハンノキ *A. maximowiczii* Call. がある。材構造ではこれらの種を識別するのは困難だが、遺跡の立地から考えるとヤシャブシである可能性が高いと言える。ヤシャブシは東北地方南部以南の全国の山野に広く分布する樹高 $10 \sim 15$ m、幹径 30cm ほどの落葉高木で、典型的な陽樹で二次林に多い。材はやや堅硬で木理は緻密、旋作材、床柱、櫛材などの用途がある。本遺跡出土材は加工材1点である。

11. クリ Castanea crenata Siebold et Zucc. ブナ科

写真図版 V-13a-c (SZ-17428)

年輪のはじめに円～卵形の大道管が $1 \sim 3$ 層に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が周囲状仮道管や木部柔組織と共に集合して火炎状の紋をなす環孔材で年輪が明瞭である。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立帶状で、後者は晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で背は低い。道管～放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、柵状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島県までの温帯から暖帯に広く分布する落葉高木で、幹径 1m 以上、樹高 30m になる。材質は堅く、割裂が容易で心材は耐久力つよく水湿に特に強い。大材が得

られるので大型建造物から一般的の家屋の大黒柱や土台回り、屋根葺き材（くれこば）などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水温に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。本遺跡出土材は加工材1点である。

12. コジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科

写真図版 V-14a-c (SZ-17333)

道管形態がクリによく似た環孔材で、年輪の始めに丸一楕円形の中～やや大型の道管が間隔を置いて1～3層に並び、順次径を減じて、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材の環孔材で、年輪は明瞭である。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状である。放射組織は単列同性と集合放射組織の2型がある。集合放射組織は時に放射組織細胞の割合が高くなり複合状となるが、コナラ属のように幅広にはならない。道管-放射組織間壁孔は楕円形でしばしば縦に柵状に並ぶ。これらの形質からブナ科シノキ属のコジイの材と同定した。スダジイからは集合放射組織があることで区別される。

コジイ（別名ツヅラジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素のひとつである。スダジイが海岸部に多いのに対し、コジイは内陸部に多い。コジイは樹高20m、幹径1mの大木となり、材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など）、下駄、薪炭材などに用いる。本遺跡出土材は杭、土木材、加工材など5点である

13. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科

写真図版 VI-15a-c (SZ-17901)

クリ、コジイによく似た材で、年輪の始めに大～中型の円形～楕円形の道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、周囲状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材の環孔材で、年輪はやや明瞭である。幅広い年輪では年輪内側から外側に向かっての道管径の減少率は小さく、あたかもカシ類などの放射孔材に似てくることもある。木部柔組織は接線状で晩材部で目立つ。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科シノキ属のスダジイの材と同定した。道管形態、配列はコジイとほとんど変わらない環孔材であるが、集合状一複合状の放射組織を持たないことから区別される。また、クリに比べ大道管の径が小さく、年輪はじめに間隔を置いて配列することから区別される。東海地方ではスダジイは沿岸部に多く、コジイはやや内陸部に分布する。本遺跡はやや内陸部に位置することから周囲の丘陵地にはコジイが自生していたことが窺われ、スダジイ材は沿岸部からの持ち込みの可能性も考えられる。

スダジイは東北地方の南部以南九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布する常緑高木で、照葉樹林の主要要素の一つで、特に海岸部に多い。樹高20m、幹径1m以上となり、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する独特の樹形となる。材はコジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はコジイと区別されない。本遺跡出土材は土木材2点である。

14. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus sect. Cyclobalanopsis* ブナ科

写真図版 VI-16a-c (SZ-17789)

最大接線径が $160\ \mu\text{m}$ 程度の中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材。木部柔組織は独立帶状で接線状に多數配列してよく目立つ。道管の穿孔は單一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、道管-放射組織間壁孔は縦に長い楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属（イチイガシを除く）の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、アカガシ *Quercus acuta* Thunb.、シラカシ *Q. myrsinaefolia* Blume、イチイガシなど常緑の樹種からなる亜属で、東北地方以南の全国の暖帯に広く

分布し、照葉樹林の主要素である。静岡県地方にはこれらの他、アラカシ *Q. glauca* Thunb.、ツクバネガシ *Q. sessilifolia* Blume、ウラジロガシ *Q. salicina* Blumeなどがあり、道管径が格段に大きいイチイガシ以外の樹種を材構造により識別するのは困難である。アカガシ亜属のいずれの材も硬く緻密で強韌で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輪材、柄物など広い用途がある。本遺跡出土材は鋤の柄と思われるもの1点の他、加工材2点がある。

15. ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray ブナ科

写真図版 VI-17a-c (SZ-17636)

アカガシ亜属と同様の放射孔材だが、道管の最大接線径は 90 μm 程度と格段に小さく、また、大放射組織は複合状とならず集合状で幅が狭いことから、コナラ属コナラ亜属のウバメガシの材と同定した。

ウバメガシは静岡県地方の海岸部に多い常緑低木～小高木で、高さ 2～10 m、幹径 10～50 cm ほどになる。材は重く、極めて堅硬で粘り強く、切削加工は困難だが、硬さを活かした各種器具材、特に堅い木炭である「備長炭」の特用がある。本遺跡出土材は用途不明品の有頭状の木材1点である。ウバメガシの自生は海岸部に限られることから本遺跡出土品は沿岸部からの持ち込みが考えられる。

16. アカメガシワ *Malotus japonicus* (Thunb.) Muell. Arg. トウダイグサ科

写真図版 VII-18a-c (SZ-17654)

年輪始めに中型の単獨あるいは2個放射方向に複合した梢円形の道管がややまばらにあり、そこから順次径を減じて、晩材部では外形多角形で壁がやや厚く、内腔が丸い小道管がしばしば放射方向に3～5個程度複合したもののがまばらに散在する環孔材である。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。本部柔組織は量がやや多いが横断面では繊維細胞との区別が難しい。放射組織は単列異性である。以上の形質からトウダイグサ科のアカメガシワの材と同定した。

アカメガシワは東北地方中部以南の日本列島に広く分布する落葉広葉樹で、典型的な陽樹で二次林に多い。樹高 5～10 m、幹径 10～30 cm 程度になる。材はやや軽軟で木理粗く、器具材、下駄材などに使われる。当遺跡出土材は杭と加工材の2点である。

17. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

写真図版 VII-19a-c (SZ-17455)

単獨の梢円形あるいは2～数個放射方向に複合した梢円形の管孔が年輪内に密度高く均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向けてゆっくりと減じ、年輪界を挟んで早材と晩材の道管径は明確に異なる。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に密にある。本部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は単列異性で、直立細胞と道管との交差分野の壁孔は蜂の巣状となる。以上の形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

静岡県地方にヤナギ属の樹種は高木から低木のものまで多数あり、材構造での個々の種の識別は困難である。山野に広く分布するバッコヤナギ *Salix bakko* Kimura は樹高 10～15 m、幹径 50 cm になる落葉高木で、材は軽軟、割裂自由で切削加工が容易で、箱板類、小細工ものなどの用途がある。本遺跡出土材は加工材1点である。

18. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科

写真図版 VII-20a-c (SZ-17383)

年輪始めにややいびつな円～梢円形の大道管が数層並び、順次径を減じて、晩材部では厚壁で多角形の小道管が数個集まって塊となったものが散在する環孔材で、周囲状柔組織および連合翼状柔組織があり、特に晩材部で量が多く、肉眼では多層の縞模様に見える。道管の穿孔は單一、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、また道管内に黄褐色の透明物質がしばしば詰まっている。放射組織は 3～5 細胞幅で背は高くなく、接線面で見たときの輪郭が不整形である。これらの形質からムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東地方以西から九州・沖縄までの暖地に比較的希に生える幹径 40cm、樹高 15m ほどになる落葉高木で、東日本で山野に自生することはほとんど無く、しばしば社寺、鎮守様、農家敷地などに植えられるので正確な天然分布は明らかでない。材は軽軟で肌目は粗く、脆いが切削加工容易である。机や箱類、小細工もの、キリ（桐）の代用として下駄などの用途がある。果实にサボニンを含み、若実を「石鹼」の代用にするほか、黒くて丸い種子を羽根つきの羽根の頭にする。本遺跡出土材は加工材 1 点である。

19. クマノミズキ *Cornus macrophylla* Wall. ミズキ科

写真図版 VIII-21a-c (SZ-17781)

円一いびつな楕円の小道管がほぼ単独で均一に散在する散孔材で、道管径は早材から晩材部にかけて緩やかに小さくなる。道管の穿孔は横棒数が 20 本程度の階段状、道管内壁にらせん肥厚は見られない。木部柔組織は散在状で出土材ではしばしば黒色物質が詰まつていて横断面で黒い小さな点として見える。放射組織は 5 細胞幅程になる典型的な異性で、接線断面で見ると多列部は紡錘形、1 ~ 多細胞の單列の翼部がある。これらの形質からミズキ科ミズキ属のクマノミズキの材と同定した。同じミズキ属のミズキ *C. controversa* Hemsl. は道管がしばしば複合することにより、また、ヤマボウシ *C. kousa* Buerger ex Hance は放射組織が幅広いことにより区別される。

クマノミズキは青森県以南、九州屋久島までの暖温帯に広く分布する樹高 12m、幹径 40cm になる落葉高木で、関東以西に多い。花期はよく似ているミズキより 1 ヶ月程遅い。材は堅硬でかなり重いが均質で、ミズキ同様梁の特用があり、漆器木地、各種器具材に用いられる。本遺跡出土材は加工材 1 点である。

20. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科

写真図版 VIII-22a-c (SZ-17420)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、道管径は年輪内ではほとんど変化しない。道管の穿孔は横棒の多い（40 本ほど）階段状である。木部柔組織は散在状で均一に分布し、目立たない。放射組織はほぼ單列の異性で、背は比較的高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からモッコク科のサカキの材と同定した。

サカキは関東南部以西～九州、南西諸島に分布する照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径 20cm、樹高 8m くらいになる。材は堅硬で肌目はやや粗く、強靭で割裂困難であり、萌芽枝がまっすぐによく伸びることから丸木の柄物に重用される。各種柄物、杵、天秤棒、舟の棹、櫓等に用いられる。本遺跡出土材は加工材 2 点である。

21. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

写真図版 VIII-23a-c (SZ-17424)

小型の道管が多くは放射方向に数個複合して長楕円形となったものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら比較的均一に散在する散孔材で、年輪後半では道管は径が小さくなり目立たず、独立帶状の木部柔組織が目立つ。年輪界を挟んで極端に道管径が異なり、半環孔材的に見える。道管の穿孔は横棒が 10~20 本程度の階段状である。放射組織は異性で、1~3 細胞幅である。以上の形質から、エゴノキ属のエゴノキ属の材と同定した。

静岡県に自生するエゴノキ属には、エゴノキ *Styrax japonicus* Siebold et Zucc.、ハクウンボク *S. obassia* Siebold et Zucc.、コハクウンボク *S. shiraianus* Makino の 3 種があり、いずれも落葉小高木である。ハクウンボクとコハクウンボクは多少とも標高のある山地帯に多く、平野部ではエゴノキが普通に生えることから出土材はエゴノキである可能性が高い。エゴノキは北海道最南部以南から九州、南西諸島の温帯から暖帯、亜熱帯に広く分布する落葉小高木で、幹径 20cm、樹高 8m ほどになる。材

は白色で、やや堅硬、緻密均質で粘りがあり、切削加工がよく、木製玩具などに用いられる。当遺跡出土材は加工材1点である。

22. マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科

写真図版 IX-24a-c (SZ-17507)

年輪始めにいびつな円形の道管がほぼ単独で均一に分布し、晚材部に向かって順次径を減じる環孔材だが、幅の狭い年輪では大道管以外には中小の道管が僅かにあるのみで、ほとんど大道管からなる散孔材のように見える。道管の穿孔は單一、ごく希にある道管同士の側壁は階段状となる。木部柔組織は短接線状～接線状。放射組織は3～5細胞幅程度の異性で、高い單列の翼部を持つ。以上の形質からマタタビ科マタタビ属の材と同定した。日本列島のマタタビ属にはサルナシ *Actinidia arguta* (Siebold et Zucc.) Planch. Ex Miq.、シマサルナシ *A. rufa* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Miq.、山間地の溪流沿いに多いマタタビ *A. polygamia* (Siebold et Zucc.) Planch ex Maxim. 及びミヤママタタビ *A. kolomikta* (Rupr. Et Maxim.) Maxim. があり、いずれも木性蔓植物であるが、後2者は蔓の太さが通常1cm程度にしかならないことから2cmを超える本遺跡出土材には該当しない。また、シマサルナシはサルナシと材構造では区別できないが分布が紀伊半島以西～琉球列島に限られることから本遺跡出土材はサルナシである可能性が高い。

サルナシは北海道～九州の暖帶～冷温帶上部の湿潤地に自生する木性落葉蔓植物で、幹は時には直径20cmほどになる。蔓は柔軟性があり、結束材や吊り橋素材などに用いられる。本遺跡出土材は田下駄の環状の材と加工材の3点である。上土・岳美遺跡に限らずこの地域の条里制水田址からは少なくない数の円柱型（輪かんじき型）田下駄が出土している。これまで樹種が調べられた限りでは、その踏み板は例外なくスギ材で、円柱材はマタタビ属である。この円柱は直径2cmほどの丸木であることから、サルナシ材と考えられる。遺跡周辺に位置すると思われる集落周辺ではこの用途に用いるサルナシの蔓を容易に得られる程の自生があったとは考えにくく、多少なりとも離れた山間地で採取してきたものを利用していたことが推定される。

22'. マタタビ属 樹皮 *Actinidia Bark* マタタビ科

写真図版 IX-25a-c (SZ-17560)

細くて多角形の筋管とそれに伴う伴細胞、柔組織の塊と纖維組織の塊が交互に出現して文様を成す樹皮で、放射組織は單列で多数ある。この樹皮に付隨していた木部組織の形態からこの樹皮はマタタビ属（サルナシ）であると同定された。おそらくは材として出土したものの樹皮部分が剥離したものと思われる。

23. ムラサキシキブ属 *Callicarpa* シソ科

写真図版 IX-26a-c (SZ-17403)

小道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して密度低く均一に散在する散孔材で、単独道管の断面はほぼ円形、2個複合の場合8の字形となり、道管壁はやや厚い。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。木部柔組織は随伴状だが目立たない。放射組織は3細胞幅位の異性で背が高い。以上の形質からシソ科のムラサキシキブ属の材と同定した。

静岡県内にはコムラサキ *Callicarpa dichotoma* (Lour.) K. Koch.、ムラサキシキブ *C. japonica* Thunb. var. *japonica*、オオムラサキシキブ *C. japonica* Thunb. var. *luxurians* Rehder.、ヤブムラサキ *C. mollis* Siebold et Zucc. が分布する。材構造は互いによく似ており、個々を識別するのは困難である。もっとも普遍的なムラサキシキブは樹高2～4m、幹の太さ5～10cmになり、根元から生ずる萌芽枝は直立で下部は枝が無く、真っ直ぐな長い棒を得ることが出来る。木材は極めて堅く強韌で、柄物、堀棒、弓などに適する。本遺跡出土材は加工材1点である。

24. カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科

写真図版 IX-27a-c (SZ-174902)

放射方向に長軸を持つ梢円形の道管が、多くは単独で、時に2-3個放射方向に複合したもののが均一に低密度で散在する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の壁はやや厚く、穿孔は單一、道管相互の壁孔は微細な孔紋で密に交互状に分布する。木部柔組織は単細胞幅の接線状、量は比較的多い。放射組織は1-3細胞幅の異性で背は低く、層階状に配列する。以上の形質からカキノキ科のカキノキ属の材と同定した。

静岡県地方にはリュウキュウマメガキ *Diospyros japonica* Siebold et Zucc.、トキワガキ *D. morrisiana* Hance が分布し、また、カキノキ *D. kaki* Thunb.、マメガキ *D. lotus* L. はいつの時代（おそらく平安時代以前）にか大陸から渡來したもので、現在では農家等で広く植栽されている。これらはいずれも樹高5~10m、幹径20~40cmの小高木~高木で、材は堅硬緻密、均質で切削加工は容易であり、床柱や室内的装飾的部分の建築材、箪笥、机など各種家具、そろばんの枠など各種器具材に用いられる。本遺跡出土材は鉄鎌の柄1点であり、材質を活かした利用である。なお、カキノキ材の遺跡からの出土は多くはない。県内では中屋遺跡から中世の丸杭が比較的多数出土し、また、角江遺跡、元島遺跡などでも出土が知られているが、鎌の柄への利用例は初めてである。

II. 上土遺跡における木材利用

上土遺跡は静岡市葵区立石地区の現況ほぼ水田の低地帯一帯に広がる平安時代の条里制水田址を主体とする。この条里制水田址は西の賤機丘陵と東の南沼上丘陵にはさまれた、静岡平野北部の麻機低地一帯に広がっていて、上土遺跡の西には全く同じ時期の条里制水田址からなる岳美（たけみ）遺跡があり、これらは同じ遺跡の西と東の部分であると看做される。

岳美遺跡は平成4、5年度（1992、1993年）に発掘調査がなされ、平成6、7年度（1994、1995年）に遺跡調査報告書が発刊されている。報告書には大畦畔を構築する大量の遺構材や農工具類を報告するもその樹種については触れていない。平成24~26年度（2012~2014）には岳美遺跡の東部分さらに東に位置する上土遺跡の発掘調査がなされ、平成29年度（2017年）に報告書が刊行され、そこには770点の出土材から同定不可だった1点を除いて35の樹種が報告された（第10表）。今次の上土遺跡出土木材の樹種同定結果はこれに引き続く平成29~令和元年度（2017~2019年）に発掘された木材577点を調べたものであり、28の樹種・部位が同定された（第10表）。時期的には平安時代を中心とするものの弥生時代~中世に及ぶ遺物であると考えられている。これらのうち、遺物の形状が比較的のしっかりしており、本報告書に実測図が掲載される163点については付表に樹種を記載した。

上土・岳美遺跡が条里制水田の遺跡であることから、出土する木材は大部分が畦畔の構築材であり、少数が水田面から出土している。畦畔は条里制に則った間隔がほぼ107mの縦横の大畦畔と、それらの間に各水田面を仕切る小畦畔が認められ、大畦畔には多量の木材が構築材として使われていることが知られている（2017年報告書）。大畦畔を構築している木材は、打ち込まれた杭と横架材から成り、その大部分は建築部材、農工具等の転用材であり、大畦畔の礎に埋め込まれていることから、木材利用の最終形態のひとつと言える。

上土・岳美遺跡の出土材の樹種同定結果（第10表）の一番の特徴は、大部分（2017が85.5%と2022が79.9%）がスギの幹材であることである。スギ材の転用前の用途は付表および2017年報告書の出土遺物の記載にあるように各種建築部材、田下駄（踏み板）、泥よけ、棒類などほとんどの用途に亘る。このようなスギ材の多用は登呂遺跡を始めとして静岡県地方の弥生時代~中世に至るほとんどの遺跡で認められることである。スギ材の多用は北陸地方でも顕著であり、山陰、東北地方日本海側でも

ある程度認めることは出来るが、全国的に見た場合、特に近畿、関東地方と比較した場合、極めて特異であると言える。このようなスギ材中心の木材利用が可能となった背景には、東海地方における実に潤沢な天然スギ林の存在であった。登呂遺跡近くでは弥生時代のスギ巨木の埋没林が知られ、当時は若狭地方同様に低地にスギ林が広がっていたことが明らかとなっている。そして遺跡で使われているスギ材の年輪を調べると、年輪幅が狭く均一で、明確な早材部と晩材部を持つ材が少くない。これは樹齢100年以上を経た、恐らくは数百年という老齢大径木の木材であると推測されることから、静岡県地方では中世までは豊富なスギ天然資源を背景に木材利用が図られてきたと言える。ただ、その豊富だった資源も近世にはかなり減少したようで、人工造林が広く行われるようになり、天然杉は天城山中、愛鷹山、駿遠の奥地部などに限られてしまったようである。

一方、スギ材以外の出土は全体の14～20%程度と、スギ材の多さに隠れて量的には乏しいが、その少ない数から同定された樹種数は試料数と比較すると大変多い、と言える。2017年の報告と今回の報告ともスギに次いで多いのはヒノキ材である。同じヒノキ属のサワラも少なくなく、これら2種ともスギ同様年輪幅が狭く均一な材が比較的多く、やはり天然の大径材が使われていたことが窺える。ヒノキに次いで多いのはイヌマキ属で、その自然分布からイヌマキと考えられる。イヌマキ材は腐朽・水湿に特に強く、土木・建築材によく使われていたことが分かった。針葉樹ではこのほかカヤ、マツ（アカマツ、複維管束亜属）、モミ属、ツガ属が同定され、針葉樹材が全体の、2017年度報告では90.6%、本報告では91.7%を占め、針葉樹中心の用材となっていることがよく示されている（第10表）。

広葉樹は全体の8.8%にしか過ぎないが、樹種は落葉広葉樹が24種（5.0%）、常緑広葉樹が9種（3.5%）、いずれとも判断がつかないものが2種（0.3%）、合計35種と、実に多様である。遺跡自体は低地の水田耕作地であり、すぐ近傍にはもちろん森林ではなく、出土材は基本的には畦畔構築及び水田耕作に関わって持ち込まれた木材であることから、これらの木材は水田をここで営んだ人たちが住む集落等で使われている木材そのものを表している。その集落は近傍の丘陵地に近いところに推定されるが、クリ、コナラ節、ケヤキ、エゴノキ属、アカメガシワ、イヌンデ節、クヌギ節、ヤシャブン節、カラスザンショウ、クサギ、リョウブなどの出土は、その集落周囲には暖帶性的の二次林が広がっていたことを推定させる。一方、アカガシ亜属、サカキ、シイ類、ヒサカキ、クスノキ、クスノキ科などの常緑広葉樹の存在は照葉樹林の要素も存在し、実際には部分的に照葉樹林要素がモザイク的に混在する二次林であったと考えられる。これを現在の静岡平野の低丘陵地の景観に重ねると、現在の景観からスギ、マツの人工林を取り去った常緑広葉樹を交えた二次林が広がっていたと言え、人々はスギ、ヒノキなどの主要針葉樹以外の木材はここから得て利用していたことが窺えた。

第10表 上土遺跡出土木材樹種一覧表

樹種	*	2017**		2022		2017・2022合算	
		小計	%	小計	%	合計	%
スギ	C	658	85.5	460	79.7	1118	83.0
スギ 枝材	C			1	0.2	1	0.1
ヒノキ	C	24	3.1	24	4.2	48	3.6
サワラ	C			18	3.1	18	1.3
ヒノキ属	C			2	0.3	2	0.1
ヒノキ科	C	1	0.1			1	0.1
ヒノキ皮樹皮	C			2	0.3	2	0.1
イヌマキ属	C	10	1.3	15	2.6	25	1.9
カヤ	C	1	0.1	4	0.7	5	0.4
モミ属	C	3	0.4			3	0.2
アカツク	C	1	0.1			1	0.1
マツ属複管束型属	C			2	0.3	2	0.1
ツガ属	C			1	0.2	1	0.1
針葉樹合計		698	90.6	529	91.7	1227	91.1
クリ	D	13	1.7	1	0.2	14	1.0
ヤナギ属	D	1	0.1	7	1.2	8	0.6
マタタビ属	D	3	0.4	3	0.5	6	0.4
マタタビ皮樹皮	D			1	0.2	1	0.1
コナラ属コナラ節	D	6	0.8			6	0.4
ケヤキ	D	4	0.5			4	0.3
エゴノキ属	D	1	0.1	2	0.3	3	0.2
イヌスピリ	D	3	0.4			3	0.2
サクラ属	D	3	0.4			3	0.2
アカメシヅク	D			2	0.3	2	0.1
クマシデ属イシンデ節	D	2	0.3			2	0.1
クマシデ属マシデ節	D	2	0.3			2	0.1
コナラ属スギ節	D	2	0.3			2	0.1
クマノミズキ	D			1	0.2	1	0.1
ハンノキ属ヤシャブシ節	D			1	0.2	1	0.1
ムクロジ	D			1	0.2	1	0.1
ムラサキシキブ属	D			1	0.2	1	0.1
カキノキ属	D			1	0.2	1	0.1
カラスダシショウ	D	1	0.1			1	0.1
クサギ	D	1	0.1			1	0.1
トチノキ	D	1	0.1			1	0.1
ブナ属	D	1	0.1			1	0.1
ヤマウルシ	D	1	0.1			1	0.1
ヤマナラシ属	D	1	0.1			1	0.1
リョウウ	D	1	0.1			1	0.1
落葉樹合計	D	47	6.1	21	3.6	68	5.0
コナラ属アカガシ属	E	7	0.9	6	1.0	13	1.0
サカキ	E	3	0.4	8	1.4	11	0.8
コジイ	E	1	0.1	5	0.9	6	0.4
スマジイ	E	4	0.5	2	0.3	6	0.4
クスノキ科C	E			3	0.5	3	0.2
クスノキ	E	4	0.5			4	0.3
シャリンバイ	E	2	0.3			2	0.1
ウバタガシ	E			1	0.2	1	0.1
ヒサキ	E	1	0.1			1	0.1
常緑樹合計	E	22	2.9	25	4.3	47	3.5
クスノキ科D	U			2	0.3	2	0.1
クスノキ科	U	2	0.3			2	0.1
不明種合計	U	2	0.3	2	0.3	4	0.3
広葉樹合計	71	9.2		48	8.3	119	8.8
(同定不可)		1	0.1				
総 計		770		577		1347	

* C=針葉樹、D=落葉樹・常緑樹、U=不明種

** 2017=上土・岳美遺跡報告書 2017、2022=本報告

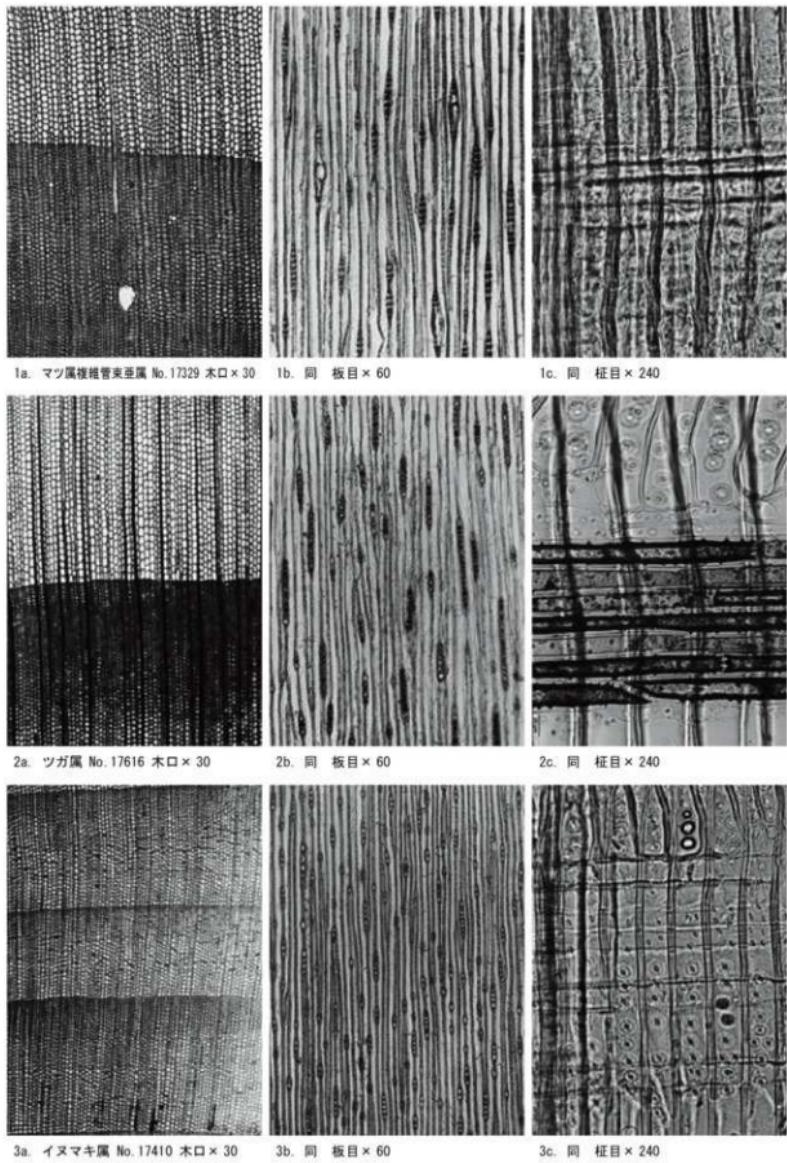


写真5 出土木材顕微鏡写真1

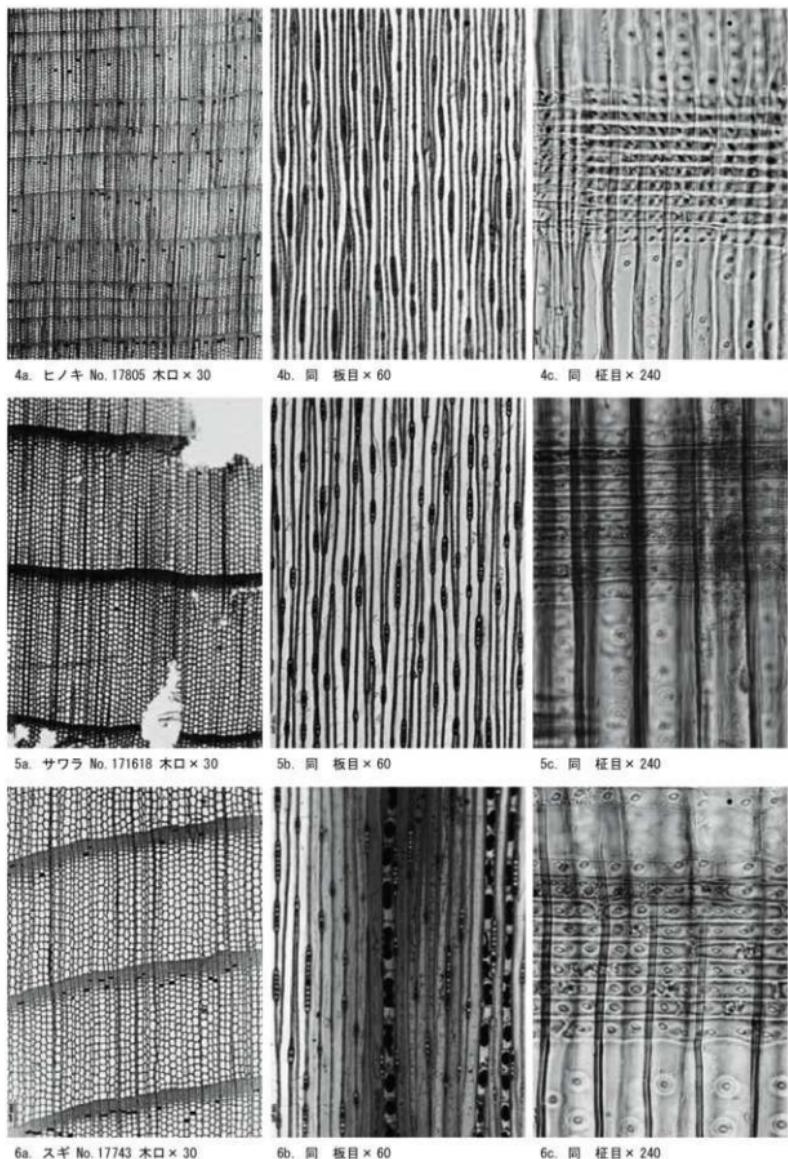


写真6 出土木材顕微鏡写真2

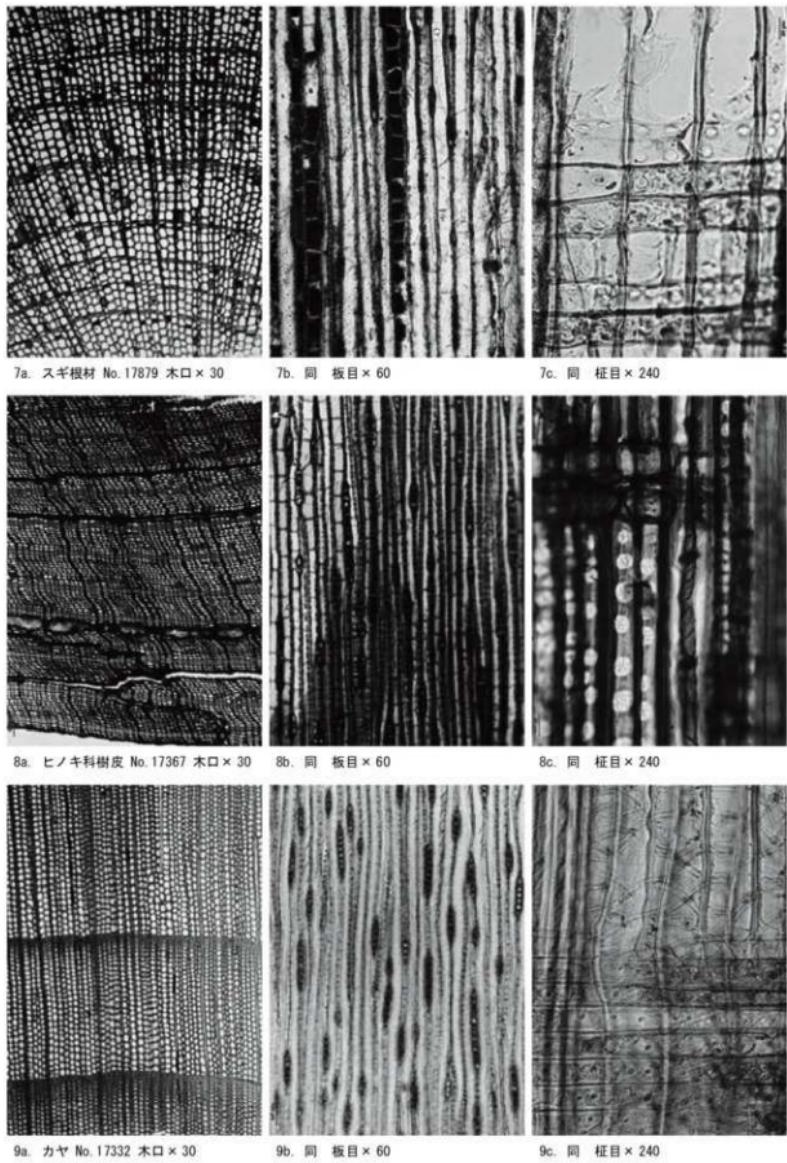


写真7 出土木材顕微鏡写真3

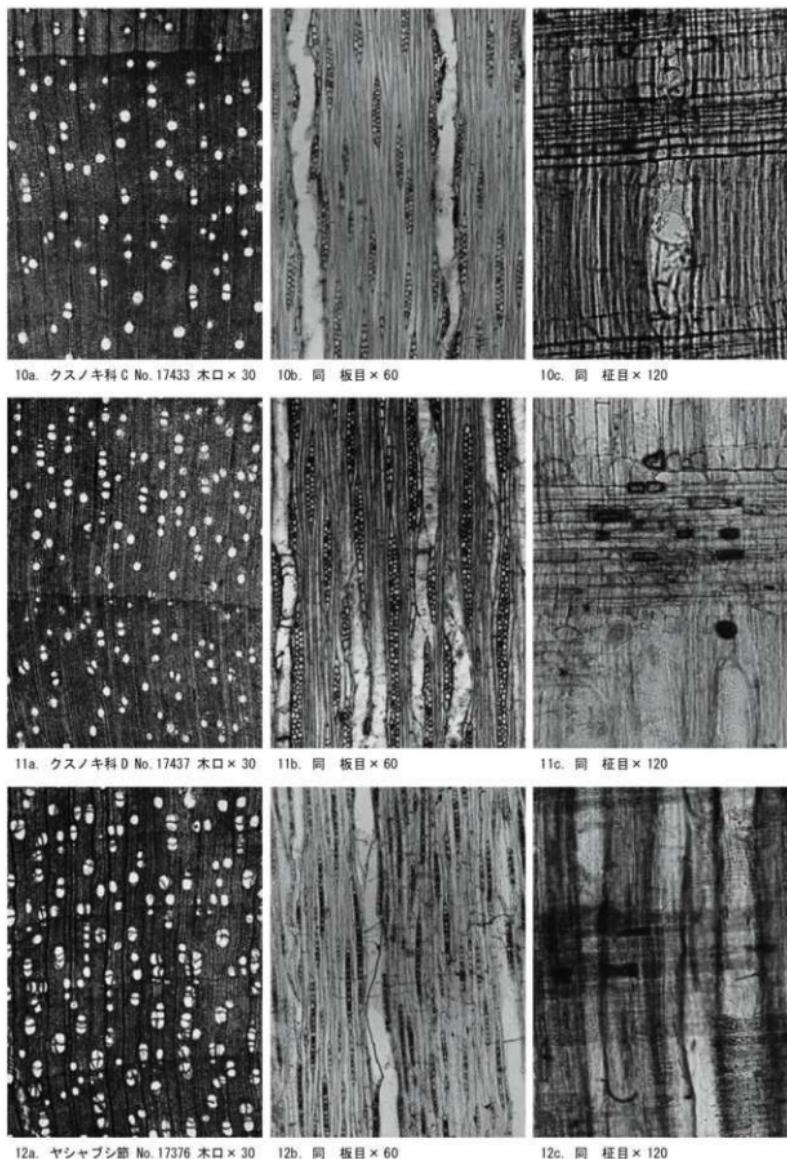
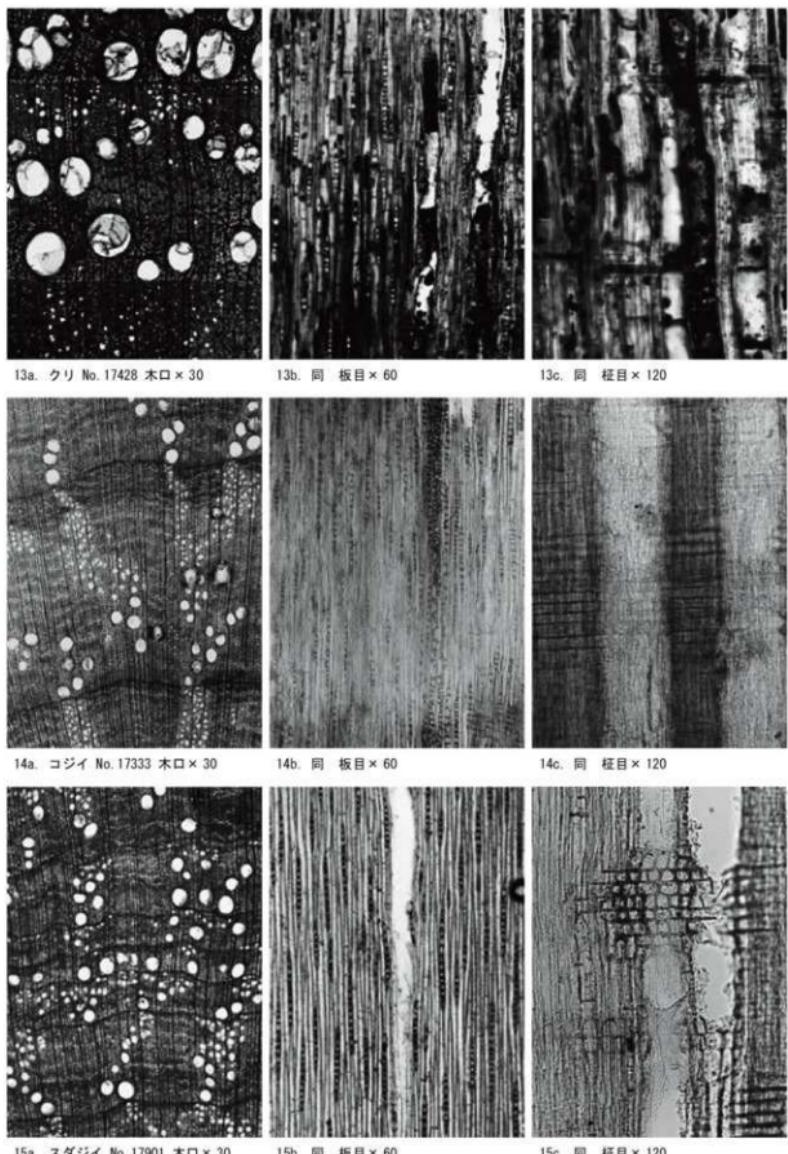


写真8 出土木材顕微鏡写真4



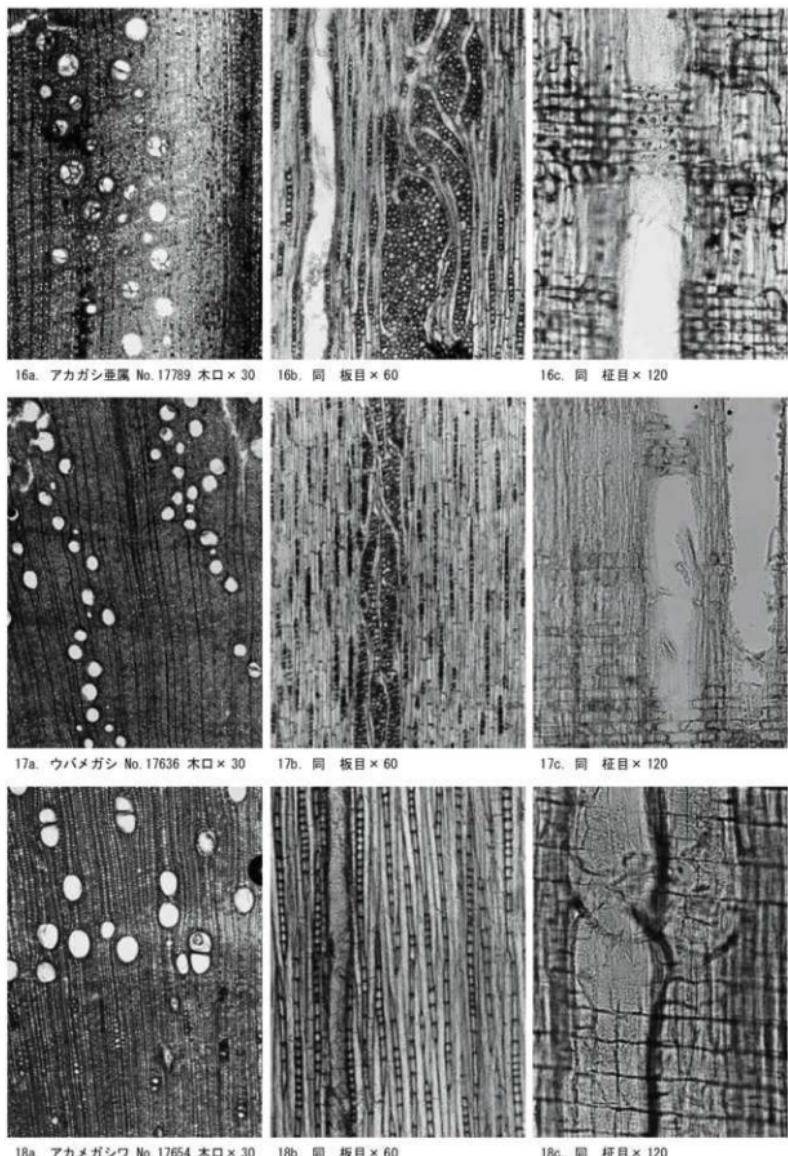


写真 10 出土木材顕微鏡写真 6

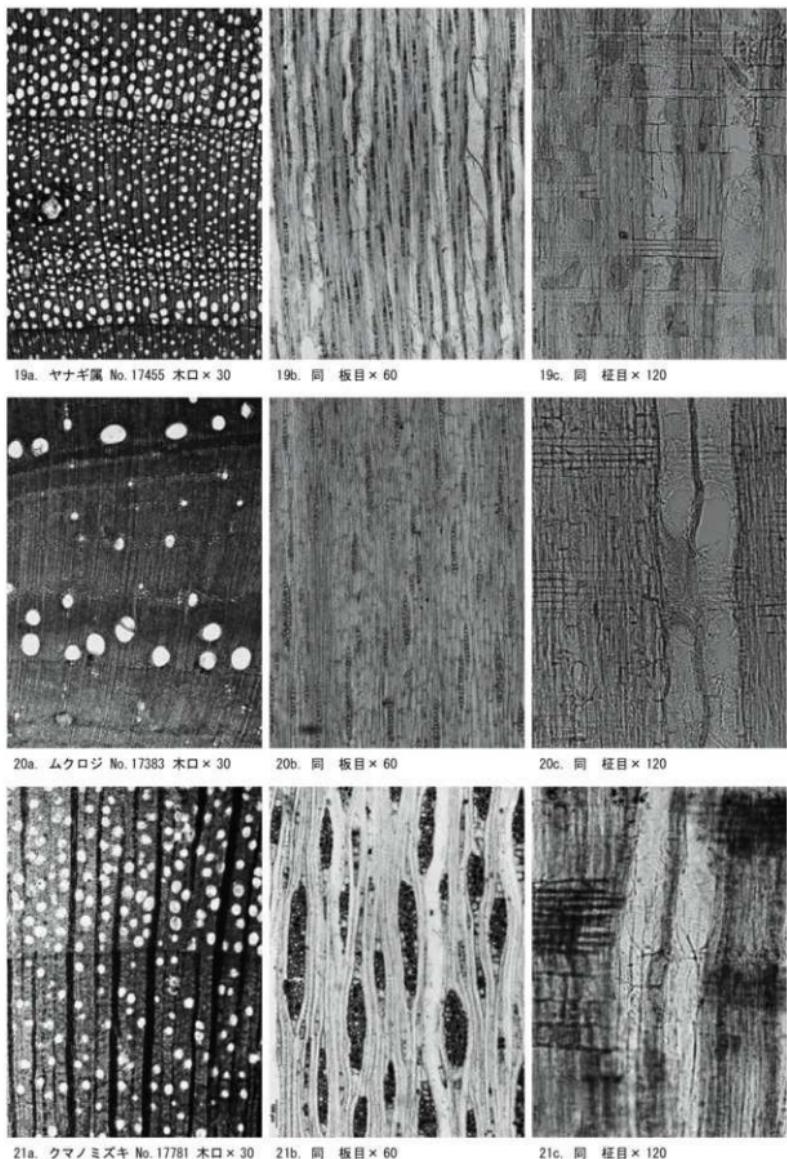


写真 11 出土木材顕微鏡写真 7

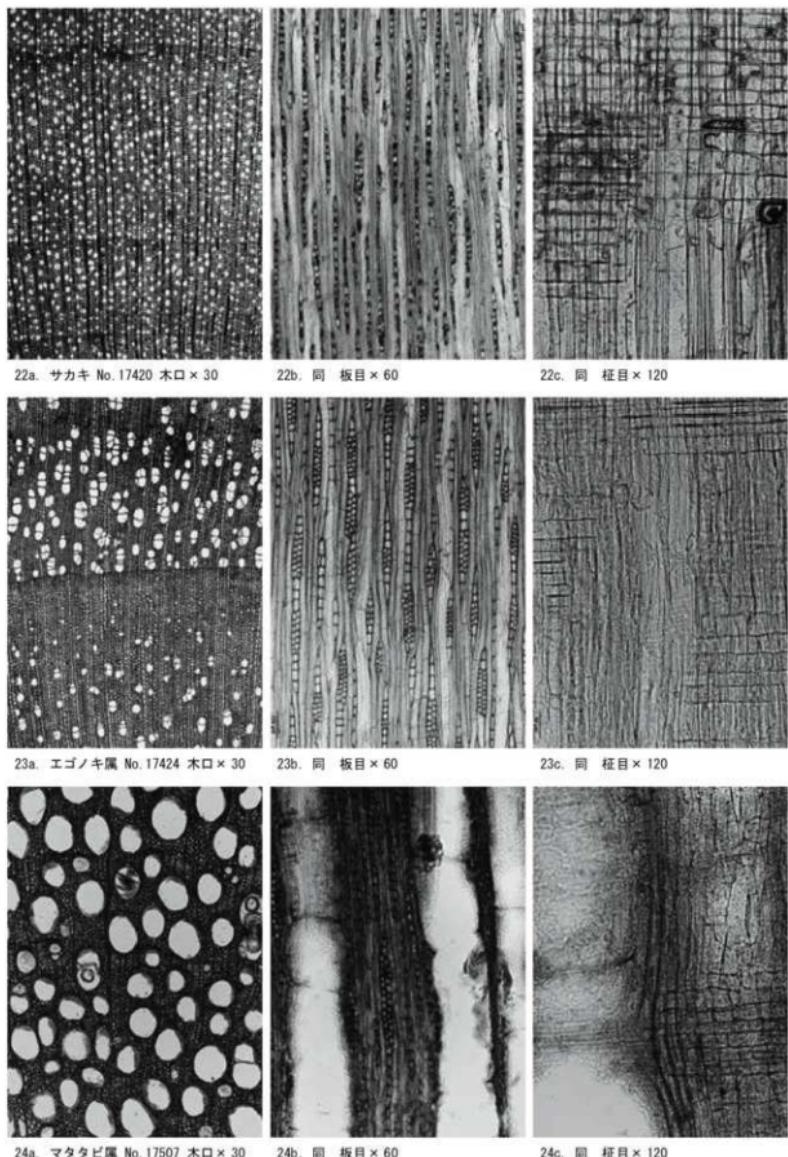


写真 12 出土木材顕微鏡写真 8

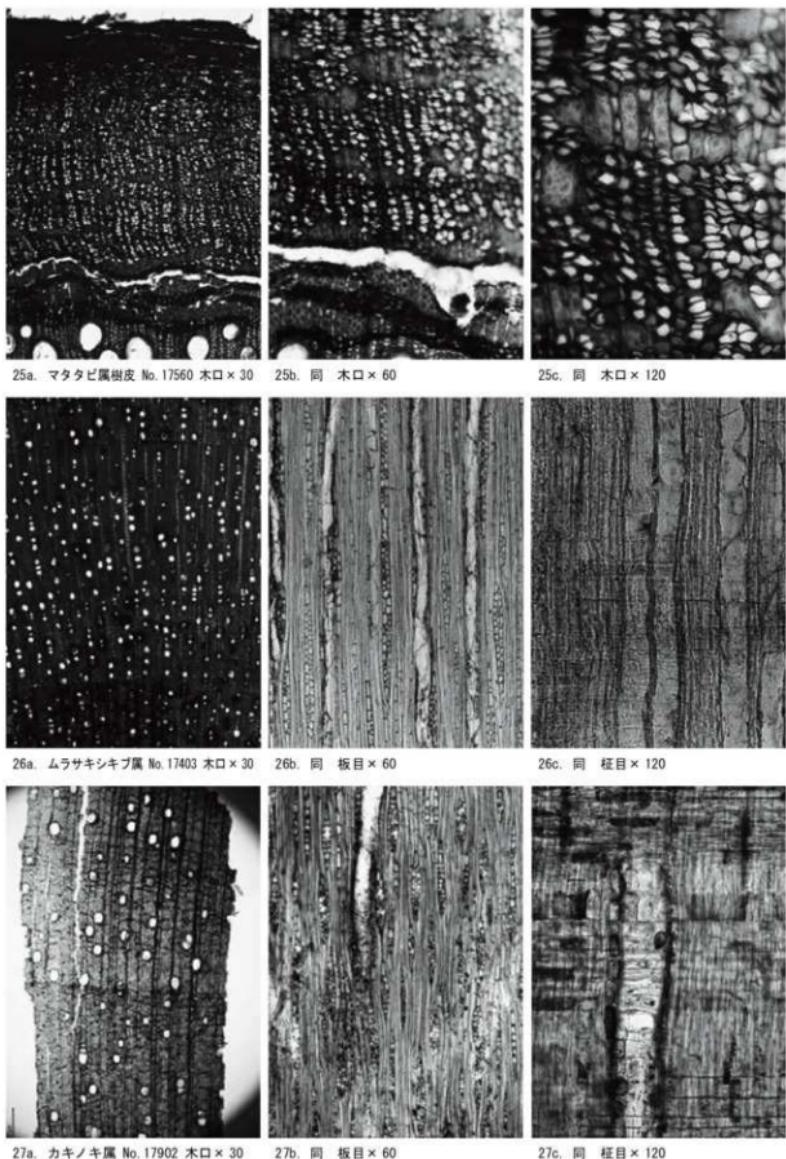


写真13 出土木材顕微鏡写真9

第2節 上土遺跡種実同定

株式会社古環境研究所

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。本報告では、上土遺跡で出土したモモとみられる種実について同定を行い、その特徴を検討する。

2 試料

試料は、上土遺跡の8世紀から9世紀とされる堆積層から採取された土壤より水洗・選別された種実39点である。試料の詳細を第11表に示す。

3 方法

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。

結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。また、デジタルノギスを用いて、長さ・幅・厚さを計測する。

4 結果

(1) 分類群

木本のモモ1分類群が同定された。以下に、同定の根拠となる形態的特徴を記載し、写真を図版に示す。

[木本]

モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・破片) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。形状の計測結果を第12表に示す。

(2) 種実群集の特徴

39点はすべてモモであり、No.34以外は完形であった。なお、金原ほか(1992)によると古墳時代～奈良時代のモモは形態的特徴からA～C類に分類されている(第58図)。その分類に従うと、本遺跡で出土

第11表 出土種実一覧表

調査区	出土位置	層位	取上げ番号
1 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ①
2 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ②
3 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ③
4 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ④
5 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑤
6 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑥
7 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑦
8 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑧
9 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑨
10 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑩
11 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑪
12 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑫
13 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑬
14 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑭
15 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑮
16 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑯
17 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑰
18 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑱
19 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑲
20 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ⑳
21 2区	疑似吐畔?		S1～S19 ㉑
22 2区		15～16層(訂正前)	S20
23 2区		15～16層(訂正前)	S21
24 2区		15～16層(訂正前)	S22
25 2区	(西端トレンチ)	16層下部(訂正前)	S23～S27 ①
26 2区	同上	16層下部(訂正前)	S23～S27 ②
27 2区	同上	16層下部(訂正前)	S23～S27 ③
28 2区	同上	16層下部(訂正前)	S23～S27 ④
29 2区	同上	16層下部(訂正前)	S23～S27 ⑤
30 不明			番号無し①
31 不明			番号無し②
32 不明			番号無し③
33 1-3区	吐畔上	12層	S-1
34 3区	吐畔真上		S-2
35 3区	吐畔側		S-3
36 3区	吐畔上層		S-4
37 3区	吐畔上	10～11層	S-5
38 3区	吐畔内	吐畔構築土	S-6
39 3区	吐畔内		S-7

したモロは全て古い形のA類であり、A類の中でも後出するタイプにあたる。律令期には左右不对象で厚みのあるタイプの出土例が多く、今回の試料ではNo.1、8、17、33がそれにあたる。計測の結果、平均値は長さ24.69mm、幅19.64mm、厚さ15.35mmであり、最大値は長さ30.23mm、幅25.18mm、厚さ19.66mm、最小値は長さ19.89mm、幅15.80mm、厚さ13.36mmであった。

第12表 出土モモ核の計測値一覧表

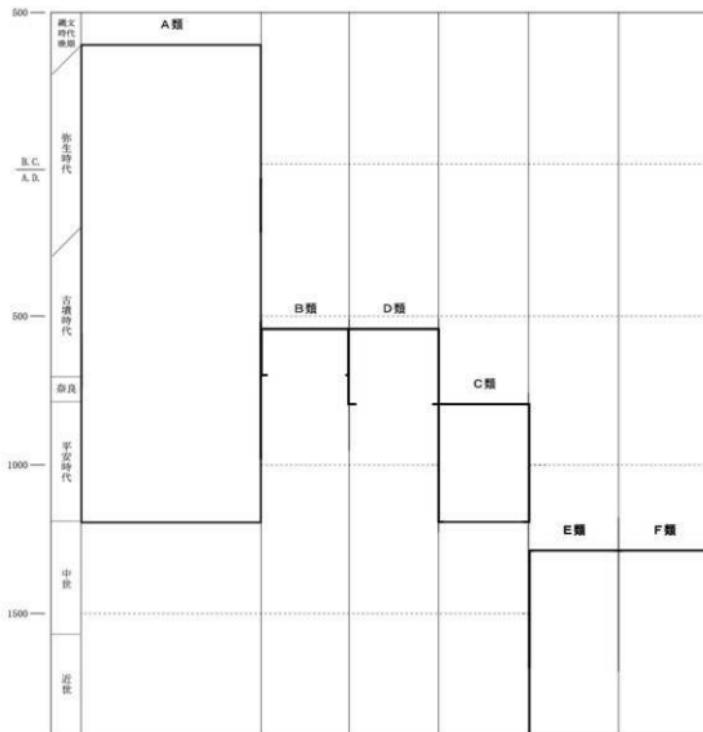
試料	状態	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅	長さ/幅	長さ/厚さ	幅/厚さ	タイプ	写真番号
1	完形	25.82	20.26	15.65	523.11	1.27	1.65	1.29	A	
2	完形	27.78	25.18	18.20	699.50	1.10	1.53	1.38	A	
3	完形	25.94	22.40	15.75	581.06	1.16	1.65	1.42	A	
4	完形	24.69	20.72	16.69	511.58	1.19	1.48	1.24	A	1
5	完形	24.74	19.28	15.14	476.99	1.28	1.63	1.27	A	
6	完形	23.55	19.47	14.79	458.52	1.21	1.59	1.32	A	
7	完形	26.40	21.86	16.00	577.10	1.21	1.65	1.37	A	
8	完形	23.66	16.80	13.36	397.49	1.41	1.77	1.26	A	2
9	完形	27.76	21.93	16.83	608.78	1.27	1.65	1.30	A	3
10	完形	23.34	20.34	15.24	474.74	1.15	1.53	1.33	A	
11	完形	25.15	20.67	16.89	519.85	1.22	1.49	1.22	A	
12	完形	24.77	20.68	15.79	512.24	1.20	1.57	1.31	A	
13	完形	22.97	18.76	15.07	430.92	1.22	1.52	1.24	A	
14	完形	23.03	20.09	15.64	462.67	1.15	1.47	1.28	A	4
15	完形	24.11	20.27	16.41	488.71	1.19	1.47	1.24	A	
16	完形	24.77	20.49	15.61	507.54	1.21	1.59	1.31	A	5
17	完形	24.09	18.22	13.56	438.92	1.32	1.78	1.34	A	
18	完形	23.16	19.23	15.58	445.37	1.20	1.49	1.23	A	
19	完形	23.80	17.99	14.30	428.16	1.32	1.66	1.26	A	
20	完形	24.16	21.46	16.41	518.47	1.13	1.47	1.31	A	6
21	完形	23.64	19.36	15.09	457.67	1.22	1.57	1.28	A	
22	完形	22.68	19.27	14.43	437.04	1.18	1.57	1.34	A	
23	完形	28.32	20.67	16.97	585.37	1.37	1.67	1.22	A	7
24	完形	24.46	18.85	14.41	461.07	1.30	1.70	1.31	A	
25	完形	22.08	18.71	15.46	413.12	1.18	1.43	1.21	A	
26	完形	30.23	24.87	19.22	751.82	1.22	1.57	1.29	A	
27	完形	26.45	21.92	16.49	579.78	1.21	1.60	1.33	A	8
28	完形	24.34	19.09	14.98	464.65	1.28	1.62	1.27	A	
29	完形	22.97	19.40	15.37	445.62	1.18	1.49	1.26	A	
30	完形	28.30	22.70	19.66	642.41	1.25	1.44	1.15	A	
31	完形	26.59	22.16	15.85	589.23	1.20	1.68	1.40	A	
32	完形	25.95	21.02	15.72	545.47	1.23	1.65	1.34	A	9
33	完形	21.83	15.80	14.90	344.91	1.38	1.47	1.06	A	
34	半分	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	完形	28.55	21.15	16.92	603.83	1.35	1.69	1.25	A	10
36	完形	24.12	20.16	15.95	486.26	1.20	1.51	1.26	A	
37	完形	21.79	19.38	14.85	422.29	1.12	1.47	1.31	A	
38	完形	19.89	18.21	14.80	362.20	1.09	1.34	1.23	A	
39	完形	22.35	18.29	14.86	408.78	1.22	1.50	1.23	A	
平均値		24.69	20.19	15.76						
最大値		30.23	25.18	19.66						
最小値		19.89	15.80	13.36						

5 考察

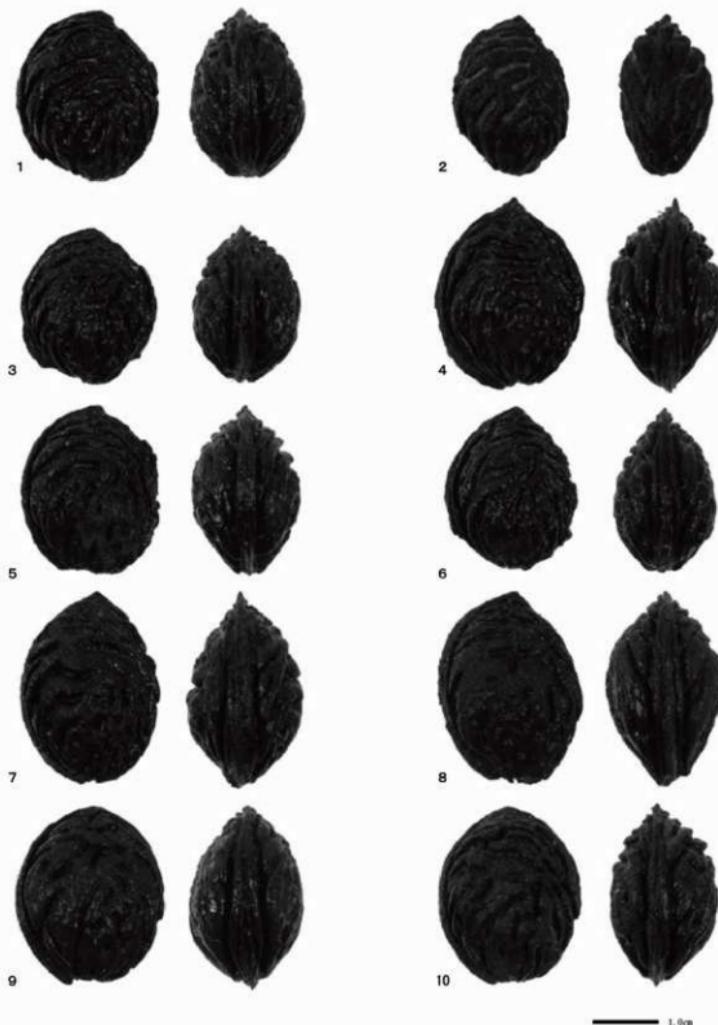
上土遺跡において種実同定を行った結果、すべて木本種実のモモであった。モモは食用となる栽培植物であり、稲作とともに伝來したとされている。多くの遺跡から出土し、食用、薬用、祭祀等に利用されてきた。本遺跡で出土したモモの形態をみると、古墳時代から古代にみられるものの特徴を有している。これらは栽培されていたか、もしくは持ち込まれたものが利用された後、投棄されたと考えられる。

参考文献

- 笠原正夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 金原正明・粉川昭平 (1992) モモ核を中心とする古代の有用植物の変遷、日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集、p. 76-77.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo. 409、ニューサイエンス社、p. 15-19.
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通1、雄山閣出版株式会社、p. 165-174.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p. 276-283.



第58図 モモ核変遷図 金原ほか (1992) より抜粋



1. 2区 疑似畦畔? S1~S19④
 2. 2区 疑似畦畔? S1~S19⑤
 3. 2区 疑似畦畔? S1~S19⑨
 4. 2区 疑似畦畔? S1~S19⑩
 5. 2区 疑似畦畔? S1~S19⑯
 6. 2区 疑似畦畔? S1~S19⑪
 7. 2区 15~16層(訂正前) S21
 8. 2区 (西端トレンチ) 16層下部(訂正前) S23~S27③
 9. 不明 垂号無し③
 10. 3区 巍畔掘 S-3

写真14 出土種子

第3節 上土遺跡検出の火山灰同定分析

株式会社古環境研究所

1 はじめに

東海地方の静岡市周辺には、富士、天城、伊豆諸島のほか、北関東地方、中部地方、九州地方などの火山に由来するテフラが分布している。すでに、それらの多くの諸特徴は、テフラ・カタログ（町田・新井 1992・2003・2011）に掲載されており、遺跡の発掘調査の際にテフラの調査分析を実施することで、考古遺物や遺構の層位や年代などがわかるようになっている。

静岡市上土遺跡では、平成 29 年度に実施された発掘調査で泥炭層中に白色火山灰層が確認され、テフラ分析の結果、神津島天上山テフラ (Iz-Kt, 838 年) である可能性が高いと判断された。

今年度の調査区においても、同じく泥炭層中に白色火山灰層が検出されたことから、テフラ分析（火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定）を実施して、指標テフラとの同定を行った。分析対象は、2 区調査区東壁 13b2 層と 2-1 区調査区南壁 13b 層の 2 試料である。土層観察によると、分析対象となる各テフラは、非常に細粒の白色火山灰層（層厚 0.3cm ~ 0.6cm 程度）である。

2 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

2 区調査区東壁 13b2 層、2-1 区調査区南壁 13b 層について、テフラ検出分析及び火山ガラスの形態（一部色調）別含有率や、軽鉱物ならびに重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 送付試料から高純度部を適量採取。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により 80°C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察（テフラ検出分析）。
- 5) 分析篩により 1/4 ~ 1/8mm と 1/8 ~ 1/16mm の粒子を篩別。
- 6) 偏光顕微鏡下で 1/4 ~ 1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態（一部色調）別含有率、軽鉱物や重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 13 表に示す。両試料には多くの火山ガラスが含まれている。火山ガラスは、無色透明の纖維束状軽石型や分厚い中間型ガラスである。

第 13 表 テフラ検出分析表

試料名	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
2 区 調査区東壁 13 b 2 層				***	pni(fh), md	無色透明	(mc)
2-1 区 調査区南壁 13 b 層				***	pni(fh), md	無色透明	(mc)

****: とくに多い。***: 多い。**: 中程度。*: 少ない。(*) : 非常に少ない。最大径の単位は mm。

bw: バブル型, md: 中間型, pn: 軽石型, sc: スコリア型, sp: スポンジ状発泡型, fh: 繊維束状発泡型,

ol: カンラン石, opt: 褐方輝石, cpx: 单斜輝石, sm: 角閃石, mc: 麻母。重鉱物の () は量が少ないと示す。

次に、火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第59図に、その内訳を第14表に示す。

1) 2区調査区東壁 13b2層

試料に含まれる火山ガラスの含有率は80.8%に達する。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型(40.8%)、中間型(38.4%)、スponジ状軽石型(1.2%)、無色透明バブル型(0.4%)である。また、この試料に含まれる軽鉱物と重鉱物の含有率はそれぞれ10.8%と0.4%で、重鉱物には雲母(黒雲母)が認められる。

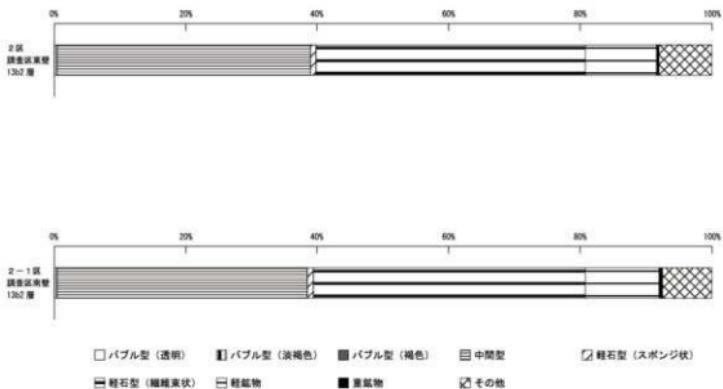
2) 2-1区調査区南壁 13b層

試料に含まれる火山ガラスの含有率は80.4%である。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型(41.2%)、中間型(38.0%)、スponジ状軽石型(0.8%)、無色透明バブル型(0.4%)である。また、この試料に含まれる軽鉱物と重鉱物の含有率はそれぞれ11.2%と0.8%で、重鉱物には雲母(黒雲母)が認められる。

第14表 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cil)	bw(pb)	bw(br)	nd	pn(sp)	pn(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
2区 調査区東壁 13b2層	1	0	0	96	3	102	27	1	30	250
2-1区 調査区南壁 13b層	1	0	0	95	2	103	28	2	19	250

bw: バブル型, nd: 中間型, pn: 軽石型, cil: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数。



第59図 上土遺跡の火山ガラス比ダイヤグラム

3. 屈折率測定(火山ガラス)

(1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度向上させることを目的として、2区調査区東壁13b2層、2-1区調査区南壁13b層に含まれる1/8-1/16mmの火山ガラスを対象に、温度変化型屈折率測定法(塙原, 1993)にしたがって屈折率特性の把握を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定結果を第15表に示す。この表には、東海地方とその周辺に降灰する後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて記載した。2区調査区東壁13b2層に含まれる火山ガラス(34粒子)の屈折率(n)は、1.494–1.496、2–1区調査区南壁13b層に含まれる火山ガラス(33粒子)の屈折率(n)は、1.495–1.497である。

第15表 屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
上土遺跡 2区 調査区東壁 13b2層	1.494–1.496	34	本報告
上土遺跡 2–1区 調査区南壁 13b層	1.495–1.497	33	本報告
東海地方とその周辺に降灰する達長質の代表的な指標テフラ			
伊豆新島向山(Iz-Nm, 886年)	1.490–1.497		1)
伊豆神津島天上山(Iz-Nm, 838年)	1.494–1.497		1)
天城カワゴ平(Kg, 約3,100年前)	1.493–1.503		1)
鬼界アラホヤ(K-Ab, 約7,300年前)	1.505–1.513		1)
立川ローム上部ガラス質(GG, 約1.5–1.65万年前)	1.500–1.503		1)
船見Tn(AT, 約2.8–3万年前)	1.498–1.501		1)
含雲母グリース状(G, 約5万年前?)	1.500–1.502		1)

1) : 町田・新井(2011), 温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993),

本報告: 温度変化型屈折率測定法(難波, 1993).

4. 考察

テフラ検出(火山ガラス比分析)ならびに火山ガラスの屈折率測定の対象となった2区調査区東壁13b2層、2–1区調査区南壁13b層のテフラ層は、層相および火山ガラスの色調や形態の特徴、黒雲母を含むこと、さらに火山ガラスの屈折率特性などから、いずれも838年の伊豆神津島天上山テフラ(Iz-Kt, 一色, 1982, 菅ほか, 1992, 町田・新井, 1992, 2003, 2011)に同定される可能性が高い。なお、両テフラ層はいずれも純度が高いことから一次堆積層の可能性が高い。

5.まとめ

静岡市上土遺跡で検出されたテフラ試料2点(非常に細粒の白色火山灰層)を対象に、テフラ分析(火山ガラス比分析・火山ガラスの屈折率測定)を行った。その結果、いずれも神津島天上山テフラ(Iz-Kt, 838年)に同定される可能性が非常に高いと判断された。

文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p. 254–269.
- 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p. 138–149.
- 塙原徹(1993)温度変化型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」, p. 149–158.
- 一色直記(1982)「神津島地域の地質」, 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 133p.
- 町田洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 276p.
- 町田洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 336p.
- 町田洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」, 東京大学出版会, 336p.
- 菅香世子・小林勝己・印牧もとこ・宮原智哉・遠藤邦彦(1992)神津島南部の火碎流堆積物, 火山, 37, p. 71–83.

第4節 上土遺跡出土プラント・オバール分析

株式会社古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オバール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

ここでは、上土遺跡の発掘調査で検出された水田耕作土およびその他の層準についてプラント・オバール分析を行い、稲作の可能性ならびに周辺植生と環境について検討した。

2 試料

分析試料は、2区調査区西壁、2区3号ベルト東側、2区調査区東壁で採取された17点、2-1区調査区南壁、2-1区第5ベルト南側で採取された11点の計28点である。分析対象層準を結果表に示す。なお、現地調査および試料採取は、平成30年12月14日と平成31年1月18日に実施した。

3 方法

- プラント・オバール分析は、ガラスピーズ法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。
- 1) 土壌サンプルの表面約5mmを除去後、新鮮な部分の土壌約10cm³を採量する。
 - 2) 採量した試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）する。
 - 3) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加する。
 - 4) 電気炉灰化法（550°C・6時間）により脱有機物処理を行う。
 - 5) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により分散する。
 - 6) 沈底法により20μm以下の微粒子を除去する。
 - 7) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オバールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オバール個数（試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オバールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻³g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、ネザサ節は0.48、メダケ節は1.16、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山 2000）。

4 結果

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらについて定量を行い、その結果を第16表、第60・61図に示した。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、ススキ属型

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節・スズタケなど）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）
[イネ科-その他]

未分類等

[その他]

海綿骨針

第16表 プラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）	2区西壁										2区3号ベルト実測							2区東壁						
	10層	12層	13a層	13b1層	13b2層	14層	13b	14層	15層	16層	17層	耕種 機械土壠	耕種 機械土壠	13b	14層	15-16 層	13b	耕種 機械土壠	13b	14層	15-16 層	13b		
イネ科	Gramineae Gramineae																							
イネ	Oryza sativa	8		3	4	16	12	10	14	12	9	4	9	8	12									
ヨシ属	Polygonaceae	4	94	8	4	4	5	5	10	23	31	10	15											
ススキ属型	Wiesentheia type	16	20	23	8	29	18	10	19	16	9	18	20	18	4	31	16							
タケ亜科	Ranunculaceae (Bambus)																							
ネザサ節型	Pleiothrixus sect. Setae	4		4		8																		
メダケ節型	Pleiothrixus sect. Nipponotum	8	8	8	4	4	5	6	9	3	8	4	8											
ササ節型	Sasa sect. Sasa etc.	4	4	12	4	24	4	5	5	4	9	4	4	4	19	4								
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Cratynoides	4																						
その他	Others						12	9	8	5														
未分類等	Diksonia	24	7	37	25	30	37	27	31	33	24	35	36	28	33	33	39	33						
(角高弓形)	Streptopholis	12				25	24	13	5	6	14	8	4	8	15									
プラント・オパール総量		72	7	163	91	50	138	73	66	76	92	23	151	60	127	93	124	65						

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・年）	2区西壁										2区3号ベルト実測							2区東壁						
	10層	12層	13a層	13b1層	13b2層	14層	13b	14層	15層	16層	17層	耕種 機械土壠	耕種 機械土壠	13b	14層	15-16 層	13b	耕種 機械土壠	13b	14層	15-16 層	13b		
イネ科	Oryza sativa	0.23		0.32	0.12	0.48	0.39	0.30	0.12	0.36	0.26	0.12	0.26	0.29	0.34									
ヨシ属	Polygonaceae	0.25	1.93	0.32	0.27	0.26	0.32	0.30	0.12	1.02	3.32							1.95	1.02	0.98				
ススキ属型	Wiesentheia type	0.18	0.25	0.41	0.11	0.25	0.22	0.15	0.23	0.30	0.10	0.22	0.25	0.22	0.06	0.38	0.18							
ネザサ節型	Pleiothrixus sect. Setae	0.02			0.02		0.04											0.02	0.02	0.02				
メダケ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.09	0.09	0.10	0.05	0.01	0.06	0.05	0.10	0.06	0.05	0.10	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.07	0.03	0.05	0.11	0.02		
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.03	0.03	0.09	0.03	0.10	0.03	0.03	0.04	0.04	0.05	0.07	0.03	0.05	0.05	0.05	0.05	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01		
ヒヤコザサ節型	Sasa sect. Cratynoides	0.01									0.02							0.01						

5 考察

プラント・オパール分析において稻作跡の探査や検証を行う際には、通常、イネのプラント・オパールが試料1 gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田構造が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。また、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥・湿润）を推定することができる。

1) 2区調査区西壁

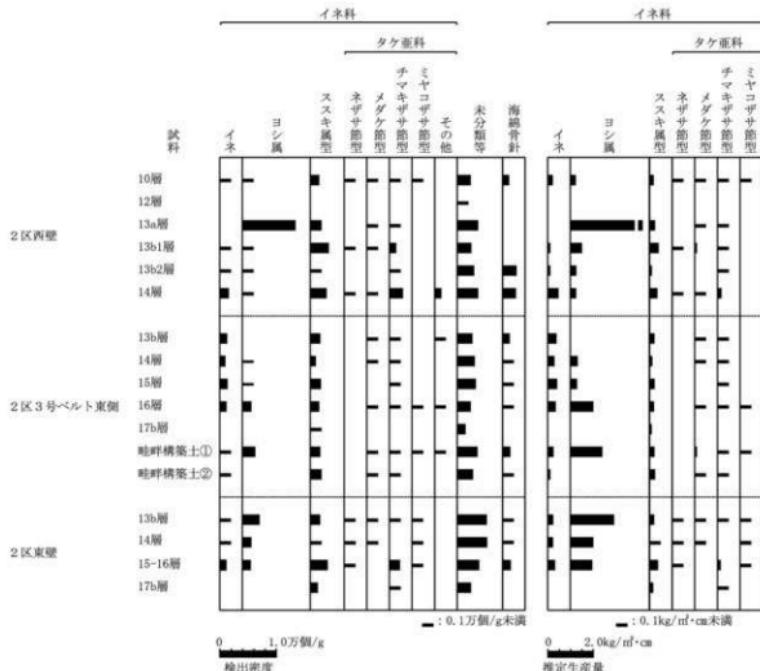
本地点では、10層、13b1層、13b2層、14層でイネが検出されている。プラント・オパール密度はそれぞれ800個/g、400個/g、400個/g、1,600個/gと低いかやや低い値であり、稻作跡の判

断基準とされる 3,000 個/g には達していない。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からプランツ・オパールが混入した危険性も否定できない。もしこれらの層で稲作が行われていたならば、イネのプランツ・オパール密度が低いことの要因として、1) 稲作が行われた期間が短かった、2) 稲の生産性が低かった、3) 耕作土が流出した、4) 土層の堆積速度が速かった、などのことが考えられる。

なお、13a 層ではヨシ属が非常に高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が極めて卓越している。このことから、13a 層の時期の調査地はヨシ属などの繁茂する湿地の環境であったと推定される。また、13b2 層以外ではスキニ属が比較的高い密度であることから、これらの層では周辺の比較的乾いたところにはスキニ属が生育していたとみられる。

2) 2 区 3 号ベルト東側

ここでは、13b 層、14 層、15 層、16 層でイネが検出されている。プランツ・オパール密度は 1,000 ~ 1,400 個/g であり、いざれもやや低い値である。なお、本地点では畦畔とみられる高まりが認められ、その上部（畦畔構築土①）と下部（畦畔構築土②）からは少量ではあるがイネが検出されている。このことから、畦畔に関連する耕作層とみられる 15 層および 16 層では、調査地において稲作が行われていた可能性が考えられる。また、畦畔の築造あるいは補強にあたっては水田土壤が利用された可能性が考えられる。13b 層と 14 層については稲作が行われて可能性はあるものの、他所からプランツ・オパールが



第 60 図 プランツ・オパール分析結果 1

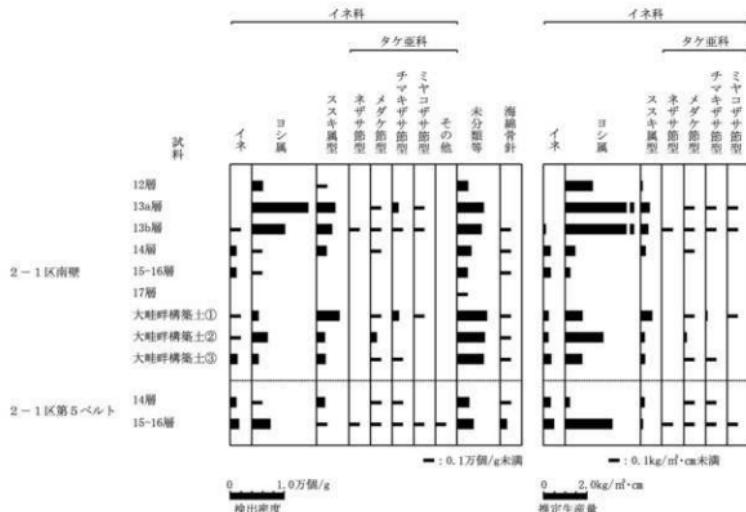
混入した危険性も否定できない。仮にこれらの層で稲作が行われていたならば、プラント・オバール密度が低いことの要因としては、先述したようなことが考えられる。

なお、13b層、15層、16層、畦畔構築土①と畦畔構築土②ではスキキ属型が比較的高い密度であることから、これらの層の時期は周辺の比較的乾いたところや畦畔にスキキ属が生育していたと推定される。

3) 2区調査区東側

本地点では、13b層、14層、15-16層でイネが検出されている。プラント・オバール密度は、順に900個/g、800個/g、1,200個/gと低いかやや低い値である。ここでは、15-16層に対応する畦畔状高まりが確認されている。このことから、調査地では15-16層において稲作が行われていた可能性が考えられる。13b層と14層については稲作が行われていた可能性はあるものの、他所からプラント・オバールが混入したことと考えられる。仮にこれらの層で稲作が行われていたならば、上述したようなことが考えられる。

なお、13b層ではヨシ属が高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が卓越している。このことから、当該層の時期の調査地はヨシ属が生育するような湿地あるいは湿った環境であったと推定される。15-16層ではスキキ属型が比較的高い密度であることから、調査地周辺の比較的乾いたところあるいは畦畔にスキキ属が生育していたとみられる。



第61図 プラント・オバール分析結果2

4) 2-1区調査区南側

ここでは、13b層、14層、15～16層でイネが検出されている。プランツ・オパール密度は、それぞれ400個/g、1,200個/g、1,200個/gと低いかやや低い値である。なお、ここでは大畦畔が検出されており、上位より大畦畔構築土①、大畦畔構築土②、大畦畔構築土③からも低密度ではあるがイネが検出されている。したがって、大畦畔は水田に伴うものであり、対応する耕作層とみられる14層と15～16層では、調査地において稻作が行われていた可能性が考えられる。また、大畦畔の築造あるいは補強には水田土壤が利用されていた可能性が示唆される。

13a層と13b層ではヨシ属が非常に高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が極めて卓越している。このことから、両層の堆積時の調査地はヨシ属などの繁茂する湿地の環境であったと推定される。大畦畔構築土①ではススキ属型が高い密度であることから、大畦畔あるいは近傍の比較的乾いたところにはススキ属が生育していたとみられる。

5) 2-1区調査区第5ベルト

本地点では、14層と15～16層でイネが検出されている。プランツ・オパール密度はそれぞれ1,200個/g、1,700個/gとやや低い値である。なお、ここでも両層に対応する畦畔状の高まりが検出されていることから、14層と15～16層において稻作が行われていた可能性が考えられる。

15～16層ではヨシ属が高い密度であり、推定生産量をみるとヨシ属が卓越している。このことから、15～16層の時期の調査地周辺はヨシ属が生育するような湿地あるいは湿った環境であったと推定される。

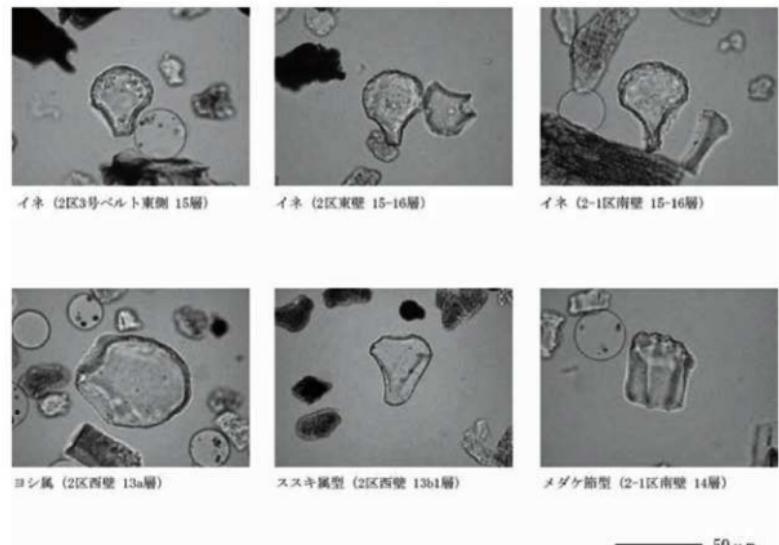


写真15 上土遺跡のプランツ・オパール写真1

6.まとめ

上土遺跡における稲作の可能性と周辺環境を検討することを目的として、プラント・オパール分析を行った。その結果、2区3号ベルト東側の15層と16層、2区調査区東側の15～16層、2-1区調査区南側の14層と15～16層において稲作が行われていた可能性が認められた。また、2区3号ベルト東側で検出された畠畔、2-1区調査区南壁で検出された大畠畔からもイネが検出され、これらが水田に伴う構築物であったことが認められた。13a層と13b層の時期の調査地は、ヨシ属の繁茂する湿地の環境であったと推定された。なお、畠畔や周辺の乾燥したところにはスキキ属などが生育していたと推定された。

参考文献

- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p. 189-213.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—、考古学と自然科学、19、p. 69-84.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学、17、p. 73-85.

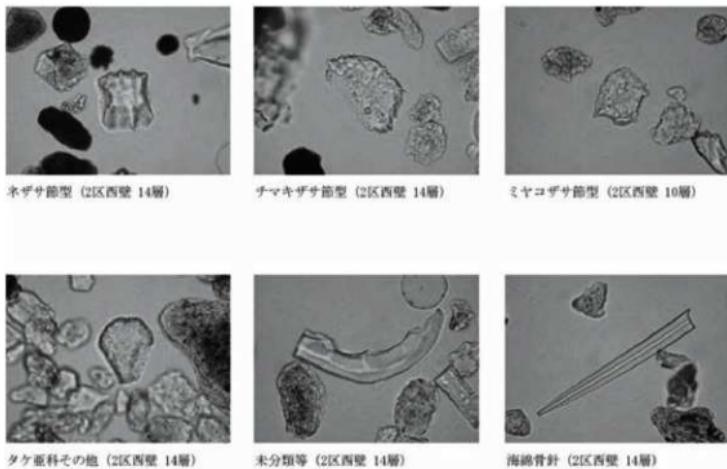


写真16 上土遺跡のプラント・オパール写真2

写真図版

図版1



立石エリア調査区全景（合成写真）

図版2



1 1-1区 調査区西側および畦畔1（北東から）



2 1-1区 調査区全景

図版3



1 1-2区 調査区遠景（北西から）



2 1-2区 調査区全景

図版4



1 1-3区 調査区遠景（南から）



2 1-3区 調査区西側および畦畔4（南東から）

図版5



1 2区 調査区遠景（北西から）



2 2区 調査区全景

図版6



1 3区 調査区遠景（南西から）



2 3区 調査区全景

図版7



1 4区 調査区遠景（北西から）



2 4区 調査区北側および畦?

図版8



1 1-1区 眺望1 土層断面（土層帯4）（南西から）



2 1-2区 眺望2 土層断面（第5ベルト南面）（南東から）



3 1-3区 眺望4とその付近の土層断面（調査区南壁）（北西から）



4 1-3区 眺望5とその付近の土層断面（調査区北壁）（東南から）



5 2区 眺望3 土層断面（第1ベルト）（南西から）



6 3区 眺望6 土層断面（調査区北東壁）（南西から）



7 3区 眺望6 土層断面（調査区南西壁）（北東から）



8 4区 眺望7 土層断面（調査区西壁北端部）（北東から）

図版9



1 I-I 区 鞋群1 土層断面（土層帯5）（北東から）



2 I-I 区 遺物出土状況（横と田下駄）



3 I-I 区 木製品集中地点1 遺物出土状況（鞋群東端部）（北東から）



4 I-I 区 木製品集中地点1 遺物出土状況（鞋群東端部）（北東から）



5 I-I 区 角鉗型田下駄出土状況



6 I-I 区 鞋群内泥除け出土状況



7 I-I 区 泥除け他出土状況



8 I-I 区 田下駄出土状況

図版 10



1 1-2 区 鮎畔 2 棚出状況（南東から）



2 1-2 区 鮎畔 2 土層断面（第2ベルト南側）（南東から）



3 1-2 区 鮎畔 2 土層断面（第4ベルト南側）（南東から）



4 1-2 区 鮎畔 2 取水口？北側の土層断面（南西から）



5 1-2 区 鮎畔 2 取水口？南側の土層断面（南西から）



6 1-2 区 内枠型田下駄の円柱と足板出土状況



7 1-2 区 田下駄出土状況



8 1-3 区 鮎畔 4 棚出状況（南東から）

図版 11



1 1-3 区 跪畔4 土層断面（調査区西壁）（南東から）



2 1-3 区 調査区南東壁西端部土層断面（北西から）



3 1-3 区 調査区北東壁土層断面（南西から）



4 1-3 区 調査区北西壁東端部土層断面（南東から）



5 1-3 区 跪畔4 下部遺物出土状況（南東から）



6 1-3 区 跪畔4 補強材検出状況（東から）



7 1-3 区 調査区東側遺物出土状況（南西から）



8 2 区 跪畔3 検出状況（北東から）

図版 12



1 2区 畦畔3土層断面（第3ベルト北東側）（北東から）



2 2区 畦畔3土層断面（第5ベルト南西側）（南西から）



3 2区 畦畔3補強材検出状況



4 2区 畦畔3補強材？検出状況（調査区西侧）



5 2区 木製品集中地点2遺物出土状況（北から）



6 2区 木製品集中地点2遺物出土状況



7 2区 火きり臼と火きり杵出土状況



8 2区 天秤棒出土状況

図版 13



1 2区 田下駄出土状況



2 2区 田下駄等出土状況



3 2区 田下駄出土状況



4 2区 木柄付鉄鎌出土状況（北東から）



5 2区 田下駄出土状況



6 2区 泥除け出土状況



7 3区 畦畔6土層断面（第1ベルト西側）（南西から）



8 3区 畦畔6土層断面（第2ベルト西側）（南西から）

図版 14



1 3区 駕籠下遺物出土状況



2 3区 遺物出土状況（調査区南西コーナー部）（北東から）



3 4区 調査区北半および駕籠7検出状況（南西から）



4 4区 駕籠7（西侧）検出状況（東から）



5 4区 駕籠7（東側）検出状況（南西から）



6 4区 調査区東南端部遺物出土状況（北西から）

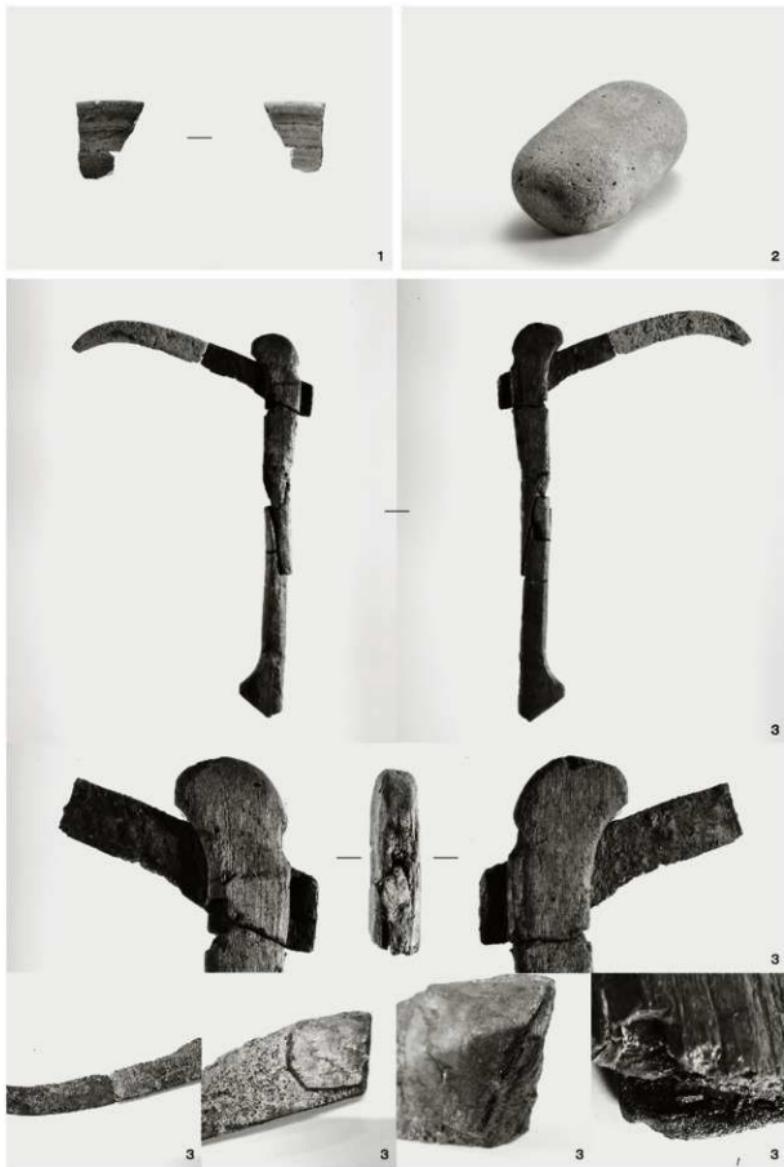


7 4区 用途不明木製品出土状況（北東から）

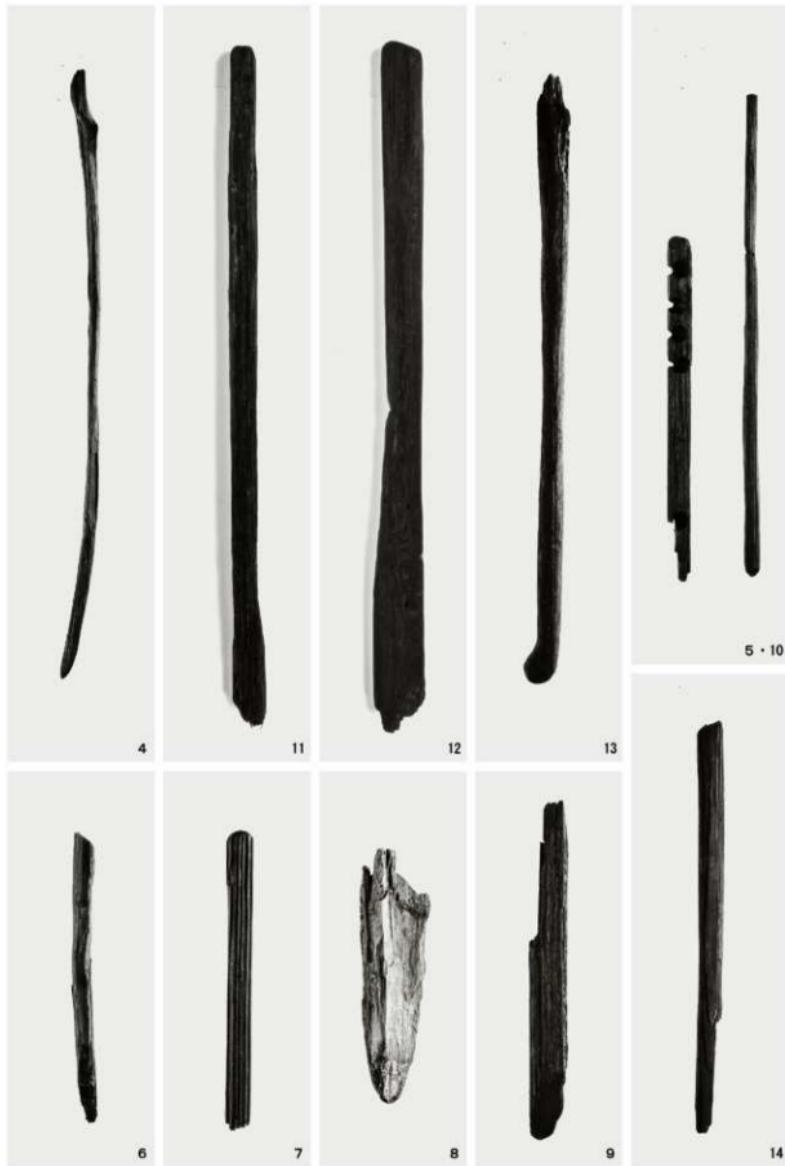


8 4区 田下駄出土状況

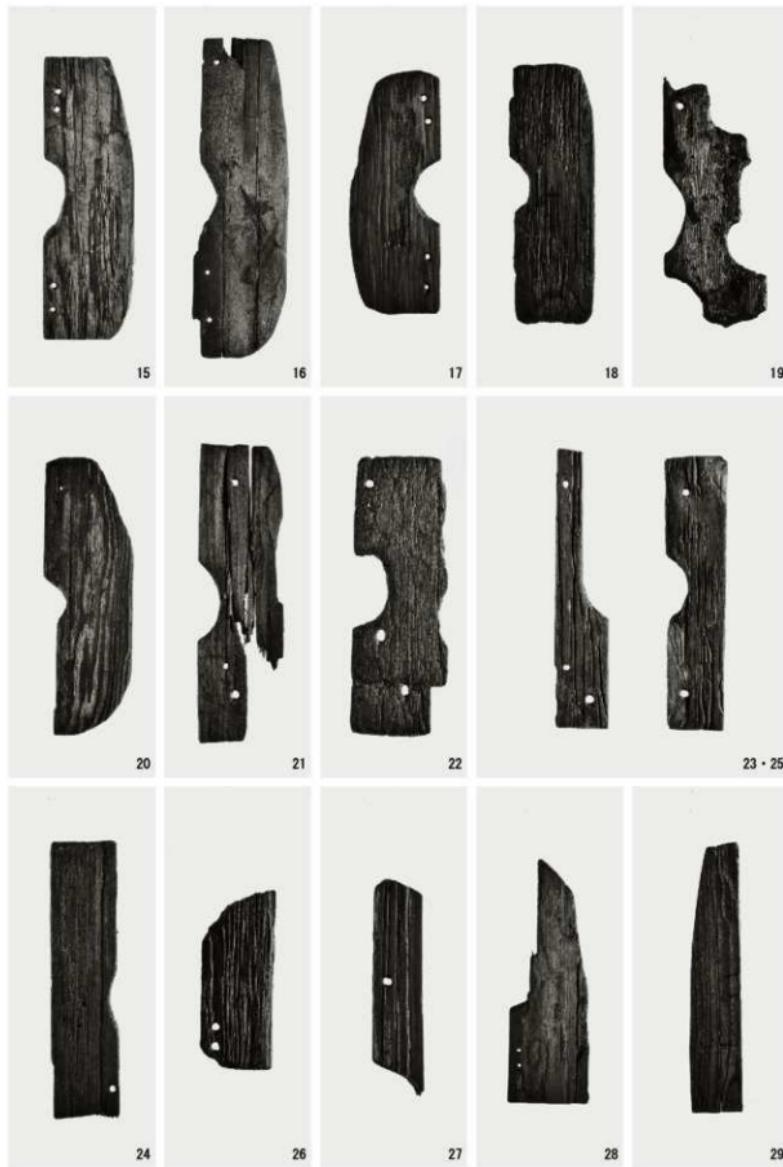
図版 15



出土遺物 1



図版 17



出土遺物3



30



31



31



33



34



35



36



37



38

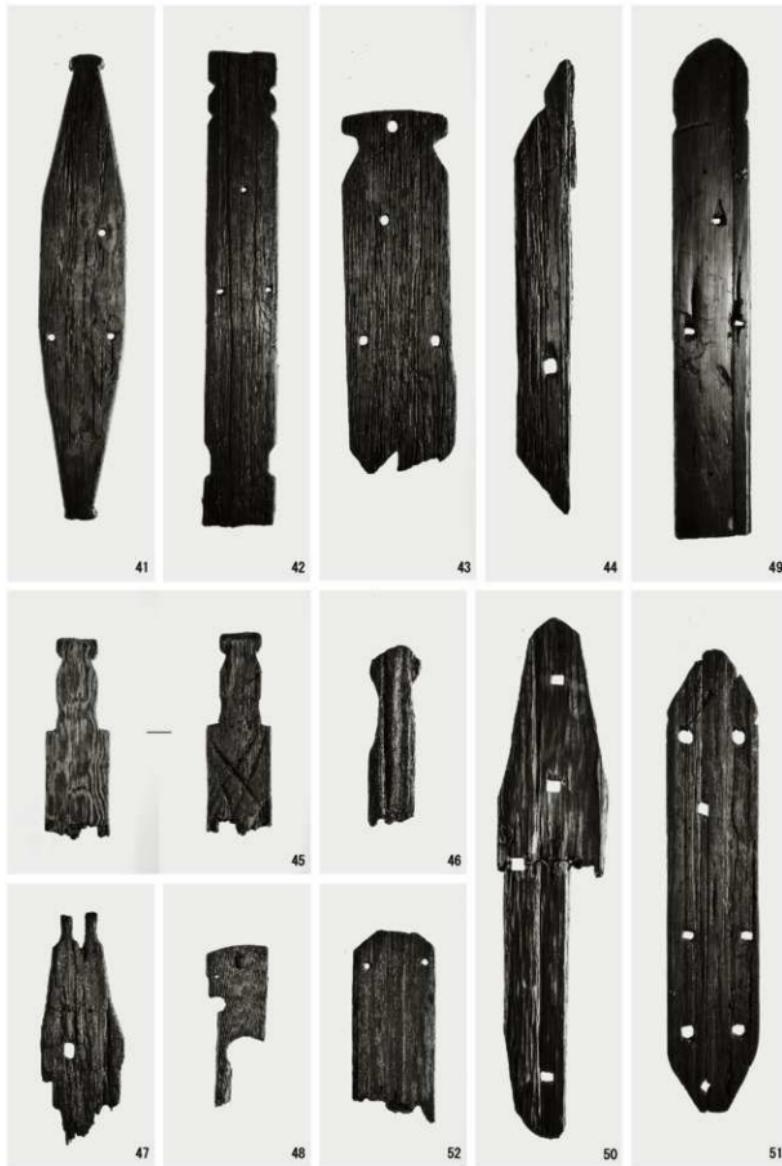


39

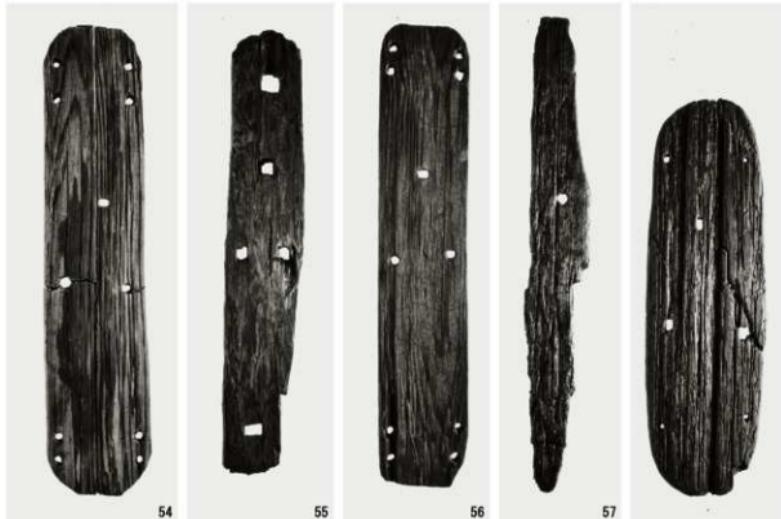


40

図版 19



出土遺物5



54

55

56

57

53



59



60

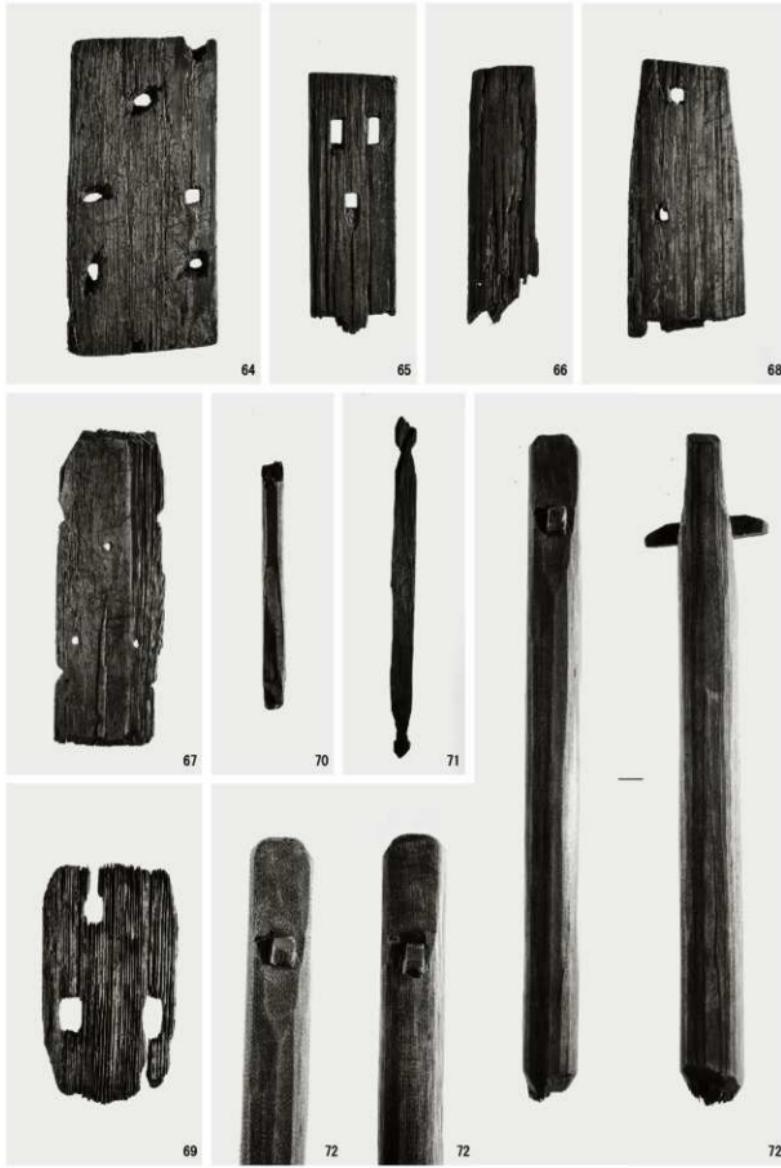
61

62

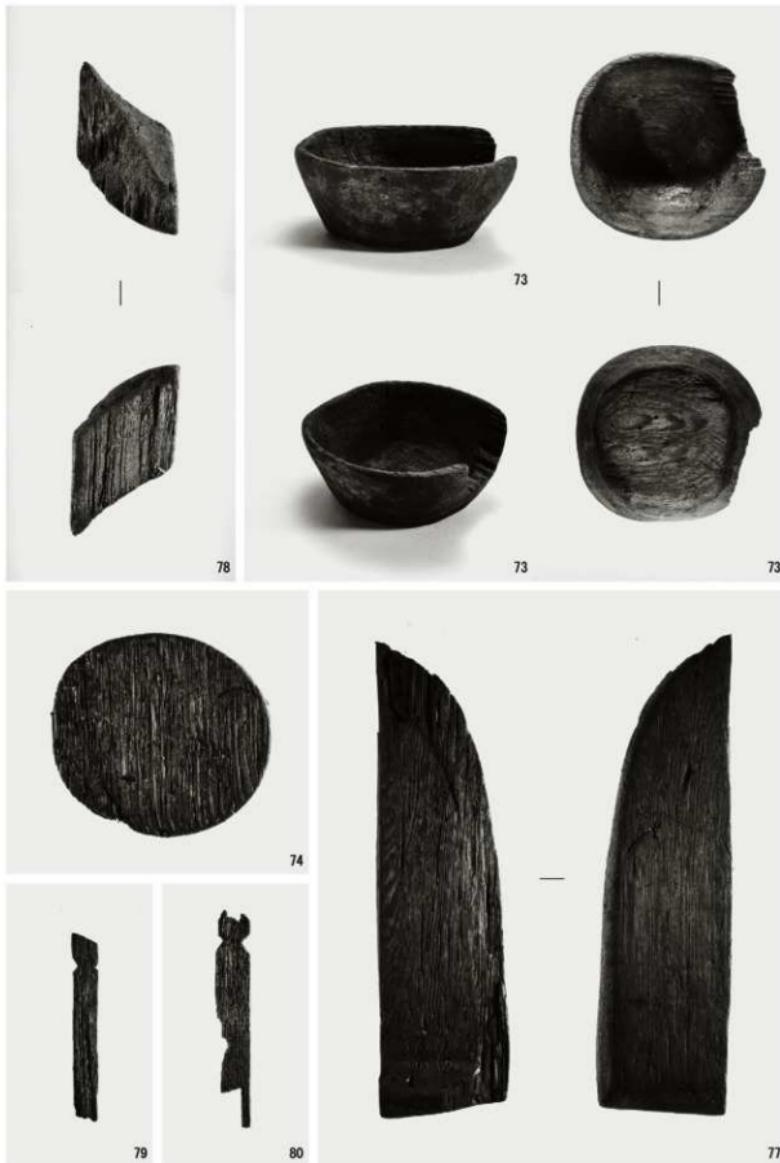
63

58

図版 21

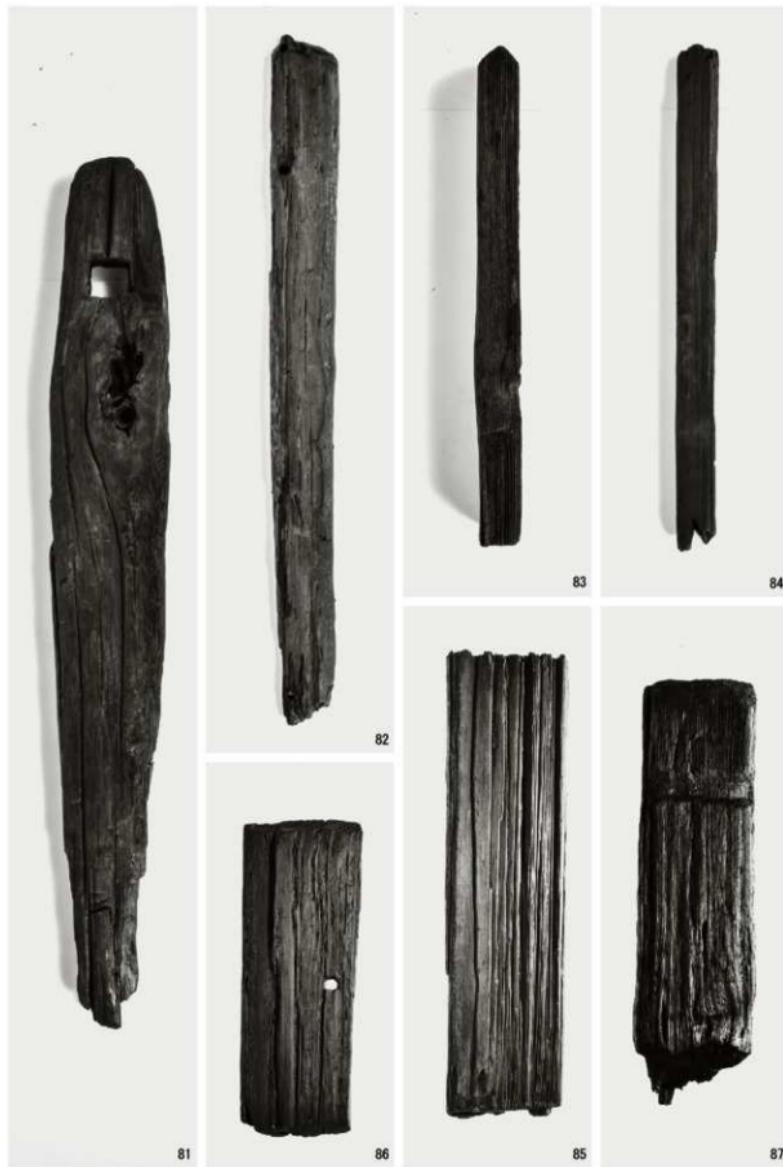


出土遺物7



出土遺物8

図版 23



出土遺物9



88



89



90

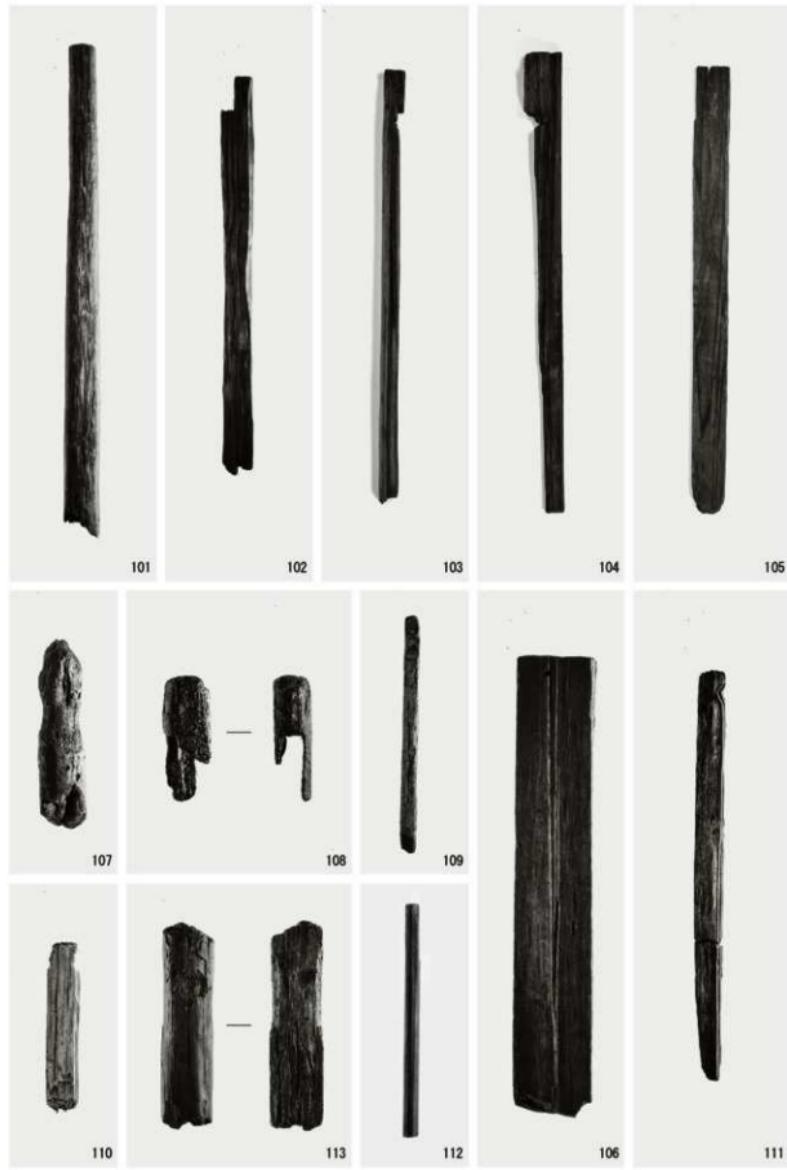


92

図版 25

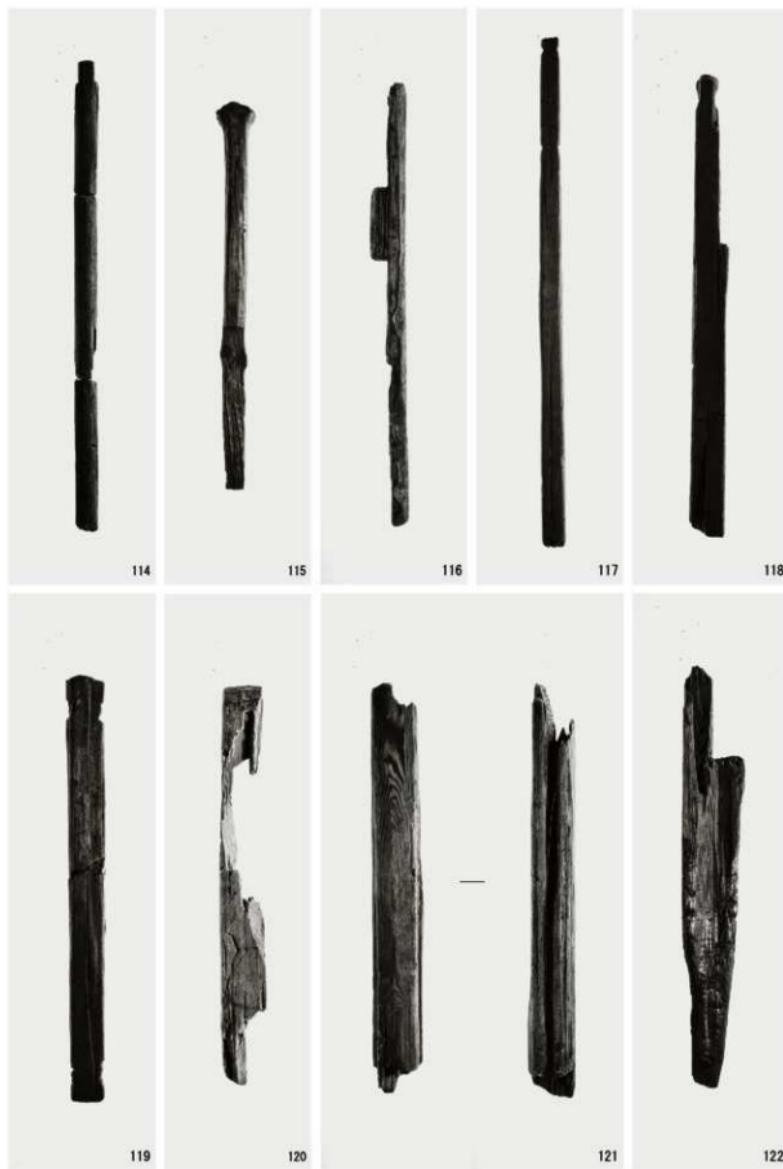


出土遺物 11

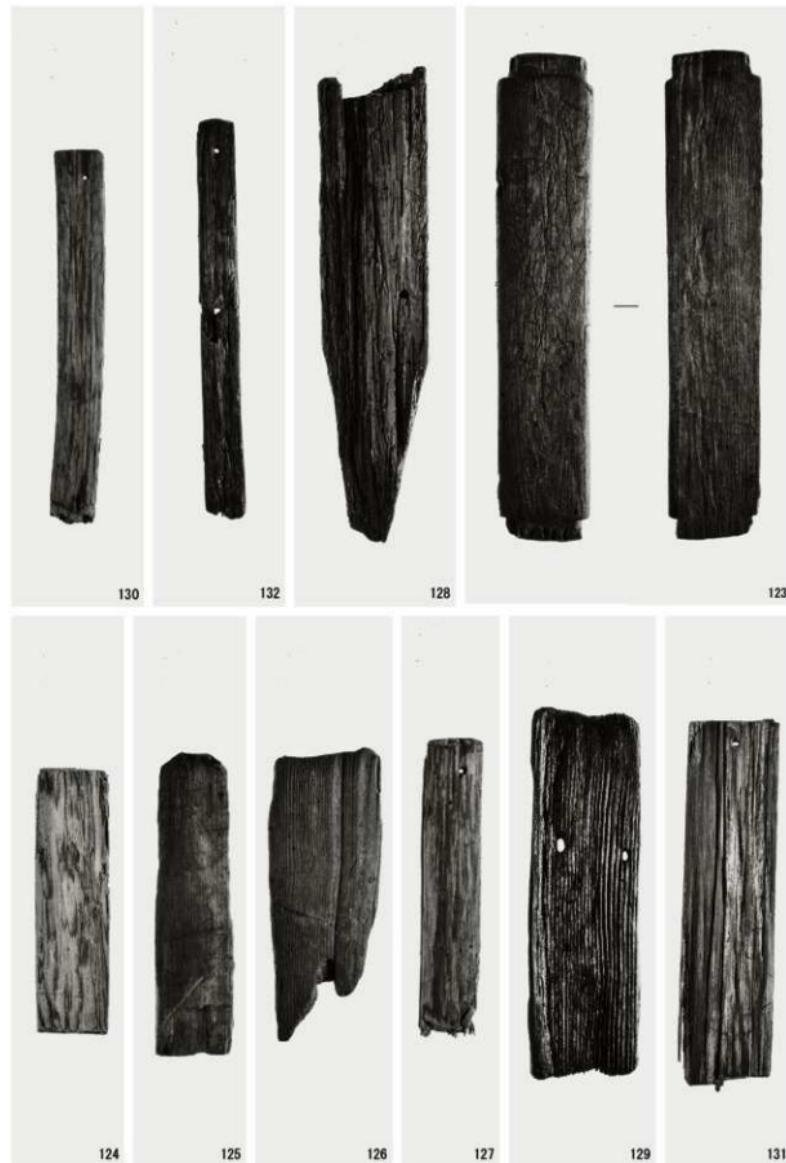


出土遺物 12

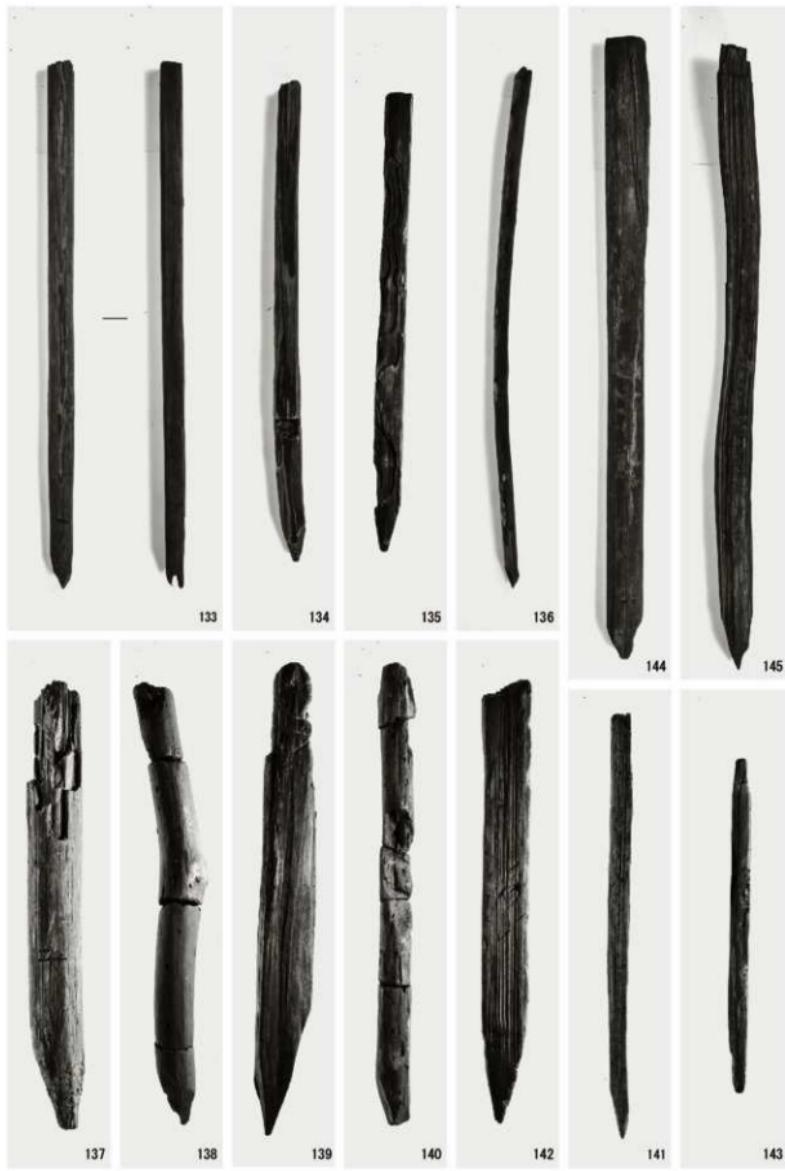
図版 27



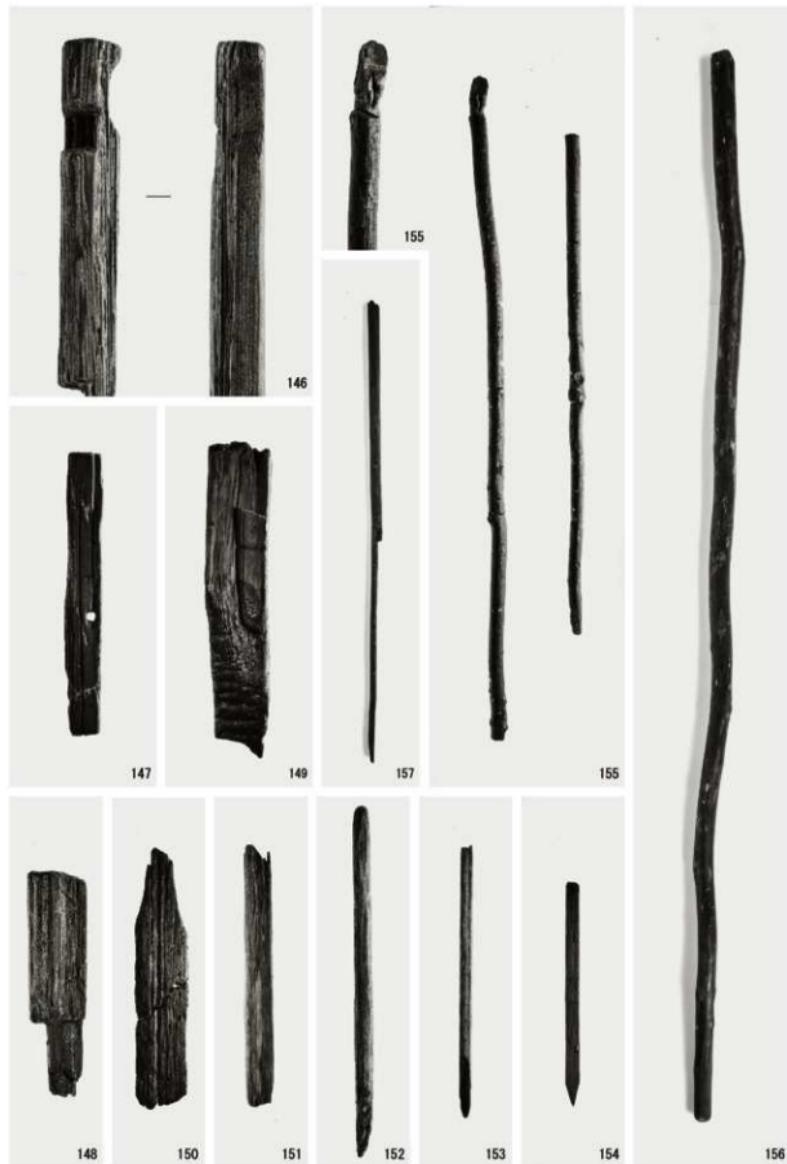
出土遺物 13



図版 29

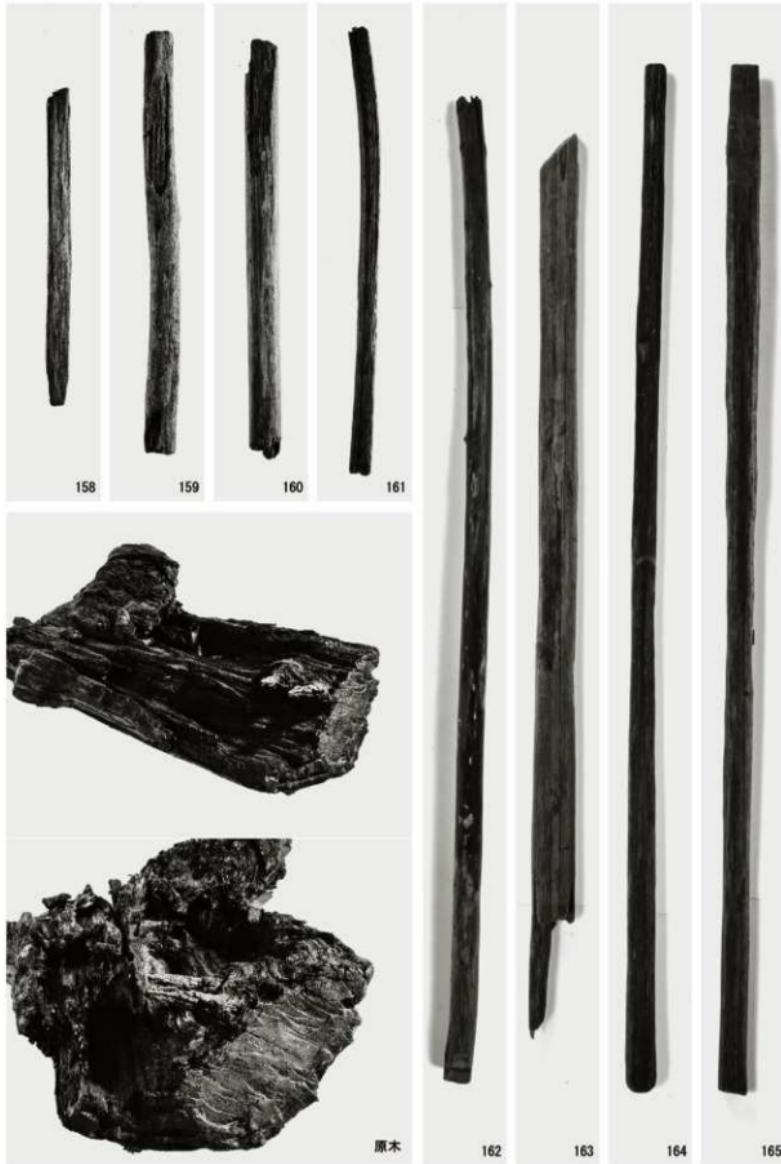


出土遺物315



出土遺物 16

図版 31



出土遺物 17

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第64集
上土遺跡II
静岡市

平成29年度～令和4年度掛二級河川巴川（麻機遊水地第2工区）
総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
令和4年3月28日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒 421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原 5300-5
TEL 054-385-5500 (代)
FAX 054-385-5506
印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒 410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839 (代)
FAX 055-924-3898